

本州四国連絡道路建設に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告 I

中原遺跡他

1997年3月

兵庫県教育委員会

本州四国連絡道路建設に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告 I

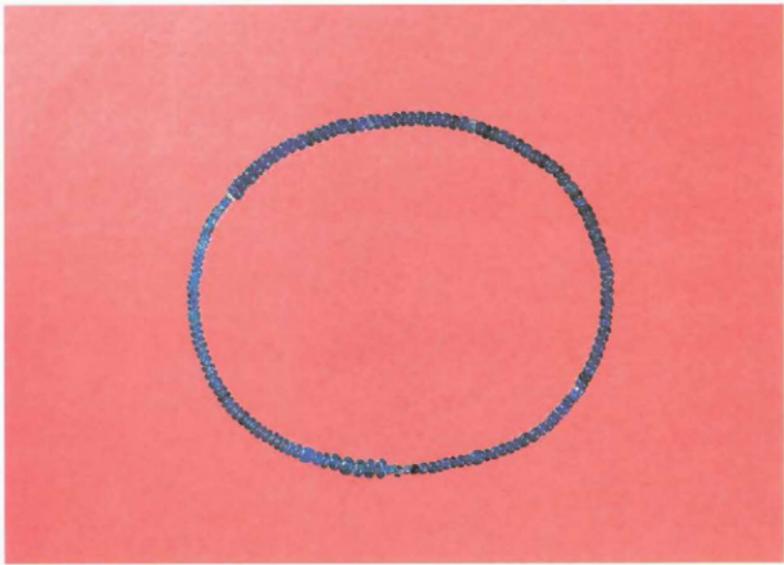
中原 遺 跡 他

1997年3月

兵庫県教育委員会



幕ノ木遺跡出土 土器



葵鼻山1号墳第1主体出土 ガラス玉

例　　言

1. 本書は本州四国連絡道路（津名～淡路）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。調査および整理作業は本州四国連絡橋公園の委託を受けて、一部を除き、兵庫県教育委員会が実施した。

2. 本州四国連絡道路（津名～淡路）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告はⅠ～Ⅴまであり、本書はそのⅠにあたり、古墳時代～中世の合計12遺跡を収録している。なお、Ⅱは塩壺西遺跡、Ⅲは伊部遺跡、Ⅳは弥生時代の5遺跡、Ⅴは丸山遺跡を収録し、順次刊行の予定である。

3. 本書に収録した遺跡名・全面調査年度・所在地・遺跡調査番号は以下の通りである。

中原遺跡	(平成4年度)	津名郡一宮町塩田	(920354)
大木谷古墳	(平成4年度)	津名郡一宮町大木谷	(920355)
中須賀遺跡	(平成3年度)	津名郡一宮町尾崎	(910088)
篠鼻山古墳群	(原ノ下遺跡B・C地点)	(平成3・4年度)	
		津名郡北淡町室津	(910090・920220・920282)
原ノ下遺跡(A地点)	(平成3年度)	津名郡北淡町室津	(910090)
平見遺跡	(平成3年度)	津名郡北淡町室津	(910089)
掛内遺跡	(平成2年度)	津名郡北淡町育波	(900105)
外町遺跡	(平成4年度)	津名郡北淡町斗の内	(920221)
井ノ谷遺跡	(平成3年度)	津名郡北淡町小田	(910091)
菅松原遺跡	(平成3年度)	津名郡東浦町白山	(910084)
藤ノ木遺跡	(平成4年度)	津名郡東浦町浦	(920281)
尾崎堂ノ鼻遺跡	(平成4年度)	津名郡一宮町尾崎	

4. 管松原遺跡・尾崎堂ノ鼻遺跡を除く各遺跡の発掘調査は本州四国連絡橋公園の委託を受け、兵庫県教育委員会が行ったが、現地調査にあたっては、橋詰建設株式会社、津名土木株式会社と請負契約を結んで実施した。

5. 遺跡の航空写真は、平成2年度全面調査分はワールド航測コンサルタント株式会社、平成3年度分は関西航測株式会社、平成4年度分は写測エンジニアリング株式会社にそれぞれ委託して撮影したものを使用した。

6. 使用した写真のうち、遺構については各遺跡調査の担当職員が撮影したが、尾崎堂ノ鼻遺跡以外の遺物は株式会社衣川および株式会社サンスタジオに委託して撮影したものを使用した。

7. 本書の遺物の図面番号は、図版番号と一致する。また、土器の色調および一部遺跡の土層色名は「標準土色帖」によるものである。なお、土器類の図のうち、断面白抜きは土師器、黒塗りは須恵器・陶器、粗い網点は瓦器・黑色土器、細かい網点は磁器をそれぞれ示す。

8. 本書の編集は尾崎比佐子の補助を得て岸本一宏が行い、本文執筆は吉田　昇・山本　誠・伊藤宏幸・岸本が分担し、一部、小川良太執筆分を再録した。なお、執筆者名を文末に記している。

9. 発掘調査および整理作業にあたっては、下記の諸氏にご教示・ご指導をいただいた。横松　剛、濱岡きみ子、岡田章一、佐藤公保、川吉知子、小林基伸、坂口弘貴

(順不同、敬称略)

記して謝意を表するものである。

本文目次

第1章 はじめに

第1節 調査の経過と体制	1
第2節 整理作業の経過と体制	8

第2章 遺跡の調査

第1節 中原遺跡	一宮町	11
第2節 大木谷古墳	一宮町	15
第3節 中須賀遺跡	一宮町	23
第4節 築鼻山古墳群（原ノ下遺跡B・C地点）	北淡町	27
第5節 原ノ下遺跡（A地点）	北淡町	43
第6節 平見遺跡	北淡町	47
第7節 椿内遺跡	北淡町	55
第8節 外町遺跡	北淡町	67
第9節 井ノ谷遺跡	北淡町	77
第10節 管松原遺跡	東浦町	87
第11節 蕨ノ木遺跡	東浦町	91
第12節 尾崎堂ノ鼻遺跡	一宮町	103

第3章 まとめと考察

第1節 各遺跡のまとめ	119
第2節 中世小規模集落について	120
第3節 出土瓦器焼について	121
第4節 淡路島内の古墳について	122

挿図目次

第1図 本州四国連絡道路（津名—淡路）関係 確認調査実施遺跡分布図	3	第31図 2号墳全体図	41
中原遺跡		第32図 2号墳周溝内出土土器	42
第2図 遺跡の位置 (1/25,000)	11	厚ノ下遺跡 (A地点)	
第3図 調査区の位置 (1/2,000)	11	第33図 遺跡の位置 (1/25,000)	43
第4図 遺構全体図	13	第34図 調査区の位置 (1/2,000)	43
第5図 出土土器	14	第35図 遺構全体図	44
第6図 出土鉄器	14	第36図 包含層出土遺物	45
第7図 出土鉄器	14	第37図 包含層出土一石五輪塔	45
大木谷古墳		第38図 出土鉄器	45
第8図 遺跡の位置 (1/25,000)	15	第39図 出土石器	46
第9図 調査区の位置 (1/2,000)	15	平見遺跡	
第10図 遺構全体図	16	第40図 遺跡の位置 (1/25,000)	47
第11図 石室実測図	17	第41図 調査区の位置 (1/2,000)	47
第12図 出土鉄器	19	第42図 調査区北側壁土層断面図	48
第13図 出土石器	19	第43図 遺構全体図	49
第14図 出土土器	21	第44図 S X - 1	51
第15図 出土鉄器	22	第45図 出土遺物	52
中須賀遺跡		第46図 出土鉄器	53
第16図 遺跡の位置 (1/25,000)	23	掛内遺跡	
第17図 調査区の位置 (1/1,000)	23	第47図 遺跡の位置 (1/25,000)	55
第18図 遺構全体図	24	第48図 調査区の位置 (1/2,000)	55
第19図 調査区東側壁土層断面図	25	第49図 調査区の位置・掛内地区遺構全体図	56
第20図 出土遺物	25	第50図 掛内地区遺構図	58
築鼻山古墳群（原ノ下遺跡B・C地点）		第51図 掛内地区遺構図・亀淵地区全体図	60
第21図 遺跡の位置 (1/25,000)	27	第52図 出土石器	61
第22図 調査区の位置 (1/2,000)	27	第53図 遺構出土上土器	62
第23図 1号墳全体図	29	第54図 包含層出土土器	63
第24図 1号墳第1主体	31	第55図 出土鉄器	65
第25図 1号墳第2主体	32	第56図 出土古錢	66
第26図 1号墳第3主体	34	外町遺跡	
第27図 1号墳第1～3主体出土遺物	35	第57図 遺跡の位置 (1/25,000)	67
第28図 1号墳第1主体出土小玉(1)	36	第58図 調査区の位置 (1/2,000)	67
第29図 1号墳第1主体出土小玉(2)	37	第59図 遺構全体図	68
第30図 1号墳主体部以外出土遺物	40	第60図 S B - 1・S K - 14	69
		第61図 S K - 1・2	71

第62図 S K - 3	72	第86図 造構集中部	96
第63図 S K - 8	72	第87図 S K - 4 造物出土状況	97
第64図 出土土器	73	第88図 P - 1 造物出土上状況	97
第65図 出土鉄器	74	第89図 造構出土土器	98
第66図 出土石器	75	第90図 P - 1 出土鉄器	99
井ノ谷遺跡		第91図 包含層出土土器	100
第67図 遺跡の位置 (1/25,000)	77	第92図 出土石器	102
第68図 調査区の位置 (1/2,000)	78	尾崎堂ノ鼻遺跡	
第69図 A地区造構全体図	79	第93図 遺跡の位置 (1/25,000)	103
第70図 造構集中部	81	第94図 調査区の位置 (1/5,000)	103
第71図 S X - 1・2・4	82	第95図 下層造構全体図	104
第72図 S K - 2	83	第96図 調査区西壁上層図	104
第73図 S X - 2 出土古鉄	84	第97図 上層造構全体図	105
第74図 S X - 1・2 出土遺物	84	第98図 S B - 01・S D - 04	106
第75図 出土土器	85	第99図 S B - 02・S B - 03	107
第76図 出土石器	86	第100図 S B - 04・S B - 05	108
菅松原遺跡		第101図 S D - 01	109
第77図 遺跡の位置 (1/25,000)	87	第102図 S K - 01	109
第78図 調査区の位置 (1/2,000)	87	第103図 S K - 02	110
第79図 造構全体図	88	第104図 造構出土土器(1)	111
第80図 土壙群	89	第105図 造構出土土器(2)	112
藤ノ木遺跡		第106図 上部包含層出土土器	113
第81図 遺跡の位置 (1/25,000)	91	第107図 整地層下層出土土器	115
第82図 調査区の位置 (1/2,000)	92	第108図 石製品(1)	115
第83図 造構全体図	93	第109図 鉄製品	116
第84図 A地区北側壁土層断面図	95	第110図 石製品(2)	116
第85図 B地区南側壁土層断面図	95		

表 目 次

第1表 本州四国連絡道路建設に伴う埋蔵文化財確認調査結果一覧表(1)	5
第2表 本州四国連絡道路建設に伴う埋蔵文化財確認調査結果一覧表(2)	6
第3表 本州四国連絡道路建設に伴う埋蔵文化財確認調査結果一覧表(3)	7
第4表 葉鼻山古墳群1号墳第1主体出土ガラス玉計測表	38

写真図版目次

中原遺跡		
図版1	上 調査区遠景と周辺の地形（南から） 下 調査区全景（東上空から）	図版15 上 第1主体 遺物出土状況（西から） 下 第1主体 全景（東から）
図版2	上 調査区全景（南西から） 下 西部遺構群（北から）	図版16 上 第2主体 検出状況（西から） 下 第2主体 全景（東から）
図版3	上 出土土器（外面） 下 出土土器（内面）	図版17 上 第3主体 検出状況（南西から） 下 第3主体 全景（南西から）
大木谷古墳		2号墳
図版4	上 古墳遠景と周辺の地形（西北西から） 下 古墳の立地（南東から）	図版18 上 全景（南東から） 下 周溝（東から）
図版5	上 調査区全景（南東上空から） 下 調査区全景（南上空から）	1号墳 図版19 上 第1・2主体出土須恵器 下 第1主体および主体部以外出土須恵器
図版6	上 草原内埋土断面（東から） 下 墓壇内埋土断面（南から）	図版20 上 第1主体出土金属器 下 第1主体出土ガラス小玉
図版7	上 検出遺構全景（南から） 下 出土鉄器	1・2号墳 図版21 上 1号墳 第3主体出土提瓶 下 2号墳 周溝出土須恵器
中須賀遺跡		原ノ下遺跡（A地点）
図版8	上 調査区遠景と周辺の地形（南から） 下 調査区調査前全景（東から）	図版22 上 調査区遠景と周辺の地形（北から） 下 調査区遠景と周辺の地形（北東から）
図版9	上 遺構全景（南南西から） 下 出土遺物	図版23 上 調査区全景（北東上空から） 下 遺構全景（南東から）
篠鼻山古墳群（原ノ下遺跡B・C地点）		図版24 上 遺構集中部（南東から） 下 遺構集中部（北西から）
図版10	上 古墳群遠景と周辺の地形（南西から） 下 古墳群遠景と周辺の地形（北西から）	図版25 上 包含層出土遺物 下 包含層出土一石五輪塔
図版11	上 古墳群遠景と周辺の地形（南東から） 下 古墳群遠景と周辺の地形（北北西から）	平見遺跡
1号墳		図版26 上 調査区遠景と周辺の地形（南東から） 下 調査区遠景と周辺の地形（北から）
図版12	上 調査区（平成3年度）全景（北西上空から） 下 調査区（平成4年度）全景（南西上空から）	図版27 上 調査区全景（北西上空から） 下 調査区全景（西南西から）
図版13	上 遺構（平成3年度）全景（東から） 下 遺構（平成4年度）全景（東から）	図版28 上 遺構全景（南西から） 下 遺構集中部（東北東から）
図版14	上 周溝全景（北から） 下 遺構（平成4年度）全景（西から）	図版29 上 S X - 1（東北東から） 下 出土遺物

図版30 上 出土土器	図版47 上 A地区遺構集中部（東から）
下 出土遺物	下 A地区遺構集中部（南から）
掛内遺跡	図版48 上 A地区遺構集中部（北から）
図版31 上 調査区遠景と周辺の地形（北西から）	下 S X - 2 ~ 4 (南から)
下 掛内地区全景（北北西上空から）	図版49 上 S X - 1 (北東から)
図版32 上 掛内地区全景（北東上空から）	下 S X - 2 (南から)
下 掛内地区柱穴集中部（北西から）	図版50 上 S K - 2 (西から)
図版33 上 S K - 05北西部（南から）	下 S K - 2 墓土断面（南から）
下 出土遺物	図版51 上 S X - 2 出土鉄錆
図版34 上 遺構出土土器	下 出土土器
下 遺構出土土器	菅松原遺跡
図版35 上 包含層出土土器	図版52 上 調査区全景（南西から）
下 包含層出土上器	下 土壞群（西南西から）
図版36 上 包含層出土陶磁器	藤ノ木遺跡
下 包含層出土上製品	図版53 上 A地区西部（北西から）
外町遺跡	下 A地区中央部（北から）
図版37 上 調査区遠景と周辺の地形（南西から）	図版54 上 A地区遺構集中部（南東から）
下 調査区全景（南西上空から）	下 A地区遺構集中部（北西から）
図版38 上 調査区全景（北東上空から）	図版55 上 A地区南西部（北東から）
下 調査区全景（南東上空から）	下 A地区東部（南西から）
図版39 上 S B - 1 (北北西から)	図版56 上 P - 1 遺物出土状況（北から）
下 S B - 1 南部（北北西から）	下 S K - 4 遺物出土状況（北から）
図版40 上 S K - 1 検出状況（西南西から）	図版57 上 B地区全景（南西から）
下 S K - 1 (南から)	下 B地区遺構集中部（北東から）
図版41 上 中央部土壤群（北西から）	図版58 出土土器
下 南西中央部（南西から）	図版59 上 出土土器（外面）
図版42 上 下段遺構群（南西から）	下 出土上器（内面）
下 出土遺物	図版60 上 包含層出土瓦器（外面）
図版43 上 出土土器	下 包含層出土瓦器（内面）
下 出土土器	図版61 上 包含層出土土器（外面）
井ノ谷遺跡	下 包含層出土土器（内面）
図版44 上 調査区遠景と周辺の地形（南南西から）	図版62 上 出土遺物
下 調査区と周辺の地形（南東から）	下 包含層出土土器
図版45 上 調査区全景（南上空から）	図版63 上 各遺跡出土石器（表面）
下 A地区遺構集中部（北上空から）	下 各遺跡出土石器（裏面）
図版46 上 B地区全景（北西上空から）	図版64 上 各遺跡出土石器
下 B地区全景（南東から）	

- 尾崎堂ノ鼻遺跡
- 図版65 上 調査地遠景（南西から）
下 調査区全景（北東から）
- 図版66 上 下層遺構全景（南西から）
下 S D-04（南から）
- 図版67 上 S B-02・03（南から）
下 S B-04・05（北から）
- 図版68 上 S K-01検出状況（南東から）
下 S K-01充填状況（南から）
- 図版69 上 S D-01（西から）
下 S K-02（南から）
- 図版70 上左 S D-04瓦器検出土状況
上右 土器(18)出土状況
中左 鉄器(T37)出土状況
中右 鉄器(T38)出土状況
下 調査区西壁土層
- 図版71 上 出出土器
下 遺構出土須恵器
- 図版72 上 遺構出土土師器1
下 遺構出土土師器2
- 図版73 上 遺構出土土師器3
下 遺構出土土師器4
- 図版74 上 包含層出土須恵器1
下 包含層出土須恵器2
- 図版75 上 包含層出土土師器1
下 包含層出土土師器2
- 図版76 上 瓦器・瓦質土器
下 陶磁器
- 図版77 上 瓷壺・土鍾
下 鉄器
- 図版78 上 石器（表）
下 石器（裏）

第1章 はじめに

第1節 調査の経過と体制

1. 調査にいたる経過

本州と四国を結ぶ本州四国連絡道路のうち、最も東側にあたる神戸～鳴門ルートは、神戸から鳴門間の約81kmであり、阪神間と四国を結ぶ最短距離の自動車道である。

このうち、淡路島中央部と四国を結ぶ津名一宮インターチェンジ～鳴門インターチェンジ間の約45kmについては、昭和62年に工事完成し供用開始となったが、津名一宮インターチェンジ～神戸間の建設計画については、明石海峡大橋とともに昭和48年のオイルショック以降凍結となっていた。

しかし、景気の回復とともに工事再開が決定され、途中、平成7年1月17日の兵庫県南部地震も経験したが、予定通り平成10年4月の供用開始に向けて急ピッチで工事が進められている。

本州四国連絡道路建設に伴う埋蔵文化財については、本州四国連絡橋公団からの照会を受けた兵庫県教育委員会は、埋蔵文化財の有無とその保存協議のための分布調査を淡路考古学研究会に依頼し、同研究会は昭和47～48年に分布調査を実施した。兵庫県教育委員会はその結果をもとに、本州四国連絡橋公団と協議を行い、現状保存できない箇所については調査を実施することになった。

こうして、昭和62年に供用開始となった津名一宮インターチェンジ～鳴門インターチェンジ間の淡路島内の埋蔵文化財発掘調査は、昭和53年の三原郡西淡町の志知川沖田南遺跡を嚆矢として、全面調査は洲本市所在の大森谷遺跡、森遺跡、寺中遺跡、西淡町所在の雨流遺跡、志知川沖田南遺跡、鉢田遺跡、谷町筋遺跡で実施し、津名一宮インターチェンジ以南の埋蔵文化財発掘調査は平成元年に終了した。

一方、今回報告する、淡路島中部の津名一宮インターチェンジ以北の淡路島陸上部における本綱部分の埋蔵文化財については、当初の分布調査時点からかなり期間が経過していること、また、事業地付近に新たな遺跡の発見があったこと、および、埋蔵文化財保護の立場から、遺跡に対する認識の変化も生じており、当初の遺跡数および範囲に変化が生じている可能性が高かったため、改めて詳細に分布調査を実施することになった。

2. 発掘調査の経過と体制

分布調査

分布調査は昭和62年3月に一宮町から実施し、昭和62年11月に北淡町と東浦町の一部、昭和63年4月には東浦町と淡路町について実施した。これらの分布調査の結果、一宮町・北淡町・東浦町・淡路町の4町にわたって99地点の遺跡および遺跡推定地が確認された。数多くの遺跡が存在することによる煩雑を避けるため、遺跡名は町単位で通し番号で整理することとし、一宮町については「津」、北淡町は「北」、東浦町は「東」、淡路町は「淡」とそれぞれ頭文字を冠し、番号をふった。

この結果をもとに、兵庫県教育委員会は本州四国連絡橋公団と協議を行い、その結果、確認調査を実施することとなった。調査は、兵庫県教育委員会により実施し、分布調査で判明していた遺跡のうち、石造品等を除いた分について、平成元年度および平成2年度に実施した。

確認調査

確認調査は、遺跡の状態・遺構の有無などについて確認するために、坪掘りとトレンチ調査を併用したが、本州四国連絡橋公団の要請により、用地買収が済んでいない状況のなかで実施せざるを得なかった。土地所有者から承諾書をもらって実施したのであるが、部分的に承諾書がもらえない場合、2度にわたって確認調査を実施した遺跡も存在した。また、調査範囲を随時広げたり調査箇所数を増やしたりすることが容易に出来ず、調査箇所が所有者により指定された所もあった。したがって、遺跡の範囲が正確につかめない箇所があったりした。このため、全面調査時に遺跡範囲が拡大するものも生じ、確認調査を隨時実施しなければならない遺跡も存在した。

このような状況のなかで確認調査を実施したため、確認調査終了後はすべて埋め戻しを行った。埋め戻しの際には、後の農作業に支障をきたさないように、タンバ・重機などで締め固め、埋め戻し土の不足には真砂土で補った。特に上質条件の悪いものについては、凝固剤としてセメント、石灰を混入して、地盤の沈下などが起こらないように配慮した。

確認調査は分布調査時の番号で行い、平成元・2年度に実施した本州四国連絡道路本線部分の確認調査遺跡数は69遺跡にのぼる。また、遺跡の全面調査中に遺跡の範囲が広がる可能性が生じたため、隨時確認調査を実施した遺跡は3遺跡程度存在した。一方、本線部分に新たな遺跡が発見されたことにより確認調査を実施したり、工事用道路や溜池改築などの付帯工事箇所についても隨時確認調査を実施し、最終的には確認調査は平成6年度まで行った。なお、確認調査の遺跡の番号と所在地、調査年度、遺跡の種別、確認箇所数、調査面積、担当者は第1~3表の通りである。

全面調査

平成元・2年の確認調査の結果、17遺跡において遺構・遺物が検出された。その結果をもとに本州四国連絡橋公団と協議を行ったが、遺構・遺物が検出された遺跡すべてについて全面調査を実施することとなった。全面調査は用地買収状況に応じて実施することとなり、最初は津名郡北淡町のインターチェンジ部分に所在する掛内遺跡であり、平成2年度から調査を開始した。全面調査は主に平成3~4年度に集中することとなり、2年間で道路本線部分だけで16遺跡の調査を終了することとなった。

なお、全面調査実施にあたっては、確認調査時点までの遺跡番号ではなく、遺跡名を付して実施したが、確認調査番号と遺跡名については第1~3表を参照されたい。

一方、本線道路工事に伴い、工事用道路や溜池改築などの附帯工事箇所が存在することが新たに判明し、これも本州四国連絡橋公団と協議を行い、随時確認調査、全面調査を実施した。付帯工事のうち、工事用道路については、工事に使用した後、各町の町道として移管されるものがあり、それらについての調査は基本的に各町が実施することとなり、津名郡町村会が調査を担当した。ただし、一部算が実施したものもある。付帯工事に伴う調査は、分布調査を随时実施し、確認調査を実施したもの5遺跡であり、全面調査は4遺跡について実施した。

また、平成元・2年の確認調査後に新たに発見された遺跡は2遺跡存在し、確認調査の結果、1遺跡で遺構が検出され、本州四国連絡橋公団との協議の結果、全面調査を行った。

以上の結果、本線部分に関して全面調査を実施したのは18遺跡であり、付帯工事に伴う全面調査は4遺跡で、合計22遺跡にのぼった。それらのうち、兵庫県教育委員会が調査を実施したのは20遺跡である。

各遺跡ごとの詳細な調査体制・調査経過については、第1~3表およびそれぞれの遺跡の報告に譲ることとする。



第1図 本州四国連絡道路（津名～淡路）関係確認調査実施道路分布図

第1表 本州四国連絡道路建設に伴う埋蔵文化財調査結果一覧表 (1)

番号	確認調査番号	所在地	調査年次	種別	調査面積	調査担当者	遺跡名	全面調査	調査年度	調査担当者	報告書	備考
1	津-4	津名郡一宮町瀬田2559	元年度	散布地	3箇所	12m ²	吉田・西口他					
2	津-5	津名郡一宮町瀬田2385他	元年度	散在地	3箇所	12m ²	吉田・西口他					
3	津-6	津名郡一宮町瀬田2210他	元年度	散在地	3箇所	12m ²	吉田・西口他					
4	津-7	津名郡一宮町瀬田1894他	元年度	散在地	3箇所	8m ²	吉田・西口他					
5	津-8	津名郡一宮町瀬田1911他	元年度	散在地	3箇所	12m ²	吉田・西口他					
6	津-10	津名郡一宮町瀬田1139他	元年度	散在地	7箇所	28m ²	吉田・西口他	中・近世	4年度	吉田・三原	I	
7	津-12	津名郡一宮町瀬田1485	元年度	散在地	3箇所	12m ²	吉田・西口他					
8	津-13	津名郡一宮町瀬田1379他	元年度	散在地	4箇所	16m ²	吉田・西口他					
9	津-15	津名郡一宮町瀬田1360	元年度	散在地	6箇所	24m ²	吉田・西口他					
10	津-19	津名郡一宮町新村369・369他	1~4年度	散在地	28箇所	152m ²	吉田・西口他					文獻遺跡
11	津-20	津名郡一宮町新村239	元年度	散在地	3箇所	12m ²	吉田・西口他					
12	津-22	津名郡一宮町新村636	元年度	散在地	5箇所	18m ²	吉田・西口他					
13	津-25	津名郡一宮町玉坂2892	元年度	散在地	1箇所	18m ²	吉田・西口他					
14	津-26	津名郡一宮町南鶴3027	元年度	散在地	1箇所	18m ²	吉田・西口他					
15	津-29	津名郡一宮町木戸2537	元年度	散在地	4箇所	16m ²	吉田・西口他					
16	津-30	津名郡一宮町木戸2479	元年度	散在地	4箇所	16m ²	吉田・西口他	山麓時代後期	4年度	吉田・三原	I	馬谷古墳
17	津-31	津名郡一宮町木戸2178	元年度	散在地	2箇所	10m ²	吉田・西口他					
18	津-33	津名郡一宮町木戸2178・2179	元・2年度	散在地	5箇所	20m ²	吉田・西口他					
19	中須賀重勝	津名郡一宮町木戸牛頭原1916	3年度	散在地	7箇所	56m ²	吉田・西口他	山麓時代後期	3年度	吉田・岸本	I	大木谷通路
20	同	同	2年年度	散在地	6箇所	28m ²	吉田・西口他	山麓時代後期	3年度	吉田・岸本	I	工事用道路(通路)
21	同	同	2・3年度	散在地	1箇所	3m ²	吉田・西口他	山麓時代後期	3年度	吉田・岸本	I	工事用道路(通路)
22	北-1	津名郡北浦町重津2175他	元年度	古墳地	27箇所	166m ²	吉田・西口他					
23	北-2	津名郡北浦町重津2121他	元年度	散在地	8箇所	32m ²	吉田・西口他					
24	北-3	津名郡北浦町重津1582他	4年度	古墳	3箇所	93m ²	吉田・三原	古墳時代後期	4年度	吉田・三原	I	美馬山古墳群
25	北-3	津名郡北浦町重津1717他	4~5年度	古墳	3箇所	135m ²	吉田・西口他	古墳時代後期	3~4年度	吉田・三原	I	美馬山古墳群
26	北-4	津名郡北浦町重津2656他	元年度	散在地	14箇所	56m ²	吉田・西口他	下遺跡 A	3年度	吉田・岸本	I	
27	北-5	津名郡北浦町重津1360他	元年度	散在地	13箇所	52m ²	吉田・西口他	下遺跡 A	3年度	吉田・岸本	I	
28	北-6	津名郡北浦町重津246他	元年度	散在地	10箇所	46m ²	吉田・西口他					
29	北-7	津名郡北浦町重津855他	1~2年度	散在地	3箇所	25m ²	吉田・西口他					
30	北-8	津名郡北浦町重津1249他	元年度	散在地	5箇所	26m ²	吉田・西口他					
31	北-9	津名郡北浦町重津1235他	元年度	散在地	3箇所	23m ²	吉田・西口他					

第2表 本州四国瀬戸内海沿岸道路建設に伴う埋立て地財産調査結果一覧表 (2)

番号	確認調査番号	所 在 地	確 定 調 査		調査担当者	測定名	全 面 葦	現生時代	調査相当当量	調査相当當量	備考
			調査年度	種 別							
33	北-10	津名郡北淡町脇坂1794 津名郡北淡町1-69-2158953他	元年復 新芦原?	1箇所	20m ²	吉田・西口他	占田・熊出他	中世	—	—	—
34	北-11	津名郡北淡町1-69-1115他	元年復 散布地	5箇所	20m ²	吉田・西口他	吉田・西口他	4年復	吉田・三原	1	—
35	北-12	津名郡北淡町1-69-1115他	元年復 散布地	19箇所	76m ²	吉田・西口他	外町溝庭	—	—	—	—
36	北-13	津名郡北淡町毛野字石引203 津名郡北淡町毛野字石引203	元年復 散布地	6箇所	24m ²	吉田・西口他	山土・中村他	—	—	—	浅野寺地区道路 井内谷道路
37	淡野寺地区	津名郡北淡町毛野字石引203 津名郡北淡町毛野字石引203	5年復 新芦原?	1箇所	210m ²	吉田・西口他	—	—	—	—	—
38	北-14	津名郡北淡町1-井567 津名郡北淡町1-井471	元年復 散布地	5箇所	20m ²	吉田・西口他	吉田・西口他	—	—	—	—
39	北-15	津名郡北淡町1-井567 津名郡北淡町1-井471	元年復 散布地	20箇所	80m ²	吉田・西口他	/井/谷透断	中世	3年復	吉田・井岸本	1
40	北-17	津名郡北淡町1-井471	元年復 散布地	20箇所	80m ²	吉田・西口他	吉田・西口他	—	—	—	—
41	北-19	津名郡北淡町1-井	元年復 散布地	6箇所	24m ²	吉田・西口他	吉田・西口他	—	—	—	—
42	東-2	津名郡北淡町毛野1569 津名郡北淡町毛野1569	元年復 散布地	3箇所	12m ²	吉田・西口他	—	—	—	—	—
43	東-3	津名郡北淡町毛野1569-602 津名郡北淡町毛野1655-628	元年復 散布地	5箇所	20m ²	吉田・西口他	秃山山原	弥生時代後期	3年復	吉田・深井他	N
44	東-4	津名郡北淡町毛野1655-628 津名郡北淡町毛野1655-628	元年復 散布地	9箇所	34m ²	吉田・西口他	尼ヶ崎山原	弥生時代後期	3年復	吉田・深井他	N
45	菅原澤通:	津名郡北淡町白山菅原256 津名郡北淡町白山菅原256	3年復 散布地	5箇所	20m ²	吉田・西口他	管長松道筋	中世	3年復	岸本・所崎	1
46	東-5	津名郡北淡町白山菅原206 津名郡北淡町白山菅原206	元年復 散布地	1箇所	4m ²	吉田・西口他	—	—	—	—	—
47	東-6	津名郡東浦町2432 津名郡東浦町2432	元年復 古墳?	1箇所	20m ²	吉田・西口他	吉田・西口他	—	—	—	—
48	東-9	津名郡東浦町1637他 津名郡東浦町1637他	元年復 散布地	6箇所	198m ²	吉田・西口他	—	—	—	—	—
49	東-10	津名郡東浦町1637他 津名郡東浦町1637他	元年復 散布地	2箇所	8m ²	吉田・西口他	—	—	—	—	—
50	東-11	津名郡東浦町1637他 津名郡東浦町1637他	元年復 散布地	25箇所	112m ²	吉田・西口他	船尾坂:	縄文弥生中叶	3年復	深井・山本他	III
51	東-12	津名郡東浦町2042他 津名郡東浦町2042他	元年復 散布地	3箇所	16m ²	吉田・西口他	—	—	—	—	—
52	東-13	津名郡東浦町2042他 津名郡東浦町2042他	元年復 散布地	10箇所	40m ²	吉田・西口他	藤/木本原	中世	4年復	吉田・三原	1
53	東-14	津名郡東浦町2042他 津名郡東浦町2042他	2年復 半田地	4箇所	50m ²	吉田・山本	—	—	—	—	—
54	東-15	津名郡東浦町2042他 津名郡東浦町2042他	2年復 半田地	1箇所	35m ²	吉田・山本	—	—	—	—	—
55	東-16	津名郡東浦町2042他 津名郡東浦町2042他	2年復 半田地	4箇所	4m ²	吉田・山本	—	—	—	—	—
56	橋今下林通跡	津名郡東浦町22341他 津名郡東浦町22341他	3年復 散布地	9箇所	36m ²	都町会津伊藤	桂木下林伊藤	縄文弥生中世	4年復	都町会津伊藤	丁寧事務(後町造)
57	淡-1	津名郡東浦町22341他 津名郡東浦町22341他	4年復 新芦原?	5箇所	—	吉田・西口他	藤/木本原	—	—	—	—
58	淡-2	津名郡東浦町22341他 津名郡東浦町22341他	4年復 新芦原?	5箇所	20m ²	吉田・西口他	吉田・西口他	—	—	—	—
59	淡-3	津名郡東浦町22341他 津名郡東浦町22341他	2年復 散布地	3箇所	12m ²	吉田・山本	—	—	—	—	—
60	淡-4	津名郡東浦町22341他 津名郡東浦町22341他	2年復 散布地	9箇所	36m ²	吉田・山本	堤壁西田	弥生時代後期	4年復	深井・山本	II
61	淡-5	津名郡東浦町22341他 津名郡東浦町22341他	4年復 新芦原?	2箇所	45m ²	吉田・山本	—	—	5年復	深井・山上他	III
62	淡-6	津名郡東浦町22341他 津名郡東浦町22341他	2年復 散布地	14箇所	56m ²	吉田・山本	—	—	—	—	—
63	淡-7	津名郡東浦町22341他 津名郡東浦町22341他	2年復 散布地	12箇所	48m ²	吉田・山本	塩苦東原耕	弥生時代後期	4年復	吉田・三原	IV

第3表 本州西側連絡道路建設に伴う埋設文化財調査結果一覧表 (3)

番号	種別調査番号	所 在 地	調査年度	種 別		調査相当層	道 路 名	合 面 積	調査 年度	調査担当者	報告書	備 考
				種	別							
64 淡 8	津名郡淡路町岩屋2574・2515他		2年度	散在地	10箇所	40m ²	吉田・山本					
65 淡 9	津名郡淡路町岩屋2865・26971		2年度	散在地	4箇所	16m ²	吉田・山本					サイトメン遺跡
66 淡 10	津名郡淡路町岩屋2555・2556他		2年度	散在地	3箇所	12m ²	吉田・山本					大林遺跡
67 淡 11	津名郡淡路町岩屋726・728他		2年度	散在地	8箇所	32m ²	吉田・山本					銀田遺跡
68 淡 12	津名郡淡路町岩屋25357		2年度	散在地	1箇所	4m ²	吉田・山本					
69 淡 13	津名郡淡路町岩屋550・697他		2年度	散在地	3箇所	12m ²	吉田・山本					
70 淡 14	津名郡淡路町岩屋1117・315他	元	2年度	散在地	7箇所	44m ²	吉田・山本他					
71 淡 19	津名郡淡路町岩屋3441		5年年度	集落?	2箇所	10m ²	吉田・山本他					
72 淡 20	津名郡淡路町岩屋34460他		元年年度	集落?	3箇所	50m ²	吉田・山本他					
73 淡 22	津名郡淡路町岩屋34569他		元年年度	集落?	3箇所	120m ²	吉田・山本他					移進尾山遺跡
74 淡 23	津名郡淡路町岩屋33535		元年年度	集落?	1箇所	40m ²	吉田・山本他					
75 淡 24	津名郡淡路町岩屋1715他		元年年度	集落?	9箇所	360m ²	吉田・山本他					
76 淡 25	津名郡淡路町岩屋1713		元年年度	集落?	5箇所	92m ²	吉田・山本他					
77 淡 27	津名郡淡路町岩屋1713		元年年度	占墳?	1箇所	10m ²	吉田・山本他					

補足調査

平成元年度 吉田・西口他……吉田・昇・西口本介・瀬田・洋・穂 美記・多賀茂治
平成元年度 吉田・瀬田他……吉田・昇・瀬田・洋・多賀茂治
平成2年度 吉田・山本……吉田・昇・山本・洋

全面調査

平成2年度 吉田・山本……吉田・昇・山本・誠
平成3年度 吉田・瀬井他……吉田・昇・深井明比古・岸本・一介・川本・誠・深江英憲・所崎明哉
平成3年度 吉田・岸本他……吉田・昇・岸木一介・所崎明哉
平成3年度 深井・山本他……深井明比古・山本・誠・深江英憲・所崎明哉
平成4年度 吉田・三野……吉田・昇・三野憲吾
平成4年度 深井・山本……深井明比古・山本・誠
平成5年度 深井・山上他……深井明比古・山上恒弘・松岡千尋
平成5年度 山上・中村……山上恒弘・中村吉孝

第2節 整理作業の経過と体制

全面調査を実施した遺跡は22遺跡もあり、佃遺跡のように調査面積・遺物出土量とともに膨大な遺跡がある一方、管松原遺跡のように調査面積・出土遺物ともに些少な遺跡も存在する。また、調査年度や担当者也非常に多岐にわたっている。したがって、各遺跡の整理作業および報告書作成については、遺跡の内容・時期および調査担当者、整理作業のスムーズな流れなどを考慮して、報告書をI～Vの5冊に分けて作成することとし、各遺跡の整理作業もI～Vにそれぞれ所取する遺跡でまとめて実施することとした。報告書のタイトルについては、津名一宮インターチェンジ以南の発掘調査報告書が淡路縱貫道関係埋蔵文化財調査報告書のサブタイトルを冠しているので、それらと区別するため、本州四国連絡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告とし、報告書によつては、遺跡名を主タイトルにすることとした。各報告書の所取遺跡については、第1～3表に示したが、報告書別に示すと、以下の通りである。

本州四国連絡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 I (古墳時代～中世の遺跡・本省)

所取遺跡（12遺跡）	中原遺跡 大木谷古墳 中須賀遺跡 篠鼻山古墳群（原ノ下遺跡B・C地点） 原ノ下遺跡（A地点） 平見遺跡 掛内遺跡 外町遺跡 井ノ谷遺跡 管松原遺跡 蘿ノ木遺跡 尾崎堂ノ鼻遺跡
------------	--

本州四国連絡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 II (弥生時代後期の遺跡)

所取遺跡（1遺跡）	塩竈西遺跡
-----------	-------

本州四国連絡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 III (绳文時代後期ほかの遺跡)

所取遺跡（1遺跡）	佃遺跡
-----------	-----

本州四国連絡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 IV (弥生時代後期ほかの遺跡)

所取遺跡（5遺跡）	禿山遺跡 尼ヶ岡遺跡 塩煮東遺跡 高尾遺跡 岩屋台遺跡
-----------	---

本州四国連絡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 V (縄文時代草創期の遺跡)

所収遺跡（1遺跡） 丸山遺跡

各報告書の刊行年度予定については、本州四国連絡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（以下、本四報告と略）ⅠとⅡが平成8年度、Ⅲ～Vが平成9年度である。

各報告書作成およびそれに伴う出土品整理作業については、本州四国連絡橋公団と協議の結果、兵庫県教育委員会が受託し、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で実施することとなり、各報告別の整理作業実施年度および予定は以下の通りである。

本四報告Ⅰ関係遺跡	平成4年度～平成8年度
本四報告Ⅱ関係遺跡	平成6年度～平成8年度
本四報告Ⅲ関係遺跡	平成5年度～平成9年度
本四報告Ⅳ関係遺跡	平成4年度～平成9年度
本四報告Ⅴ関係遺跡	平成7年度～平成9年度

各遺跡の出土品整理の実施内容および体制については、各報告書にゆずることとして、以下、本四報告Ⅰに収められた遺跡についての作業内容および体制について述べることとする。

本四報告Ⅰ関係遺跡のうち、掛内遺跡については調査年度も早かったため、平成4年度から出土品整理作業を実施しており、平成5年度にはトレース作業まで実施し、大半の作業は終了した。一方、掛内遺跡および尾崎堂ノ鼻遺跡を除いた遺跡出土品については、掛内遺跡同様、発掘調査実施年度中に出土品の水洗い作業は終了していたものの、その後の作業は平成6年度以降に実施した。

なお、尾崎堂ノ鼻遺跡については、兵庫県教育委員会の受託ではなく、すべての作業は津名郡町村会で行った。

それらの遺跡の出土品整理作業のうち、平成6年度はネーミング作業を実施した。ネーミング作業は出土した遺物1点ずつに番号を記入してゆく作業であり、当事務所では遺跡調査番号とそれに続く番号を記入するのであるが、遺跡調査番号は遺跡の名称および調査実施年月、調査担当者などを特定できるもので、台帳を作成し、対照できるようにしている。また、それに続く番号も、出土層位・出土遺構・出土年月日などを記入したカードを入れた袋ごとに、それらを記入した台帳を作成し、その際に付した番号であり、番号により出土層位などが特定できるものである。記入には基本的にポスターカラーを使って面相模で細かい字で記入している。

平成7年度は接合・補強、実測・拓本、復元、写真撮影、写真整理、保存処理の各作業を実施した。接合・補強はバラバラの状態で出土した同じ個体の土器片を接着剤で接合し、次の実測作業に耐える強度にするため、一部分を石膏などで補強する作業である。実測・拓本は、出土遺物の形・大きさ・紋様・製作手法などの特徴を観察して、方眼紙などの上に図化し、記録する作業で、整理作業中で最も遺物を深く観察する重要な作業である。また、紋様などの特徴を拓本で表現することもある。復元作業は実測まで終了した遺物のなかから、完全な形に近いものや特徴的なものを選んで、不足した部分を石膏などで補填して、元の状態に復元する作業であり、次の写真撮影の関係などから補填した部分を着色する。写真撮影は遺物を横位置や直上から撮影し、形・質・特徴などを視覚として伝達するための作業であり、当事務所では専門業者に委託して実施している。また、出来上がった写真を公開・活用するために、ネガとプリントの一枚ごとに番号を付けて撮影内容を記した台帳を作成するのが写真整理である。保存処

埋は、出土した金属製品は土中の塩分や水分の影響で劣化しており、そのままでは錆が進行してすぐにはち来る。そこで脱水・脱塩処理のち錆取りを行い、樹脂を含浸させて補強・強化させる作業である。この作業によって、錆の塊であった不明品の形状が判明することが多い。

平成8年度は遺構図補正、トレース、保存処理作業を実施し、掛内遺跡もあわせてレイアウト作業を行い、報告書印刷・刊行を行った。遺構図補正是、発掘調査時に作成した図面を整合性を持つように補正したり、現地で分割作成した図面をつなぎ合わせ、トレース下図を作成する作業であり、トレースは補正した遺構図や遺物実測図などを製図用ペンを使ってトレーシングペーパーに書き写す作業である。報告書の製版下に使用するため、仕上がり寸法に注意してペンの太さを使い分ける必要がある。レイアウト作業は報告書刊行にあたって、調査の内容などの文章原稿とトレースした図面や写真を見やすく配列したり、製版下を作成し、印刷するまでの細かな指示を記入するなどの作業である。印刷は専門業者に発注し印刷・製本する。出来上がった報告書は、発掘調査の成果を紹介し、また、学術資料として活用するために、各図書館や各都道府県教育委員会や各市町教育委員会などに配付する。

出土品整理作業については、平成4年度～平成8年度の5年間実施し、各年度ごとに本州四国連絡橋公園と契約を行い、以下の体制で実施した。

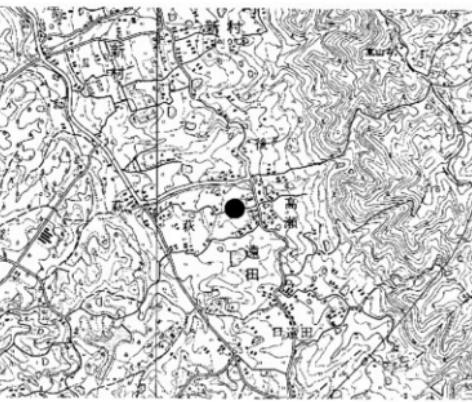
出土品整理	主体（契約）	兵庫県教育委員会
出土品整理	担当（実施事務）	兵庫県教育委員会 埋蔵文化財調査事務所
担当者（作業）	職員	調査専門員
		吉田 昇
	主査	加古千恵子（保存処理担当）
	主査	岸本 一宏
	技術職員	山本 誠
嘱託員	主任技術員	松本 瞳
		小川 美奈
		酒井喜美子
		尾崎比佐子
	企画技術員	岡崎 煉子
		横山 麻子
	國化技術員	中田 明美
		藏 純子
		鎌木まき子
		茅原加寿代
		萩原 智美
日々雇用職員	名田 純子	
		三浦由紀子
		森實 直子

第2章 遺跡の調査

第1節 中原遺跡

1. 位置と環境

中原遺跡は津名郡一宮町遠田に所在する。遺跡は「東山寺」の建立されている、標高360mの東山寺山から淡路島の西浦海岸に向かって、いっ気に傾斜する斜面地に立地する。周辺部には独立丘陵状の高まりも見られ、山塊から扇状地へと変化する辺りで、土石流によって形成された舌状に延びる地形の先端部に位置する。また、北側に向かっては小さな谷地形と成っており、深くて細い小河川が見ら



第2図 遺跡の位置 (1/25,000「郡家」・「志筑」)

れ、途中で新川に合流して北西方向に流れて瀬戸内海へと注ぐ。

現在の地目は水田及びみかん畑であり、標高は80~83mの間に存在する。



第3図 調査区の位置 (1/2,000)

2. 調査の経過

遺跡は昭和62年～63年にかけて実施された分布調査の内、昭和62年3月の一宮町域の分布調査にて、発見されたもので、当初は津-10地点と呼称されていた。

確認調査は平成元年に実施され、7か所設定した坪の内2か所にて、柱穴と土壌が検出され、中世の遺物が検出されたが、他の坪からは何ら遺構・遺物は見られず、縛まりの悪い砂礫層が厚く堆積していた。確認調査の結果を受け、全面調査の範囲を確定させ、遺跡名も字名から中原遺跡と呼称された。

その後、兵庫県教育委員会と本州四国連絡橋公团が協議を重ねた結果、平成5年1月29日～3月12日の期間で全面調査を実施する事となった。

調査にあたっては、耕土以下遺物包含層まで、バックホーによる機械掘削を行った。残る遺物包含層を人手によって掘削し、遺構検出に務める一方で、必要に応じて遺構検出状況の写真を撮影した後、遺構掘削を開始した。遺構掘削終了後、調査範囲全体を写真・図面に記録した。

また、各遺構の配置・周辺の地形をよりよく把握するため、ヘリコプターによる空中写真の撮影を実施した。

3. 調査の結果

遺構

調査によって検出された遺構は、井戸・土壌・溝等である。

検出した遺構は、調査区の東半部に限られ、調査区の北及び東に向かっては、砂を中心とした砂礫層と成っている。

井戸

井戸は楕円形を呈し8×9mの大きさを計る、素掘りのものである。その埋土中より多くの丸、陶磁器片を検出しており、人為的に埋められた過程を示しているものと考えられる。

土壌

土壌は合計で5基検出している。特に調査区中央で、まとまりを持って4基の土壌を確認している。いずれも直徑1m以上の大形の土壌であり、平面形は円形、側面は垂直に、底面は水平、断面は方形を呈する。

出土遺物が少ないため、時期を決定するのはためらわれるが、概ね近世の遺構と考えられる。

溝

調査区全体から3本の溝状遺構を検出している。

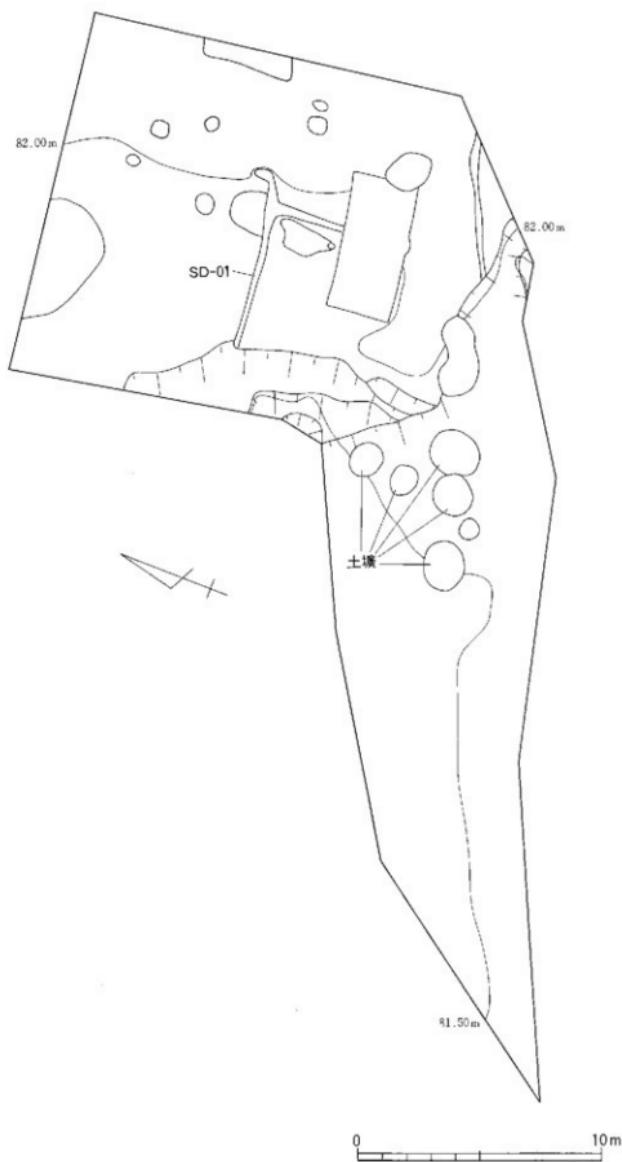
いずれの溝も、排水に伴う暗渠と考えられ、出土遺物から近世の時期が想定される。 (吉田)

遺物

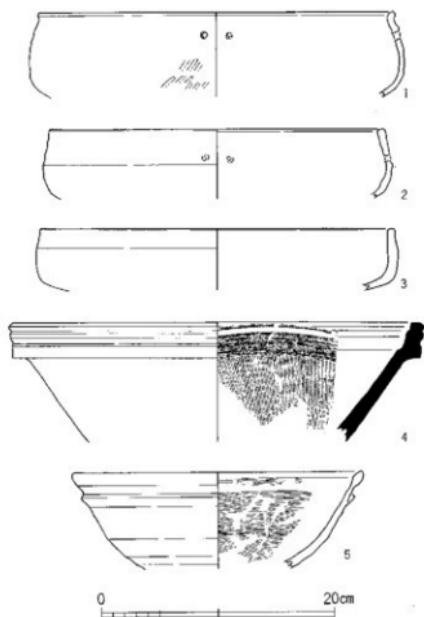
出土遺物量は少なく、図示したのは土器5点と鉄製品3点である。

土器には焼成、擂鉢があり、すべて調査区北東部の上段から出土している。

1～3は土師質の焼成で、現存高は1がもっとも高く7cm、次いで2が6cm、3がもっとも低く5cmである。口径は1が30.1cm、2が28.6cm、3が30.1cmである。1は口縁部から底部への屈曲はゆるいカーブを描き、口縁部は短く外反させている。口縁下には直径6mmの孔が1.5cmの間隔で2個穿たれており、つり下げの紐孔と思われる。体部外面には斜め方向の平行タタキが認められ、外面には煤が付着している。胎土には赤色粒を含み、にぶい橙色(7.5YR7/3)を呈する。上段部西端の落ち込み出土である。



第4図 遺構全体図



第5図 出土土器

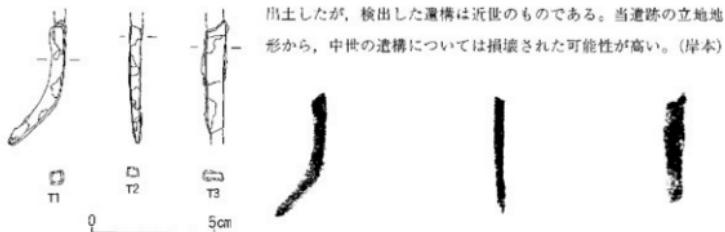
世紀後半～19世紀の所産であろう。SD-01から出土している。

5は土師器の擂鉢で、外面口縁部下に貼り付けの凸帯がめぐる。擂目は刷毛目を横方向に施している。胎土には赤色粒を含み、淡赤橙色（2.5YR7/4）を呈する。口径は24.6cm。16世紀後半と思われる。

鉄器は3点図示した。すべて角釘片で、土壤から出土している。T1は断面4mm×3.5mm、T2は4mm×4mm、T3は2mm×8mmで扁平である。

4. 小結

今回の中原遺跡の調査の結果、遺跡の一端が明らかにされた。遺物包含層からは中世～近世の遺物が



第6図 出土鉄器

第7図 出土鉄器

2も1と同様、口縁部から底部へは緩いカーブで続く。口縁部に径5mmの穿孔がある。胎土に赤色粒を含み、灰白色（10YR 8/2）を呈する。外面に煤が付着している。下段包含層出土である。

3は口縁部が1・2に比べて厚く、底部との境は急に屈曲する。胎土に赤色粒は含まず、淡赤橙色（2.5YR7/4）を呈する。外面には煤が付着している。1・2同様、内面と口縁外面は回転ナデである。出土場所は1と同様である。

時期的には、1がもっとも古く、18世紀頃、3は19世紀ごろに編年されるものであり、2はその中間の時期にあたると思われる。

4は備前系の擂鉢で、内面擂目の直上に段が認められ、明石で生産されたものと思われる。口縁部は外側に肥厚させ、2条の凹線を施している。内外面の表面には泥漬が施されており、灰赤色（7.5R 5/2）を呈し、断面はにぶい赤褐色を呈する。口径34.7cm。18

第2節 おおぎだに 大木谷古墳

1. 位置と環境

大木谷古墳は、津名郡一宮町大木谷2479-10地に所在する。

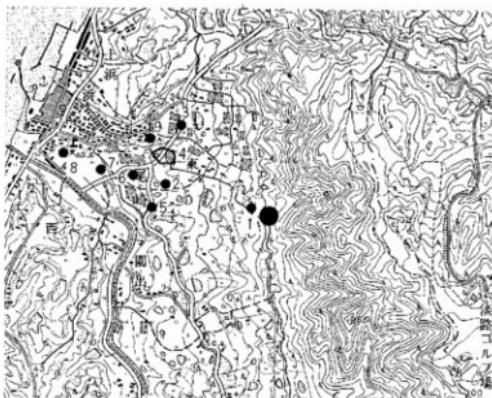
古墳の位置は、西浦海岸尾崎港に注ぐ新川の中流部や河口寄りにあり、津名山地から幾つも派生する尾根のほぼ先端部に位置する。遺跡の前面は海岸線まで緩らかな傾斜地となって、広く開けており、瀬戸内海を挟んで家島から小豆島までを望む。

海岸線から直線で1.2km、標高105mを測る。現在の地目は山林であり、以前には畠地として使用されていた様子が伺えるもの、現在は荒れ地となって放置されている。

(吉山)

周辺の遺跡としては、縄文時代の大木谷遺跡(第8図1)が本遺跡のすぐ北西斜面下にあり、西北西約500mには後期古墳の山門古墳(2)が所在する。中世の遺跡は周辺に多く所在し、本報告書に所収する尾崎堂ノ鼻遺跡(4)や中須賀遺跡(5)では、建物跡や土器等を検出している。他に、前田遺跡(3)、岡堂遺跡(6)、原代遺跡(7)、久保田遺跡(8)、北ノ前遺跡(9)が付近に所在する。

(岸木)



第8図 遺跡の位置 (1/25,000「都家」・「志筑」)



第9図 調査区の位置 (1/2,000)

2. 調査の経過

本州四国連絡道路（神戸・鳴門ルート）建設事業に伴う、一宮町域の分布調査は昭和62年3月に実施されたが、この時点での大木谷古墳の位置は確定されていなかった。

多くの遺跡及び遺跡推定地が発見されたが、周知の遺跡としての大木谷古墳・大木谷遺跡はもとより、今は伝説と成ってしまった枯木古墳・小丸古墳などは、建設事業地内に存在するのかどうかも知れない状況であった。

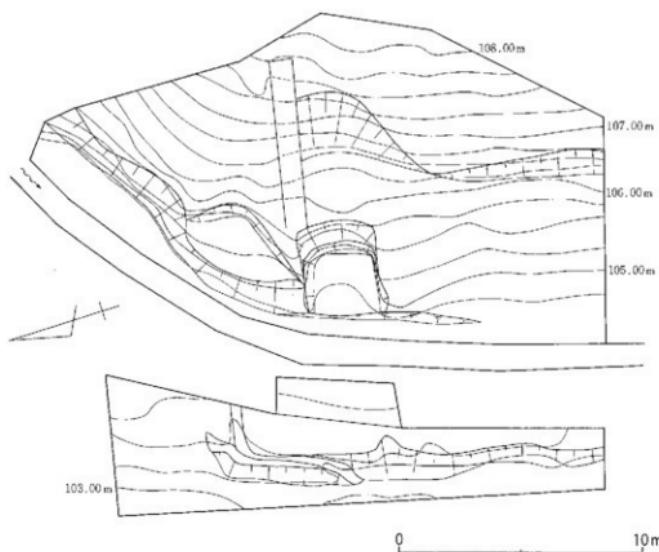
しかし、分布調査結果から確認調査へと計画される段階で、幸いにも地元で古くからの研究者である浜岡先生から貴重な教示を得ることができ、大木谷古墳の位置を判明するに至った。

なお、枯木古墳・小丸古墳は建設事業地には係っておらず、大木谷遺跡もルートから少し外れる事も同時に判明した。

以上の事から、平成元年度に確認調査を実施した。確認調査は破壊の原因となった、水路の前に置かれた目印の大きな石から、東側に向かってトレーニチを設定した。その結果、横穴式石室の側壁基底石と掘り方が確認され、横穴式石室の基底部が残存していることが判明した。大木谷古墳は、昭和9年の破壊から初めて、調査の手が加えられることになった。

全面調査は、本州四国連絡橋公団と協議を重ねた結果、平成4年度に実施することとなった。

調査は、確認調査の結果から、水路を挟んで東をA区、西をB区として実施し、現時点で消滅しまっている古墳の墳丘・石室の規模等、できるだけ当時の状況を把握することを念頭に置いて、大木谷古墳の復元を目的に実施した。



第10図 遺構全体図

3. 調査の結果

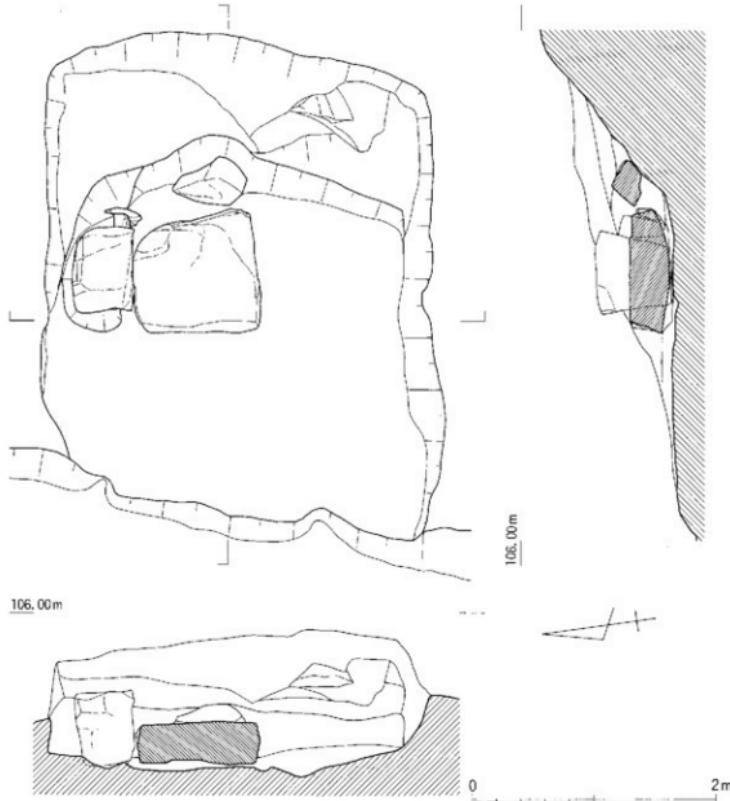
遺構

本古墳は、「淡路考古漫録」(銀治利夫 1937)に肩谷古墳と記載される古墳であり、「淡路考古漫録」では、「円墳、破壊、発見遺物ハ尾崎村小学校ニ保管。」との記載があり、昭和9年の開墾・農業用水路工事以後、古墳の規模等不明な点が多くあり、「淡路の歴史的環境」(縄文時代～古墳時代)所集の一覧表では、円墳(横2.0m、径2.5m)横穴式石室(1.6m×0.9m高1.2m)昭和9年2月細開墾中発見と記録にあり、鉄鏃、刀剣、須恵器、土師器と記載されている。(岡本 稔 1972)

以上の状況を頭に、遺構について順次記述していきたい。

(埴丘)

古墳の立地している地形が、山裾の緩斜面であり、上方から地山面を検出してきた結果、石室掘り方の上方5m付近から、地山整形が見られる。また、第10回遺構全体図から、石室掘り方右側の標高105m



第11図 石室実測図

第2節 大木谷古墳

～106m付近と、左上方の標高106m付近で、周溝の痕跡がセンターに読み取れる。更に、水路下方のB地区では、閑壁に伴う削平の影響もあるが、自然傾斜地形となっており、石室・埴丘は延びて来ないと思われる。以上の事から地形図に復元すると、径10～11mクラスの円墳と考えられる。

(石室)

調査の結果、石室右側壁基底部の石材が、石室構築当初のままに残存しており、石室の掘り方の検出に努めたところ、基底部で幅2.8m、残存長3.4m、奥壁側は43度の傾斜で立ち上がり、最も深い所で1mを測る掘り方を検出した。

石室は、検出された2点の石材を中心に、石材の抜き取り痕などを考慮して検討すると、残存している側壁基底石の右に並ぶ石は、奥壁が倒れている可能性が高く、奥壁正面の石材と考える。

また、奥に見えるやや小型の自然石は、奥壁に付随する類のものと想定される。

数少ない資料から、石室の復元を敢えて行うと、残存石室の内法で幅1.3m、残存長2.9mとなる。

また、側壁・奥壁の石積みについては、石材の大きさから考えて、2～3石の石積みであろう。

掘り方と石室の関係では、右側壁を掘り方にきっちり固定しており、左側壁側に少し余裕が見られ、掘り方の中央に石室を設置しないで、右寄りに構築した様子が伺え、順序としては、右側壁側からといった順序が想定される。

使用されている石材は、付近一帯に見られる転石と考えられ、現に調査中に多くの石材が頭を出している。

地形実測図や埴丘復元の状況から、石室の規模を敢えて想定すると、石室の端は水路付近となり、全長5m程の横穴式石室であったと考えられる。

石室の主軸はW-9°-Nで、ほぼ西向きに開口部を持つと思われる。

遺物は、石室床面と思われる付近と、水路の下方B地区流土中から検出されているが、一度手が加わっているため、原位置かどうか疑わしい。

今回の調査からは、主体部と呼べるものは1箇所のみであった。

(吉田)

遺物

今回の調査で出土した遺物には鉄器と石器がある。

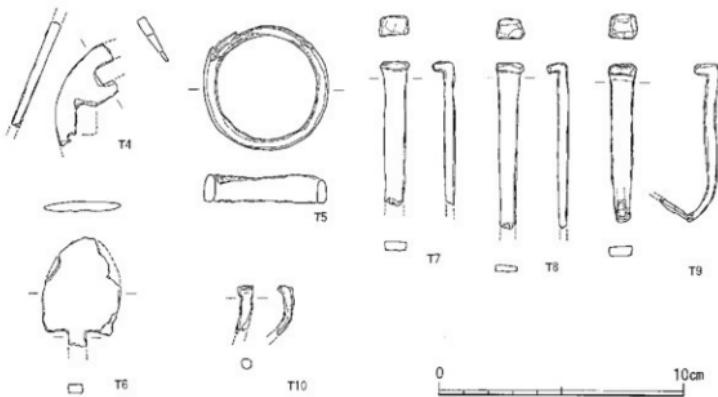
鉄器には刀鍔・環状製品・鎌・釘がある。

T4は刀鍔の破片である。平面方形と思われる窓が2箇所確認できる。窓は7mm×12mm以上の大きさで、窓間は短い方で10mm、長い方で15mmである。窓の大きさと窓間の幅から、6窓もしくは8窓のものと思われる。鍔の平面形状は倒卵形になるものと思われ、現存する幅は2cmで、厚さは4mmである。石室の前底部埋土から出土した。

このような窓を持ち、幅が広い鍔を有する刀の型式は、頭椎大刀・主頭大刀・円頭大刀があり、それらのいずれかにあたると思われる。

T5は環状製品である。平面はほぼ正円形で、直徑5.1cm、高さ1cm、厚さ4.5mmで、断面形状は上方の幅が若干狭く、台形状を呈する。したがって、直徑も上端ではやや小さく、4.8cmとなる。石室の南側掘り方内埋土より出土した。

この鉄製品の用途は不明であるが、後世の鎌や鍔等の道具の11金あるいは、古墳に伴うものとすれば把頭縁金具の可能性がある。把頭縁金具とすれば、平面形状が卵形をなさないことから、頭椎大刀や主頭大刀ではなく、円頭大刀の可能性が高い。



第12図 出土鉄器

T 6は鉄劍である。有茎劍であるが、欠損している。鍔部は頭が丸い五角形状を呈し、逆刺は浅い。鍔身部断面はレンズ状をなし、両丸造りである。残存長4.5cm、鍔身部長3.9cm、幅3.2cm、厚さ4cm、頸部残存長0.6cm、幅0.7cm、厚さ0.4cmを測る。石室の北部掘り方内埋土より出土している。

鉄劍は今回の調査では1点のみ出土したが、以前の出土分と合わせて合計10点となった。

鉄角釘は3点図示した。すべて平折角釘で、長さは最低でも6cm以上で、8cm程度になるものと思われる。断面長方形で長さ幅とも大きい釘であり、通常、横穴式石室の内部に納められた木棺に使用された釘は断面方形に近く、長さ、幅とも本例よりずっと小さいものである。また、木棺以外に大きな釘を使用するものは考えられず、他の古墳出土釘にも本例と同様の釘は見当たらない。したがって、本例は古墳に直接関係したものではなく、後世に混入したものと思われる。

T 7は残存長5.9cm、幅1.0~0.75cm、厚さ0.35cmで、頭部は長さ1.2cm、幅0.8cmの長方形で、厚さ0.35cmである。石室の前庭部分埋土から出土している。

T 8は残存長6.75cm、幅0.9~0.6cm、厚さ0.25~0.4cmで、頭部は長さ1.1~0.8cm、幅0.8cmと台形で、厚さは0.3cmである。石室の北部掘り方内埋土より出土している。

T 9は先端まで遺存しており、残存長8.1cm、幅1.0~0.3cmと先端にゆくにつれ徐々に幅が狭くなっている、厚さも0.5~0.15cmと、先端へ徐々に薄くなっている。頭部は長さ1.15~1.0cm、幅1.0cmと平面台形で、厚さは0.4cmである。石室前庭部の西側下の落ちの埋土から出土している。

T 10は鋶化が激しいが、丸釘である。残存長2.0cm、太さ0.4cm、頭部の直径は約0.6cmである。石室前底部の埋土（褐色砂層）から出土している。近代以降のものである。



石器は石劍が1点、石室前庭部の西側下の落ちの埋土（暗褐色砂質土）から出土している。
(岸本)

S 1は、サスカイト製の石劍で、長さ1.9cm、幅1.6cm、厚さ0.4cm、重さ1.0g、先端は欠損している。形態から推測して、縄文時代中期～後期に属するものであろうと考えられる。
(山本)

以上、今回の調査で出土した遺物を記載したが、前述のように、昭和9年に破壊された際に大量の遺

物が出土している。それらについては、すでに公表されているのであるが、ここで今一度収録することにより、古墳を理解する上での一助とした。

なお、昭和9年に出土した遺物については、一宮町江井所在の旧住田家住宅に展示してあったが、平成7年の阪神・淡路大震災により家屋が全壊したため、現在は収蔵庫の奥に保管しており、取り出すことが困難なため、実測図については前報告の図を淨写してそのまま収録し、説明については、前報告者の了解を得て、若干変更している。

(岸本)

4. 付載 (出土遺物)

須恵器

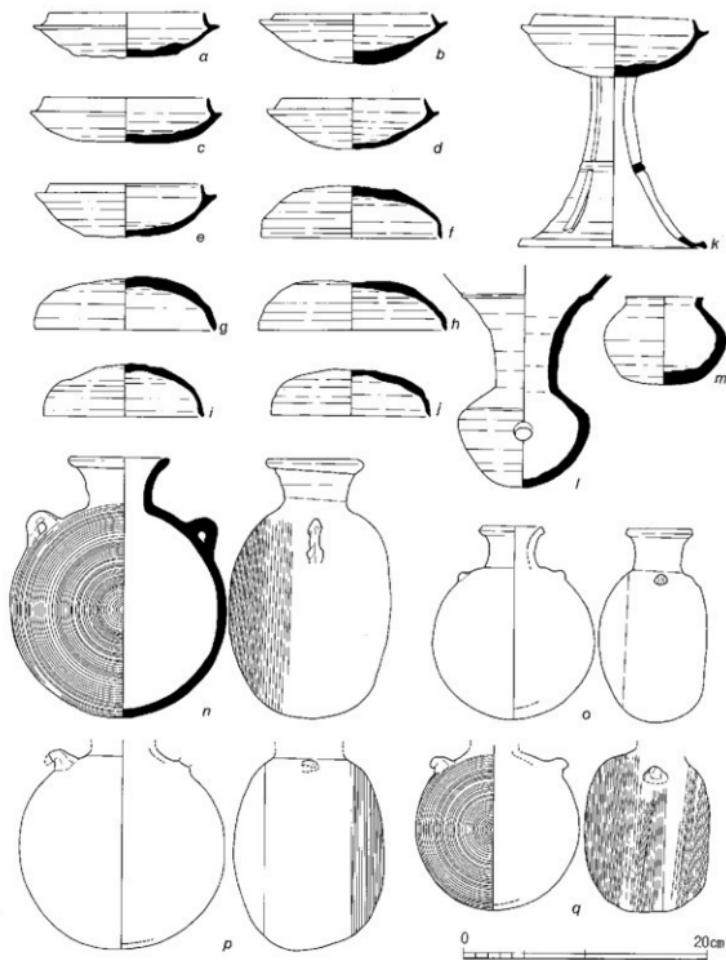
*a*は口径12.9cmで全体に偏平な作りであり、底部には粘土紐の巻き上げ痕がみられヘラ削りによって平坦になっている。一部に緑色の自然釉がみられ、胎土は細かい砂粒を多量に含み灰白色を呈している。焼成は良好である。*f*の蓋は*a*とセットになり、胎土、色調とも同じであり粗雑な仕上げである。*b*～*d*は口径14cm～11.8cmで表面にはヘラ削り痕がみられ、*c*はヘラ削りによって底部は平坦に仕上げられている。内面底部にはいずれも縱方向のナデ痕がみられ、胎土は砂粒を含み灰色を呈す。*d*のみ焼成はやや不良。*e*は口径14.6cmで内外面ともにナデ痕がみられる。外面は黒色で内面は茶色を呈し、胎土は砂粒を含まず精選された胎土を使用している。*j*は*e*とセットになる蓋であり、胎土・色調・仕上げ手法は全く同一である。*g*～*i*は口径15.6cm～13.2cm、いずれも外面はヘラ削り痕がみられ、内面にはナデ痕がみられる。胎土は砂粒を含み、灰色を呈す。*b*～*d*の身と*g*～*i*の蓋はそれぞれセットになる可能性もあるが*a*と*f*、*e*と*j*のように両者の齐一性を顕著には認められないでセット関係は不明である。*k*は長脚二段透しの有蓋高坏である。口径13.2cm、高さ18.8cmである。坏部下から脚にかけて横方向の調整痕がみられる。脚は二段透して三方に開け、開けには二条の凹線を施している。脚内面上方には絞り痕がみられ脚下端部は薄く、表面には自然釉がみられ、全体に黒色を呈し丁寧な仕上げである。*l*は残存高17.5cmの籠である。頭部は下半は垂直に立ち上がり上部で大きく口を開き一条の突帯を施している。胴部は直線的な上肩部に対し、下腹部は半球形を呈し、肩部には一条の凹線を施している。表面全体には縦方向のナデ痕がみられる。*m*は口径6.4cm、高さ7.2cmの短頸瓶である。球形の胴部にやや外反した頭部がつく。頭部上端はヘラによって水平に削られている。器内は厚く全体に灰色を呈す。*n*は口径8.2cm、高さ21.7cm、両肩部に環状釣り手を有している。口頸部は上開きで縁部は丸くおさめている。表面はカキ目調整を施し頭部から胴上部にかけ自然釉がかかっている。*o*は口径5.4cm、高さ16.3cm、釣り手は小さな粘土塊を付けているのみである。胴部背面にヘラ削り痕がみられる。*p*は胴部径17.1cm、残存高16.7cm、鈎状の釣り手を有する。胴部前・背両面にカキ目調整を施している。*q*は胴部径13.6cm、残存高13.3cm、鈎状の釣り手を有する。胴部は全面にカキ目調整を施し、茶褐色を呈している。

鉄器

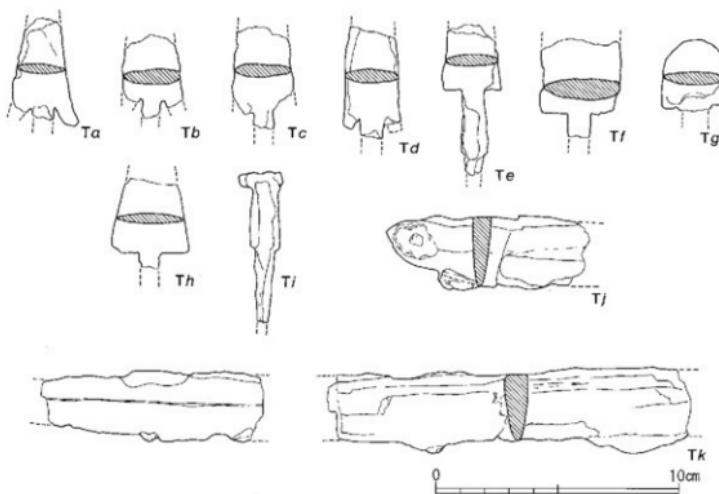
9点の鉄鏃は全て平根式であるが金容を知り得るのは三点のみである。9点の内 *Ta*～*Td* は逆鏃のある腸抉式で *Te*～*Tf* は三角式とに分けられる。*Ta* は刃部長4.5cm厚さ0.3cmであり、*Tb* は刃部長3cm厚さ0.5cmである。

直刀は2個体分あり、*Tj* は刃部幅2.9cm厚さ0.8cmである。*Tk* は刃部幅2.7cm、厚さ0.9cmである。

(小川)



第14図 出土土器



第15図 出土鉄器

5. 小結

今回の調査により、大木谷古墳そのものは本州四国連絡道路により破壊されたが、これまで、削平によりその所在地が不明であった大木谷古墳の位置が明確になったことの意義は大きい。

墳丘は大きく削平を受け、横穴式石室も僅かにその基底石のごく一部を残すのみであった。

大木谷古墳の位置は海岸からは約1.2kmの距離であるが、標高105mの丘陵支尾根上に位置し、古墳から播磨灘を能望できる場所に立地している。この立地については後述するが、淡路島北部の西側沿岸に所在する古墳の特徴となっている。

一方、大木谷古墳出土遺物については、今回の調査では須恵器の小片と鉄器であったが、それらは昭和9年の採集遺物とは須恵器が同型式と考えられ、鉄器についても同タイプのものが出土している。したがって、大木谷古墳の時期については、採集土器が示すMT85型式すなわち、6世紀第3四半世紀頃と考えられ、今回の調査結果による変更は認められなかった。

しかし、今回出土した鉄器には方形の窓をもつ刀鐸があり、採集品の刀身片がこれにあたるかは別として、装飾大刀が副葬されていたことが判明した。この装飾大刀は円頭大刀の可能性がある。

淡路島北部の西側沿岸に所在する各古墳は、6世紀第3四半世紀頃から築かれはじめると考えられるが、その古墳に装飾大刀が副葬されていることは、これらの古墳の動向を探る上で重要な材料となるであろう。

(岸本)

第3節 中須賀遺跡

1. 位置と環境

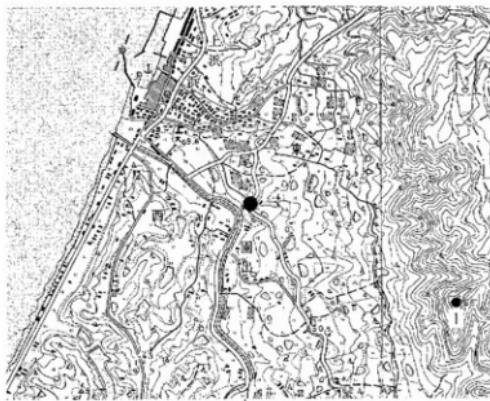
中須賀遺跡は津名郡一宮町尾崎字中須賀に所在し、今回調査した箇所は1916-1, 1916-2, 1946番地にあたる。

遺跡は津名山地中の支谷のうち、淡路島を構造的に北半と南半に分離する志筑断層と平行に流れる新川が北北西方向に開析した谷の出口付近にあり、この谷には西南西に短くのびる小支尾根が認められるが、本遺跡もその丘陵の先端部分に位置している。ちょうど新川が北流から北東方向へ流れを変える部分の東側にあたる。

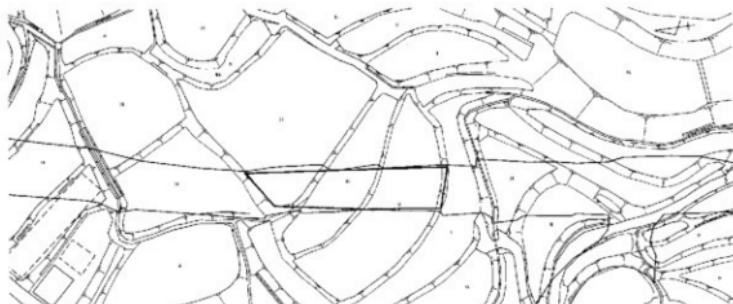
このあたりの地形は小さな起伏に富んでおり、周辺には小規模な中世の遺跡が散在する（第8図）。また、東側山頂から西の斜面は急峻であることから、山頂には尾崎城（第16図1）が築造されている。なお、付近には室町時代に京都からの刀鍛冶の移住伝承がある。

2. 調査の経過

当遺跡については、本州四国連絡道路の工事用道路として計画され、工事終了後は町道になることから、一宮町教育委員会が調査主体となって、平成元年度から分布調査が実施された。また、平成3年度には、町教育委員会によって確認調査も実施され、3箇所の坪から柱穴・落ち込みが検出され、全面調査が必要との判断がなされた。この結果を受けて、本州四国連絡橋公団から、兵庫県教育委員会に調査の依頼があり、平成3年度に水田3筆（282m²）について全面調査を実施した。



第16図 遺跡の位置 (1/25,000「郡家」・「志筑」)



第17図 調査区の位置 (1/1,000)

3. 調査の結果

調査区は大きく3枚の水田に分かれており、北側の高い方から順に上・中・下段と呼称する。

上段では、耕土・床土の下には黄褐色の土層が堆積しており、中段に近い部分では灰黃褐色土層が堆積していた。灰黃褐色土層には若干の遺物を含んでいた。遺構はこれらの土層の下の浅黄色の土層から検出でき、上段では不定型の土壤を1基検出した。

中段では、耕土・床土の下には黄褐色の土層と灰黃褐色・褐色の土層が堆積しており、後者の土層に少量の遺物を含んでいた。遺構面はこの下の明黄褐色土で、ほぼ中央部で柱穴、梢円形の土壤、溝状の浅い落ち込みを検出した。

下段は、土層の堆積状況は中段と同様であるが、遺構面は浅黄色の砂質土である点が異なっている。遺構は柱穴が少量と、溝状の浅い落ち込みを検出した。

遺構

土壤

上段で検出した不定形な土壤は、最長3m、最短2.3mである。平面的には台形に近く、遺物は出土していない。

中段の土壤は、隅丸方形と梢円形の中間の平面形で、長軸1.6m、短軸1.2mで、深さは55cmで、断面は台形を呈する。土壤の埋土から擂鉢と土師器皿が出土した。

柱穴は中段で4本、下段で4本が検出できた。いずれも掘立柱建物跡として組み合うものは認められない。柱穴は最も小さいもので、直徑25cm、大きいものでは40cmで、30cm前後のものが最も多い。柱穴の深さは、浅いもので5cm、深いもので45cmであり、20cm前後が最も多い。柱穴の深さが浅いことから、全体にかなり削平を受けていることが推察される。下段の確認調査坪の西隣りで検出した柱穴内より土師器の皿片が1点出土している。

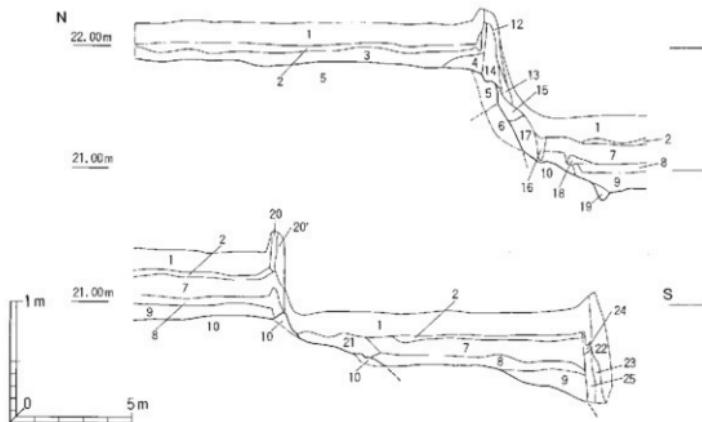
溝状の浅い落ち込みは、中段と下段で1条ずつ検出した。中段のものは土壤をとりこむ形で中央部が最も幅広くなってしまっており、最大幅約4.2mである。深さは最深部で11cm、レベル的には西側が低く東側が高くなっている。

下段の溝状落ち込みはやや並行し、中央部が若干膨らんでいる。最大幅は3.5mで、東側は2mと狭くなっている。深さは中央の最深部で33cm、底のレベルは東側が高い。埋土中より土錘と土壤片が出土している。



第18図 遺構全体図

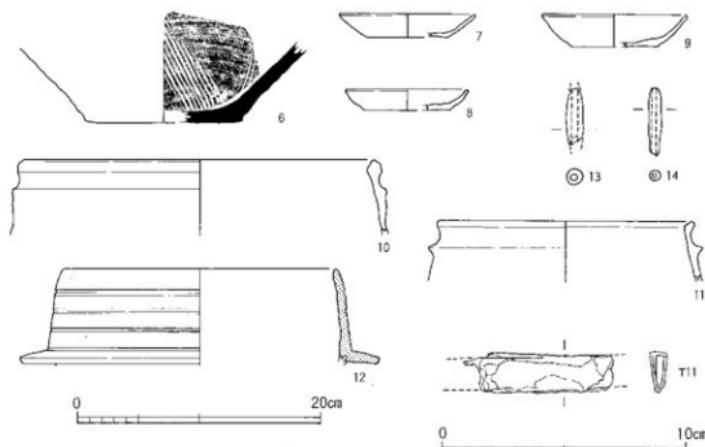
第3節 中須賀遺跡



1. 5Y5/3 黒色 滲透粘土。粘粒第一層粘粒を含む。耕作土。
 2. 5Y4/1 黑灰色 地錠粘土。粘粒を含む。耕土。
 3. 10Y5/2 黄褐色 粘透粘土。中粒第一層粘粒を含む。既分多く含む。
 4. 10Y5/2 黄褐色 地錠粘土。地錠粘土。マンガン多く含む。透水性否。
 5. 2,5Y7/4 黄褐色 粘透粘土。地錠粘土。大量少量含む。板岩、マンガン含む。
 6. 2,5Y6/2 黄褐色 粘透粘土。地錠粘土。大量多く含む。既分少量含む。
 7. 10Y5/5 黄褐色 10Y6/1 黑灰色 地錠粘土。中粒第一層粘粒を含む。既分多く含む。
 8. 10Y5/6 黄褐色 地錠粘土。既分多く含む。
 9. 10Y5/7 黄褐色 地錠粘土。中粒第一層粘粒を含む。含金量。
 10. 10Y5/6 黄褐色 地錠粘土。
 11. 2,5Y7/3 黄褐色 粘透粘土。既分多く含む。マンガン含む。
 12. 10Y6/2 黄褐色 黄褐色粘土。既分含む。
 13. 10Y6/2 黄褐色 粘透粘土。既分含む。

14. 10Y5/3 黃褐色 黃褐色粘土。既分第一層粘粒を含む。
 15. 10Y6/1 黑灰色 地錠粘土。既分含む。既分含む。
 16. 7,5Y5/1 黑色 黃褐色粘土。
 17. 2,5Y5/2 黑灰色 地錠粘土。既分多く含む。
 18. 7,5Y5/1 黑色 黃褐色粘土。既分多く含む。
 19. 10Y5/5 黄褐色 地錠粘土。既分含む。マンガン多く含む。
 20. 7,5Y5/1 黑色 黃褐色粘土。
 21. 7,5Y5/1 黑色 黃褐色粘土。理により粘粒化。
 22. 5Y5/1 黑色 黃褐色粘土。
 23. 10Y5/5 黄褐色 地錠粘土。
 24. 5Y4/1 黑色 黃褐色粘土。既分含む。
 25. 2,5Y5/2 黄褐色 黃褐色粘土。既分第一層粘粒を含む。既分含む。

第19図 調査区東側壁土層断面図



第20図 出土遺物

なお、上段と中段の壇付近の第16層から瓦質羽釜片、中段北部の第9層から鉄滓1点、下段の第7層から土鍤1点、下段南部の第9層から土堀片と刀子柄が出土している。

遺物

出土した遺物のうち、図示したものには陶器擂鉢、土師器皿、土堀、瓦質羽釜、土鍤のほか、鐵刀子柄があり、図示していないが、鉄滓が1点ある。

6の擂鉢は備前のもので、おろし日は10条1单位の横で間隔をあけて施している。内面特に底部付近は使用が顕著に認められる。外面は灰褐色(5YR4/2)、内面は灰褐色(7.5YR4/1)～浅黄橙色(7.5YR8/6)を呈する。備前Ⅳ～V期のもので、15世紀代のものと思われる。

7～9は土師壺の皿である。7は口径11cm、器高2cm、底径6.5cmで、厚さ3mmと薄くつくられている。内外面はロクロナデ仕上げ、底面は回転糸切りである。胎土には赤色粒を含む。にぶい橙色(7.5YR7/4)を呈する。8は表面がかなり磨滅しており、調整は観察しにくいが、内外面はロクロナデ、底面は静止糸切りのようである。口径は9.9cm、器高は1.7cmで、底径は7cmである。胎土に微細な金雲母を含み、にぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。9は壊に近い形態で、口径11.8cm、器高2.7cmである。内外面はロクロナデと思われ、内面はさらに横方向に磨いたような痕跡も看取される。底面は回転糸切りで、底径は6.8cmである。胎土には赤色粒を含み、灰黄褐色(10YR5/2)を呈する。何れも15世紀代の所産と考えられ、7は薄く仕上げてあるため、若干新しいかもしれない。

10～11はいわゆる土堀で、10は口縁部は内傾し、外面口縁下は強いナデによって段をつくり出している。外面には煤の付着が見られ、段から下は厚く付着している。内面から外面段まではナデで仕上げている。口径は28.7cm、胎土には赤色粒を含み、橙色(5YR7/6)を呈する。11も口縁部は内傾するが、外面口縁部下は10と違って貼り付けにより凸状態を呈する。口縁部は強く大きく外反する。内外面とも横方向のナデである。胎土には赤色粒を含み、にぶい褐色(7.5YR5/3)を呈する。外面には煤が付着する。10は16世紀前半、11はそれより古く、15世紀後半頃のものと思われる。

12は瓦質の羽釜で、外面は黒褐色(2.5Y3/1)、断面は黄灰～灰色を呈する。口縁部外面には沈線を1.2cm程度の間隔で3条施し、内外面を横方向のナデで仕上げている。鶴の下側には煤の付着が認められる。口径は22.2cmで、胎土には石英粒を多く含む。16世紀代以降の所産と考えられる。

土師質の管状土鍤は2点出土した。13は最大径1.3cm、両端を欠失し、現存長は4.7cmである。重さは8.3g。14はほぼ完形品で、長さ5.6cm、径0.9cmで、重さは6.3gである。

刀子柄は兩端を欠損するが、幅1.4cm、厚さ3.5mmの鉄芯の全体に厚さ1mm程度の鋼板を巻いたもので、鉄心は断面楔形を呈する。背の部分の鋼板は殆ど欠失する。

なお、包含層より出土した鉄滓は、3.5×2.5cmの橢円形に近い鏡形鉄滓である。

4. 小結

今回の調査では、柱穴8カ所と土堀2基、溝状落ち込みを2箇所検出したが、遺構の密度は少なく、建物跡等も検出されなかった。ただし、中段で検出した土堀はその規模から墓の可能性が高い。

これらの遺構の時期は遺構および包含層の出土遺物から15世紀後半～16世紀前半にかけてのものと思われ、遺構面直上の包含層から刀子と鉄滓が出土していることは、室町時代の刀鍛冶の移住伝承と合致し、製鉄を示唆する「すか」の地名が含まれることからも傍証されよう。今回の調査では製鉄関係を示す遺構は認められなかったが、付近に製鉄関係遺跡の中心部が存在するものと思われる。 (岸本)

つきばなやま はらのした
第4節 築鼻山古墳群 (原ノ下B・C地点)

1. 位置と環境

古墳群は津名郡北淡町室津の字「つきばなやま」に所在し、地番は1582, 2057, 2071他である。

淡路島の北半の大半を占める津名山地から北西側にのびる尾根の先端に立地する。詳細には、200m級の山塊から北にのびた裾が一度傾斜を緩やかにして鞍部をなし、さらに小支尾根に分かれでゆく部分に古墳群は立地する。傾斜が緩やかとなるため、調査前は棚田状の水田となっていた。

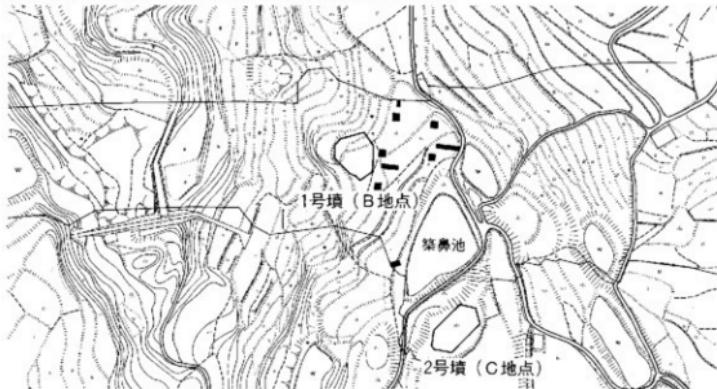


第21図 遺跡の位置 (1/25,000 「仮屋」)

この尾根の北西端は比高差約40mの断崖となっており、その下に室津の集落があり、室津港を眼下に見下ろす位置にある。

古墳群が立地する尾根は北北西にのびているが、すぐ南西側には谷を挟んで北にのびる尾根が存在する。また、古墳群の位置は尾根稜線上より若干西に寄っており、北東側平野部の視界も良好とはいえない。むしろ、西から北西側に広がる播磨灘の眺望は良く、海を見据えた位置にあるといえる。

周辺の古墳には小丸古墳（第21図8）、枯木古墳（9）があり、本古墳群同様、海に面した尾根上に立地している。付近には繩文～弥生時代の育波堂の前遺跡（1）をはじめ、弥生時代の室津土井遺跡（4）があり、平安時代～中世では、本書で報告する平見遺跡（5）、原ノ下遺跡（6）をはじめ、辻池遺跡（6）や室津集落内に室津南遺跡（7）があり、中世城館である室津館も周辺に所在する。



第22図 調査区の位置 (1/2,000)

2. 調査の経過

本古墳群の確認調査は平成元年度に実施したが、丘陵北東側の原ノ下遺跡とともに北-3地点と称していた。当初、古墳の存在は予想していなかったが、確認調査の結果、尾根部分に設定した確認坪の1つで、遺構状の落ち込みを検出し（後述の1号墳第1主体）、古墳時代の須恵器が出土したことから、古墳の残骸が存在する可能性が高いと判断した。しかし、その時点では用地未買収等の理由により古墳の範囲を明確にすることはできなかった。

平成4年1月～3月に原ノ下B遺跡地点という名称で、古墳残骸と思われる水田1筆、約110m²の全面調査を実施した結果、主体部3基と古墳の周溝と思われる溝を検出した（1号墳）。その結果、古墳の周溝は調査区外にのり、墳丘の残り部分や周溝がのびる北西部分についての追加調査の必要が生じた。

一方、地元住民によれば、築鼻池北東隣にある高まり部分で戦時に鉄刀や鉄鎌が出土しており、かつて古墳が存在し、戦時に破壊されたものと思われた。しかも、この部分が本州四国連絡道路の付帯工事による溜池代替池予定地であるため、調査が必要となった。

さらに、周辺に石室石材らしきものが散在していること、周辺の水田畦畔が部分的に張り出している箇所が認められることから、他にも古墳の残骸が存在している可能性が考えられ、再度の確認調査が必要となった。

以上の判断にもとづき、平成4年4月に周辺の確認調査を行った。第22回の長方形黒塗り部分がそれであり、正方形部分は平成元年度の確認調査部分であるが、確認調査の結果、古墳の残存を示す遺構・遺物は検出されなかった。

原ノ下B遺跡地点の追加調査については平成4年7月から実施し、この古墳群の調査で初めて重機による表土掘削を実施した。約130m²の全面調査の結果、周溝の続きを調査したが、他に主体部等は検出されなかった。

築鼻池代替池部分については、平成4年7月に原ノ下遺跡C地点としてトレレンチによる確認調査を実施した結果、周溝を検出し、土器が出土したため、古墳の存在が確定した（2号墳）。この結果を受けて、平成4年11月～12月に236m²の全面調査を行い、原ノ下遺跡B地点（1号墳）・C地点（2号墳）の調査を終了した。この調査もすべて人力掘削で実施した。

本古墳群については後に詳述するが、2号墳の所在地字名が染鼻であり、1号墳は近世以前、2号墳は遙くとも戦時に破壊されていることから、銀治利夫氏の筑穴山古墳、『淡路草』に土器が出土したと記載がある染鼻山に相当することは確実であろう。したがって、所在地の字名をとって、築鼻山古墳群と呼称することとする。

3. 1号墳

a. 墳丘と内部主体

1号墳は標高42～43m前後の位置にあり、調査時にはすでに水田と化しており、墳丘盛土は全く認められなかった。しかし、水田畦畔が西方向に張り出しており、墳丘の名残を示しているものと思われた。

確認調査の結果から、削平された古墳の一部が残っていると考えられたが、予想どおり、古墳の主体部と周溝を検出することができた。

遺構検出面は、調査区東部では耕上直下約30cmまでで検出し、調査区西部では斜面下方にあたり、耕土・床土の下に黄灰色・明黄灰色土が存在していた。これらの土層は水田を平坦にするための客土によ

る盛土と考えられ、土層中には中世～近世と考えられる土器類や土錐が多く包含されていた。なお、地山は黄色の粘質土であり、遺構はすべてこの土層上面で検出した。

検出した遺構は、主体部3基と周溝である。

主体部は中央で検出したものを第1主体、第1主体の北側に存在しているものを第2主体、やや離れて南東端に位置するものを第3主体と呼称する。

第1主体は確認調査時に検出していたもので、石材は残っていなかったが、抜き取り穴を検出したため、小石室と考えられる。第2主体も同様の状況であり、同じく小石室と考えられる。第3主体は石室壁体の大部分が遺存しており、小石室であることが確認された。

周溝は調査区内東部で検出し、幅1.3m程度、深さ0.7mで、長さ約10mにわたって検出した。周溝の方向は北北西に近く、南部の始まりは徐々に深くなっている。北端については底のレベルはあまり変わらないものの、上端が下がってくることにより自然消滅している。いずれの溝も後世の水田構築により削平を受けている。周溝埋土から須恵器の小片が出土している。

周溝の形状は断面「V」字形に近く、平面では直線的に伸びている。また、尾根のもっとも高い部分の周溝は途切れているが、もともと地山まで掘削していなかったのかどうかは不明である。

1号墳の墳形については、すべての主体部と周溝の形状および残存地形を総合して考えると、全く不明となる。第1・第2主体と残存地形からでは円墳の可能性が高くなる。そうすると、第3主体は埴丘



第23図 1号墳全体図

外もしくは別の古墳と捉えなければならない。ただし、周溝は第1・第2主体を取りまくように廻らず、直線的に北方向にのびるため、円墳としては変則的である。周溝の位置と形状から墳形を推定するには、墳丘部分をさらに北側に広がるものと考え、さらに第1・第2主体が南に寄っていると考え、周溝が尾根稜線部分を区画した程度のものと考えれば、円墳もしくは方墳と捉えることができる。しかし、この案でも、第3主体は墳丘外となる。

このように、残存地形・主体部位置・周溝の方向と形状を総合して1基の古墳の墳丘・墳形を復元することには無理がある。今後の検討を要するところであるが、とりあえずここでは、第3主体を墳丘外と考え、西側水田畔の形状が弧状を呈すること、第1主体と第3主体間の地形にくびれが認められること、周溝が尾根稜線部分を区画したもので、第1・第2主体が南に寄っていると捉え、これらを総合して、複数の主体部を持つ円墳と考えておくこととする。そうすると、直径13mの規模となる。

第1主体

第1主体は確認調査で検出していたもので、全面調査の結果、主体部であることが判明したものである。ただし、下層の確認のための深掘りにより損壊している。

第1主体では石材は全く検出されなかつたが、抜取穴が長方形にめぐる状態で検出されたため、第3主体同様、石室であったものの、石材が抜き取られてしまっていたものと判明した。

石室は東西に長く、その規模は、内法の長さ2.3m、幅0.7m、石室外寸では長さ2.7m、幅1.2mである。かつて石材が長方形にめぐっていたことが確認され、その形態は小石室、あるいは堅穴式小石室と呼ばれるものである。石室外は大きく削平を受け、石室内との比高差は僅かに5cm程度であった。

石室石材抜取穴の形状から、石室東側短側基底石は3個の石材で構築されており、西側は3~4個の石材で構成されていたことが判明した。これは第3主体の基底石と同様である。長側基底石については不明である。構築時の石室内の高さも不明であるが、他の例から1m程度と推測される。

遺物は石室内東部の床面から須恵器蓋壺、金環、ガラス小玉、鐵釘、刀子が出土し、石室石材抜取穴から須恵器短頸壺、提梁などの破片が出土した。ガラス小玉の出土位置から埋葬頭位は東側で、N-E^{88°}である。また、石室床面の高さも、西側に比べて東側が約5cm高くなっている。なお、遺物出土地点西側で、直径5cm程度のチャートの玉石が部分的に認められ、礫床の痕跡と思われた。

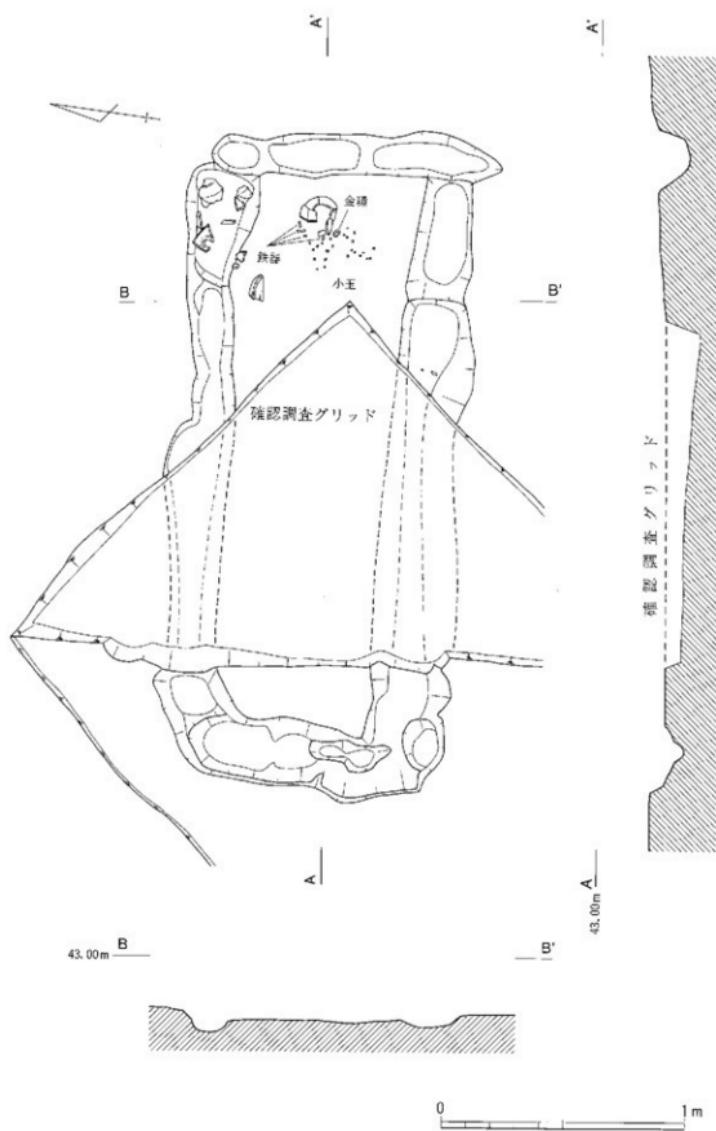
石室内出土遺物のうち、須恵器壺の蓋、鐵器、ガラス小玉はその出土状況および出土位置から、原位置をほぼ保っていると思われ、ガラス小玉の出土位置から、須恵器蓋は頭頂部に置かれていた、もしくは、土器枕として使用していた可能性がある。

なお、第1主体西側の斜面下に水田畔の石積みがあったが、おそらく第1・第2主体の石室石材を利用したものと思われ、発掘調査の結果、それらに混じって須恵器や鐵釘片が出土している。

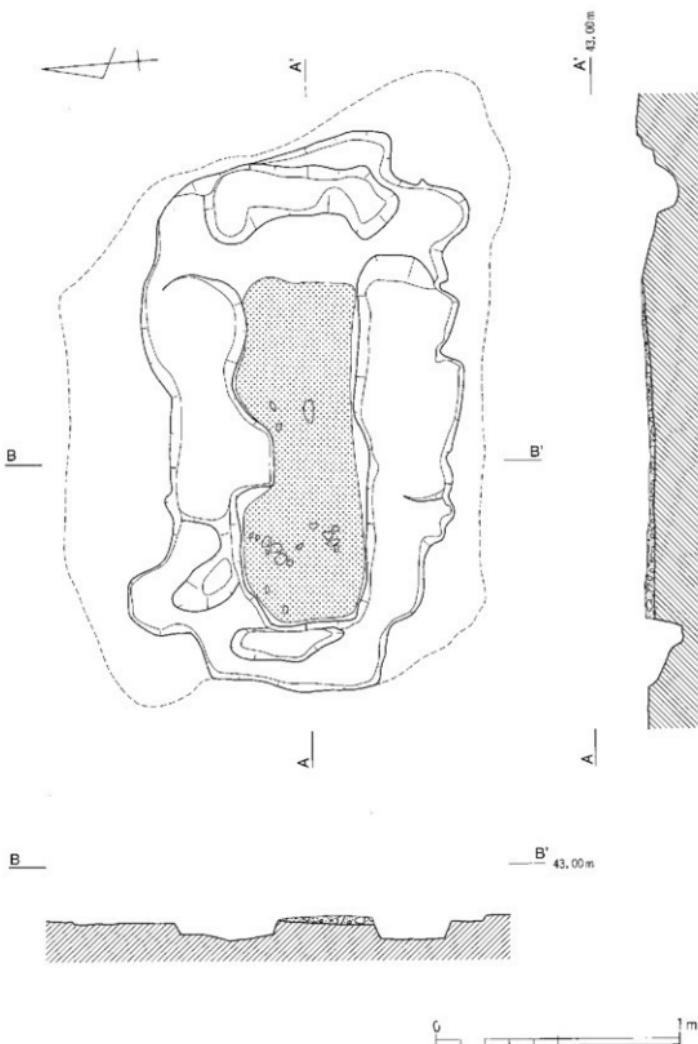
第2主体

第1主体の北側、約1mの間隔をおいて位置しており、主軸は第1主体と平行に近い。主体部の検出レベルは第1主体より2~3cm高く、主体部床面も約8cm高くなっている。したがって、検出時点では既に床面が現れていた。さらに、石室石材の抜取穴を検出するために周囲を削り下げ、抜取穴を掘削したため、床面が浮き上がったようになってしまった。

本主体部でも石室石材の抜取穴が長方形に検出されたため、他の主体部同様、堅穴式小石室であることが判明した。ただし、抜取穴埋土と地山との識別が非常に困難な部分が多く、掘りすぎている箇所も



第24図 1号墳 第1主体



第25図 1号墳 第2主体

多いと思われる。やや不正確なきらいもあるが、石室外寸では東西の長軸で約2.3m、南北短軸は約1.3mである。内寸では長軸1.7m、短軸0.5mである。検出した主体部のうち、最も規模が小さい。

石材抜取穴の観察から、石室東側短側基底石は3個、西側は1~2個のようである。長側基底石については、4~6個程度であることが看取される。

石室内床面には、本主体部発見の契機となった、直径1cm以内の玉砂利が全体に敷きつめられていたが、東端部では削平のため、幅約30cmで失われていた。床面は東側が高く、西側が低くなっている。確定下部での高低差は約4cmである。したがって、第1主体部同様東枕であったと推定され、方位はN-93°-Eである。

遺物は石材抜取穴埋土中から須恵器片、鉄器片が出土したが、須恵器は図化できなかった。

第3主体

本埋葬施設は第1主体から南東へ約5m離れた位置で検出した。検出した高さは、大半が第1主体より約20cm低かったことと、水田の斜面下間にあたるため、削平を殆ど受けることなく、むしろ、水田を水平にするための盛土で保護されていたような観がある。しかし、石室の上部は破壊を受け、基底石がかろうじて残存していたにすぎない。第3主体発見の契機となった、北側短側石には上に長いものがあり、水田構築時にはその石が地面から飛び出していたようなふしがある。

石室は他の主体同様規模が小さなもので、両側短側部も石を据えた、堅穴式石室状を呈する。規模は内法の長さで、長軸2.0m、短軸0.7m、石室掘り方は、長軸2.8m、短軸1.3mである。石室の主軸は、他の主体とやや違って、北東-南西方向となっている。

石室基底石は北東側短側が2枚の石で構成され、北側コーナーにも1石置いている。南西側も基本的には2枚の石で、西および南コーナーに各1石置いている。石室長辺南東側は基本的には5石で、南コーナーに1石加えている。北西側は4石遺存しているが、1石抜かれている。北・西コーナーにはそれぞれ1石据えている。長側石は短側石にくらべて、石の間隔が広く、10cm程度も開いている箇所が認められる。北西短側石の最も長いものは約60cmで、石室床面から頂部まで40cmある。石材は花崗岩である。

第3主体検出面から床面までの高さは、北東側の深いところで約30cm、浅いところでも約15cmで、石室内全体は暗灰黄色土や明黄褐色土で埋まっていた。石室床面には直径5cm程度のチャートの玉石をやや疎らに敷いており、砾石あるいは礫床と呼ぶものである。石室内部東側のこの礫の直上で、須恵器壺身と提梁が各1点出土した。石室床面のレベルは北東側が南西側よりも16cm高く、頭位は北東側にあると思われ、N-36°-Eである。南西部は盜掘を受けている可能性が高いものの、頭頂部に須恵器壺を置くことは、第1主体と共にして認められることであり、床面の傾斜とあわせて、推定頭位が正しいことを意味していると思われる。

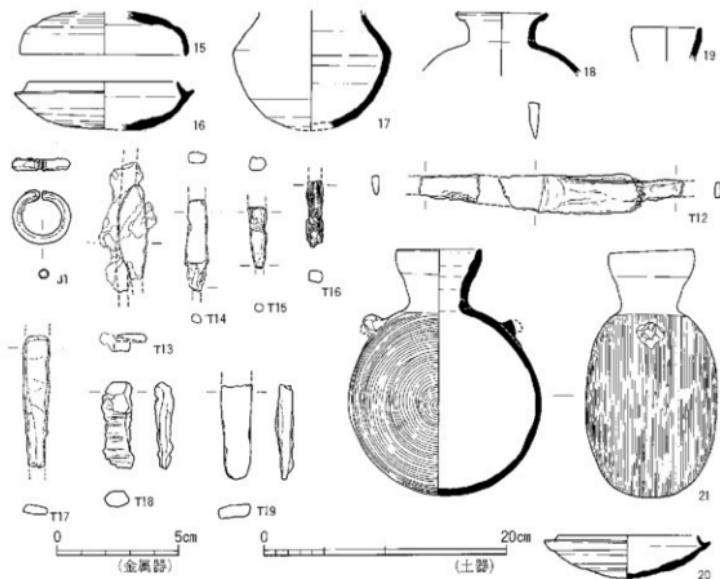
第3主体の遺物は須恵器2点のみで、他に鉄器等はまったく出土しなかった。

b. 出土遺物

前述のように、1号墳から出土した遺物には須恵器・金属器・ガラス玉などがあるが、それらのうち、第1主体~第3主体で出土したものを第27図に掲げた。また、第1主体出土のガラス玉は第28・29図に図示し、第4表に計測表を示した。主体部以外の出土遺物については第30図に掲げたが、それらには、第1・第2主体西側斜面下の集石に混じって出土した須恵器と、耕土と黄灰色・明黄灰色土から出土した十種を示した。なお、図示していないが、黄灰色・明黄灰色土から寛永通宝が出土している。



第26図 1号墳 第3主体



第27図 1号墳第1～3主体出土遺物

第1主体出土遺物

第1主体から出土した須恵器のうち、石室床面から出土したのは第27図15・16であり、石室石材抜取穴から出土したのは17～19である。

須恵器壺蓋は1/2程度の破片で、口径は13.5cmを測り、残存器高は3.5cmである。犬部と口縁部の境は屈曲せず内湾し、外側天井部寄りはやや凹む。口縁端部は丸くおさめ、若干内湾する。天井部外側は回転ヘラケズリ、その他は回転ナデで、内面には仕上げナデを施す。灰白色（N 7/）を呈する。

16の須恵器壺身は底部を欠損するが、全体で3/4程度の破片である。口径12.4cm、器高3.9cmを測る。受部はやや外上方に短くのび、立ち上がり部は内傾し、やや外反する。底部外側約2/3を回転ヘラケズリする。その他は回転ナデで仕上げている。ロクロ回転は右方向である。灰色（N 6/）を呈する。

短頸壺（17）は口縁部と底部を欠失するが、1/2程度の破片で、肩部の傾斜はきつく、ややあまい稜をもつて底部へと続く。底部は丸く、回転ヘラケズリ調整である。全体的には腹径に対しても器高が高い形態である。他の土器に比べて胎土には砂粒を多く含み、灰白色（7.5Y 7/1）を呈する。腹径は13cmである。

18は提瓶の口縁～肩部で、口縁は外反し、端部は外側に肥厚し、玉縁状を呈する。口径は7.3cm、焼成は良好で、灰色（N 6/）を呈する。

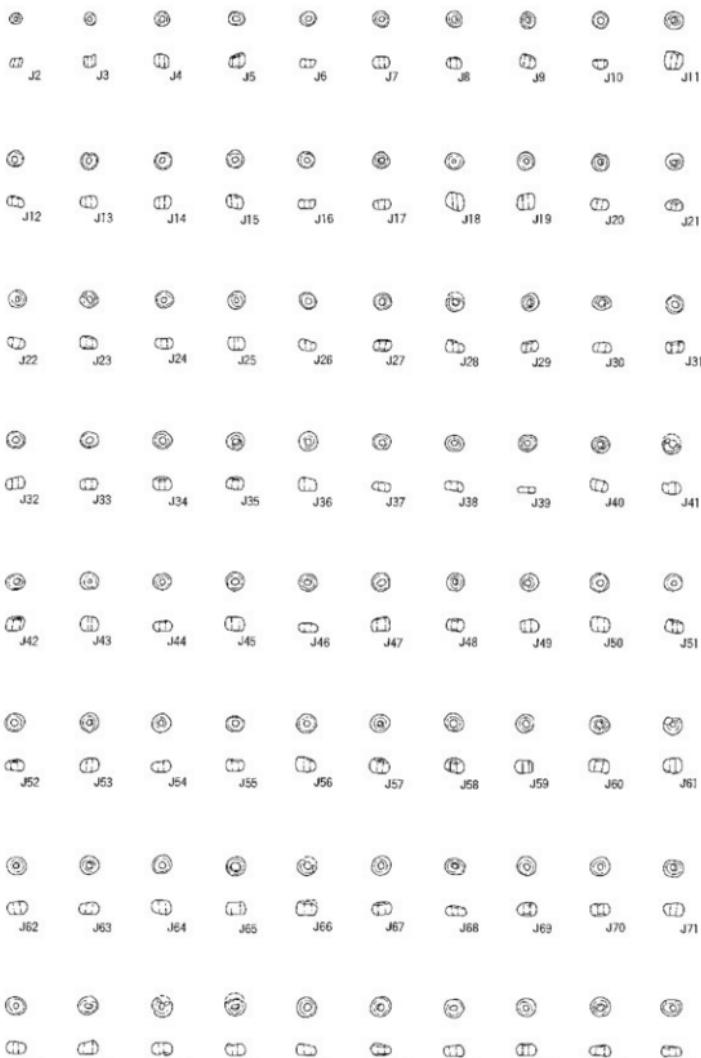
19の口縁部は口径5.5cm、焼成は良好で、灰白色（N 7/）を呈する。壺・瓶類と思われる。

以上、第1主体出土須恵器については、その特徴から、M T-85型式に最も近いと思われる。

金環（J1）は、金箔を巻いた直径4mmの芯を、径2.3cmの大きさに曲げたものである。

鉄器はT12～T14・T16～T18が第1主体から出土したものである。12は片開造りの刀子で、切先・身

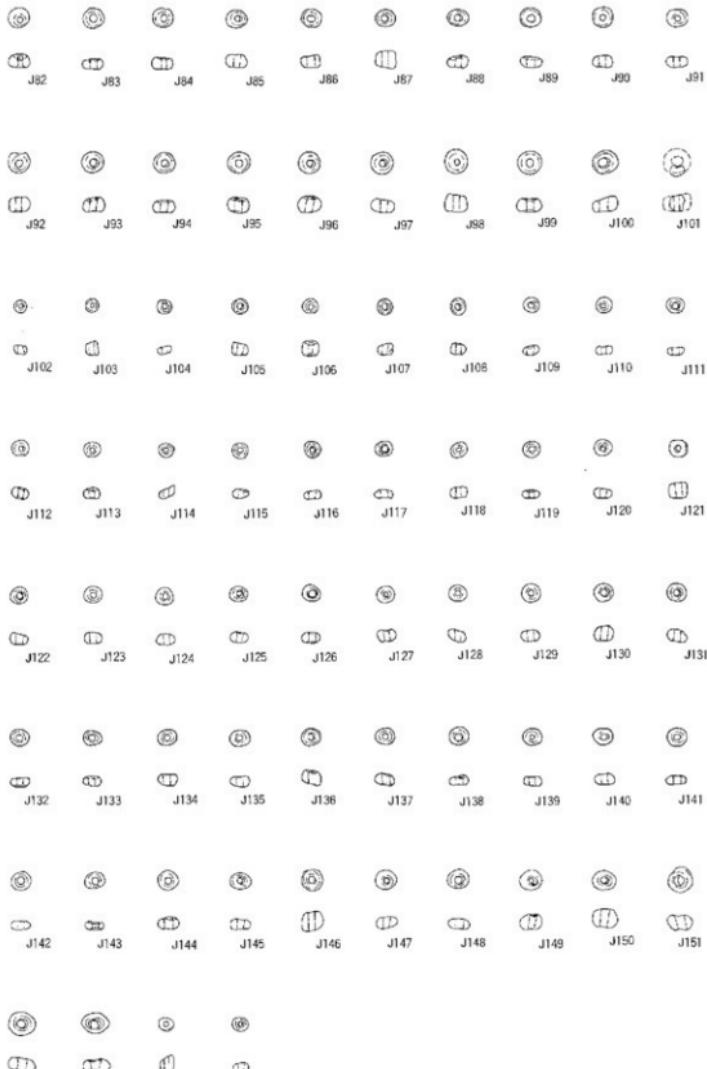
第4節 桧鼻山古墳群



0 5cm

第28図 1号墳第1主体出土小玉(1)

第4節 茶鼻山古墳群



0 5cm

第29図 1号墳第1主体出土小玉(2)

No.	径mm	厚mm	重mg	色	No.	径mm	厚mm	重mg	色	No.	径mm	厚mm	重mg	色
J2	2.50	1.80	17	A	J54	4.00	2.50	48	A	J106	3.34	3.20	41	B
J3	2.77	2.40	24	A	J55	4.00	2.29	48	A	J107	3.35	2.15	28	B
J4	3.07	2.60	36	A	J56	4.00	3.20	63	A	J108	3.40	2.27	30	B
J5	3.23	2.75	34	A	J57	4.00	3.00	61	A	J109	3.42	1.57	18	B
J6	3.40	1.65	25	A	J58	4.00	2.71	45	A	J110	3.45	1.69	23	B
J7	3.40	2.29	36	A	J59	4.01	2.56	52	A	J111	3.48	1.41	18	B
J8	3.40	2.00	28	A	J60	4.01	2.82	60	A	J112	3.50	2.14	33	B
J9	3.40	2.58	38	A	J61	4.02	3.17	65	A	J113	3.50	1.83	28	B
J10	3.41	1.77	27	A	J62	4.10	2.75	60	A	J114	3.51	1.93	26	B
J11	3.50	4.00	74	A	J63	4.11	2.47	51	A	J115	3.55	1.62	26	B
J12	3.50	2.04	33	A	J64	4.11	2.63	61	A	J116	3.59	1.71	24	B
J13	3.53	2.38	36	A	J65	4.11	2.62	56	A	J117	3.63	1.70	27	B
J14	3.55	2.54	43	A	J66	4.12	2.78	(37)	A	J118	3.65	2.15	37	B
J15	3.58	2.52	46	A	J67	4.12	2.40	56	A	J119	3.67	1.60	27	B
J16	3.58	1.90	36	A	J68	4.12	1.90	39	A	J120	3.70	2.03	33	B
J17	3.60	2.09	35	A	J69	4.14	2.55	54	A	J121	3.71	3.17	64	B
J18	3.66	3.10	60	A	J70	4.16	2.57	55	A	J122	3.73	2.26	36	B
J19	3.66	3.24	62	A	J71	4.17	2.58	59	A	J123	3.78	2.20	34	B
J20	3.68	2.10	37	A	J72	4.18	2.51	58	A	J124	3.79	2.00	35	B
J21	3.70	2.30	38	A	J73	4.21	2.60	57	A	J125	3.86	2.10	33	B
J22	3.70	1.96	36	A	J74	4.20	2.50	(41)	A	J126	3.87	1.90	31	B
J23	3.70	2.60	42	A	J75	4.20	2.18	(41)	A	J127	3.88	2.43	42	B
J24	3.71	2.20	41	A	J76	4.19	2.32	50	A	J128	3.89	2.05	34	B
J25	3.71	2.65	52	A	J77	4.19	2.36	59	A	J129	3.90	2.21	43	B
J26	3.72	2.23	35	A	J78	4.19	2.42	50	A	J130	3.98	3.01	60	B
J27	3.73	2.03	35	A	J79	4.21	2.78	66	A	J131	4.01	2.32	48	B
J28	3.73	2.21	25	A	J80	4.22	2.08	50	A	J132	4.01	1.88	37	B
J29	3.74	2.20	41	A	J81	4.22	2.40	49	A	J133	4.03	1.93	30	B
J30	3.75	2.18	35	A	J82	4.24	2.89	62	A	J134	4.05	2.58	44	B
J31	3.77	2.20	40	A	J83	4.27	2.10	49	A	J135	4.08	2.10	37	B
J32	3.79	2.52	48	A	J84	4.28	2.33	57	A	J136	4.08	2.48	49	B
J33	3.79	2.20	42	A	J85	4.29	2.59	57	A	J137	4.10	2.20	42	B
J34	3.80	2.59	52	A	J86	4.31	2.52	59	A	J138	4.10	2.10	36	B
J35	3.80	2.40	48	A	J87	4.31	3.70	79	A	J139	4.12	2.10	37	B
J36	3.81	2.65	55	A	J88	4.32	2.42	49	A	J140	4.17	2.40	45	B
J37	3.81	2.04	34	A	J89	4.40	2.17	50	A	J141	4.18	1.72	34	B
J38	3.82	1.90	35	A	J90	4.40	2.40	65	A	J142	4.20	1.83	38	B
J39	3.83	1.31	24	A	J91	4.41	2.34	57	A	J143	4.22	1.60	26	B
J40	3.83	2.40	40	A	J92	4.43	2.97	76	A	J144	4.22	2.29	41	B
J41	3.84	2.48	(25)	A	J93	4.46	2.94	73	A	J145	4.28	2.09	42	B
J42	3.85	2.86	51	A	J94	4.47	2.40	68	A	J146	4.39	3.88	102	B
J43	3.87	2.85	59	A	J95	4.52	3.04	80	A	J147	4.40	2.45	51	B
J44	3.88	2.21	41	A	J96	4.57	3.19	90	A	J148	4.41	2.12	48	B
J45	3.88	2.62	54	A	J97	4.75	2.58	76	A	J149	4.48	3.30	79	B
J46	3.89	1.83	34	A	J98	4.89	3.72	162	A	J150	5.10	3.90	102	B
J47	3.89	2.82	56	A	J99	5.11	2.80	91	A	J151	5.18	2.98	96	B
J48	3.90	2.48	47	A	J100	5.20	3.10	90	A	J152	5.37	3.02	94	B
J49	3.90	2.45	48	A	J101	—	—	52	A	J153	5.58	2.78	74	B
J50	3.91	2.91	62	A	J102	2.67	1.80	17	B	J154	2.93	3.59	34	C
J51	3.97	2.52	55	A	J103	2.83	2.50	26	B	J155	3.32	2.20	29	C
J52	3.97	1.98	37	A	J104	3.00	1.59	17	B					
J53	3.98	2.90	60	A	J105	3.27	2.28	30	B					

色はA:緑、B:ブルー、
C:緑の各系統色

第4表 1号墳第1主体出土ガラス玉計測表

の一部、茎端を欠損する。身部の最大幅は1.5cm、背の厚さは約4mmである。茎は幅約8mm、厚さ約2mmで、木質が一部付着している。

T13・T14・T16は鉄鏡片で、全て長頸鏡になると思われるが、全体をうかがえるものはない。T13は間のない鑿箭式の鏡身部片と別個体の頸部が接着したもので、鏡身部の長さは約3.4cm、幅約1.1cmで、別個体の頸部は幅約5mm、厚さ約4mmである。T14は頸部から茎部にかけての破片で、頸部の幅7mm、厚さ4mmで、茎の断面は4×3mmで格円形に近い。T16は茎の部分で、矢柄の木質と茎に巻いていた繊維が遺存している。T17も鉄鏡の可能性がある。現存長5.4cmで、上方は幅11mm、厚さ4mmで、下方は幅7mmである。下から1/4程度のところで両側に小さな突起が認められ、鍊泡被の可能性がある。T18は不明鉄器である。現存長3.5cm、断面は格円形状を呈し、幅10mm、厚さ6mmである。表面に横方向の木目が遺存している。

ガラス小玉は154点図示したが、壊れて粉々になったものもあり、出土総数はもう少し多い。

色調別でみると、紺系統色のもの（A類）が100点（J2-J101）あり、全体のほぼ2/3を占める。青緑系統色（B類）は52点（J102-J153）で、残りの約1/3を占め、緑の系統色（C類）は2点（J154・J155）である。ただ、青緑色と緑色との色調の差はあまり明確なものではない。

ガラス玉は、側面はもとより上下面も全体に丸みを持つものが多く、孔の上下端も丸みを持っている。しかし、上下の面が平行になるものは少ない。ただし、上下端が丸みを持たず、平坦に近いものもあり、A類に多い。玉内部の気泡はA類に少なく、B・C類に多く含まれるが、いずれも丸い形をしている。

ガラス玉の直径は2.50mm（J2）から5.58mm（J153）まであり、全体の平均は3.93mm、A類での平均は3.95mm、B類の平均は3.91mmであるが、A類では3.7~3.9mmの間に4.1~4.3mmの間にピークが認められ、それぞれ27点、24点である。それに対し、B類では3.3~4.5mmの間に認められ、0.1mm毎の数量は2~6点で、52点中44点が含まれる。厚みでは、1.31mm（J39）から4.00mm（J11）まで、全体での平均は2.42mm、A類では2.5mmで、2.4~2.6mmの間に29点認められる。B類の厚みは平均2.24mmで、A類に比べてやや薄く、2.1~2.3mmの間にピークがあり、15点存在する。重さは17mg（J2、J102、J104）から162mg（J98）まであり、平均は約48mgであるが、A類では47.7mgで、35~65mgの間に70点が含まれる。B類では気泡を多く含むせいか、平均41.4mgとやや軽く、25~45mg間に33点存在する。

このように、A類とB類では色調の違いや気泡の入り方だけでなく、径・厚さの平均やピークも異なっており、形状の若干の違いも認められる。

第2主体出土遺物

第2主体の石室石材抜取穴から出土した遺物のうち、図化したのは鉄器2点であり、第27図に掲げた。

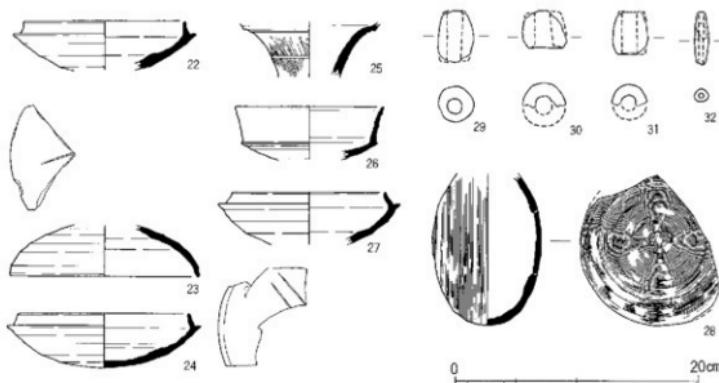
T15は鉄鏡の頸部から茎へかけての破片と思われ、頸部は幅7mm、厚さ5mmで、茎部は断面径3mmのほぼ円形を呈する。

T19は不明鉄器であるが、刀子の茎部破片の可能性がある。現存長3.9cm、最大幅1.2cm、厚さ0.5cmである。

第3主体出土遺物

第3主体の遺物は石室内北東部端床面で出土した須恵器2点である。

第27図21はほぼ完形の瓶である。器高20.4cm、体部最大径は15.9cm、体部幅は5.4cm、口縁部径は6.7cmである。体部はカキ目調整が認められ、肩部の釣り手は鉤状のものである。口縁端部付近は内湾ぎみで、端部は丸くおさめる。焼成は良好で、灰白（N 7/）~灰色（N 4/）を呈する。



第30図 1号墳主体部以外出土遺物

20は裏返して置かれていた壺身で、完品である。口径11.4cm、器高3.6cmで、全体に扁平な形であるが、底部はやや尖っている。立ち上がり部は、外反しながら短く内上方にのび、受け部上面との間は凹面状を呈する。底部外面はヘラ削りで、全体の3/5程度である。焼成は良好で、灰色（N 6/）を呈する。

主体部以外出土遺物

第30図22・25は平成4年度の機械掘削時に出土したもので、23・24・26～28は第1・2主体部東方の斜面下の石室石材集積部出土のものである。29～32は耕作土～黄灰色・明黄灰色土から出土している。

壺身は3点図示した。22は口径13.1cmで、立ち上がり部はやや外反しながら上方に短くのびる。灰白色（N 7/）を呈する。1/4程度の破片である。24は1/3程度の破片で、口径13.9cm、器高4.5cmである。立ち上がり部はやや内傾して短くのび、罐部は丸くおさめる。底部外面3/4はヘラケズリ、内面には仕上げナデを施す。焼成はややあまく、灰白色（N 7/）を呈する。27は口径12.5cm、現存高4.3cmで、体部が上半が丸みをもたら、やや深い形である。底部外面3/4程度をヘラケズリし、平行線のヘラ記号を描いている。焼成は良好で、灰色（N 6/）を呈する。

23の壺蓋は口径15.4cmで、天井部から口縁部へは殆ど屈曲せず内湾しながら下外方にのびる。罐部は丸くおさめる。天井部外面にはヘラ記号がある。灰色（N 6/）を呈する。

25は趣の口縁部と思われ、外面には櫛による紋様を施し、中間に1条の沈線を引いている。口縁屈曲部までの破片であり、灰白色（N 7/）を呈し、焼成はやや良好である。

26の高杯壺部は鋭く屈曲して外反する口縁部に統じ、端部は尖りぎみにおさめる。屈曲部外側は鋭く短く突出する。壺部外面はヘラケズリを施す。口径12cm、焼成は良好で、内外面は自然釉がかかる。

28は提瓶の体部のはば片側破片で、体部径12.6cm、体部幅約9cmで、表面に細かいカキ目を施す。

土錘のうち、29～31は太いタイプ、32は細い管状土錘である。29は一部を欠損するが、径2.9cm、長さ4.25cmとやや長く、孔径は1.2cm。30は短いもので、径3.6cm、長さ3.1cm、約半分を欠損する。31は径2.9cm、長さ3.5cm、29と30の中間の長さで、約半分を欠失する。3点とも石英粒を多く含み、橙色（5YR6/6）で、淡路北半部の弥生土器と同様であることから、近くの粘土を使用したと思われる。32は精良な胎土で、長さ4.3cm、径1.25cmでにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈する。重さ4.7gで完品である。

4. 2号墳

a. 外部構造

2号墳は1号墳から南東約80mの斜面上側に存在し、標高は50~55mである。北西側は池、南東側は池を埋め立てた水田であり、1段低くなっているため、外観は独立丘陵状である。

全面調査の結果、周溝を検出したが、主体部等は戦時中の削平により検出できなかった。また、地形についても後世の改変をかなり受けしており、周溝も1箇所で検出したのみである。しかし、地元住民の話から、内部主体は石室の可能性が高いと考えられる。

検出した周溝は長さ約10m、最大幅約3m、深さ0.9mである。周溝の埋土である淡橙褐色中粒砂から、壺・高杯・提瓶等の須恵器が出土した。この周溝は古墳の東側にあたるとみられ、その形状から、直径15m程度の円墳の可能性が考えられる。

b. 出土遺物

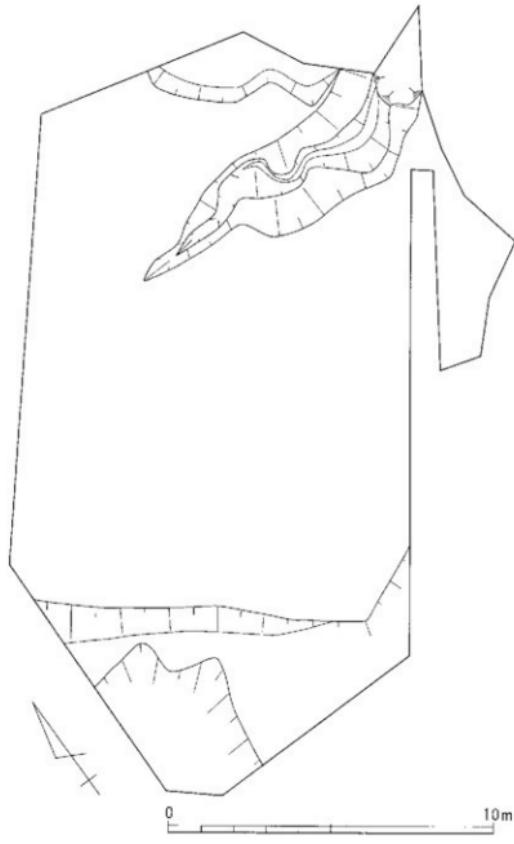
出土した須恵器は第32図に示した。

33~35は壺身で、受け部は外上方や横に短くのび、立ち上がり部は外反しながら内上方に短くのびる。33は口径12.3cm、器高3.7cm、底部2/3をヘラケズリする。34は1/4程度の破片で、口径12.9cm、器高3.9cmである。35は焼成良好で器壁も薄いが、底部を欠失する。口径13.7cmを測る。

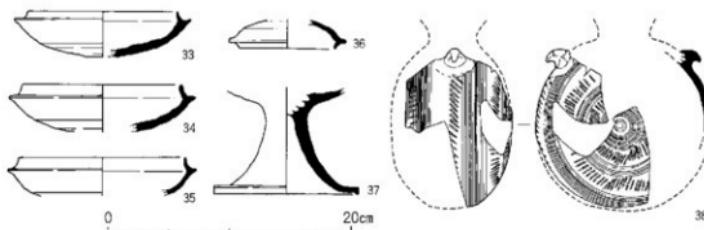
36は蓋であるが、天井部中央を欠損する。口径は7.8cm、現高は2.3cmである。

37の高杯は鋸部径11.8cm、焼成不良、灰色(7.5Y 6/1)を呈する。

提瓶(38)は体部の一部の破片であるが、最大径14.4cm、幅は10cm程度と思われる。鉢状の釣り手を有し、体部全体に櫛刺突文と2条1単位の沈線を巡らす。焼成良好で、灰色(N 6/)~灰白色(2.5 GY)を呈する。



第31図 2号墳全体図



第32図 2号墳周溝内出土土器

5. 小結

全面調査の結果、水田や畑の下に埋没し、削平を受けた2基の古墳が存在していたことが判明し、1号墳では主体部も残存していた。また、遺物も少量ながら出土し、時期も判明した。

本古墳群の名称については、字名が築鼻であること、削平された古墳であることから、昭和12年に銀治利夫氏が「淡路考古漫録」に記載している、「室津村筑穴山古墳 円墳？現存不明恐ラクハ破壊。」にあたると考えられる。また、「淡路草」卷之4上の育波郷宍津村海福寺の項に、

「大明9年(1789)の春3月当寺の石垣修造せんと後山の築鼻山と云所にて石を切居ころに底より陶器を掘出す岡の如き也丸瓦6寸厚瓦2寸5分程口広サ1寸5分 内水56合入ベシ色鼠色黒色折二文小ナル水3合程入ベシ大小数7ツ斗掘出ス何ニ用タル物ヤ未詳按に行瓶蓋類ニヤ」

とあり、土器の図を載せている。この土器は「鼠色黒色折二文」とあるから、須恵器であることは間違いないなく、直径約18cmで厚さ約7.5cm、口径4.5cmの須恵器は捷瓶と思われるが、水3合程入る小型のものは不明である。また、大小あわせて7個体程出土しているが、残り5個体の器形についても不明である。しかし、ここでわかることは、1789年に海福寺の石垣を修理するために、裏山にある築鼻山というところで、石を採取したということであり、「石を切居ころに底より陶器を掘出す」ことから、おそらく古墳の石室の天井石や側壁の石を切っていたと思われ、石室床面まで達し、須恵器が出土したのであろう。宍津にある築鼻山で、石室をもつ古墳は本古墳群をおいて他にはなく、まさしくこれにあたると思われる。ただし、今回調査した2基のうち、いずれにあたるのは厳密には不明であり、既に破壊し尽くされてしまっている他の古墳の可能性もある。

いずれにせよ、今回調査した古墳以外にも存在していた可能性は高く、周辺には石室石材として使用してあったような石が川の畔に多く使用されていることからも首肯されよう。

さて、1号墳は第1・2主体を埋葬施設とする直径13m程度の円墳と推定したのであるが、それには各主体の時期も考慮したことである。すなわち、第1主体出土土器と第3主体出土土器には時期差が認められるのである。第1主体出土須恵器についてはMT-85型式に最も近く、第3主体出土須恵器は数が少ないながらも、TK-43型式からTK-209型式のものと考えられる。また、第1・2主体部東方斜面下出土須恵器については、MT-85型式からTK-43型式のもので、これらを第1・2主体のものと仮定しても第3主体より古いことが確実であり、第1・2主体を6世紀後半、第3主体を6世紀末とすることができよう。また、2号墳については、周溝出土土器からみると、第1・2主体とはほぼ同様の時期と考えられる。

(岸本)

はらのした 第5節 原ノ下遺跡（A地点）

1. 位置と環境

原ノ下遺跡は篠鼻山古墳群が存在する丘陵尾根の北東斜面に位置し、その斜面の傾斜がちょうど緩やかになり、北東に張り出したかたちになった部分の北東端で、再び傾斜がきつくなった所に存在している。

調査前は水田および畑となっていました、段差1.5m程度の梯田状を呈し、幅も約5m程度の細い水田であった。

約10mの斜面の下側は平坦地となり、室津川が流れしており、その対岸には後述の平見遺跡が存在する。

原ノ下遺跡が存在する丘陵部の中世の遺跡には、平見遺跡（第21図5）のほか、室津館（第21図3）や室津南遺跡（第21図7）があり、室津川を隔てた対岸の海岸付近には辻池遺跡（第21図2）や育波塙焼遺跡（第33図2）、後述の掛内遺跡（第33図4）が中世の遺跡であり、弥生時代の磨製石剣も出土している。また、平安時代の遺跡としては塙焼遺跡（第33図3）があり、古墳時代の製塙土器を多数出土した浜田遺跡（第33図1）でも中世の土器が出土している。ただし、室津川対岸のこれらの遺跡が所在する場所と本遺跡との間は、現在畑となっているが、土取りにより丘陵を削平してきた人工の平坦地であり、その南側斜面にもかつて遺跡が存在していた可能性は十分指摘できるものと思われる。



第33図 遺跡の位置 (1/25,000「仮屋」)



第34図 調査区の位置 (1/2,000)

2. 調査の経過

原ノ下遺跡は平成元年に確認調査を実施した。当時は北-3地点と呼称し、今回報告の篠鼻山古墳群が所在する場所とともに合計29箇所のグリッドを設定して調査した結果、中世の土壙・柱穴等を検出した部分と、古墳の残骸と推定される部分とが確認された。このうち、中世の遺構が検出された部分について、原ノ下遺跡A地点と呼称して平成3年度に全面調査を実施した。

全面調査当時は、本遺跡を原ノ下遺跡A地点、古墳の部分を原ノ下遺跡B地点という遺跡名称であったが、今回、B地点を篠鼻山古墳群と呼称したことにより、A地点については、地名が必要なくなつたことから、所在地の字名をそのまま遺跡名として、原ノ下遺跡と呼称することとする。

調査については、重機の進入路がからうじて確保できたため、表土から包含層上面まではバックホーで掘削し、遺構面までは人力により探削作業を行った。遺構面については、遺構精査や遺構掘削を行い、写真撮影のための清掃作業を行った。遺構掘削後は足場を設置し、足場上からの写真撮影を行い、ヘリコプターによる航空写真撮影も実施した。また、遺構各個の写真撮影も実施した。写真撮影後は全体と遺構各個の平面実測図の作成を行った。

3. 調査の結果

遺構

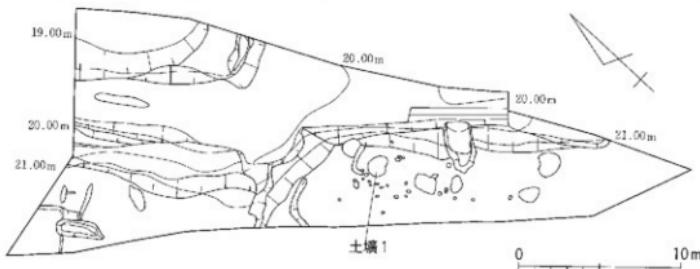
調査区は2面の田・畑にわたっており、上下の田・畑の調査前での比高差は約1.6mで、調査区外の田畠との比高差は斜面上側で約1.4m、斜面下側では約1mである。

調査区の形状は平面三角形状ではなく南北に細長く、約40m、底辺にあたる北側東西の幅は約15mである。調査面積は454m²であった。

調査区は前述のように、2段に分かれているため、便宜上、上段・下段と呼称して説明することとする。

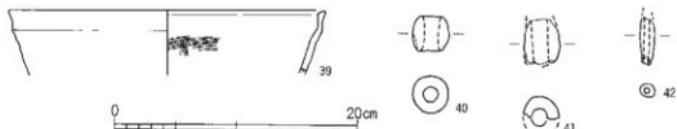
上段では、耕土・床土の直下に黄灰色粘質土の遺構面（地山）が存在し、北東側の斜面下方では、遺構面の上に灰褐色土の遺物包含層が堆積していた。地山面は中央部で幅約3~6mの谷状地形となり、谷の北西側上端部は平坦に削平を受けている。

下段は上段とは約1.5mの差があり、調査区の南東端部分が最も浅く、耕土・床土直下で遺構面が認められ、最も深いのは調査区の北東隅で、地表から地山まで約1.6mで、未土の下から地山までは褐色系の上のが遺物包含層として堆積していた。また、下段の北東隅は谷状に急に落ち込んでいる。これは、



第35図 遺構全体図

第5節 原ノ下遺跡



第36図 包含層出土遺物

調査区上段から続く小さな谷と考えられ、谷が北東方向から北方向へ曲がっているものと思われる。

造構は上段の中央部南寄りで集中的に認められ、ちょうど確認調査でグリッドを設定した部分にあたる。柱穴は30個程度認められ、他に円形・方形・不定形の上盤、溝状遺構も認められた。そのうち、土壤1は長径1.4m、短径1.2mの楕円形の土壙で、深さは37cmであり、断面形は逆台形状を呈している。埋土から少量の土師器片が出土したが、時期、性格等は不明である。また、上段南東寄りの斜面で検出した谷状の遺構は、土砂が崩れた跡もしくは、走り水の跡と考えられ、埋土中からは巨礫以外、遺物は出土しなかった。

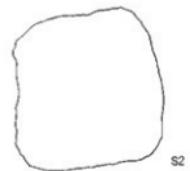
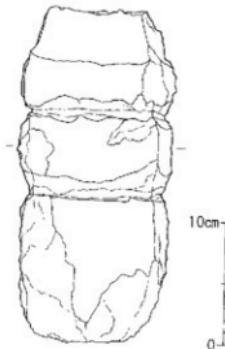
なお、調査区北端では上下段共に浅い溝状遺構が数条存在し、他には近世以降の落ち込み状遺構が検出された。

遺物

調査区全体を通しての遺物は少量であり、遺物包含層から中世の土師器片を中心として、須恵器・陶器の細片が出土し、土師も出土した。また、F段の包含層からは一石五輪塔も出土している。他には、鉄釘、石器が出土している。

第36図39は、口径25.8cmを測る上盤器の擂鉢であるが、口縁部のみの破片である。上段の包含層から出土している。口縁部下の外側には凸帯状の張出部があるが、突出度が大きな貼りつけのものではなく、口縁部直下を強くナデすることによって突出したように見せかけるものであるが、この破片では特に、ナデ調整および口縁部の上部を内傾させることによって外側突出部を強調しているにすぎない。突出部はかなり退化して尖っているだけである。口縁部上には平坦であるが、内傾している。内外面ともにロクロナデによる調整であるが、体部内面には櫛による擂目を施している。擂目は横方向に施したのち間隔をあけて縱方向にも施しているが、使用による磨滅が著しく、下方は観察できない。焼成は良好で、橙色(7.5YR7/6)を呈し、赤色粒のほか砂粒を多く含んでいる。器形の特徴から16世紀の後半の所産と考えられる。

40~42は土師器の有孔土錐である。40・41は太く、42は細いタイプである。40は完形品であるが、器表は磨滅している。直径3cm、長さ2.9cm、孔の直径は1.2cmである。重量は19.0g。橙色(7.5YR7/6)である。41は約半分を欠損するが、現重量11.6gで、元は20g前後と思われる。直径3cm、長さ3.75cmで、孔の直径は1.25cmである。淡黄橙色(7.5YR8/4)を呈し、胎土には赤色粒を微量含む。42は西端



を少し欠損し、現存長3.9cm、直径1.3cm、孔の直径は0.4cmである。焼成は良好で、ぶい褐色(5YR6/6)を呈する。現重量は4.3gである。40~42はいずれも包含層から出土したものである。

一石五輪塔は第37図に示した。風・空輪を欠失するもので、花崗岩製であるが、表面の風化が著しい。特に地輪の下端は丸くなってしまっている。全体に造りは椎と思われ、水輪は上下に押しつぶされた形となり、あまり丸くはなく、平面的にも方形に近い。現存長は27.6cmで、水輪部での一辺は約12.5cmである。

鉄釘は第38図に示した平折釘である。幅1cm、厚さ3mmで、頭部は1×1.2cmの大きさである。先に行くにしたがい、幅が狭くなっているようである。頭部付近のみの破片であり、全体の長さも窓いえない。

(岸本)

S 3はサムカイト製の石鐵で、上段の包含層より出土している。

長さ2.7cm、幅2.5cm、厚さ0.4cm、重さ3.3gで、先端および基部を欠損している。所属時期は不明である。

S 4は石英製の剝片で、両側縁に細かな連続した渦れが認められる。「火打ち石」として使用されたのであろうか。長さ5.8cm、幅2.8cm、厚さ1.6cm、重さ17.4gである。所属時期は不明である。

(山本)

4. 小結

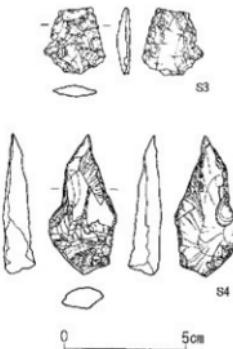
原ノ下遺跡の発掘調査の結果、遺構の密集度は低く、掘立柱建物跡として組み合うものはなかったが、上段で集中的に中世の柱穴群および土壙等を検出した。

遺物の量は少なかったが、出土した土器器種からみて、中世末期の16世紀のものと思われ、土糞が多く出土したことや、遺跡が海に近い場所に位置することから、漁労に関係する集落であった可能性が高い。もっとも、集落というには立地面積が狭いため、家屋の跡とするほうが妥当であろう。

また、本遺跡が存在する場所は、台地状の丘陵の平坦部ではなく、そこから斜面へと変換した場所にあたり、確認調査でも丘陵上平坦部では遺構は検出されていない。しかしながら、今回調査した地点は丘陵斜面のうちでも、若干ながら張り出した部分にあたり、いくぶん傾斜がゆるやかになっている。その小さな張出部については、全体が確認調査対象地であり、確認調査を行ったのであるが、他に遺構を検出することはできなかった。すでに流失してしまったとも考えられるが、ここでは、ほかに遺構は存在せず、今回調査した部分にのみ家屋が存在し、この張出部内の他の部分には存在していないかったと考えておくことにしたい。したがって、原ノ下遺跡としては、今回全面調査を実施した地点すなわち、家屋と思われる遺構で完結しているととらえられるのである。

なお、本遺跡から出土した一石五輪塔については、その所属遺構が明らかではないが、土糞 1が墓の候補としてあげられる。形状は臺としてもよいのであるが、現在淡路の墓は埋め墓と參り墓が分かれた双墓制であり、また、伸展葬である。現在とは全く違っているが、想像をたくましくすれば、中世末の時点では、淡路では单墓制で、しかも屈葬を行っていたと想定することも可能である。また、一方では、調査区南方に墓地が存在していることから、そこから転がってきた、あるいは移動されたものであるという可能性も考えられる。

(岸本)



第39図 出土石器

ひらみ 第6節 平見遺跡

1. 位置と環境

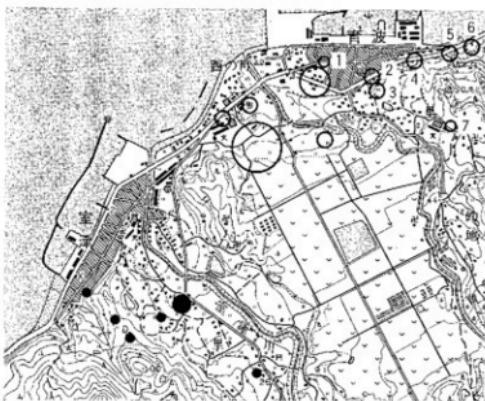
平見遺跡は、第5節の原ノ下遺跡の北東斜面下にあり、室津川左岸の扇状地上に立地し、標高は8m前後の低い所である。

所在地は北淡町室津1360-15, 16, 17で、字名は平見である。調査前は周囲と同じように水田となっていた。

周辺の遺跡については第4・5節で既述したが、遺跡のさらに北東方の育波集落東部の遺跡を記述することにする。第40図

1は浜遺跡で、浜川遺跡同様、

古墳時代の製塩遺跡である。平安時代の遺跡には堂ノ脇遺跡(7)があり、中世の遺跡としては、小谷遺跡(2)、育波城跡(3)、浜田北遺跡(4)、育波大谷B遺跡(5)、育波大谷A遺跡(6)がある。



第40図 遺跡の位置 (1 / 25,000 「仮屋」)

2. 調査の経過

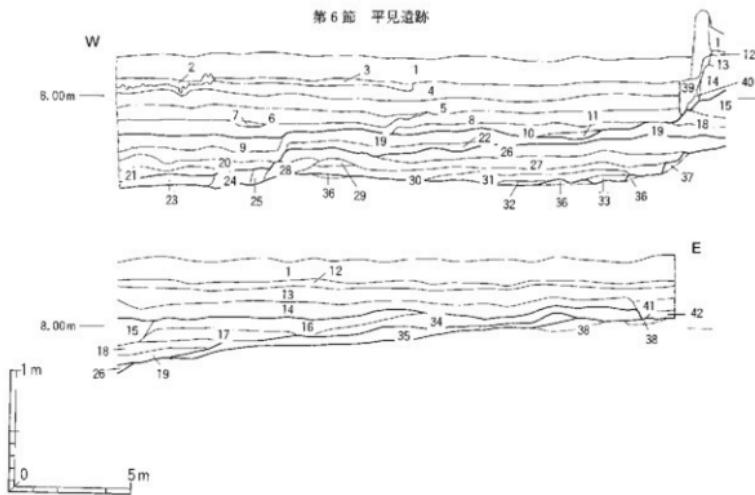
平見遺跡の確認調査は平成元年度に実施し、当時は北一4地点と呼称していた。確認グリッドは17箇所設定し、掘削した結果、3箇所のグリッドで遺構状の落ち込みを検出し、別の1箇所では遺構が存在する可能性が高いと判断した。その結果、事業地内の水田4筆について中世の遺跡が広がっていると判断した。

本州西国連絡橋公園と協議した結果、事業地内の遺跡が広がっている範囲について、全面調査が必要となり、平成3年12月20日から調査を開始し、平成4年1月に調査を終了した。調査面積は1,319m²で



第41図 調査区の位置 (1 / 2,000)

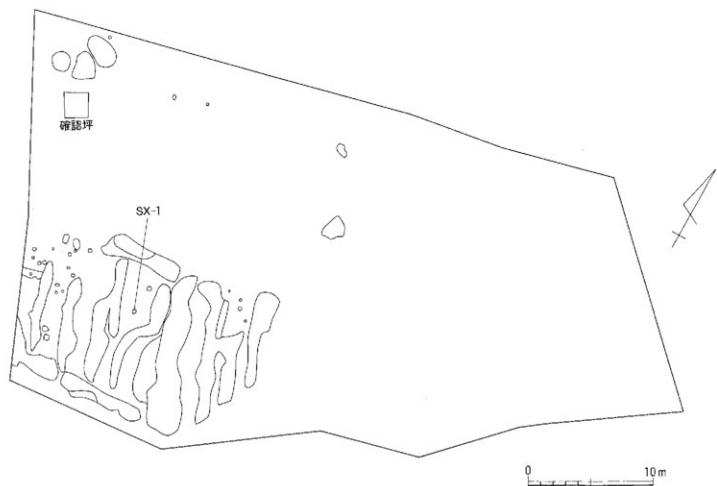
第6節 平見遺跡



1. SY4/1 灰色 塵泥粒砂を含む。鉛作二。
2. SY4/2 深オリーブ色 塵泥粒砂—細緻。中繊維を含む。灰土。
3. 2.SY4/1 黄灰色 塘底泥砂。
4. 2.SY4/1 黄灰色 塘底泥砂を含む。鉛分含む。旧耕作土。
5. 2.SY4/1 黄灰色 両端吹替。粗粒粒砂を含む。鉛分より多量に含む。旧耕作土。
6. 2.SY4/1 黄灰色 塘底泥砂。粗粒粒砂を含む。鉛分微量含む。旧耕作土。
7. 2.SY4/1 黄灰色 塘底泥砂。粗粒粒砂を含む。鉛分、マンガン含む。旧耕作土。
8. IOY4/1 鹿灰鉄色 10YR4/4褐色 塘底泥砂—細緻砂。中繊少量含む。粘質。鉛分多量。マンガン含む。旧耕作土。
9. IOY4/1 鹿灰鉄色 塘底泥砂—細緻砂。マンガン含む。やや若い砂質土で、土器片を含む。
10. IOY4/1 黑褐色 塘底泥砂—細緻砂。粗粒粒砂含む。マンガン多量含む。
11. IOY4/2 黑褐色 塘底泥砂—細緻砂。粗粒粒砂含む。マンガン多量含む。
12. IOY4/3 黑褐色 塘底泥砂—細緻砂含む。鉛分多く含む。灰土。
13. IOY4/3 黑褐色 塘底泥砂—細緻砂含む。鉛分含む。旧耕作土。
14. 7.5Y4/0 1.5 黑褐色 塘底泥砂—粗粒粒砂。粗粒粒砂含む。鉛分含む。旧耕作土。
15. IOY5/0 黑褐色 塘底泥砂。粗粒粒砂含む。マンガン含む。やや若い砂質土で、土器片を含む。
16. IOY5/1 黑褐色 塘底泥砂。粗粒粒砂含む。マンガン含む。やや若い砂質土で、土器片を含む。
17. IOY5/1 黑褐色 塘底泥砂。粗粒粒砂含む。マンガン含む。やや若い砂質土で、土器片を含む。
18. IOY5/1 黑褐色 塘底泥砂—細緻砂。粗粒粒砂含む。マンガン含む。やや若い砂質土で土器片を含む。
19. IOY5/1 黑褐色 塘底泥砂—細緻砂。粗粒粒砂含む。マンガン含む。やや若い砂質土で土器片を含む。
20. IOY5/1 黑褐色 塘底泥砂—細緻砂。粗粒粒砂含む。マンガン含む。やや若い砂質土で土器片を含む。
21. IOY5/1 黑褐色 塘底泥砂—細緻砂。中繊維少量含む。マンガン含む。やや若い砂質土で土器片を含む。
22. IOY5/1 黑褐色 塘底泥砂—細緻砂。中繊維少量含む。マンガン含む。やや若い砂質土で土器片を含む。
23. 5Y5/1 灰色 粗粒砂。細粒粒砂—細緻砂含む。マンガン少量含む。砂砾。
24. 8Y4/1.5 鹿灰—灰黒褐色 粗粒粒砂。粗粒粒砂含む。鉛分微量含む。層層。
25. IOY5/1 黑褐色 シント・鹿灰鉄色 ラミナリスを呈する。粗粒粒砂含む。
26. IOY4/1.5 鹿灰—灰黒褐色 塘底泥砂—細緻砂。粗粒粒砂含む。マンガン含む。砂砾。
27. 2.SY4/1 黄灰色 塘底泥砂—細緻砂。粗粒粒砂含む。マンガン土器片含む。砂砾。
28. 2.SY4/1 黑褐色 塘底泥砂—細緻砂。粗粒粒砂含む。マンガン、土器片含む。砂砾。
29. IOY4/1 黑褐色 塘底泥砂—細緻砂。粗粒粒砂含む。鉛分。マンガン含む。砂砾。
30. 2.SY4/1 黑褐色 塘底泥砂—細緻砂。粗粒粒砂含む。マンガン含む。
31. IOY4/2 鹿灰鉄色 塘底泥砂。粗粒粒砂—マンガン含む。砂砾。
32. IOY4/2 黑褐色 塘底泥砂—細緻砂。
33. IOY4/2 黑褐色 塘底泥砂—細緻砂。
34. IOY4/3 5 黑褐色 塘底泥砂—細緻砂。粗粒粒砂—マンガン土器片含む。砂砾。
35. IOY4/3 黑褐色 塘底泥砂—粗粒粒砂。粗粒粒砂—粗粒粒砂。鉛分多く含む。鉛分多く含む。
36. 2.SY4/1 黄灰色 塘底泥砂。鉛分。マンガン少量含む。砂砾。過剰鉛。
37. IOY4/1 黄灰色 中石炭—中鐵。鉛分。マンガン含む。鉛鉻。
38. 2.SY6/3 にがい 黄色 塘底泥砂—中鐵。鉛分含む。鉛分含む。砂礫層。
39. IOY4/1 黄褐色 塘底泥砂。鉛分微量含む。鉛分含む。
40. IOY4/4 黄色 塘底泥砂。鉛分微量含む。鉛分多く含む。
41. IOY5/1 黑褐色 塘底泥砂—粗粒粒砂。粗粒粒砂含む。鉛分含む。やや若い砂質土で土器片を含む。
42. IOY4/1 塘底泥砂—粗粒粒砂。粗粒粒砂含む。鉛分含む。やや若い砂質土で土器片を含む。

第42図 調査区北側壁土層断面図

第6絵 平見遺跡



第43図 遺構全体図

ある。

表土から遺物包含層上面まではバックホーで掘削し、包含層以下遺構面までは人力で掘削した。また、遺構を検出するための遺構面精査や遺構掘削、写真撮影のための清掃作業を人力で行った。遺構掘削後は足場を設置して写真撮影を行い、ヘリコプターによる空中写真撮影も行った。また、遺構各個の写真も適宜撮影した。写真撮影後は全体と遺構各個別の平面実測図の作成を行い、土層の堆積状況の実測も行った。

3. 調査の成果

遺構（土層）

遺跡は室津川が開削した谷内に所在するためか、遺構面は砂層であり、その上部に堆積している遺物包含層も砂層となっていた。その上層は水田を構築するための客土と思われる砂質土であり、その上に水田面が存在する。水田面は旧耕土と現耕土が床上をはさんで存在していた。旧耕土については近世以降のものと思われた。これらの土層をさらに詳細に述べると以下の通りである（第42図）。

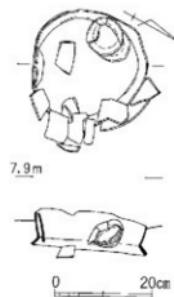
基本土層は、耕作土・床土の下層は旧耕土が3~4層に重なり、約50cmの厚みであった（第42図第4~8, 13, 14層）。その下層は灰褐色から黒褐色系の砂質土で、約30cmの厚みがあり、それぞれの場所で上から下まで2~4層に細分できた（第9, 15~22, 34層）。やや粘性を帯びた砂質土で、極粗粒砂やマンガンを含んでおり、少量の土器片を包含していた。さらにその下層は灰色系の砂層になっており、10~20cmの厚みがあり、上下1~4層程度に細分できた（第23~31, 35層）。微量の灰片やマンガンのほか、土器片も含んでいた。そこから地山までは部分的に5~10cmの厚みで、遺物を小量含んだ黒色の砂層（第32~33層）が存在していた。以上、これらの土層の表土からの堆積は、最も厚いところで約1.1mであった。堆山すなわち遺構面は、それらの下層の黄色や灰色系の砂層（第36~38層）であり、柔らかく、鉄分やマンガンを含んでいた。

遺構は調査区西部、特に南西部に集中して認められた（第43図）。検出した遺構は溝状遺構が最も目立ち、他に柱穴・土壙があり、土器埋納遺構（S X-1）も1基認められた。

溝状遺構は南北に近い方向のものが平行に9条程度認められ、最大で長さ13mあり、その両端にもほぼ東西方向に溝状遺構が存在していた。これらの溝は直線的ではなく、途中で屈折したり、分岐したりしている。幅も一定ではなく、細い部分で約50cm、幅の広い部分では270cmであった。深さについては、南北方向の溝では、12~20cmで、各溝ではほぼ同じ深さである。東西方向の溝では各溝での深さは一定せず、23~35cmを測る。

これらの溝状遺構の性格については、川の氾濫した痕跡かとも考えられるが、一定箇所に集中していることと、方向が南北の溝を東西の溝で囲むようにしてあることにより、人工的なものであると思われ、畑状遺構としては歴の幅が一定せず、途中で途切れたりしていることや、溝間に柱穴や土器埋納遺構が存在することから、これも疑問である。今後調査例を待って性格を明らかにしてゆきたい。なお、溝状遺構の埋土は先述の黒色砂層で、埋土中からは土器・須恵器のほか、瓦器や青磁碗も出土している。

S X-1（土器埋納遺構）は溝状遺構のうち南北方向のほぼ中央部の溝間で検出した（第44図）。構造は、土壙を掘り、土壙を伏せていたと考えられ



第44図 S X-1

るが、土壤状の掘り方は検出することはできなかった。地山が砂層であったためと思われる。土壙の内部からは瓦器碗1点と小皿2点が出土した。小皿は重ねた状態であった。本造構の性格については不明である。なお、土壙は脚が付くものであるが、出土しなかった。打ち欠いてから伏せた可能性も考えられるものである。

柱穴状遺構についても、主として溝状遺構の隙間でその殆どを検出した。直径は20cm程度から40cm程度まであり、深さは6~40cmまであるが、その殆どが20cm程度である。いずれの柱穴状遺構についても、柱痕は検出できなかった。

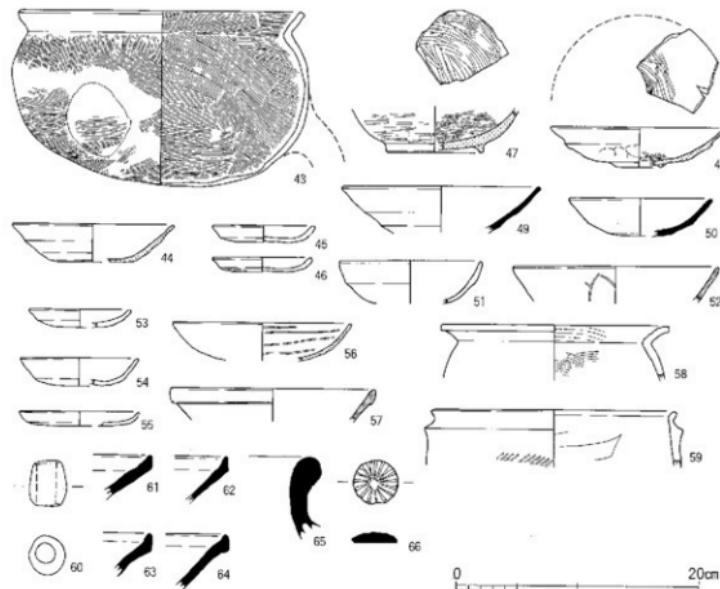
その他の遺構では、直径1.5mの円形土壙や長径2.8m、短径1.7mの椭円形土壙などを検出、掘削した。調査区北西隅にある土壙群では、深さは35~40cmであった。遺構の断面形は逆台形を呈する。内部から遺物は出土しなかった。

これらの遺構は出土遺物から、中世でも鎌倉時代の所産と考えられ、他に近世以降と考えられる不規形土壙も調査区中央部で1基認められた。

遺物

出土遺物は中世の土師器を中心として他に須恵器・陶磁器が認められたが、量的には多くはなかった。また、土鍬や鉄釘も出土した。土器類については第45図に、鉄釘の実測図は第46図に示した。

まず、SX-1出土土器であるが、43~46に示した。43は土師器の鍋で、三足が付くタイプであるが、3個とも刺離痕を残して欠失している。体部はやや偏平であるが、全体に丸みを帯びている。口縁部は



第45図 出土遺物

体部から「く」の字状に屈折して、直線的に外上方にのびる。体部外面は口縁部下は縱方向、中位以下は横方向の刷毛を施している。外面全体には煤が付着している。口縁部外面はヨコナデ調整である。外表面は全体的に凹凸が多く、やや歪な模様がある。体部内面および口縁部内面はほぼ横方向のナデである。口縁端部は面をなす。口径22.7cm、現器高は14.3cmを測る。体部最大径は21.3cmである。

44は壺のような形態であるが、瓦器壺である。底部は瓦器にはめずらしく平坦で、高台は本破片のなかでは認められない。48に似た形態と思われる。体部外面は指頭圧痕が著しく、小さな破片であるため、図では凹凸面のようになってしまっている。口縁部はヨコナデである。内面は口縁部ヨコナデ、それ以外はナデである。暗文のようなものも認められる。口径13.2cm、現高3.1cmである。内外面とも灰色（5Y5/1）を呈するが、外面がやや濃い。口縁部外面はヨコナデにより凹面をなし、体部との境はゆるやかな段を形成している。

45・46の土師器小壺は两者とも同様の形態で、完形品である。内面口縁端部付近と外面の所々に黒い付着物が認められるが、灯明皿として使用した際の油脂分か、砂層に含まれる鉄分が付着したためかの見極めはできていない現状である。どちらも体部内面および口縁部はナデ調整、底部外面には指頭圧痕が認められる。45は口径8.2cm、器高1.4cm、46は口径8.0cm、器高1.25cmである。ともに焼成は良好で、外面明黄褐色（10YR 7/6）を呈し、内面はにぶい黃褐色（10YR 7/4）と浅黃褐色（10YR 8/4）である。

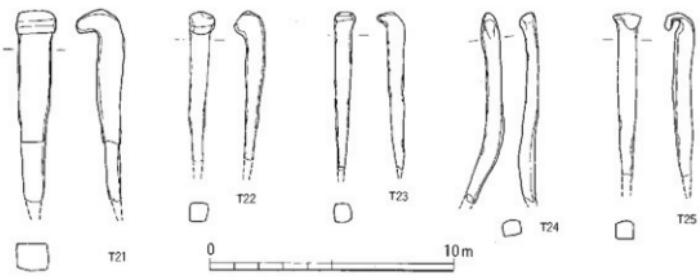
次に、溝状遺構から出土した土器は47~52・61で、排水探集品であるが、62もその可能性が高い。黒色土器・瓦器・須恵器・土師器・青磁とバラエティーに富んでいる。

47は内黒の黒色上器で、外面は浅黃褐色（7.5YR8/4）を呈し、ミガキ調整が加えられている。胎土に微細な赤色粒が多く観察できる。内面は密な磨きを施している。口縁部は欠損している。高台径は7.8cmである。香川県西村遺跡のものと同一の可能性が高い。

48の瓦器壺は径3.5cmの小さな貼り付け高台が認められ、口径14.4cm、器高3.3cmの浅いものである。体部外面は指押さえ、口縁部は強くヨコナデすることにより、体部との境は段状を呈している。内面はナデで、見込み部分に僅かに暗文が認められる。外面は灰色（10Y5/1）、内面は灰白色（10Y8/1）である。

49・50は須恵器の壺であり、49の体部から口縁部にかけては直線的に横外上方へのびる。口径は16.1cmである。50の体部は丸く、口径も11.8cmと小さく、体部外面には指押さえ状の小さな凹凸が認められる。49・50ともに灰色（N6/0）で、内外面はロクロナデ調整、口縁端部外面には重ね焼きの痕跡がある。

51は土師器の壺で、口縁部は直線的であるが、体部から底部へは丸みを持つ。口径11.6cmで、胎土には赤色粒を含み、にぶい黃褐色（10YR 7/4）を呈し、断面は黒褐色を呈する。口縁部はヨコナデである。



第46図 出土鉄器

青磁碗片は口径16.8cmで、外面に鏡のない連弁文を描いている。緑灰色（7.5GY6/1）を呈する。

61・62は須恵器こね鉢の破片であるが、破片が小さいため断面のみ示した。61は灰白色（5Y8/0）、62は灰色（10Y7/1）を呈し、口縁端部は肥厚せず、端面は垂直である。62は黒色砂層の上げ土採集品である。

包含層から出土した土器のうち、下部の灰色系砂層および黒色砂層から出土したのは53～58の土器で、上部の灰褐色・黒褐色系砂質土からは59・60・63が出土し、59・66は旧耕土からの出土である。

53・55は土師器皿で、53は口径8.2cm、器高1.5cm、浅黄橙色（7.5YR8/3）で、赤色粒を含む。55は口径9.8cm、器高1.2cm、淡黄色（2.5Y8/3）で、赤色粒を微量含む。54は土師器の坏で、口縁下部を強くナデすることにより底部との境がはっきりしている。口径9.6cm、器高2.3cmで、橙色（7.5YR6/6）である。

56の瓦器塊は体部が丸く、口縁部外側も強くナデていないが、口径14.6cm、現高3.1cmと浅広いタイプである。内面にのみ疎らに暗文が認められる。灰白色（10Y7/1）を呈する。

57は玉様状口縁部の白磁碗で、口径16.6cm、灰白色（5Y7/2）を呈する。

58は壺と思われる。細片のため、傾き・口径は不正確であるが、18.6cmである。浅黄橙色（10YR8/4）。

59は土壺で、にびい橙色（5YR7/4）で、焼成は良好である。口径19.8cmで、口縁部外側下を強くナデすることにより、凸帯状の段を強調している。体部には平行叩きが認められる。口縁端部は外反する。

60は土師器の管状土錘で、完品。重量は26.3gで、胎土には赤色粒を含む。径3.1cm、長さ3.7cm、孔径1.6cmで、にびい橙色（5YR7/4）を呈する。

須恵器こね鉢のうち、63は灰色（10YR6/1）、64は灰白色（NS8/0）を呈し、ともに口縁端部を少し拡張する。

65は備前焼壺の口縁部片で、壺部は玉様状を呈する。灰（10Y5/1）～オリーブ灰色（2.5GY5/1）である。

66は軟質陶器で蓋と思われ、上面はやや丸く、下面は平坦である。菊花文の型押し作りで、縁軸の上松付けを行っているが、溝状の部分のみ残存している。器底部は白色（2.5Y8/2）で、ほぼ完品である。

鉄釘のうち、T21～T23は上部包含層からの出土で、T24は下部包含層、T25は採集品である。いずれも先端部を折損している。T21は平折釘で、頭部ぎわの幅は1.4cm、厚さ1.0cmで、現存長7.8cmである。T22・T23は折釘で、頭部付近の断面はほぼ方形で、一辺8mm程度であり、長さは6cm程度還存している。T24は頭部を欠損していると思われるが、長さは約8cm還存している。T25の頭部は平たく打ち延ばして折り込んだものである。断面ほぼ方形で8mm、長さは6.5cmである。

4. 小結

今後の平見遺跡の全面調査の結果、遺構面は砂層であり、調査区中央部にはほぼ東西方向に砂疊層の自然流路も存在しているようである。向的には調査区南東隅が最も高く、標高8.1mで、北西隅が最も低く、7.2mと、非常にゆるやかな傾斜地である。

遺構は、溝状遺構が10数条と柱穴20個程度、土壤が7基のほかは土器埋納遺構（SX-1）を1基検出した程度で、西側に主として集中しており、遺物は少量であった。SX-1はその形態から、窓の可能性が考えられるが、壺を伏せた類例を知らない。出土した土器から13世紀前半と考えられる。溝状遺構から出土した土器では、13世紀を中心とした時期が考えられる。また、包含層から出土した遺物では、白磁碗が12世紀後半、こね鉢は13世紀中頃～14世紀前半、備前焼はⅢ期で、13世紀後半～14世紀前半、59の土壺は16世紀代、66の陶器は近世のものであろう。

したがって、遺構は鎌倉時代であり、本遺跡の周辺には13世紀後半～14世紀代の遺跡が存在している可能性が高く、そこから流入した遺物と考えられる。

(岸本)

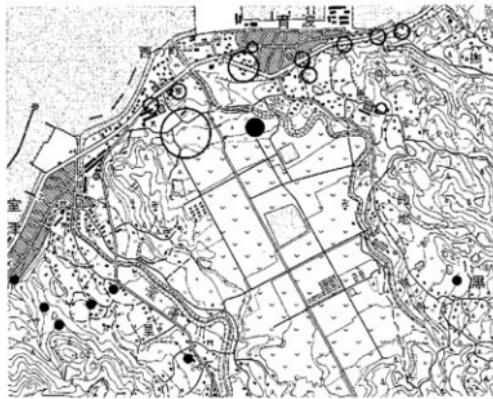
かけうち
第7節 掛内遺跡

1. 位置と環境

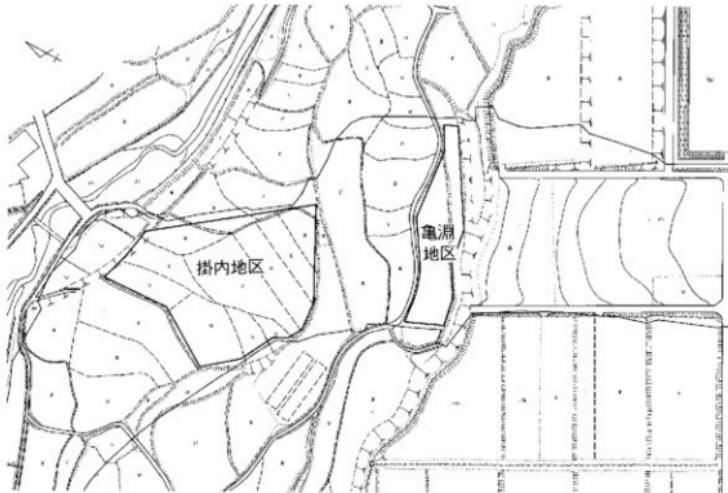
掛内遺跡は津名郡北淡町育波に所在する。現在の海岸線から南に約600mの場所で、標高約20mから15mで、南北向きの扇状地地形末端部に位置する。

遺跡の東側を南から北に向かって育波川が流れている。この育波川床及び河口付近では半大程度のサヌカイト塊（原石）が採取できるようである。淡路島北部の津名郡域内では山塊の路頭断面や河川の河口付近で、

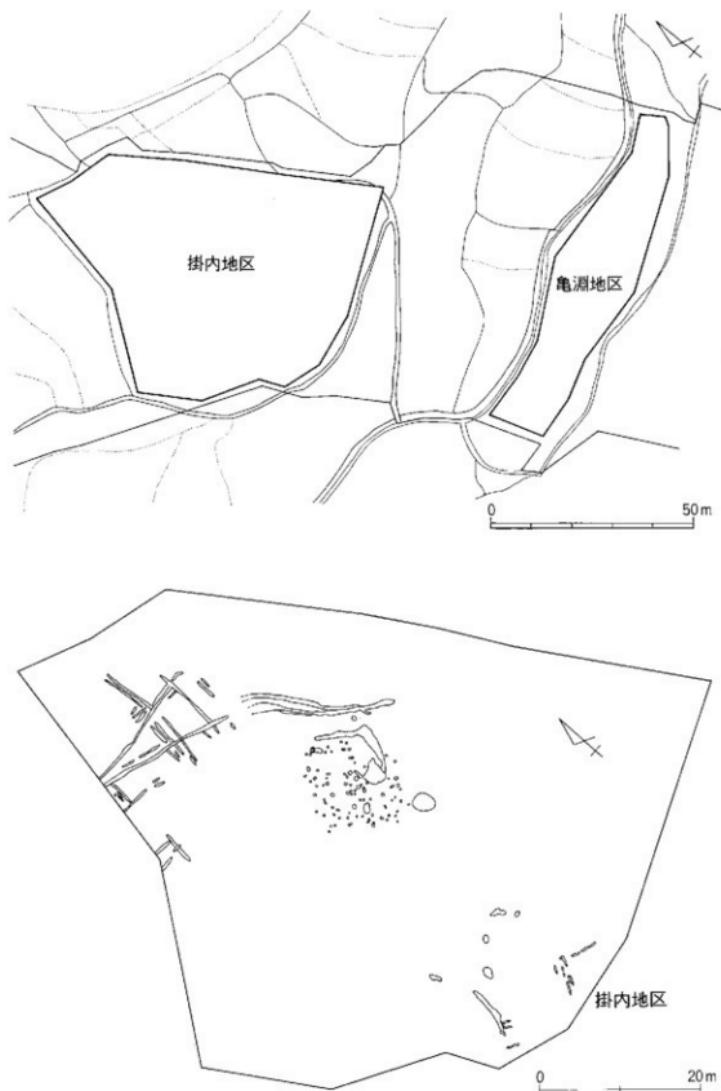
今日でも拳大程度から乳幼児の人頭大程度のサヌカイト塊が採集することができる。形状は亜角礫ないし円錐で、表面の風化が激しく、表面は凸凹で、色調は灰色を呈する。しかし、このサヌカイト塊の内面を観察すると暗青灰色を呈し、ガラス質が強く認められる。淡路島北部の諸遺跡（淡路町まるやま遺跡、東浦町佃遺跡など）では縄文時代から、このサヌカイト塊を利用した石器づくりが行われ、中・近世の諸遺跡（北淡町外断遺跡、井ノ谷遺跡など）では「火打ち石」としても使用されている。



第47図 遺跡の位置 (1/25,000 「仮屋」)



第48図 調査区の位置 (1/2,000)



第49図 調査区の位置・掛内地区造構全体図

掛内遺跡の周辺には、北淡町教育委員会をはじめ、これまで多くの遺跡が確認されている。本報告書掲載以外の遺跡では、有波塗の前遺跡（縄文・弥生時代：包蔵地）、塙焼遺跡（平安時代：散布地）、浜田遺跡（古墳時代：製塙跡）、浜遺跡（古墳時代：製塙跡）、育波城跡（中世：城跡）、堂の脇遺跡（平安時代：散布地）、江池遺跡（平安時代：散布地）がある。（第21・33・40図参照）

なお、掛内遺跡の発掘調査にあたり、調査区を2箇所設定し、北側を掛内地区、南側を亀淵地区と呼称する。

2. 調査の経過

掛内遺跡は、「北一7地点」として、平成元年度に確認調査が実施された。坪No.1～No.4は亀淵地区、坪No.11～16・26～28が掛内地区にあたる。亀淵地区にあたる坪No.2の調査において、弥生時代に属すると考えられるサヌカイト磨製石剣が出土した。同時代の遺物・遺構は検出されなかつたが、その周辺に遺物・遺構が存在すると思われた。また、掛内地区では、坪No.14から花崗岩の巨礫混じりの砂礫層を地山として土坑・柱穴が検出されるとともに、地山層上の包含層からは古代～中世と考えられる土器片がまとまって出土した。確認調査によって遺構の確認された坪は他になかったが、周辺の坪から同一地山面および同様の包含層を確認したことから、遺構の広がる可能性が高まった。

よって今回、平成2年度に、亀淵地区、掛内地区の2地区を全面調査の対象範囲とし、発掘調査を実施した。

3. 調査の結果

a. 掛内地区

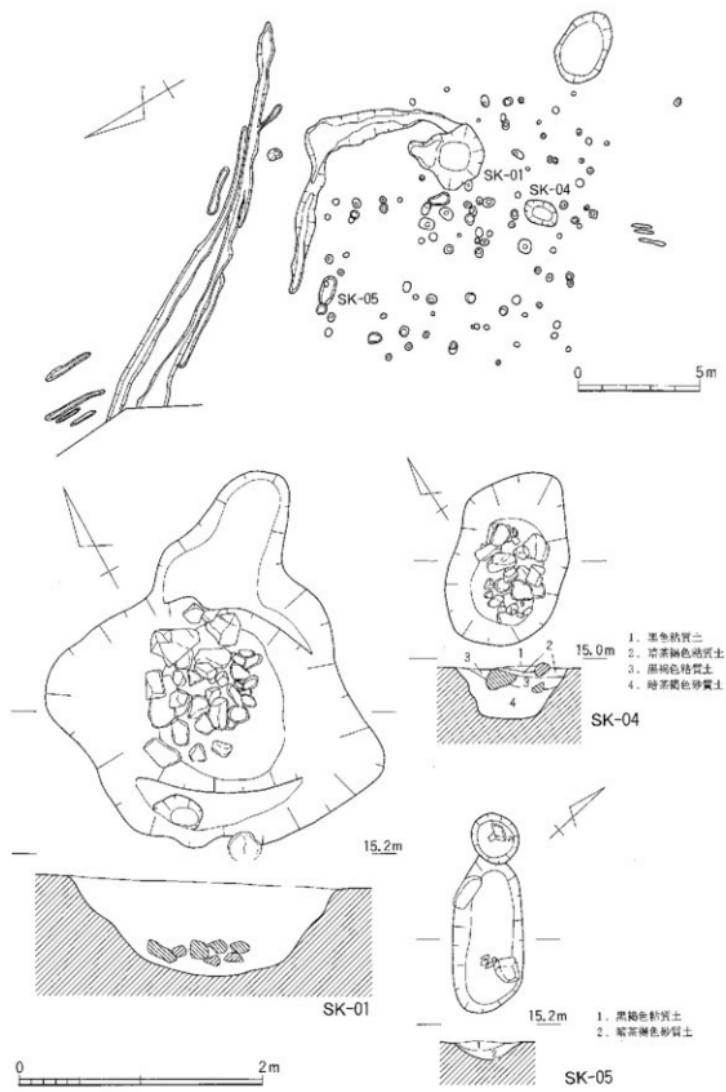
約3,400m²について調査を実施した。

調査開始前の地目は水田で、標高15m～16.5mをはかっていた。この地区西端では、現地表面（耕作面）から0.4m下で、北端では0.6m下で、南端では0.7m下で遺構面に達する。基本上層は上位から、耕作土、黄褐色砂質土（無遺物層）、暗灰色砂質土（遺物包含層）、黄色砂質土（地山）、花崗岩混じり砂礫層（層状地堆積物）となっている。遺構面の土層は「黄色砂質土」で5cm～10cmの厚さをもち、この地区全域で認められる。なお、確認調査で地山と考えていた「花崗岩混じりの砂礫層」はその層直下に存在している。当地区北側では部分的に「黄色砂質土」と「花崗岩混じりの砂礫層」との間に、黒褐色砂質土がみられる。

掛内地区のほぼ中央部に遺構の集中箇所を検出した（第50図）。土坑4基（SK01・03・04・05）、溝2条、柱穴約100個から構成する。

12m×12mの範囲内から約100の柱穴を検出し、この柱穴群の北東及び南東辺にL字状の溝がめぐっている。これらのあり方から、幾度も建て替えが行われていたものの、3間×4間程度の掘立柱建物が1軒建っていたと思われる。上部構造等は不明である。

SK01は長径3.2m、短径2.9mの不整形の掘りかたを持ち、深さ0.8mの土坑である。底から径10cm内外の礫を30個以上検出した。SK01の埋土から出土した土器は、第53図67・68である。SK04は、長径1.5m短径1.0mの長方形の掘りかたをもち、深さ0.4mの土坑である。この土坑の埋土から出土した土器は、第53図69～72である。SK05と呼称している土坑は、長径1.2m、短径0.6m、深さ0.2mの長



第50図 掛内地区造構図

楕円形の土坑とそれに接して検出した径0.4mの柱穴もあわせて総称している。この土坑の柱穴部分の埋土からは、備前焼の壺が出土した（第53図73）。

柱穴群（獨立柱建物）の北東～南東に巡る「L字溝」は最大幅1.5mで、溝内堆上から第53図75～77が出土した。

柱穴群の北西側には、幅10cm～20cm程度の「溝状遺構」を多数検出した（第51図）。特に南北に並ぶ「溝状遺構」は深さ数cmで、これらは田畠の耕作時における鋤使用によるもので、耕作遺構の痕跡であると考えられる。

掘内地区では上記の他に南側で「溝状遺構」や土坑を数基検出した。

また、掘内地区では中央部の遺構集中箇所をはじめとして、全域で遺物包含層を検出し、多くの遺物が出土している（第54図）。

b. 亀淵地区

約1,200m²について調査を実施した。

調査開始以前の地目は水田で、標高約20mをはかる。

基本層序は、上位から耕作土、盛土、赤褐色粘質土、暗～明青灰色粘質土（遺物包含層）、明赤褐色砂土（地山）、花崗岩混じり砂礫層である。なお、遺物を包含する土層には、直徑5cm程度の円礫が多数含まれていた。現地表面から遺構包含層までは約0.7m（南側）である。

調査区北側のはば全面の地山上に暗～明青灰色の遺物包含層を検出した。出土した遺物は、弥生土器や、土師器・須恵器などで、弥生時代から中世と多種多様である。遺構は東西に流れる溝を2条検出した。時期・性格等は不明である。

亀淵地区的南側では、東から西に継続する幅5m、深さ0.4mの溝状のものを検出したが、入為的掘削痕跡は認められず、自然の流路と考えられる。流路内の堆積土からは奈良時代の須恵器片を検出した。

平成元年度の確認調査（坪）において磨製石剣（第52図）が出土し、それに関する遺物・遺構の検出に努めたが、住居跡などの検出はできなかった。また、弥生土器片は僅かに検出されたが、表裏面の磨滅や風化が認められ、土器の部位も推定できない細片がほとんどであった。また、磨製石剣に伴う遺構や遺物は亀淵地区より上方に存在する可能性が調査当初より考えられていたので、亀淵地区南に接する部分について再度確認調査（トレンチ調査、長さ約30m）を行ったが、遺構・遺物は確認できなかった。よって、磨製石剣に伴う遺構・遺物は、さらに上方にあり、そこから磨製石剣や細片となった弥生土器片が下方に流れ、多数の円礫とともに、当地区で埋積したと考えられる。

（山本）

c. 遺物

掘内遺跡で出土した遺物のうち図示できたのは、亀淵地区では確認調査時に出土した石剣と暗～明青灰色粘質土出土土器であり、掘内地区では土壌・溝出土土器と暗灰色砂質土出土土器である。遺構出土土器および包含層出土土器の大半は掘内地区から出土したものであり、亀淵地区で出土した遺物は第54図に示した少量である。以下、各遺物について述べる。

（岸本）

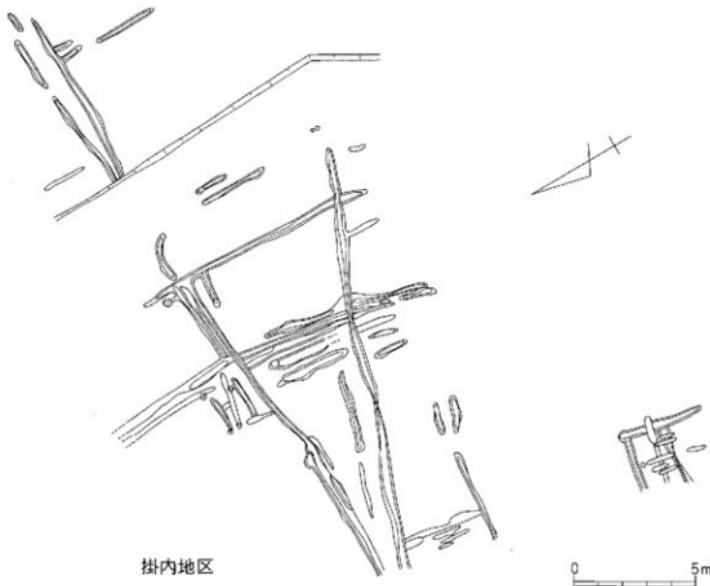
S5は、亀淵地区出土のサヌカイト製の打製石剣で、最大長19.7cm、最大幅3.3cm、最大厚1.5cmである。最大幅、最大厚は、先端から3/4の付近に存在する。部分的な欠損は、発掘時によるものである。

先の「1. 位置と環境」で触れたように、遺跡の立地する淡路島北部ではサヌカイト原石が採集可能

第7節 掛内遺跡

であるが、拳大程度のものがほとんどで、長さが20cm近くもあるこの打製石剣の素材となり得るような原石は付近に存在しない。この打製石剣の原石は、大阪府・奈良県境の「上山付近または香川県金山・五色台周辺と考えられる。

表裏とも側縁側から中央部に向かってやや大きめの剥離を行うことによって成形し、側縁の細部加工を行なうため、細かな剥離を連続的に行なっている。基部の末端部も自然面を残さず、剥離調整によって整形している。全体の剥離調整の後、表裏とも先端部から2/3程度の範囲に研磨を施し、鎌部分を作り出す。なお、研磨により細部加工時の剥離面稜線も磨かれているので、剥離調整の後に研磨されているのは明らかである。なお、両側縁とも下半部に微細な「潰れ」が認められる。布もしくは樹皮等が巻か



第51図 掛内地区遺構図・亀淵地区全体図

れ、「握り」部分であった可能性がある。

これまで近畿地方や中部瀬戸内でよく出土する「石槍状石器」(平井1991)と比較すると、今回出土した打製石剣は最大長20cm近くもあり、大形の部類に属する。しかし、「石槍状石器」のはほとんどが両側縁はほぼ並行で、尖端のみ三角形の尖頭部をもつものである一方、今回の打製石剣は下半部に最大幅を有し、これまでの打製の「石槍状石器」とは形態的にやや異なる。また、サヌカイト製であるにも関わらず、先端部を中心に研磨も施されているので、従来から知られている「石槍状石器」とは異質なものである。今日知られている「磨製石剣」は、有柄式(銅劍形)、有柄式、鉄劍形などであるが、今回の打製石剣は、研磨によって鏽を作り出すことや、形態的な特徴から、鉄劍形磨製石剣に類似するように思われる。

今回の打製石剣には共伴する上器が認められないのでは、時代・時期を特定することはできない。しかし、多くの打製「石槍状石器」や近畿地方における銅劍形磨製石剣は、弥生時代中期後半から後期前半と考えられているので、その年代がうえられるであろう。(山本)

(平井 勝『弥生時代の石器』考古学ライブラリー64 1991)

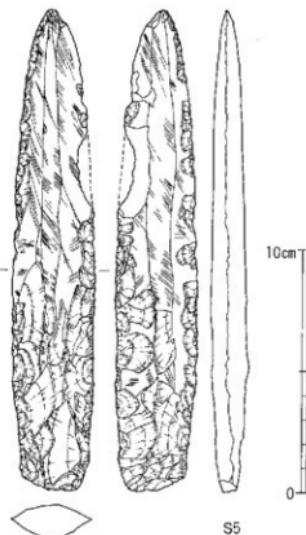
その他に、掛内地区と亀浦地区の中間で磨製石斧片を表面採集した。刃部の破片で、基部は折損している。幅4.5cmであり、基部へ若干幅を減じている。最大厚は1.6cmで、長さ4.8cm遺存している。やや偏平であるが、両刃である。図示はしていない。

土器のうち、土壤から出土したものは第53図で、SK01から67・68が、SK04からは69~72が出土している。

67・69・70は羽釜と呼称すべきものである。いずれも口縁部は内傾し、縁部は面を持つ。縁より下の外面は平行タキで成形し、内面は刷毛目もしくは板ナデを施す。67・69は口縁端部と鈎の縫部を除いて殆ど同形態で、口径も67が25.6cm、69が25.2cmとほぼ同一である。67は浅黄橙色(7.5YR8/3)、69はにぶい橙色(5YR7/4)を呈し、ともに赤色粒を含む。69の鈎以下には煤が付着している。70は口径31.6cmで、口縁部も67・69よりも長く、鈎と口縁端部との間に段が凸壠状に認められる。鈎は上傾しない。にぶい橙色(5YR7/4)を呈し、胎土に赤色粒を含む。外面に煤が付着している。15世紀前半頃と考えられる。

68・71の土器器皿はいずれも平底であるが、底部中心部を欠損する。68は口径11.5cm、器高2cmで、にぶい橙色(7.5YR7/4)を呈する。器表磨滅のため調整は不明である。71は口縁部はやや内済し、器高2.35cm、口径12.4cmを測り、口縁部は回転ナデ、底面は回転糸切りである。ともに金雲母を若干含む。

同様の皿はP6とL字形溝からも出土している。P6出土の74は口径10.9cm、器高2.15cm、L字形溝出土の75は口径11.5cm、器高2.15cmで、器高は同一である。ただし、74は75に比べて器壁が厚く、68・71に近いものである。両者ともに口縁部は若干内済し、底面は回転糸切りで、わずかに四面を呈する。胎土には赤色粒を含み、にぶい橙色(7.5YR7/3)である。

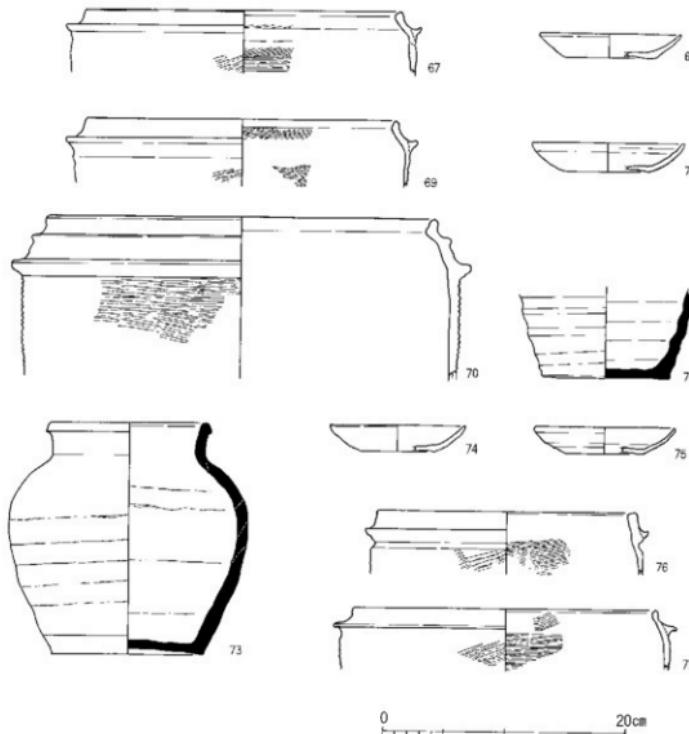


第52図 出土石器

72は軟質陶器または土師質壺の底部で、外面は浅黄橙（7.5YR8/6）、内面は橙色（5YR7/6）を呈する。体部はロクロ目が顯著である。底部は平坦で、回転糸切り後の調整は行っていない。底径は10.6cmである。胎土には大粒の石英粒を含む。S K 04出土である。

73は備前焼の壺で、IV期と思われるが、口縁端部が玉縁状を呈さず、下方に肥厚し、外にやや尖る形態で、体部上半の横描文も認められない。完形品ではないが、図上では完形となる。口径は12.7cm、器高18.9cm、体部最大径19.6cm、底径は12.6cmである。体部内外面には粘土紐の接合痕が顯著に認められ、自然釉が付着している部分がある。赤褐色（10R5/3）～明褐灰色（5YR7/1）を呈し、胎土にはやや大粒の砂粒を含んでいる。S K 05北西の柱穴状穴からの出土である。

75と同じ遺構出土のものに、76・77の羽釜状の煮炊具がある。76は内傾する口縁部が厚く、鶴は外方に短くのびる。体部外面は並行タタキ、内面は刷毛で仕上げる。口径は20.9cmで、にぶい橙色（7.5YR6/4）である。77の口縁部も内傾するが、端部を上方に少し延ばし、肥厚させる。鶴は外方やや下にのびる。体部はやや丸く、外面は平行タタキ調整、内面は横方向の刷毛である。口径は24.8cmで、淡橙（5YR

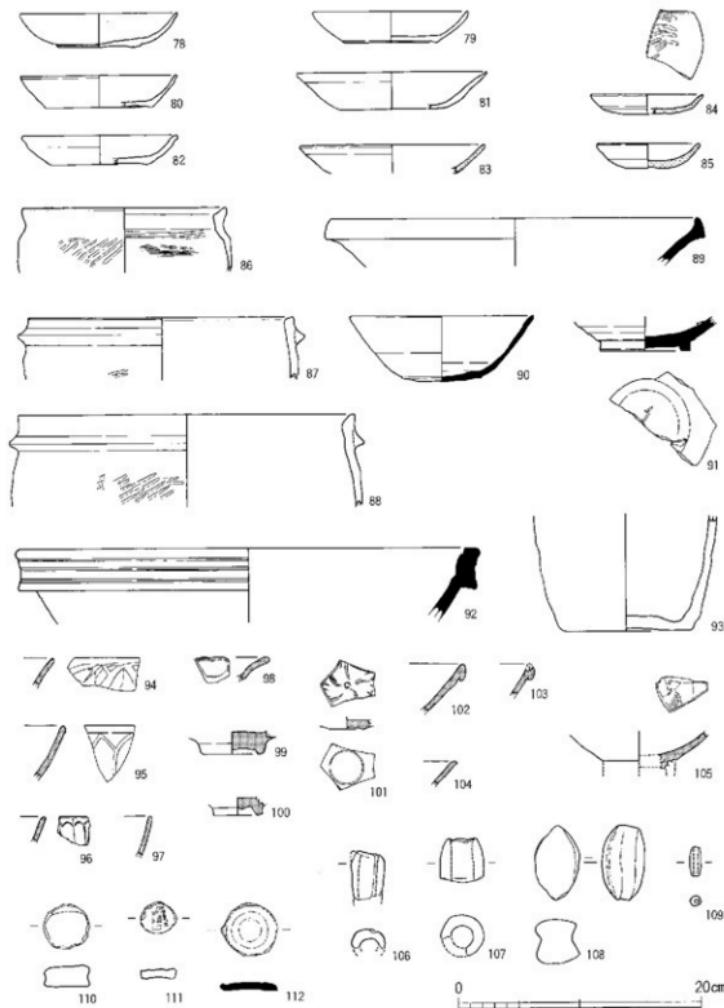


第53図 遺構出土土器

第7節 掘内遺跡

8/4)・浅黄橙(7.5YR8/3)・にぶい橙色(7.5YR7/3)を呈する。76・77とともに15世紀前半頃と思われる。

次に、包含層出土土器について述べる。第54図に示したが、それらのうち亀淵地区で出土したものは、84・87・88・90・91・99・105～107・110～112の12点で、それ以外はすべて掘内地區出土である。ここ



第54図 包含層出土土器

では出土地区にこだわらずに器種別に述べることとする。

土師器皿は5点図示できた。78は口径12.8cm、器高2.8cm、79は口径12.6cm、器高2.6cm、80は口径12.7cm、器高2.6cm、81は口径15.5cmと大きいが、細片のためやや不正確である。器高は3.1cmである。82は口径12.5cm、器高2.4cmである。底部は78がやや突出する以外は平坦あるいは上げ底気味になっている。体部は内外面ともすべて回転ナデ仕上げである。口縁部の形態では、内湾しながら外上方にのび、丸くおさめるもの(78・79)と、端部のみを外反させるもの(80・82)、体部中央で外反させるもの(81)がある。底面は78・80が静止系切り、79が回転系切りである。色調は78・80・82がにぶい黄橙(10YR6/3)で、78・80が特に似た色であり、胎土に石英細粒を含むものも同様である。82には石英粒の他に赤色粒も含んでいる。79はにぶい橙色(7.5YR7/3)で、胎土に石英粒と赤色粒を含む。81は体部と底部の境が曖昧なもので、内面は灰黃褐色(10YR6/2)、外面はにぶい橙色(7.5YR7/3)である。胎土に石英粒と赤色粒を含む。

83は瓦器塊の口縁部片である。内面には暗文が施されているようであるが、器表が磨滅しており、単位が読み取れない。外面も磨滅しているが、指痕圧痕が認められ、ヨコナデの範囲も狭いことから、暗文は施されていなかったようである。灰白色(5Y 7/1)を呈する。瓦器皿は2点図示した。84は亀淵地区から出土したもので、口径9.1cm、器高1.7cmで、外面では口縁部と底部の境は明瞭である。底部外面はユビオサエ、その他はヨコナデもしくはナデで、内面には暗文を施している。内面は灰白色(N 7/), 外面は灰色(N 6/)である。85は岡では底部の器壁が厚いが、3/4程度の厚さの部分が大半である。底部と口縁部の境が曖昧であるが、ヨコナデを施していることにより区別ができる。口径8.2cm、器高2.0cmで、灰白色(N 7/)を呈し、内面はナデ仕上げで、暗文は施していない。瓦器塊については、和泉型と思われ、塊・皿とともに外面の暗文が認められないこと、形態のくずれが顕著には認められないことから、13世紀後半の頃と推定することができよう。

土師器の壺類は3点図示した。86は鈴ではなく、「く」の字形甕の系統と思われる。体部から屈曲して内傾した口縁部をもう一度上方に屈曲させており、外面からの強いヨコナデによるものと思われる。端部は上からのナデにより肥厚させ、内傾する面を持たせている。体部内面は横方向の刷毛調整、外面は平行タタキを施している。外面には煤が付着している。胎土には石英粒・赤色粒を含み、橙色(5YR6/6)である。14世紀後半から15世紀代のものとも思われるが、不明である。口径は16.5cmである。87・88は亀淵地区出土のもので、ともに短く突出した鈴を持つが、88の方が口径が大きくなっている。87は口径27.6cm、88は21.6cmである。両者とも体部外面は平行タタキを施し、他の部位はナデによる調整である。87は胎土に赤色粒を含み、灰白色(7.5YR8/2)を呈する。88も胎土に赤色粒を含むが、にぶい橙色(5YR7/3)で、外面には煤が付着している。所属時期については不明な点が多いが、15世紀中頃～後半の時期を推定しておきたい。

89は東播系須恵器鉢で、口縁端部は肥厚させ上方に引き延ばし、端面はやや内傾する。灰白色(N 7/)を呈し、端面に重ね焼きの痕跡の色調の変化が認められる。13世紀後半～14世紀初頭と考えられる。

須恵器塊は1点のみ(90)図示した。全体の約1/4程度の破片で、口径は15.0cm、器高は5.4cmである。底部外面は回転系切りで、ほとんど突出しない。岡では底部中央が下方に膨らんでいるが、もう少し口径が大きくなれば、底面のラインが水平になる。岡がやや不正確かもしれない。体部及び口縁部はロクロナデで、胎土には石英粒を含み、灰白色(N 7/)を呈するが、口縁端部付近のみ灰色(N 4/)で重ね焼きの痕跡が残る。やや深い形であるが、岡の傾きが間違いたらば、13世紀前半の所産と考えられる。

91は施釉陶器の底部で、瀬戸・美濃系の鉢と思われる。内面のみ薄緑色の釉薬が施され、「目跡」が認められる。胎土は灰白色(7.5Y 8/1)を呈し、底部外面に墨書が認められるが、判読できない。江戸時

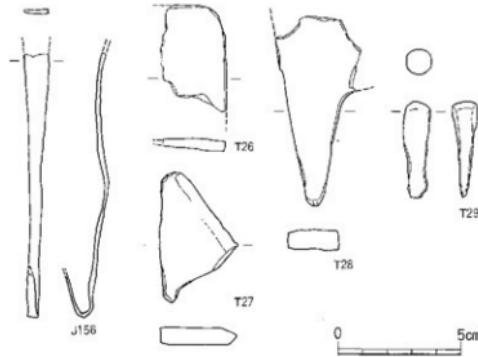
代の所産と考えられる。

92は陶器の擂鉢で、明石または堺のものと思われるが、口縁端部内面が窪んでいることから明石焼の可能性が高い。口径は37.2cm、にぶい赤褐色(2.5YR5/4)を呈し、体部外面は横方向の削りで仕上げている。18世紀後半のものと考えられる。

93は土師質壺の底部で、全体にロクロ目が認められるが、やや歪な作りとなっている。底面は回転糸切りである。胎土には右英・長石粒のほか、赤色粒・金雲母も少量ながら含んでおり、にぶい橙色(5YR7/4)を呈する。外面には薄く煤が付着しており、内面にも薄く認められることから、火消壺として使用されていたものと思われる。

輸入陶磁器類は94~105に示した青磁・白磁の碗・皿類である。青磁の連弁文碗は94~96に示した。94は範彫りの箇連弁文で、釉薬はオリーブ灰色(5GY6/1)である。龍泉窯系のものと思われ、13世紀後半の所産であろう。95の連弁は輪郭のみ範彫りした広形連弁文で、14世紀代のものであろう。釉薬の色は明オリーブ灰色(2.5GY7/1)である。96は細連弁文碗で、オリーブ灰色(2.5GY5/1)の釉薬である。15世紀代のものであろう。97は無文の青磁碗で、13世紀代のものと思われる。釉薬の色はオリーブ灰色(10Y6/2)である。98は青磁の輪花皿の口縁部片で、口縁部内面には3条の柳描文が認められる。釉薬はオリーブ灰色(10Y5/2)である。16世紀代のものと思われる。99~100はともに青磁碗の底部で、99は内外面とも施釉しているが、高台畳付から底面にかけては施釉しない。釉薬はオリーブ灰色(5GY5/1)である。外面には割花文もしくは連弁文が描かれているようであるが、断定はできない。龍泉窯系のもので、13世紀前半~中頃であろう。100は灰オリーブ色(7.5Y7/1)の釉薬を施しているが、高台から底面までは露胎である。外向には柳描文が認められ、同安窯系のもので、12世紀後半~13世紀前半と思われる。101は割花文を描いた青磁皿の底部で、内外面ともオリーブ灰色(5GY6/1)の釉薬を施すが、底面は露胎である。釉層が厚く、高台が付かない古いタイプの皿で、13世紀中頃と思われる。102~105は白磁碗で、102~103は森田分類ではともにIV類で、口縁端部は玉縁状を呈する。とともに内外面に灰白色(7.5Y7/1)の釉薬を施すが、102の体部外面下部は露胎である。104の口縁端部は壠反りで、V類である。灰白色(7.5Y7/1)を呈する。105の内面には柳描文が描かれ、体部外面下部は露胎である。口縁部を欠失するが、おそらくV類になるものと思われる。白磁碗についてはいずれもIV類およびV類であり、12~14世紀と考えられている。

土鍤は4点図示した。管状土鍤(106~107・109)が3点、有溝土鍤(108)1点である。106は大形で、約1/2の破片である。残存長4cm、最大径2.7cmである。にぶい橙色(5YR7/4)を呈し、現重量11.0g。107も大形で、約3/4の破片である。残存長・最大径ともに3.6cmである。淡橙色(5YR8/3)を呈し、現重量は23.8gである。109は小形の管状土鍤で、ほぼ完成品である。長さ2.4cm、最大径0.9cmで、にぶい橙色(2.5



第55図 出土鉄器

Y 6/1) を呈し、重量1.8 g。108もほぼ完形品で、側面に幅約2.3cmの溝を有する。長さ6.1cm、幅3.5cmで、にぶい橙色(2.5YR6/4)を呈する。重量は71.3 gである。

円板状土製品は3点図示した。110は土師器で、直径3.8cm、高さ1.8cmで、托の口縁部・体部を除去した底部と思われるが、上縁の可能性も残っている。重量は29.5 gで、灰白色(7.5YR8/2)を呈する。111も土師器であるが、こちらは縁の口縁部を円板に加工したもので、淡橙色(5YR8/3)を呈し、重量は7.3 gである。第56図 出土古鏡112は束縛系須恵器の塊もしくは小皿の底部で、体部をうち欠いて円板に加工したものであろう。灰色(N 6/)を呈し、重量は16.8 gである。

金屬器は第55・56図に示した。J156は銅製笄の一部で、最大幅1.0cm、先端幅は0.3cmである。先端は欠損し、途中で折れ曲がっているが、残存長は約13cmである。亀淵地区の包含層から出土したものである。T 26～T 29は不明鉄器である。T 27は確認調査時に掛内地区の坪No.14で出土したもので、遺構集中部であった。その他は掛内地区のS K 04から出土したものである。J157の宋銭は包含層から出土したもので、上部に「元」、下部に「通」、左部に「寶」の文字が認められる。直径2.4cmである。

4. 小結

今回の調査の結果、特に確認調査時に出土したサヌカイト製磨製石剣は特筆すべき遺物である。残念ながら、当該時期の遺構は全く検出されなかった。

掛内地区では、調査区のほぼ中央部で柱穴や土壙・溝など遺構が集中している部分が認められ、それらの範囲は約12m四方である。多数の柱穴の存在から、何度も立て替えを行った3間×4間程度の掘立柱建物跡が建っていた可能性が指摘できたが、確定するにはいたっていない。また、同時に検出した土壙・溝の出土遺物から、この遺構群の時期は15世紀前半と考えられ、これら遺構群の北西側や南側に存在した「溝状遺構」が掘作遺構の痕跡と考えられることから、これらも同時期と捉えれば、中世後半の土地利用のしかたや集落形態を考える上で興味深い資料となるであろう。

亀淵地区では、前述の磨製石剣出土をうけて、当該時期の遺構の検出に努めたが、自然流路などを検出したことにとどまった。また、工事予定地区内の周辺の確認調査も併せて行ったが、遺構・遺物ともに確認できなかった。

両地区をあわせた、包含層からの出土遺物では、古いものでは12世紀後半～13世紀代のものが多く認められた。その時期の遺構は存在しなかったが、すでに削平された、あるいは周辺に当該時期の遺構が存在しているものと思われる。次の時期で、出土遺物が多く認められたのは、15世紀代のものである。掛内地区で認められた遺構群から出土した遺物も15世紀前半であり、包含層出土遺物の量の多さとも合致する。なお、18世紀の遺物も少量ながら出土している。

以上、掛内遺跡では弥生時代中期後半～後期前半の時期、平安時代末～鎌倉時代前半、室町時代中期の大きく3時期に生活の痕跡が認められ、検出した遺構からでは、室町時代中期の痕跡が最も多く残されていたことが判明した。

(岸本)



そとまち
第8節 外町遺跡

1. 位置と環境

外町遺跡は、津名郡北波町斗ノ内1115他に所在する。

「常隆寺」の立地する津名山地の最高所、伊勢ノ森から西浦へと向かって派生する、斗ノ内と育波の海岸平地に挟まれた、丘陵の先端部に位置する。

遺跡はほぼ南に向かって傾斜する、3段に開墾された水田となっている。調査地の西側は急な小支谷となっており、上流域からの土石流の堆積を伺い知ることができる。



第57図 遺跡の位置 (1/25,000 「仮屋」)

(古田)

遺構面は花崗岩のバイラン土からなっており、遺跡の標高は75~78mを測る。周辺の遺跡では、第57図に示したように、南東山間の小谷を含んだ台地上に、弥生時代後期の集落跡であるおぎわら遺跡⑨や散布地の金坪遺跡⑩がある。また、外町遺跡と同様、中世の遺跡は山塊からやや下った緩斜面に多く立地しており、散布地では、浅野石原遺跡(3)、浅野原田遺跡(4)、田ノ脇遺跡(5)、浅野尾花遺跡(6)、瀬尾遺跡(8)、斗ノ内里B遺跡(11)、斗ノ内小田遺跡(12)、斗ノ内里C遺跡(13)、伊羅々遺跡(14)、神田原A遺跡(15)、神田原B遺跡(16)がある。海岸付近の中世の遺跡としては、水越B遺跡(1)、机ヶ脇



第58図 調査区の位置 (1/2,000)

遺跡(2), 貝殻遺跡(7), 御明田遺跡(8)がある。なお、堂鼻遺跡跡のみ弥生時代と同じ立地であり、中世城館では細川館(9)がある。

(岸本)

2. 調査の経過

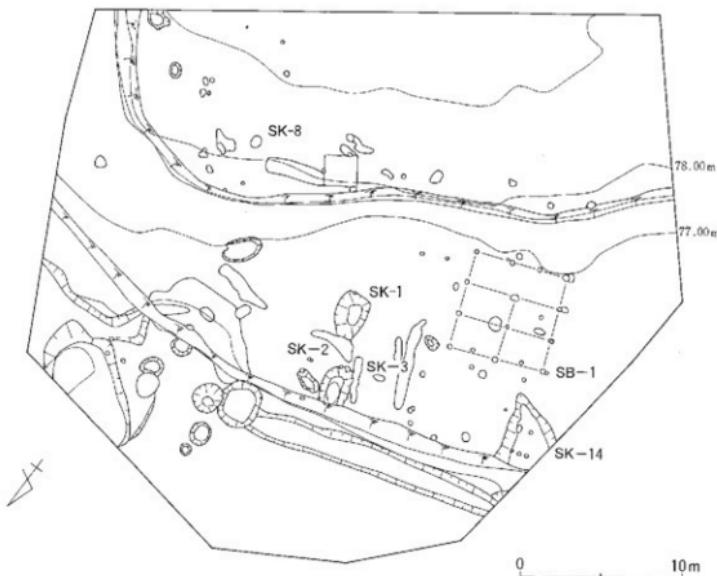
本州四国連絡道路の本線部分にかかる分布調査は、昭和62~63年にかけて実施された。その内、北淡町域は昭和62年に実施され、当遺跡もその時点で発見されたもので、当初北-12地点と呼称されていた。

確認調査は、分布調査の結果を踏まえて、平成元年度に実施した。調査の結果、中世~近世の遺物包含層及び同時代の溝・柱穴等の遺構が確認され、遺跡の存在が明らかとなり、新たに字名をとって「外町遺跡」と呼称された。

その後、兵庫県教育委員会と本州四国連絡橋公団は協議を重ね、平成4年度に全面調査を実施することとなった。

調査にあたっては、現在の水田畦畔にしたがって、便宜的にA~Cの3区に分けて調査を実施した。各地区ともに、耕土以下包含層まで、バックホウによる機械掘削を行った後、残る遺物包含層を人力によって掘削し、遺構検出作業を行った。必要に応じて、遺構検出状況の写真を撮影し、遺構掘削を開始した。遺構掘削終了後、調査範囲全体を写真・図面に記録した。

また、各遺構の配置をよりよく把握するため、ヘリコプターによる空中写真を撮影した。



第59図 遺構全体図

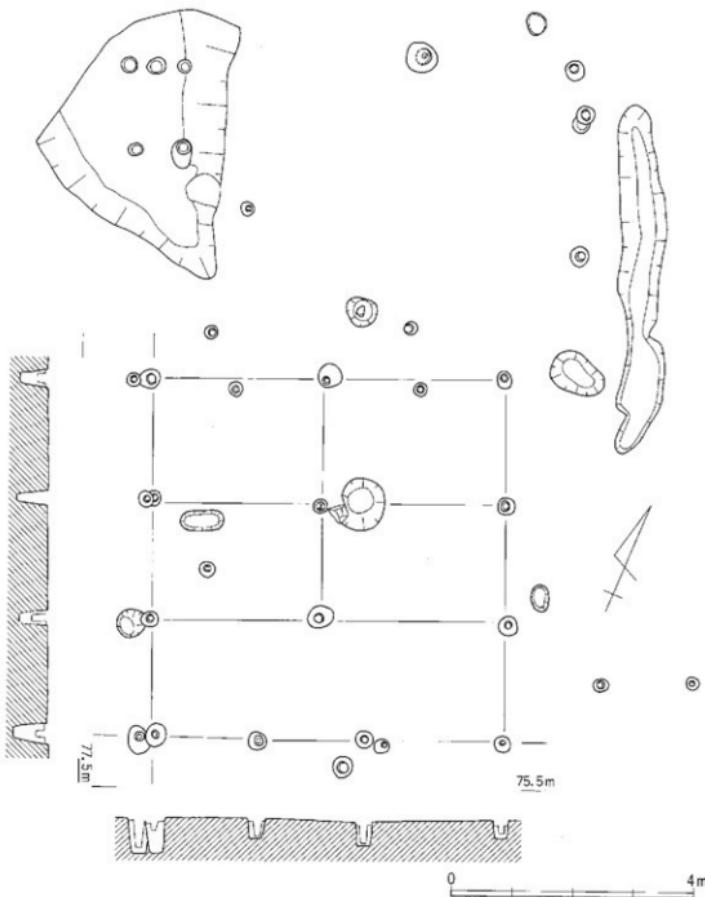
3. 調査の結果

a. 遺構

遺構は調査区全域において見られるが、中段のB区を中心に遺構が集中している。

上段のA区と中段のB区とは、段差こそ存在するものの、遺構のあり方からは同一面と考えられる。C区上端付近の遺構が見られない付近は、開墾時に削平されてしまったと考えられる。

また、下段のC区と他の調査区とは、かなりの段差を持つ事から、同一面は削平されてしまつており遺構は統かないものと思われる。この事は、検出された遺構の性格・時期等からも証明されている。



第60図 SB-1・SK-14

今回検出された遺構は、掘建柱の建物が1軒と、土壙・溝・柱穴等であり、調査区の制約や、地形的制約によって、余裕が不明確であったり、途中で途切れてしまっている状況となっている。

また、C区の遺構は、近世の開墾時か耕作に伴うものと考えられ、径2m程度の大型の土壙が数ヵ所で見られる他、埋土中から近世のすり鉢片が出土している。

S B - 1 (第60図)

B区中央やや西寄りにて検出された、掘建柱の建物跡である。

建物跡の規模は、6m×5.8mの大きさであり、2間×2間の土の南側に1間幅の庇状の施設が付属する形態が考えられ、南側一列のみ3間となっている。更に、北寄りに柱穴の並びが見られる事から何らかの付属設備の存在も想定される。

柱間は2m弱を測り、柱穴掘り方の深さは0.4~0.6mである。

S K - 1 に近接して S K - 14 や溝も見られるが、S K - 1 との時期的関係は不明確である。

しかし、北西に見られる溝は、建物の方向とも合致している点や、削平の影響を受け、本来はもっと統一していたと考えられることなどから、建物に付随する溝と考えるのが妥当であろう。

S K - 1 (第61図)

前述のS B - 1 に近接する土壙であり、北端の一部を他の不整形土壙によって切られている。更に、不整形土壙を挟んで、S K - 2 へと連なる。

S K - 1 は 2m × 3m の規模で、平面形は楕円形を、断面形はすり鉢状を呈す。

埋土には炭・焼土を多く含み、深さは0.2m程度である。同様に炭・焼土を伴う土壙が他にも幾つか見られる。土壙内より、輪殷形の鉄錠・土師器片等が出土している。

S K - 2 (第61図)

B区中央先端部に位置し、北側部分をC区との縁によって切断されている。現存する規模は、2m×2.5mであり、S K - 1 と同様平面形は楕円形を、断面形はすり鉢状を呈す。

S K - 3 (第62図)

B区中央S K - 2 の西に位置し、S B - 1 とは北東付近の位置関係を持つ。0.4×0.8mの平面形長楕円形の土壙で、深さ0.1mの埋土中に、炭・焼土を含む。埋土の状況から、S K - 1 ・ S K - 14 と同時期のものと考えられる。

S K - 8 (第63図)

A地区東寄りに見られる土壙で、平面形はほぼ円形、断面形台形を呈する。0.7×0.6m、深さ0.25mの規模を測る。

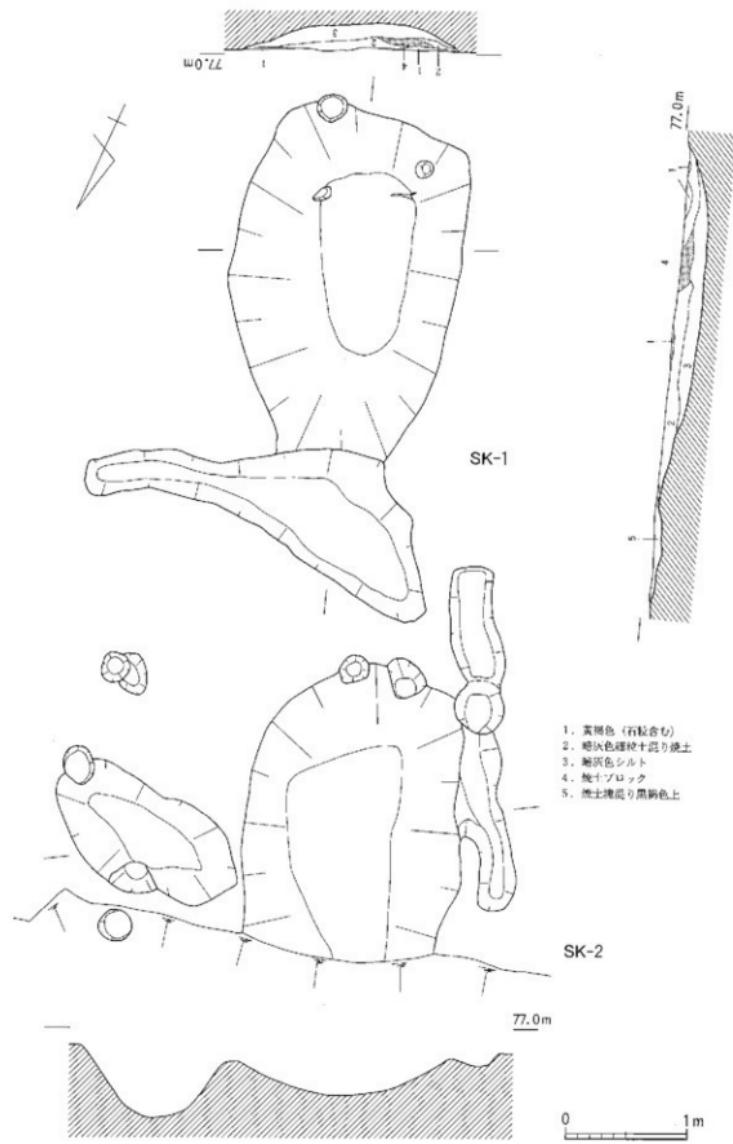
埋土中に甕・黒色土器の破片を多く含み、数個体に復元されている。遺構の性格などについて、不明と言わざるをえないが、興味深い遺構の一つである。

S K - 14 (第60図)

B地区西端部にて検出された土壙で、S B - 1 に最も近く位置し、C地区との境界をなす縁にて切られている。

形態は不整形で、3.2×4.4mの規模を持つ。また、土壙内には、一定の方向性を持つ柱穴が5ヶ所見られ、覆い屋的な施設の存在も想定させる。埋土中には、他の幾つかの土壙と同様に、炭・焼土を含んでいる。

第8節 外町遺跡



第61図 SK-1・2

その他

調査区全体から数状の溝を検出している。いずれの溝も後世の削平を受けて、残存状況は余り良くない。建物跡の方向に合致するものなども見られるものの、存在時期・性格等は不明と言わざるを得ない状況にある。

(吉田)

b. 遺物

出土した遺物には土師器・陶器などの土器類のほか、鉄器や石器類がある。図示し得た土器類は少ないが、第64図に、鉄器は第65図、石器類は第66図にそれぞれ示した。

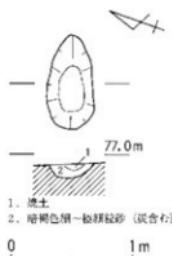
土器類のうち、遺構から出土したものは113～117の4点で、118～123は包含層から出土したものである。

遺構出土土器のうち、SK-8から出土したのは113～115の3点で、116はSK-2から出土したもの、117はSK-14から出土したものである。

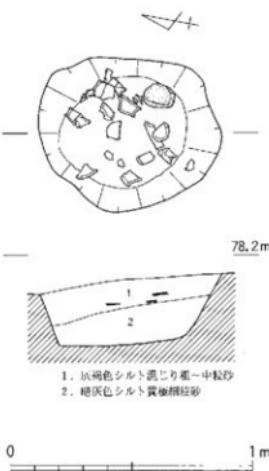
113～115の3点は黒色土器で、すべて内側だけが黒色を呈し、114・115の2点のみ口縁部外側が一部黒くなっている。

113は口縁部外面に強いナデを施すことによってやや歪ませ、それ以下は指頭圧痕が目立つ。外面の体部～口縁部の特徴をみると、和泉型や大和型瓦器塊を彷彿とさせる。高台の断面は台形に近い三角形を呈し、比較的高く、しっかりしたものである。高台径は7.8cmと大きい。口縁部の内面はナデにより、端部へ徐々に厚みを減じている。なお、口縁部は幅約5cmの単位で輪花状につくっている可能性がある。体部および底部内面はナデの上からヘラミガキを密に施している。口径は17.3cm、器高5.3cmである。内面は赤黒色(2.5YR2/1)、外面は褐灰色(7.5YR6/1)である。時期は12世紀中頃と捉えておきたい。114の口縁部は外面のナデはあまり強くないが、内面の強いナデあるいは引きのぼすようにして端部を外反させている。また、内面には小さな沈線状の凹みを作っている。外面のナデより下の体部は指頭圧痕が目立ち、ヘラミガキは施していない。内面は口縁端部まで密にヘラミガキを施している。口径16.8cm、内面は113と同じ赤黒色、外面は灰白(2.5YR7/1)～ぶい橙色(5YR7/3)で、微細砂粒を含み、赤色粒や金雲母も含む。焼成は良好。115の口縁端部も114と似ているが、端面を外から軽く押さえることにより、短いはねあげ状の口縁部となっている。また、内面の凹みも強調されている。体部から大きく角がって底部へ続くようで、小片のため傾きが不正確ではあるが、114よりも直線的で、直立に近いと思われる。底部には断面が三角形に近い台形の高台を外側に踏ん張るように貼り付いている。高台径は10.0cm、口径15.0cm、器高5.7cmである。内面は褐灰色(10YR4/1)、外面は灰白色(5YR8/2)を呈する。内面のみ鏡磨きを施している。115は114に比べて体部が直立的で、やや古い様相と思われるが、両者あわせて、11世紀中頃～12世紀と考えておきたい。

116の壺は口縁部が内傾するタイプで、短い錐状の凸帯が口縁下にめぐるが、貼り付けではないよう



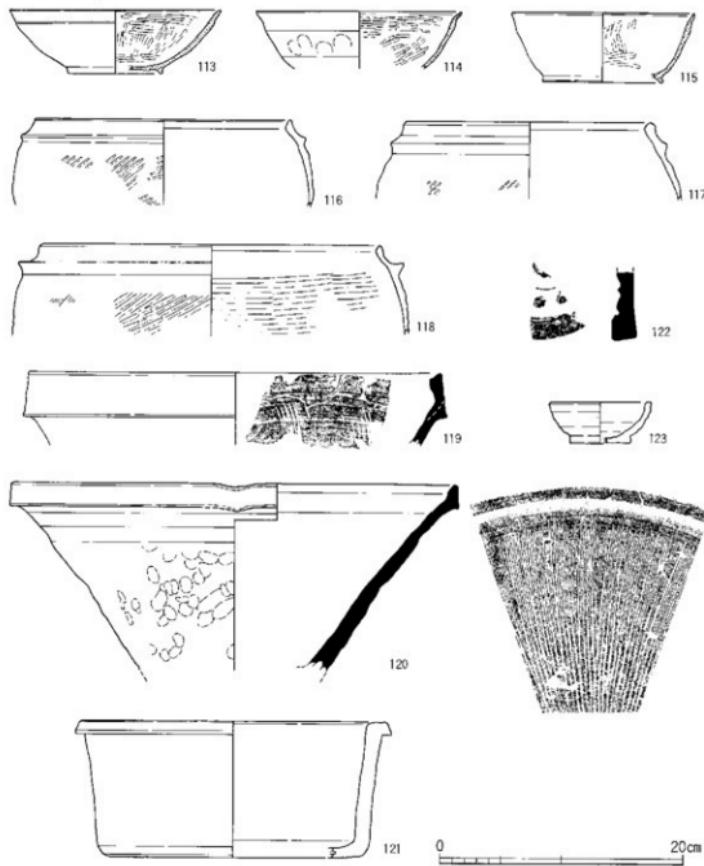
第62図 SK-3



第63図 SK-8

である。口縁端面は内側からのナデによって面をつくり出し、上端は丸くおさめている。播磨地域で良くみられる器形である。体部外面は平行タキを右上がりに施し、内面はナデ調整のようであるが、かなり平滑に仕上げている。胎土には赤色粒を含み、内面は明褐灰色（7.5YR7/2）、外面はほぼ全体に煤が付着しているが、煤以外の部分では灰褐色（7.5YR6/2）を呈する。口径は21.0cm、現高は7.1cmである。15世紀後半頃のものと思われる。

S K-14から出土した117も口縁部が内傾するタイプの堀で、基本的な形態は116と同様であるが、鉢部分の下部もヨコナデにより産ませている点が異なり、また、全体的にシャープさに欠けている。すなわち、口縁部・鉢部分や体部の凹凸が目立ち、ルーズな作りとなっている。体部外面もタキの後、指押さえを頻繁に行っている。内面は板状工具により丁寧なナデツケを行っている。胎土には赤色粒を



第64図 出土土器

多く含み、内面は淡橙色(5YR8/4)、外面は一部煤が付着しているが、にぶい橙色(5YR7/3)を呈する。口径は20.1cmで、現高は6.3cmである。116と同様、15世紀と考えておきたい。

118は包含層出土の内傾する鍋である。116と作りや胎土が類似しているが、鍔はより大きく突出しており、貼り付けである。また、口縁端面は116ほど平坦面を強調していない。基本的な調整も116と同じであるが、体部内面は粗い目の刷毛調整である。胎土には長石(?)が目立ち、赤色粒も含んでいる。外面には、鍔の先端以下に煤が付着し、その他の部分はにぶい褐色(7.5YR6/3)を呈する。鍔が突出し、貼り付けであることから、116よりもやや古く、15世紀前半と捉えておきたい。

119は内面が特に生焼けとなった備前の捕鉢片で、調査区東部の落ち込み上の包含層から出土している。口縁部を上方に拡張し、内面の搔目は柄で間隔を開けて施している。備前IV b期で、15世紀後半であろう。内面は黄色が強い灰白色(7.5YR8/2)を示し、外面も灰色系の灰白色(2.5YR7/1)である。胎土には赤色粒も含んでいる。この赤色粒は、内面の酸化焰焼成の部分では赤色、外面の還元焰焼成に近い部分では黒色を呈している。口径は33.8cmである。

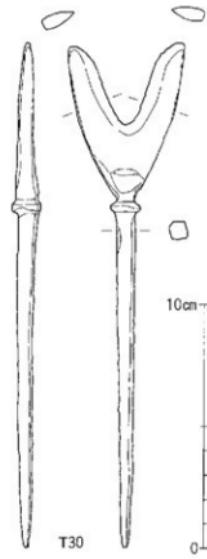
120は底部を欠失するが、月波の捕鉢である。口縁部外面は直立し、口縁部の断面形は二等辺三角形を呈する。内面の口縁部と体部の境は凹面をなす。体部内面には8本程度の単位の櫛押き搔目を密に施している。外面には指押さえ痕跡が多く残る。焼成は良好で、にぶい赤褐色(2.5YR5/4)および橙色(2.5YR6/6, 7/6)を呈する。下相野窯跡報告書では17世紀後半に編年されるものである。

121はやや大形の鉢形のものである。体部は厚く、ほぼ直立し、口縁部は体部を「L」字状に折り曲げた後、内傾した端面にナゲを施している。底部は体部に較べて薄く、大半が欠失している。口縁部の内側での口径は22.0cmで、器高は11.2cmである。内外面ともナゲ調整で仕上げている。胎土には赤色粒・金雲母も含み、にぶい黄褐色(10YR 7/3)を呈する。内面の上半部が煤けており、火鉢の可能性が指摘できるが、断定できない。所属時期についても不明である。

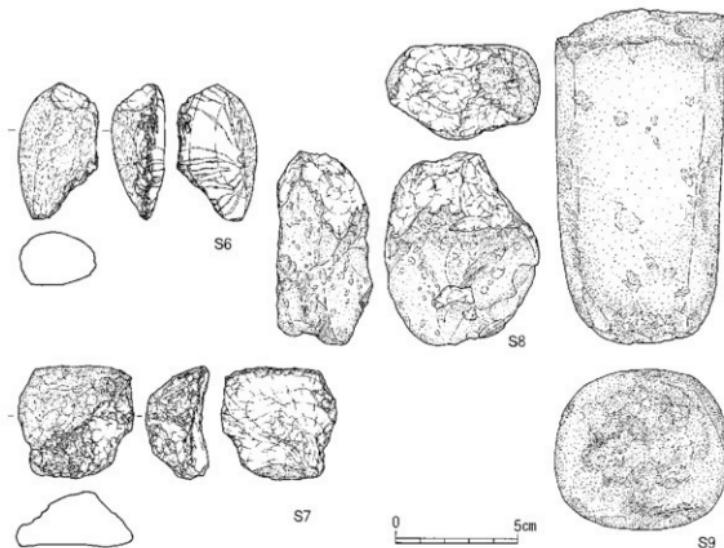
122は巴文軒丸瓦片で、珠文と巴文の頭と尾の一部が看取できる。室町時代の可能性がある。にぶい橙色(10YR 7/2)を呈し、薄く褐色(10YR 6/1)の薙しがかかる。

123は土師器の小形鉢あるいは小形壺である。平底の底部は少し突出し、底面は回転糸切りである。体部は大きさに較べ厚手で、口縁部は厚みを少し増し、丸くおさめている。胎土には石炭・チャートなどの砂粒を多く含み、焼成は良好・堅緻で軟質陶器にやや近い。色調は灰白色(10YR 8/2)である。ロクロナゲ調整で、ロクロ目が観察できる。形態的には平安時代の東播系須恵器や中世の土師器壺に近いが、同様のものを見いだすことはできなかった。したがって、時期についても不明であり、中世の可能性が高いことを指摘するに止まらざるを得ない。

鉄器では、SK-1から出土した雁脛旗の完形品1点を図示した。表面は錆化しているが、完形の優品である。全長20.7cm、茎の長さは13.8cmで、茎から刀部までが長いものである。茎は断面方形で、葉被ぎわの一辺は7mmをはかり、徐々に細くなり、先端は尖らせている。



第65図 出土鉄器



第66図 出土石器

範被の周囲には凸帯がめぐっている。刃部の幅は4.8cmで、頸部から先端へは徐々に厚みを減じているが、刃は急角度につけている。粗股鐵のうちでは、鰐尾形鐵にある。この鐵の時期であるが、SK-1から出土した土器は細片であるため、確定はできないが、15世紀代と考えられる上師器皿がある。したがって、粗股鐵についても同時期の可能性が高いと思われる。

石器類は第66図に示したが、火打ち石・たたき石などがあり、B区やC区の包含層などから出土している。(岸本)

S6・S7は、いずれもサスカイト円礫を素材とした火打ち石である。素材となったサスカイト円礫は、淡路島内で採集されるものである。

S6は長さ5.6cm、幅3.3cm、厚さ2.2cmで、重さは45.3gである。

S7は長さ4.6cm、幅4.7cm、厚さ2.3cmで、重さは58.5gである。

S8は、サスカイトの原石(円礫)で、熱を受けて剝離した部分が認められる。長さ7.9cm、幅6.3cm、厚さ3.6cmで、重さは243.1gである。B区包含層の出土である。

S9は砂岩製のたたき石で、石器下端部のつぶれが著しい。長さ13.7cm、幅7.1cm、厚さ6.3cmで、重さは887.6gである。C区包含層から出土している。(山本)

4. 小結

外町遺跡の1,154m²の全面調査の結果、調査区中段のB区において据立柱建物跡を1棟検出した。建物は現在2間×2間の主屋に1間幅の庇が付くもの、あるいは、2間×3間で南側のみ3間になる建物跡と考えられる。さらに、その建物の北側には柱穴を伴う空間地があり、その場所には柱穴以外には土

第8節 外町遺跡

横・溝などは存在していない。空間地は東西を土壤と溝で区切られており、広さは東西約6.5m、南北は北側を水田のため削られているが、長さ約6m遺存している。その部分は柱穴しか遺存していないことから、別の建物が1棟建っていた可能性があるが、明確でなく、規模なども不明である。

また、掘立柱建物跡に近接する位置から、SK-1、2、14等の規模の大きな土壤や、SK-3等の規模の小さな土壤、また、溝等を検出している。特に、SK-14は柱穴を伴うことから、上屋があったものと考えるべきであろう。これらの土壤は、出土遺物や存在場所などから、掘立柱建物跡と同時期の存在と考えられ、その時期については、15世紀と考えられる。

なお、SK-1、3、14の埋土中に炭・焼土を伴っていることが注意される。このほか、A・C区の遺構面上から鉄滓が9点も出土している。また、SK-1から鉄錠の完形品が出土している。これらのことと組合して、遺跡の性格を考えると、小鍛冶を行っていた作業跡と考えることができるであろう。本遺跡から火打ち石が2点も出土していることや、付近に細川氏の館跡が存在していることは、この考えを裏付けているものと思われる。

外町遺跡は、15世紀にはこのような状況であるが、遺構ではそれ以前の、11~12世紀の遺構も検出している。A地区のSK-8のみであるが、その周囲には柱穴が若干数認められることから、建物跡が建っていた可能性がある。

外町遺跡は平安時代後期の11~12世紀に生活の痕跡が認められ、その後15世紀に至って、武器などを生産していた鍛冶関係の遺跡となっていたことが、今回の調査で判明した。
(岸本)

いのたに 第9節 井ノ谷遺跡

1. 位置と環境

井ノ谷遺跡は津名郡北淡町小田470、471に所在する。

淡路島北部の山間地に所在し、標高は144～146mと148mである。

淡路島西岸の北淡町富島から東岸の東浦町久留麻を結ぶ線のほぼ中央部であり、西岸から東岸を結ぶ県道の北側にあたる。

遺跡は、東に開いた小支谷に面した南斜面に存在し、遺跡の北側背後の丘陵は、北東方向にのびている。

現在、丘陵稜線は幅広く、やや平坦な形状であるが、遺跡はそこから約15m南に下った位置の、斜面鞍部に位置している。遺跡の南側の斜面はさらに傾斜がきつくなり、谷底まで20m近い高低差である。谷底には、東浦町浦に流れる浦川の支流が東流している。

本遺跡と同じ中世の遺跡は、周辺では、鳩ヶ巣遺跡（第67図2）、将監遺跡（4）があり、中世城館では小田館（5）、仁井館（6）がある。山を下った東浦町側では、原遺跡（9）、白山真上遺跡（11）が中世の集落跡や散布地である。また、奈良時代の百田遺跡（9）も存在している。

なお、本遺跡が位置する淡路北部山地は、弥生時代後期を中心とした遺跡が数多く存在することが知られている。第67図に示した遺跡のうち、北淡町域では舟木遺跡（1）をはじめ、尾花遺跡（3）、将監遺跡（4）、上ノ開地遺跡（7）、ソウ田遺跡（8）があり、東浦町域では原遺跡（9）、百川遺跡（10）、白山真上遺跡（11）、禿山遺跡（12）や禿山遺跡に東接して尾ヶ岡遺跡が存在している。

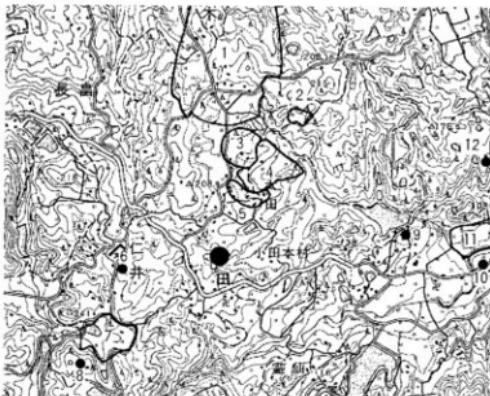
2. 調査の経過

井ノ谷遺跡の確認調査は、平成元年度に実施した。当時、本遺跡は北-17地点として調査を実施したが、全面調査の際に字名をとって、遺跡名を井ノ谷遺跡とした。

確認調査は坪を20箇所設定し、調査した結果、3ヶ所の坪で柱穴等の遺構を検出し、水田3筆にわたって中世の集落跡が広がっていると判断された。坪No.1、2を設定した水田2筆が全面調査のA地区にあたり、坪No.12の1筆がB地区にあたる。

確認調査の結果をうけて、本州四国連絡橋公團と協議を行った結果、全面調査を行うこととなり、調査は平成3年11月～12月にかけて実施した。調査面積はA・B地区合わせて607m²であった。

全面調査は、標高148.6mの水田1筆分をB地区とし、標高146.7mと145.2mの水田2筆部分をA地区と呼称し、B地区から掘削を開始した。掘削は表土をバックホーで掘削したあと、遺物包含層を人力で掘削し、遺構検出や遺構掘削も人力で行った。写真撮影は足場を立てるなどして適宜行ったが、調査



第67図 遺跡の位置 (1/25,000「仮屋」)



第68図 調査区の位置 (1/2,000)

区全体および周辺の地形を含めた全体の写真撮影については、ヘリコプターにより実施した。

3. 調査の成果

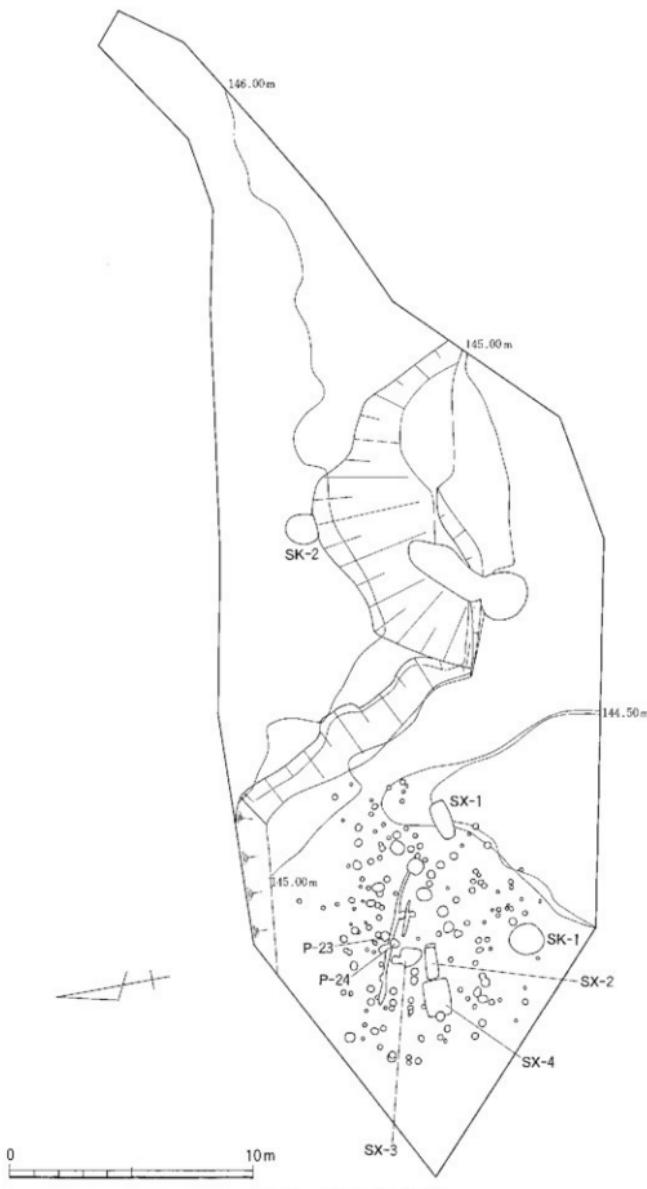
a. 遺構

調査区は水田2筆の部分と1筆の部分にわかれています。便宜上前者をA地区、後者をB地区と呼称します。A地区は水田2筆分であるが、ここでは棚田となっているため、掘削前の水田2筆の比高差は1.5mであった。

B地区は南方向に急傾斜する谷底地形部分であり、耕土・床土の下に灰褐色の粘質土が厚く堆積していました。この土層の中に若干の土器が含まれていました。地山は黄灰色の軟質岩盤で、この岩盤も斜面下方に向かって傾斜していたが、現況の傾斜ほどではない。遺構は調査区中央部分で幅約50cm、長さ約3mの浅い溝状遺構を1条検出したのみである。溝内から遺物は出土しなかった。

A地区は丘陵の張り出し部分で、上下2段に分かれます。上段では耕土・床土の下に灰褐色の盛土が存在していました。地山は黄灰色の軟質岩盤の部分と黄灰色の粘質土の部分がある。遺構は、確認調査の坪部分に柱穴・土壤・溝らしきものが存在したが、遺物は出土していない。他に灰褐色盛土上面で直径1m

第9節 井ノ谷遺跡



第69図 A地区溝構全体図

程度の円形の炉跡（SK-2）を検出した。

A地区の下段では、東部で円形と梢円形の土壙が接合したかたちの遺構を検出したが、性格は不明である。なお、周囲の包含層より平安時代末の須恵器が出土している。

下段西側では、黄灰色の軟質岩盤を堆山面として、多くの遺構が集中的に認められた。遺構には多数の柱穴と円形土壙（SK-1）、長方形の土壙（SX-1・2・4）のほか、溝状遺構、北東部に池状遺構が認められた。これら遺構群の上層には、遺物包含層である茶褐色の細～極細粒砂が堆積していた。

以下、遺構別に詳細を述べることとする。

柱穴集中部

約170個の柱穴が南北約9m、東西約12mの範囲で集中して存在していた部分である。

柱穴は直径10cm程度のものから、60cm程度のものまで大小様々である。深さも5cm程度から約60cmのものまであるが、大半は20～30cm程度のものであり、比較的しっかりしたものが多い。柱穴を大きさや深さで分類して埋立柱建物跡の復元を試みたのであるが、建物跡として組み合わせることはできなかつた。しかし、柱穴の分布状況を観察すると、北西～南東方向および北東～南西方向に並んでいる状況を看取することができ、細い溝もその方向とほぼ合ってくる。しかし、長方形土壙はその主軸を東西方向にとっており、建物推定方向とは違っている。但し、掘立柱建物跡の時期と土壙の時期が同一である確証がないため、時期が違っている可能性も考慮しなければならない。一方、視点を変えて柱穴集中部外側に近い柱穴の分布状況をみると、ほぼ東西・南北方向に合致した方向で並んでいる状況が窺える。特に西側と北側の列が存在するようであるが、この列についても南と東側に柱列が存在しないため、建物跡としての判断はできない状況である。

いくつかの柱穴から遺物が出土しているが、それらのうち石器2点と土器類3点が同化できた。P-6からは土師器皿片が、P-15からは青磁碗片が、P-23からは漬戸・美濃系皿片と火打ち石が、P-24からは火打ち石がそれぞれ出土している。その他の柱穴からも土器が出土しているが、細片であったり、同化できず、時期も不明なものである。同化した土器類については、時期のばらつきがないようであるが、包含層からは古い時期の遺物も出土しているため、遺物が出土していない柱穴が同時期であるとは断定できず、これら柱穴すべての時期が判明あるいは推定できるわけではない。

SK-1（第70図）

遺構集中部の南端部分で検出した平面円形の土壙である。上面の直径は1.3mと1.5mで、底では0.9～1mのは円形で、底は平坦である。深さは約50cmで、北側には浅い籠所があり、上面からの深さは約25cmである。断面は逆台形を示し、埋土の大半は黄灰色の極細粒砂で、軟弱であり、中・粗粒砂や地山ブロックを含んでいる。その下層には厚さ約5cmで黄褐色の極細粒砂があり、これも軟弱で中・粗粒砂を含んでいる。この土壙の性格については、平面円形で、底が平坦であること、一段深いところがあること、建物に近接して存在することから、漬戸とも考えられる。

SX-1（第71図）

遺構集中部東端で検出した、おおむね平面長方形を呈する土壙である。主軸は東西に近く、長方形の短辺中央が外側に張り出す形状で、底の形状も上面と同様である。長さ約1.8m、幅約65cmで、深さは約70cm遺存していた。底での長さは約1.5m幅約90cmで、底は平坦である。壁面は特に北側が垂直に近く、南側でも急傾斜である。

西側の底から約10cm上で、漆器碗が1点出土した。漆器は木質部分が腐朽して、内外面の漆皮膜を残

すのみとなっていた。掘削中、途中まで氣づかず、ほぼ半分が失われてしまった。また、薄い漆皮膜しか残っていないかったため、出土状態の写真が最も良好なものとなっている。内面は赤色を呈し、外面は黒色である。

この土壙の性格については、後述する SX-2・4 同様、土壙墓と思われる。調査中から推定しており、木棺墓の可能性も考えて断面および平面を精査したのであるが、木棺の痕跡は認められなかった。

なお、漆器椀のほかに土師器甕が 1 点出土した。

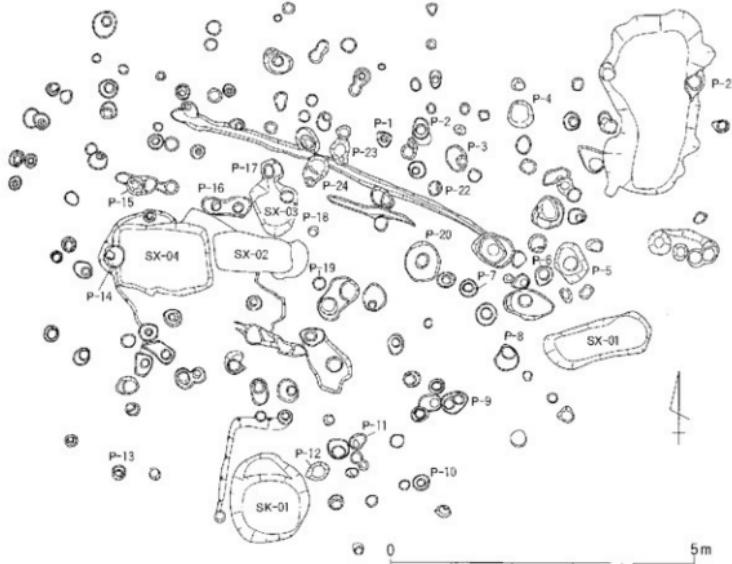
SX-2 (第71図)

造構集中部の中央西寄りで検出した平面長方形の土壙である。確認調査時に検出されていたものである。主軸は先述の SX-1 よりも東西方向に近く、西側が幅広く、東側が狭くなっている。壁面は直立もしくはオーバーハング気味で、底は平坦である。長さは 1.35m、西側の幅は 65cm、東側は 45cm で、その差は 20cm ある。底での幅もほぼ同じであるが、長さは 1.4m である。深さは約 30cm 達成していた。

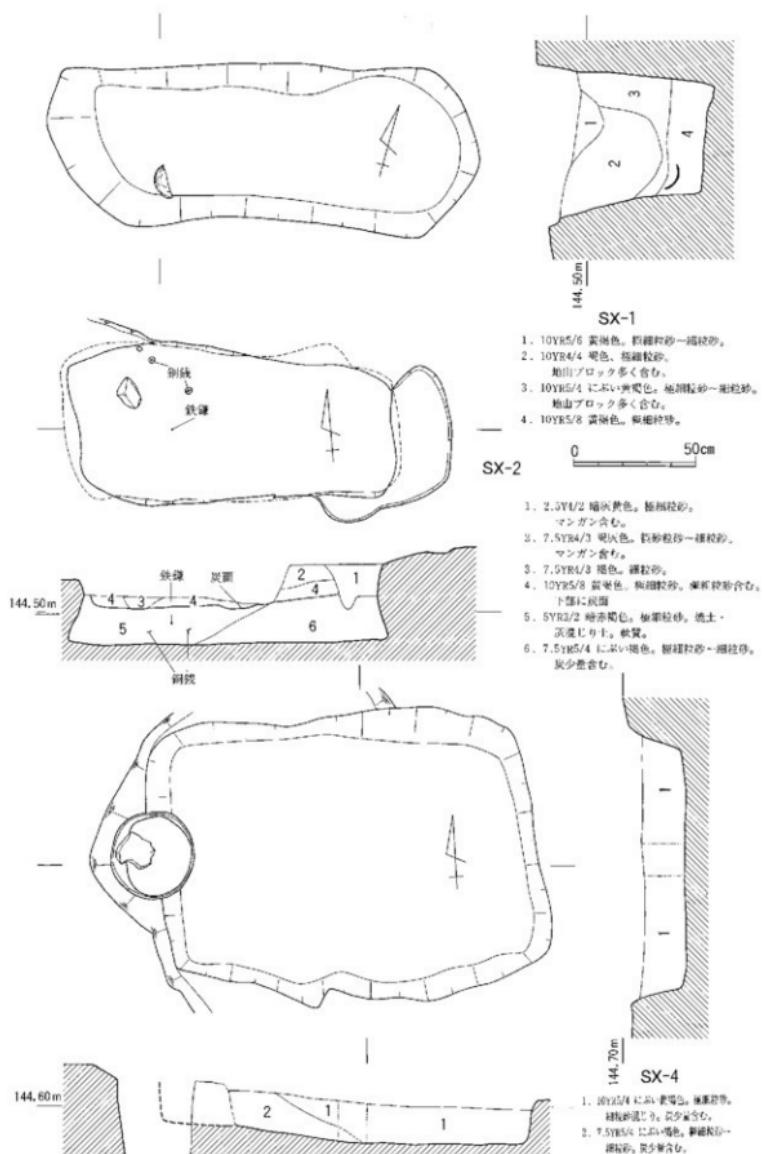
遺物は、西部中央の底から約 9cm 上で鉄鎌が 1 点出土し、北西部の底から約 6~7cm 上で古錢が 2 点出土した。なお、西部で亜角環が 1 点、土壙底から 2cm 上で出土している。

埋土は、下半部が暗赤褐色の板細粒砂とにびい褐色の糊細粒砂～細粒砂で、前者には焼土・灰が混じっており、後者には炭が少量含まれていた。焼土・灰が混じっていた。この両者の層の上面は平坦で、上端には炭の面が認められた。この面は、土廣検出面から約 12cm 下がった位置である。

この土壙の性格についても、木棺墓の可能性を考えて精査したが、木棺の痕跡は認められなかった。したがって、遺物等より、土壙墓と考えられる。



第70図 造構集中部



第71図 SX-1・2・4

S X - 3 (第70図)

S X - 2 の北側で検出した不定形の土壙である。南北方向の長軸は約90cm、東西の短軸は約80cmである。深さは約30cm、底は平坦で、断面形は台形に近い。埋土はにぶい褐色の極細粒砂～細粒砂で、炭を少量含んでいた。遺物は出土していない。

調査当时、これも墓の可能性を考えていたが、他の土壙墓に比べて不定形であること、肩の傾斜が緩やかなことなどから、墓とは別の性格としておきたい。

S X - 4 (第71図)

S X - 2 の西側に接するようにして検出した長方形の土壙で、これも、確認調査時に検出されていたものである。主軸方向は S X - 2 と同じであるが、短辺が幅広い形状である。西辺には柱穴があり、土層関係では、柱穴の方が新しい。土壙壁面は直立に近いが、S X - 1・2 に比べると、緩やかである。

長さ約1.6m、幅約1.2mで、深さは約20cm遺存していた。平面形状は平行四辺形にやや近い。底面は平坦であるが、西側がやや高くなっている、東端との比高差は約7cmである。底面での長さ、幅はそれぞれ1.4m、1mである。内部から遺物は出土しなかった。

埋土は2層あり、にぶい黄褐色の極細粒砂とにぶい褐色の極細粒砂～細粒砂で、どちらにも炭を少量含んでいた。

この土壙についても、S X - 1 や 2 と同一方向で、形状がほぼ同じであること、近接して営まれていることから、墓と思われるが、他と同様に、木棺の痕跡は認められなかったため、土壙墓という性格を与えておきたい。

池状遺構 (第70図)

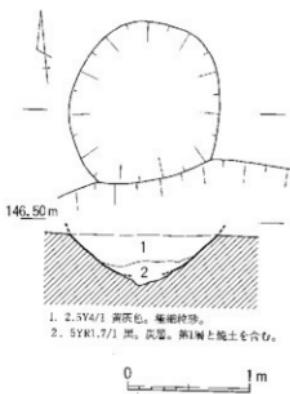
遺構集中部の北東隅部分で検出した長方形に近い平面形の土壙状遺構である。上端のラインは細かい起伏が多く、直線的でない。長軸方向はほぼ南北にとり、長さは2.9m、幅は1.7m程度である。深さは最大で20cm程度である。底はほぼ平坦であるが、南に向かって傾斜しており、北端との差は13cmである。遺構検出面でも、上面は北側が南側に比べて26cm高くなっている。底面は南北約2.6m、東西は90cm～1.2mの長さで、壁面の傾斜は緩やかである。

埋土は底付近に暗褐色の細粒砂が堆積しており、その上に褐色、オリーブ褐色、黄褐色の極細粒砂～細粒砂が堆積しており、黄褐色土層が最も厚い。西部では土壙肩付近に黄灰色のシルト質極細粒砂が堆積しており、水が滞留した痕跡が認められた。埋土中には10～20cm程度の角礫が多数存在していた。土器などの遺物は出土しなかった。

この土壙については、規模が大きいことと不整形であること、壁面の傾斜が緩いことおよび埋土中に礫を多く含むことから、墓とは考えにくい。一方、埋土に水が滞留した痕跡が認められたことと埋土中に礫を多く含むことにより、この遺構を池状遺構と推定しておきたい。

S K - 2 (第72図)

A 地区上段中央部で検出した円形の炉跡である。直径1.2mで、深さは40cmであった。ただし、上端は削平を受けている。



第72図 SK-2

播鉢状を呈し、壁面は非常に良く焼けており、赤化あるいは灰化色化していた。土壌底付近は壁面が剥がれていた。内部下半には黒色の炭層が堆積しており、暗赤褐色の焼上とが壁の崩れたものを含んでいた。上半には黄灰色の繊維粒砂が堆積しており、これは、耕土と床土が混じった土である。

炉跡は検出面が灰褐色の盛土上面であり、その上の上層は耕土・床土であること、炉跡埋土の上半は耕土と床土が混じた土であったことから、近世以降の所産と思われるが、時期を示す遺物が全く出土していないことにより、時期の限定はできない。また、何のための炉であるのかも不明である。

b. 遺物

A・B両地区を合わせた遺物は量的には少ないものであり、大半はA地区下段遺構集中部で出土したものである。したがって、図化できた遺物量も少ない。

A地区下段遺構集中部の遺物は包含層および遺構から出土したものである。遺構では柱穴から土師器のはか陶磁器・石器が認められた。陶磁器には吉備や瀬戸・美濃系の陶器がある。また、石器はサヌカイト製で、火打ち石と考えられる。土壌墓からは漆器碗や土師器甕・古鏡・鐵鎌等が出土した。

以下、出土遺物について述べることとする。

S X - 1 出土遺物は第124の土師器片である。口縁部はヨコナデ調整で、体部内面は板ナデのようである。体部外側には指頭圧痕が目立つ。胎土には石英・長石などのほか、金賞母・赤色粒も含んでいる。褐灰色(10YR 4/1.5/1)を呈する。口径は23.9cmで、時期は不明である。

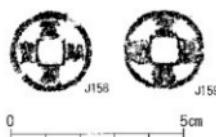
S X - 2 出土遺物は第73・74図に示した。古鏡は2点出土したが、いずれも腐食が激しく、銘名が判読できない。ただし、J158は上の文字が「元」のようであり、左端は「寶」と思われるため、元符通寶の可能性が高い。J159は直径2.5cm、J158は直径2.4cmである。

墓に入れられていたことから、六道鏡と考えられる。

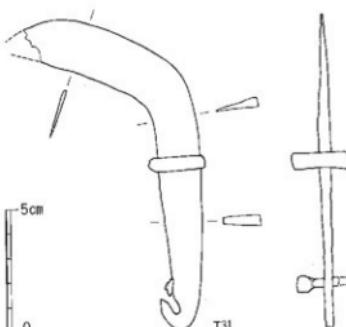
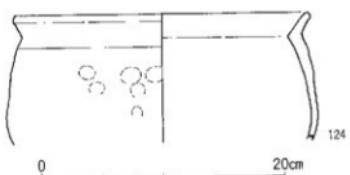
鉄鎌(T31)は刃の部分は直線的である。先端を欠損する以外は完形品である。先端付近の厚みは薄く、約1.5mmで、湾曲する部分では背の厚みは4mmである。

口金はやや歪んでいるが、外径約2.4cm、内径は約1.8cmになる。高さは6mmである。

目釘が通る部分は折り曲げてフック状に加工している。目釘も遺存しており、7mm×2mmの偏平なもので、頭部も含めた現存長は1.7cmである。



第73図 S X - 2 出土古鏡



第74図 S X - 2 出土遺物

近世に近いものとも思われるが、詳細に時期を決めるることはできない。

柱穴から出土した土器類は第75図125~127に示した。

125はP-6出土のもので、土器師の皿である。口径は10.4cmで、底部は欠損する。器表が磨滅しているため、調整は不明であるが、灰白色(10YR 8/1)を呈する。

126はP-15出土の青磁碗の口縁部片で、細かい紋様を描いている。内面にも紋様を描いており、全面に施釉し、灰オリーブ色(7.5Y 5/2)を呈する。口径は4.7cmである。15世紀後半~16世紀の年代が与えられるものである。

127は瀬戸・美濃系の皿の破片で、P-23から出土したものである。同じ柱穴からはS10の火打ち石も出土している。皿は全面に灰オリーブ色(7.5Y 6/2)の釉を施したもので、口径10.3cm、器高2.2cmで、高台径は6cmである。やや深いタイプで、16世紀代に編年されるものである。

次に包含層から出土した土器類について述べる。

128はA地区下段の包含層から出土した、束縛系須恵器こね鉢の破片である。口径は25.2cmで、口縁端部を肥厚させ、端面は垂直に近い。内面の口縁部と体部の境は窪ませている。胎土には石英などのほか、黒色粒も多く含んでいる。焼成は良好で、青灰色に近い灰白色(N7/8)を呈する。口縁部端面のみ暗い灰白色(7.5Y 7/1)を呈し、重ね焼きの痕跡であろう。

129もA地区からの出土であるが、両端の包含層から出土したものである。瓦器端であるが、須恵器に近い感じがするものである。灰色に近い灰白色(7.5Y 8/1)を呈し、外面上半部のみ灰色(N6/)を呈する。口縁部はヨコナデ調整、体部外面には指彫压痕が目立ち、内面には暗文を施しているようであるが、器表が磨滅している部分が多く、固化できない。外面には暗文は認められない。口径は14.7cmを測る。和泉型瓦器端の範疇に含まれ、13世紀後半以降のもので、14世紀代に下る可能性もある。

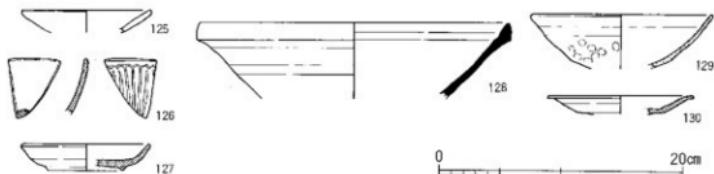
130はA地区の機械掘削時に出土した片津の皿である。輪高台が付くものと思われる。全体にシャープな作りであるが、小片である。したがって、円の傾きがやや不正確なものとなっている。全体に薄く釉薬が施されており、緑がかかった灰白色(5Y 7/1)を呈する。口径は11.7cmである。18世紀前半に編年されるものであろう。

石器は第76図に2点図示した。いずれも火打ち石で、A地区下段の遺構集中部分の柱穴から出土したものである。
(岸本)

S10はサヌカイト製(軍角砾)の火打ち石で、長さ5.6cm、幅3.8cm、厚さ2.3cm、重さ41.4gである。A地区的P-23から出土したものである。

S11はサヌカイト製(軍角砾)の石核で、火打ち石として遺跡内にもたらされた可能性が高い。長さ7.0cm、幅5.6cm、厚さ2.2cm、重さ90.3gである。A地区的P-24から出土したものである。

(山本)



第75図 出土土器

4. 小結

今回の井ノ谷遺跡の全面調査の結果、東側の調査区であるB地区では遺構は希薄で、溝が1条検出されたのみであった。

しかし、A地区の最も西端部分の南北9m、東西12mの範囲に柱穴・土壙・溝などの遺構群が集中して存在していた。これらの遺構群は、調査区端に近い部分ではその分布が希薄になるため、今回調査した範囲から外へは広がらないようである。

遺構群が存在する場所は軟質の岩盤を削平し、ほぼ水平な面を作りだしていた。この部分は南向きの斜面にあたり、急傾斜の場所であることを除けば、立地条件のよいところである。また、丘陵稜線から下がった位置であること、北風が当たらないということになり、条件が良い。

ここには非常に多くの柱穴が存在していたことから、掘立柱建物は数回にわたって建て替えられたと考えられる。その時期については、出土遺物から、15世紀から16世紀と考えられる。また、柱穴とともに長方形の土壙も検出した。土壙は3基検出したが、いずれも主軸方向を東西方向にとり、形態・規模・出土遺物から、上塙墓と考えられる。東端に存在するSX-1内の西部では漆器碗が出土し、また、中央に存在するSX-2内の西部からは古銭・鉄鎌が出土した。いずれも遺物が西側で出土していることから、頭位は西枕であったと推定される。出土した鉄鎌が近世に近いものであると推定され、また、柱穴に切られた土壙墓も存在することから、掘立柱建物と同時期、および、一部は掘立柱建物直前と考えられ、中世の屋敷墓ということになる。墓は3基もあり、しかも2基がほぼ確実に屋敷の床下に存在することになる。

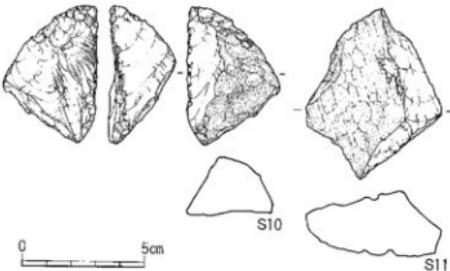
掘立柱建物跡についてはその規模を復元できなかったが、柱穴集中部の柱穴の分布状況をみると、特に南北6m程度、東西9m程度に集中していることから、南北3間、東西5間程度の建物であった可能性がある。また、東北側に池があり、池の主軸方向が南北であること、南側に溜井戸があることからも、方位には主軸を合わせた建物を推定するのが妥当と考えられる。

一方、出土遺物には、土師器、輸入陶器、瀬戸・美濃系陶器、火打ち石などがあり、出土遺物からは、特に工房などといった建物の性格は窺えず、むしろ鉄鎌がしめすような、農耕民としての性格が勞働とされるのである。

本遺跡は、山間地の丘陵斜面に営まれた小規模な遺跡で、集落というよりも1軒の屋敷を考えるほうが妥当であろう。また、その性格は、農業を営む家と推定され、15世紀頃にその居住が開始されたものと思われる。ただし、遺物では13~14世紀代の土器も出土していることから、その時期にも遺跡が存在していた可能性がある。

小規模にまとまった遺跡。遺構が平面的にはそれ以上広がらないと考えられる小規模な遺跡が、15世紀に北淡路の山間部に存在していたことが判明した。このような例は、中世の集落のあり方を考える上で、重要な示唆を含むものと考えられるのである。

(岸本)



第76図 出土石器

すげまつばら 第10節 管松原遺跡

1. 位置と環境

管松原遺跡は、津名郡東浦町白山字管松原256ほかに所在し、北淡路山地最高部から東に少し下った丘陵尾根上に位置する。

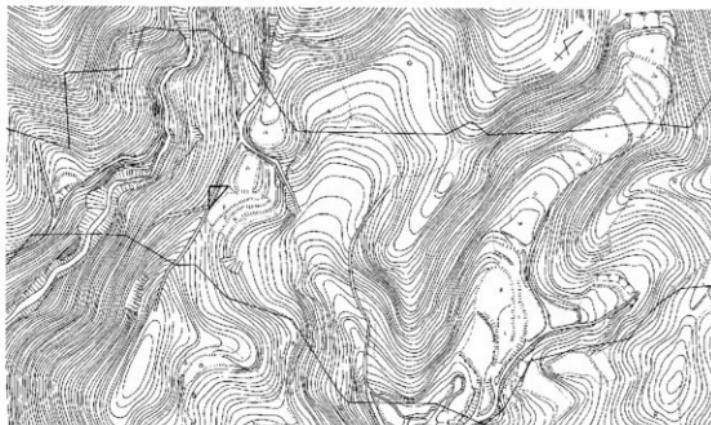
遺跡は淡路山地から派生して南東方向にのびた支尾根の鞍部にあたり、詳細には、西南西に少し下った西側斜面にあたり。支尾根鞍部の標高は90m前後で遺跡調査地区は87~84mにわたっている。

周辺の遺跡では、本遺跡のようない山地尾根上の遺跡は、本遺

跡以外では現在のところ未発見である。山地寄りの台地上の遺跡としては、後述する藤ノ木遺跡（第77図1）があり、中世の遺跡である。また、本遺跡から南西方向にある谷の中には、弥生時代後期と中世の集落跡である、白山真土遺跡37が所在する。一方、東に下った扇状地上に所在する、縄文時代~中世の集落跡である佃遺跡も本遺跡同様、本州四国連絡道路に伴う発掘調査がなされた。弥生時代の遺跡では、前述の白山真土遺跡、佃遺跡のほか、白岡遺跡38や岸田遺跡39があり、標高10m以上で、丘陵に寄ったやや高い位置に所在している。古墳時代の製塩関係の遺跡は低地に所在し、井上遺跡(2)、平松遺跡(3)、菅野遺跡(6)があり、散布地であるが、古茂尻遺跡(7)も古墳時代である。中世城館は低丘陵上に位置し、



第77図 遺跡の位置 (1/25,000「仮屋」)



第78図 調査区の位置 (1/2,000)

正井館跡や向巣館跡が存在する。中世の遺跡は、丘陵上や丘陵に近い台地上のほか、低地にも所在する。丘陵上や丘陵に近い台地上の遺跡としては、本遺跡および先述の藤ノ木遺跡や白山真土遺跡をはじめ、小田遺跡がある。低地の遺跡では、先述の井上遺跡、古茂尻遺跡をはじめ、平松西遺跡(5)、塙浜遺跡(6)、官ノ木遺跡(6)がある。一方、奈良時代の遺跡は仙遺跡のほか、小浦遺跡(8)、奥遺跡(4)があり、平安時代の遺跡では、猪ノ尻遺跡(4)がある。

2. 調査の経過

本州四国連絡道路の分布調査・確認調査については平成2年度までに実施・終了していたが、本遺跡については、そのいずれにおいても発見されていなかった。

しかし、平成3年9月9日、当地点においてパイロット道路の切り通し部分に土壌状の落ち込みの断面が不時発見された。そこで、本州四国連絡橋公団と協議の結果、確認調査を実施することとなった。

確認調査は、遺構が発見された尾根上および斜面についてトレーニングを設定し、バックホーを使って掘削し、人力によりトレーニング底の精査や土層断面清掃を行った。トレーニングは基本的に5本設定し、調査面積は172m²であった。調査の結果、トレーニング内では遺構・遺物とともに検出できなかつたが、当初土壌が発見された箇所が緩傾斜となっているため、その部分に遺跡が広がっていると判断された。

その結果を受けて、平成3年10月に全面調査を行った。調査面積は40m²であった。表土の掘削はバックホーで行い、遺物包含層らしきものや遺構精査、遺構掘削・土層断面清掃については人力で行った。また、大きな根株についても遺構の破損を防ぐため、人力で除去した。

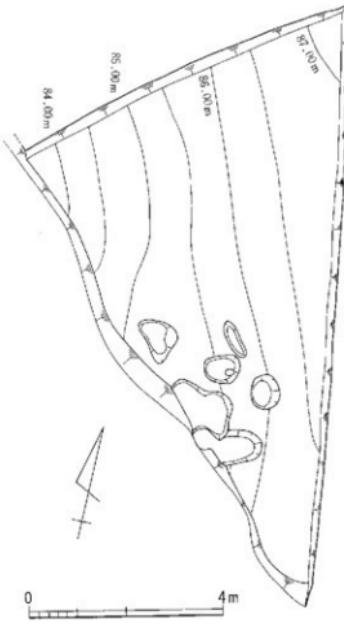
3. 調査の成果

調査を実施したのは、ほぼ南に向かってのびる尾根の、稜線上半坦面の西端から西側斜面にかけての部分で、調査区は平面三角形を呈する。調査区東側の辺はほぼ南北方向で、尾根稜線の方向とほぼ一致している。調査区西側の辺は、工事用道路の法面肩上のラインで、ほぼ北西—南東方向である。

調査箇所は西側斜面であったが、調査中、はるか南東海上を航行する船がよく見え、一部樹木が違っていたが、南東方向の眺望は良好であった。

調査の結果、表土の下には褐色の粗粒砂が約10cmの厚さで全面に堆積しており、斜面下方では、黄褐色の細粒砂がその上に堆積していた。厚さは10~20cmであった。地山は明黄褐色の細粒砂~細砂で、小礫を含み、一部は岩盤が崩れたような土であった。

遺構は、調査区の南寄りの部分で検出した(第



第79図 遺構全体図

79図)。それらは楕円形の土壙 6 基で、長径約70~150cm、深さ約20~30cmであった。遺構が集中している部分は、他の部分に較べてやや凹地になっており、黒っぽい土が全体に堆積していた。

土壙の中には、底が焼けて赤黒くなっているものや、炭を多量に含んだ土壙も各 1 基存在した。全体的に土壙集中部分の遺物包含層中では炭片が認められた。

土器は遺構集中部分の斜面上側すぐで、土器部の壘の小片が出土したのみである。

以下、土壙を個別に述べる。

SK-1 (第80図)

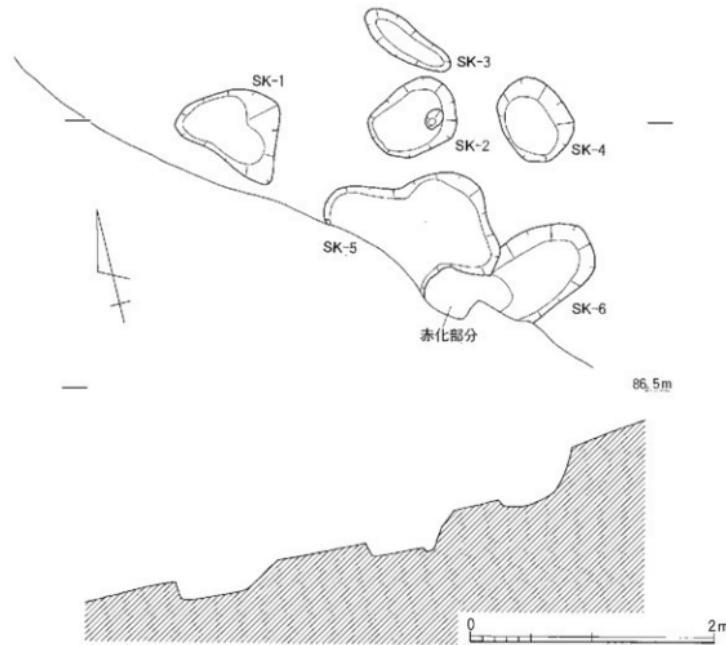
土壙群の西端で検出した、平面三角形に近い形の土壙である。北西→南東方向の長辺は94cm、短辺は76cmである。深さは斜面上側で約30cm、斜面下側で約20cmである。

SK-2 (第80図)

土壙群のほぼ中央部で検出した、平面楕円形に近い形の土壙である。ほぼ東西方向が長く、約75cm、短径は約60cmである。深さは斜面上側で約30cm、斜面下側で約13cmである。土壙内東寄りにピット状の穴が 1 個所存在したが、径約10cmで先細りになっていたため、木の根の痕跡と思われる。

SK-3 (第80図)

SK-2 の北側に存在する細長い溝状の土壙である。長さ約80cm、幅約30cmで、深さは約20cmである。土壙とするには躊躇したが、他に適当な呼称がないため、土壙とした。しかし、他の土壙とは形状がか



第80図 土壙群

なり違っているため、模倣的にも別の性格を考えるほうがよいと思われる。

S K - 4 (第80図)

土壙群の最も北東で検出した、楕円形に近い平面形をもつ土壙である。ほぼ南北方向に長く、長径は70cm、短径は約55cmである。斜面上部での深さは約40cm、斜面下部では約5cmであった。底の断面形はやや丸くなっている。埋土には炭の小片を多量に含んでいた。

S K - 5 (第80図)

土壙群の中央南部で検出した最も大きな土壙であるが、その平面形からは、東西に並ぶ2つの土壙が連接したようにも看取できる。土壙の南側は工事用道路の法面で削られている。北西-南東方向の長さは、約1.5m、北東側の南北方向の長さは約95cm、南西側の南北方向の長さは約1.1mである。深さは、東端で約20cm、西端では約10cmである。南部では約5cmで、底は東半分はほぼ水平、平坦であるが、西半分は西側および南側に少し傾斜している。この土壙が遺跡発見の端緒となつた構造にあたると思われる。

S K - 6 (第80図)

土壙群の西南部で検出した、楕円形に近い形の土壙である。北東-南西方向に長いが、南西部はS K - 5同様、T工事用道路で削られていた。現況での長さは1.45m、幅65cmで、S K - 5により北側の一部が削られたようになっている。土壙の深さは東端で約25cm、南端では約10cmである。上端の底は東部が最も深い。

土壙の底部の西部は、赤化している部分があり、火熱を受けたものと考えられる。その範囲は、現況では東西約70cm、南北約40cmで、南西側は工事用道路法面となり、切斷されている。赤化面は西側に傾斜しており、東端との差は約20cmである。土器などの遺物は出土しなかった。

4. 小結

今回全面調査を行った範囲内では、土壙を6基検出することができた。

時期については、出土遺物が少ないため、断定はできないが、中世の土師器が数点出土しており、本遺構もその時期の所産と思われる。

遺構の性格としては、骨等は全く遺存していなかったが、谷底との比高差約60mの丘陵上に存在していること、土壙の形状・規模、斜面に立地していることや、土壙がそれ各自適な間隔をおいて存在しており、特に、S K - 1・2・4が一直線に並んでいること、炭を伴う点、火熱を受けているものが存在する点からも中世墓の可能性が高いと思われる。なお、本遺跡が西側斜面に存在していることや、南東方向の眺望が良好であること、本遺跡の性格を裏とすることの傍証となるであろう。

また、本例のような小規模の遺跡は周辺に他にも存在する可能性が考えられるが、密集して存在するのではなく、小規模なものが散在するような状況であると思われる。

(岸木)

第11節 ふじのき 藤ノ木遺跡

1. 位置と環境

藤ノ木遺跡は、津名郡東浦町山田原字藤ノ木1974年に所在する。

淡路島北部に見られる津名山地は、北淡町の仁井付近で鞍部となって、西浦・東浦へと向かって延びる。この津名山地の中にあって、東浦の浦川上流域は山地と山地に挟まれた、丘陵状の平坦面となっており、下流に向かって海岸平野を形成していく。遺跡はこの山地裾部から、丘陵に移行する辺りに立地して

おり、背後の山からの上石流の堆積物によって形成された、緩斜面に位置している。

現在の地目は棚状の水田となっており、遺跡の前方は大きく開け、大阪湾から友ヶ島まで望むことができる。遺跡の標高は96~100mを測る。

(吉田)

周辺の遺跡では、前述の菅原遺跡の節で述べているので、ここでは、さらに北側のいくつかの遺跡について述べることとする。弥生時代の遺跡では、岩口遺跡(第81図1)、飛谷遺跡(3)、平林遺跡(4)があり、丘陵からは少し下った位置に存在しているが、標高は10m以上であり、先述の丘陵に寄った高い位置に所在する遺跡とは、最低位で同じ標高になる。古墳時代の製塙関係の遺跡では、楠本塩入遺跡(2)が低地に所在する。中世の遺跡では、山川遺跡(5)が丘陵斜面中腹に所在し、林ノ下遺跡(6)が低地に存在している。なお、平林遺跡では奈良時代の遺物も採集されている。

(岸本)

2. 調査の経過

本州四国連絡道路の東浦町域の分布調査は、昭和62年度に実施され、当遺跡もその時点で発見されたもので、当初東-11地点と呼称された。

分布調査の結果、平成元年度に確認調査を実施し、中世~近世の遺物包含層、同時代の上層等の遺構が確認された。確認調査の結果、遺跡の存在が明らかとなり、同地点は新たに、字名をとって藤ノ木遺跡と呼称された。

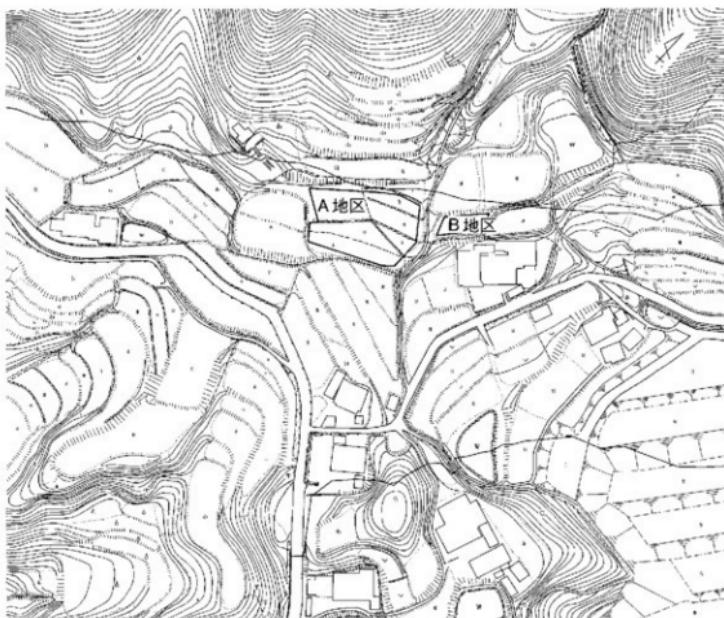
しかしながら、遺跡の範囲を設定するに当たり、範囲が不確定であったため、遺跡の範囲を確定することを目的として、引き続き平成3・4年度に再度確認調査を実施した。

数次に渡る確認調査の結果を踏まえて、兵庫県教育委員会と本州四国連絡橋公団は協議を重ね、平成4年度に全面調査を実施した。

調査にあたっては、現在の水田畠畔・里道に従って、便宜的にA・Bの2区に分けて調査を実施した。各地区ともに耕土以下遺物包含層まで、バックホウによる機械掘削を行った。残る遺物包含層を人手に



第81図 遺跡の位置 (1/25,000「仮屋」)



第82図 調査区の位置 (1/2,000)

よって掘削し、遺構検出作業を行った。この段階で、A地区の遺構が調査範囲外に延びる事が明らかとなり、一部調査範囲を拡張し調査を続行した。

その後必要に応じて、遺構検出状況写真を撮影し、遺構掘削を開始した。遺構掘削終了後、調査範囲全体を写真・図面に記録した。

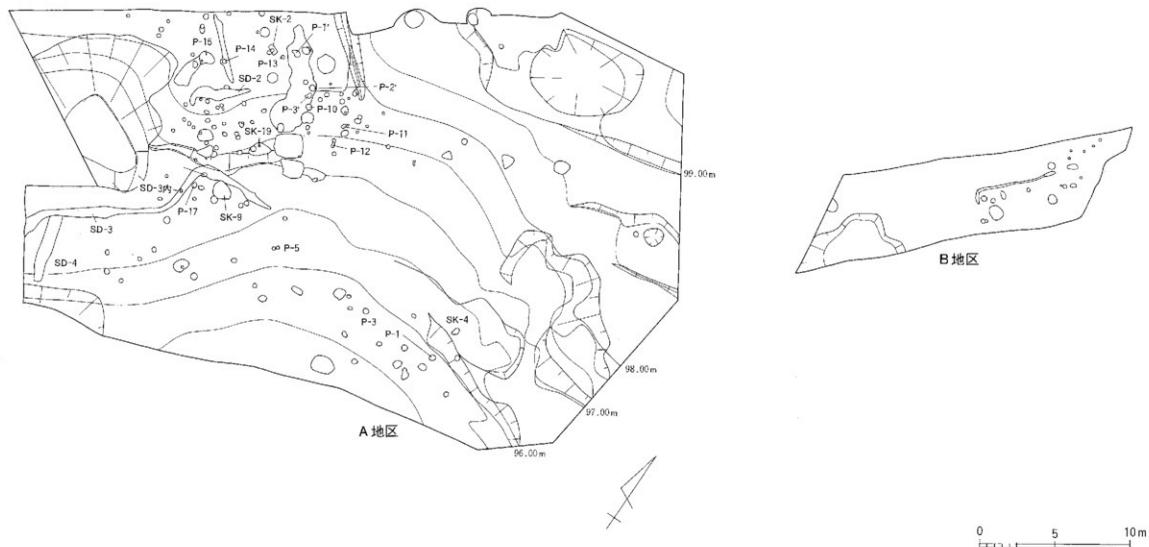
また、各遺構の配置をより良く把握するため、ヘリコプターによる空中写真を撮影した。（吉田）

3. 調査の結果

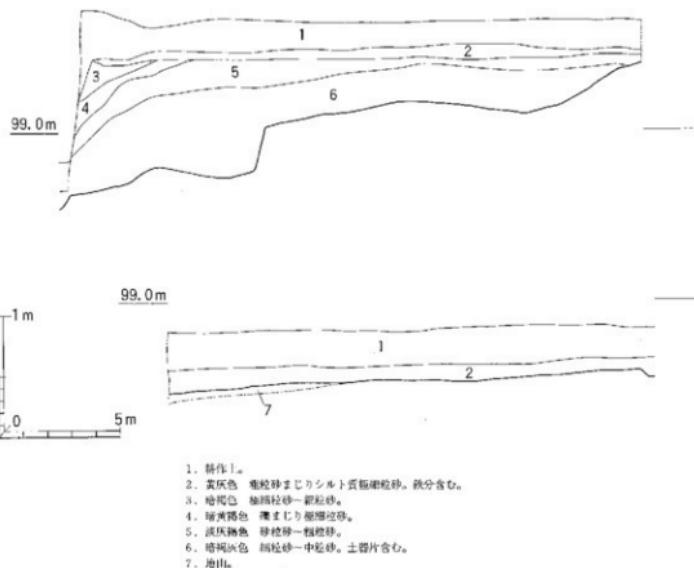
a. 遺構

各調査区の土層については、第84・85図に示した。A地区では、北壁の土層断面図をみると、耕土およびその下の底土と思われる黄灰色のシルト質極細粒砂の下層は、最も高い北西部では地山となっている。しかし、中央部から東部にかけては主として淡灰褐色の細粒砂～粗粒砂と暗褐灰色の細粒砂～中粒砂が堆積している。暗灰褐色の土層には土器片を含んでおり、遺物包含層となっている。その下層は地山である。なお、調査区南部から南東部にかけての箇所では、包含層である黒褐色シルトまじり中・細粒砂が堆積しており、その土層中には土器片が数多く含まれていた。

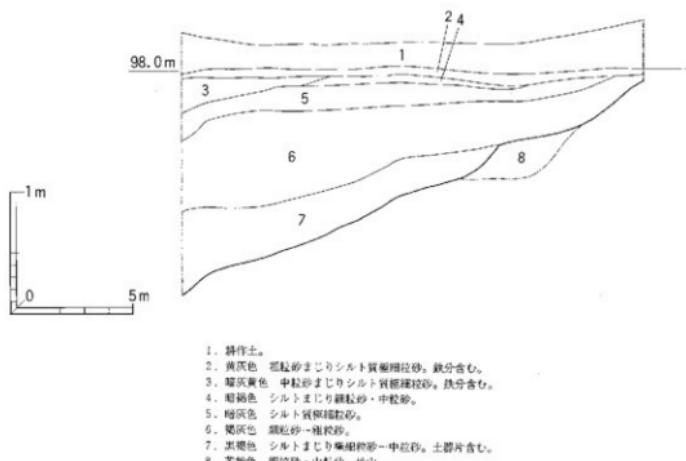
B地区的遺構面では西側が高く東側が低い傾斜面となっており、耕土・底土の下の主要土層としては、上から暗灰褐色のシルト質極細粒砂（第5層）、褐灰色細粒砂～粗粒砂（第6層）、黒褐色のシルトまじり極細粒砂～中粒砂（第7層）で、その下は黄褐色の細粒砂～中粒砂で、地山である。



第83図 通構全体図



第84図 A地区北側壁土層断面図



第85図 B地区南側壁土層断面図

(岸本)

第7層には土器片を含んでおり、遺物包含層となっている。

遺構は、A地区・B地区両方から検出している。検出した遺構は、溝・土壙・柱穴等である。

A地区は緩やかな谷地形を呈しており、東西両端部に、地滑り等の自然災害の痕跡が見られ、遺構面の混乱した状況が伺える。

A地区で主に遺構の集中しているのは、谷地形の中央部下方と、やや平坦な地形を持つ上方部西寄りの部分である(第83・86図)。溝はA地区で4本検出されている。

SD-1は、調査区の北西部にあり、4.5mの長さである。ほぼ直線的で、断面はU字形を呈する。

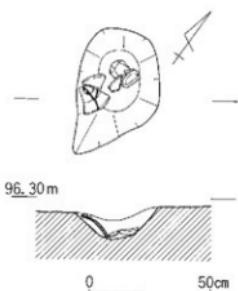
SD-2は、溝-1と近接し、直交する位置関係にある。長さは4mで、小さくL字状に屈曲する。断面は凹状を呈する。

SD-3は、調査区の西側中央付近にある。全長19m程の長さで、西から東に向かって鉤状に屈曲する。断面はU字形を呈する。埋土中から土師器小皿が1点出土している。

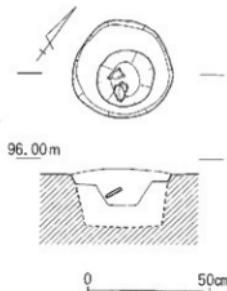
SD-4は、調査区の西側に位置し、溝-3によって切られている。長さは4.5m、幅0.7mで直線的に延びる。断面形は凹状を呈する。



第86図 遺構集中部



第87図 SK-4 遺物出土状況



第88図 P-1 遺物出土状況

土壙は合計で23検出している。平面形は梢円形を呈するものが多く、他に方形、不整形のものがある。断面形はすり鉢状のものが圧倒的に多く見られる。規模としては、大きいもので長辺2m×短辺1.5mを測る。中でも注目されるものとして、板状の花崗岩を、側面に貼り付けた土壙も見られる。(吉田)

土壙-4(SK-4・第87図)は、柱穴状の小さい土壙であり、A地区南東部の黒褐色シルトの下層で検出した。平面は梢円に近い形をしているが、1ヵ所外方に張り出した形となっている。長径は約45cm、短径は約35cmで、張り出し先端までの長さは55cmである。断面は擂鉢状で、深さは14cm程度である。土壙内部から黒色土器壷、瓦器壷、土器皿が出土した。また、後述の、土器壷や鉢形を出土したP-1が近接して存在し、SK-4、P-1周辺からは多くの土器が出土した。それらは主として黒褐色シルト中に含まれ、これら周辺の外側でも、黒褐色シルト中から数点の土器が出土している。(岸本)

柱穴は調査区のほぼ全域で検出されているが、特に集中するのは、調査区北西部の平坦地である。柱穴の並びからすると、2~3個で直線的に並ぶものが、東西・南北列で幾つか考えられ、遺物跡が存在した可能性は指摘できるが、明確に断定は出来ない。(吉田)

柱穴-1(P-1・第88図)はSK-4の南側で検出した柱穴である。掘り方の直径は40cm、柱底の直径は約15cmである。柱底内より土器皿と軽石が出土している。(岸本)

前述した如く、自然災害的な要因によって、遺構が消滅している部分もあり、確實にこの地に集落が存在していたものと考えられ、柱穴内から土器壷、須恵器、瓦器が多く出土している。(吉田)

土器が出土した柱穴は、前述のP-1のほかに、調査区南部のP-3、中央部のP-5、北西部のP-3'、P-17である。P-17では土器壷、その他の柱穴では土器皿が出土している。(岸本)

B地区は南側が大きな崖となって民家へと続いている。遺構面も地形に合わせて傾斜している。

B地区の遺構も、溝・土壙・柱穴であり、全長11mの「ヘ」の字状の溝と、それを取り巻く土壙・柱穴を中心に存在する。また、西端の大きな落ち込みは、自然災害に伴うものと考えられる。

調査区の東側は、大きな谷となっており、遺構の拡がりは認められなかった。(吉田)

b. 遺物

遺構から出土した土器については第89図に、鐵器は第90図に示し、包含層出土土器は第91図に、包含層出土石器は第92図に示した。他にも土器類は多く出土したが、実測できたものはすべて図に示した。

遺構出土土器のうち、131~13の黒色土器・瓦器壷と134の土器壷はSK-4から出土したものである。他の土器壷は柱穴出土のもので、141のみ溝3から出土している。柱穴出土土器のうち、135は

P-1, 136はP-3, 137はP-3', 138・139はP-5, 140はP-17出土のものである。

131は黒色土器塊で、内面のみ黒色のものである。口縁部はヨコナデを行っており、特に外面は強いヨコナデにより器壁の厚みを減じ、若干外反させている。体部から底部へは湾曲ぎみで、底部もやや丸い。貼り付け高台は、断面台形のものが押しつぶされ、錐鉢状になっている。体部外面には指頭圧痕が残されている。器表がかなり荒れているため、ヘラミガキ・暗文等は観察できない。口径は14.4cm、器高4.4cm、高台径は4.2cmであり、内面は暗灰色(N3/7)、外面は灰白色(2.5Y8/1, 10YR8/2)である。

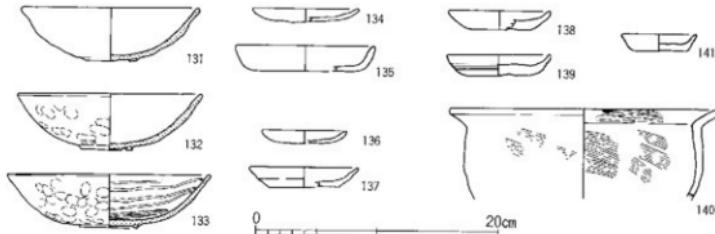
黒色土器であるという点以外は和泉型瓦器塊の特徴を示しており、この形態の黒色土器の編年が確立されていない段階では、時期を決定する根拠はないが、瓦器塊として考えれば13世紀前半頃の年代が与えられるものと思われる。

132は瓦器塊で、口径は14.9cm、器高4.7cmで、貼り付け高台は断面台形であるが、低く、直径も4.3cmと小さいものである。口縁部外面はヨコナデにより、若干外反させ、体部外面には指頭圧痕が目立つ。内面には太い暗文を疊らに施しているようである。灰色～灰白色(4N, 5N, 7.5Y8/1)を呈し、ほぼ完形品である。和泉型の特徴を示し、13世紀前半に編年されるものであろう。

133も瓦器塊であるが、内面は須恵器のような色調(7.5Y6/1)を呈している。外面は灰色に近い灰白色(6N, 7N)である。口縁部外面ヨコナデによって若干外反ぎみにしている。体部外面には指頭圧痕が多く残る。内面には暗文をやや疊らに施しているが、外面には施さない。高台は断面三角～台形に近いが、径は4.7cmで、低平である。口径は16.3cm、器高は4.4cmである。和泉型瓦器塊の編年では、13世紀前後に編年されるものである。

134は土師器の皿で、約半分の破片である。口径は8.6cm、器高は1.1cmである。ヨコナデ野様な調整痕が残り、底面には指頭圧痕が認められるが、器表が磨滅しており、正確な観察ができない。橙色(7.5YR7/6)を呈する。底部と口縁部の境は不明瞭である。黒色土器や瓦器塊と同時期と思われる。

135はやや大型の上飾器皿である。口径11.2cm、器高2.1cmで、にぶい黄褐色(10YR7/3)を呈する。口縁部はヨコナデ、底部はナデを施しているようである。胎土には赤色粒を含む。136は土師器小皿である。約1/4の破片で、底面はユビオサエ、その他はヨコナデ調整である。口径6.8cm、器高1.1cmで、口縁部と底部との境は不明瞭である。胎土に赤色粒を含み、にぶい橙色(7.5YR7/4)を呈する。137も土師器小皿で、約1/4の破片である。底面は静止糸切り、その他はヨコナデで、胎土には赤色粒を含み、にぶい黄褐色(10YR7/4)を呈する。口径は8.8cm、器高は1.6cm、底径は5.8cmである。138も土師器小皿の1/4程度の破片で、口径は8.2cm、器高は1.5cmである。底面は回転糸切り、その他はヨコナデである。橙色(7.5YR7/6)を呈する。139はほぼ完形品で、口縁部外面下方にはヘラ痕のような窪みが3条程度



第89図 遺構出土土器

観察できる。底面は回転系切り、その他はヨコナデのようである。口径8.3cm、器高1.7cmで、浅黄橙色(10YR 8/4)を呈する。

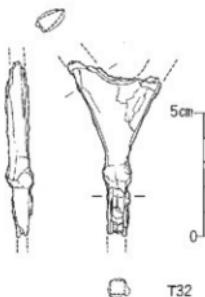
140は土師器の壺あるいは壺で、口縁部は「く」の字形に外反するものである。内面は刷毛調整、外面も刷毛のようであるが、断定できない。口径は22.0cm、胎土には金雲母も含んでおり、内面はにぶい黄橙色(10YR 7/4)、外面は灰黄褐色(10YR 6/2)～明黄褐色(10YR7/6)を呈する。この形態の壺は鐵錫模倣壺の系統とも考えられるが胎土や焼成が違う。時期については14世紀前半前後のものと考えられる。

141の土師器小皿も完形に近く、口径6.0cm、器高1.4cm、底径4.6cmを測り、底部と口縁部との境は明瞭である。底面は静止系切りで、その他はヨコナデのようである。にぶい橙色(7.5YR7/4)を呈する。

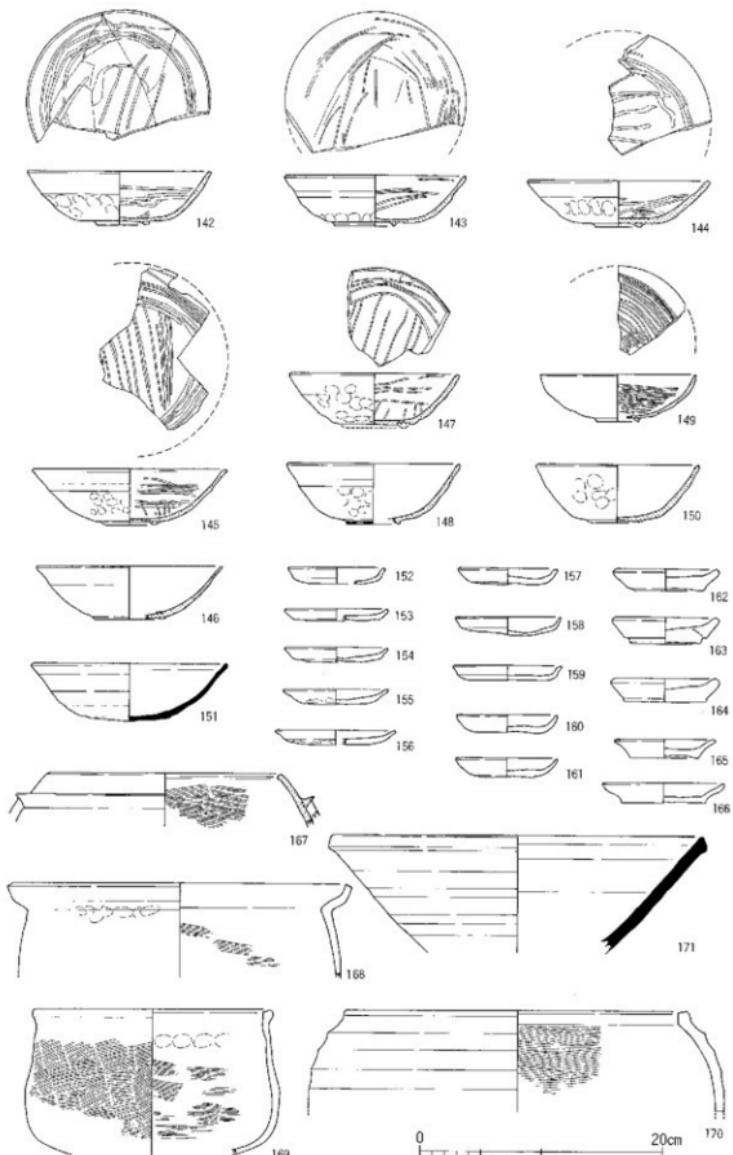
第90図T 32はP-1出土の雁脛塚で、刃部先端および茎を欠損する。表面はかなり銹化している。茎から刃部までが長いタイプで、外断跡で出土している完形品と同タイプである。莖は一部のみ遺存しており、断面は一辺6mm程度の方形である。莖には周囲に凸筋が巡っているものと考えられ、かなり膨らんでいる。厚みは刃部では約7mm、莖部付近では約8mmである。周辺で出土している土器の時期から、13～14世紀代のものとみて大過なからう。

包含層から出土した上器類は第91図に示した。それらには瓦器壺、黒色土器壺、須恵器壺、土器小皿、瓦質足壺、土壺類、須恵器こね鉢、その他がある。これらのうち、SK-4やP-1の周辺から出土したものは、142～144、149の瓦器壺、151の須恵器壺、152、153、156の土器小皿、168の鍋がある。また、それらに近接した位置で出土したものには、145、147、148の瓦器壺、150の黒色土器壺、155、157、161、163の土器小皿がある。なお、第90図に示したものはすべてA地区包含層出土土器である。

142～149は瓦器壺である。142は口径14.8cm、器高4.5cmで、高台は断面台形に近いが、低い。高台径は4.4cmである。口縁部および体部内面には暗文を施している。見込み部分には平行線を描いている。外面には指頭圧痕が目立ち、暗文は施さないようである。体部から底部へは屈曲しており、底部は平らに近い。灰色(N6/7)、灰白色(5Y 7/1)を呈する。143も形態的には142と似ているが、口縁部外面のナデを強く施すことにより、体部との境に段を設けていること、高台の断面が三角形であることが大きな違いである。142同様、2/3程度の破片である。口径は14.6cm、器高は4.2cmで、焼成は非常に良好である。外面は明青灰色(5BG7/1)、褐色(10YR4/1)、淡黄色(2.5Y 8/3)で、内面は灰白色(7.5Y8/1,N7/)である。144は1/5程度の破片である。口径は14.8cm、器高は3.9cmで、高台径は3.5cm、高台断面は三角形である。これも形態的には142に近いが、6mm器高が低い。厚手のつくりで、内面は灰色(N6/0)、外面はオリーブ灰色(2.5G Y5/1)を呈する。145は前記3点に比べて底部がやや丸い形態のものである。内外面とも灰色(N 6/)を呈し、瓦器壺と呼ぶに相応しい色調を呈している。口径は15.8cm、器高は4.6cmで、底部高台は断面が低い三角形で、底径は3.9cmである。内面には暗文を施し、見込み部分は平行線あるいはジグザグ文である。口縁部外面はヨコナデにより、体部との境は段状になっている。体部外面には指頭圧痕が目立つ。焼成は良好である。146は焼成が不良で、表面の焦しが著している部分が多く、土器器のようなにぶい黄橙色(10YR 7/4)の部分が大半である。形態的には145とはほぼ同じである。調整も同じと思われるが、暗文は観察できない。高台は断面蒲鉾状を呈し、径は5.7cmである。口径は15.2cm、



第90図 P-1 出土鉄器



第91図 包含層出土土器

器高は4.4cmである。見込み部分には粘土縫が付着しており、別の瓦器塊の高台部分と思われる。重ね焼きの際に剥がれたものである可能性が高い。147は底部が平らな形態で、142~144に似るが、口径が小さく、13.7cmである。現存の器高は4.2cmで、高台部分は剥離している。口縁部外面は強くヨコナデしている。内面には横方向の暗文を4条程度疎らに施し、見込み部分には平行線を疎らに施している。色調は須恵器のような色で、灰白色(2.5Y8/1.8/2)、口縁部外面はやや黒っぽい色で、灰色(5Y 6/1)を呈し、重ね焼きの痕跡と思われる。148は口径の約1/8の破片で、口縁部外面は強いヨコナデにより、体部との境に段を有している。高台は断面が歪んだ低い台形を呈し、4.5cmの直径である。内面には暗文が施されているようであるが、固化できない。体部外面には指頭圧痕が多く残る。口径は14.0cm、器高5.0cmで、灰色(10Y5/1)を呈し、焼成は良好である。149は灰色(10Y5/1)で、断面は灰白色を呈し、瓦器塊に相応しい色である。底部は丸みを持っており、口縁部外面もヨコナデを施してはいるが、内湾している。口径は12.8cm、器高は3.9cmと小振りである。高台は断面三角形で、破片が小さいため、やや不正確なきらいはあるが、高台径は3.4cmである。内面には暗文をやや密に施している。体部外面の指頭圧痕はあまり目立たない。以上、包含層出土瓦器塊8点は、その形態の特徴から、いずれも和泉型瓦器塊の範疇でとらえられるものである。暗文はかなり疎らであり、外面に暗文を施さず、内面もかなり疎らであるが、見込みと周縁の区別はのこっている。また、口径・器高といった法量の関係から、13世紀前半頃の時期が与えられるであろう。一方、遺構出土瓦器塊も含め、焼成や色調について観察すると、須恵器のような色を呈するものが多いことが特徴としてあげられる。瓦器塊と呼ぶに相応しいものは132~145・149の3点のみで、133~142~143~144~147は須恵器のような色調であり、燃しが不十分である。また、147は口縁部外面のみ焼されており、後述する151をはじめとする13世紀代の須恵器と同様の焼成を行っているようにも見えるのである。また、同時に、須恵器様の色調を示すものが、その形態の特徴として底盤が平らであることを注意しておきたい。特に、142~143~144~147はその典型である。しかし、その製作技法は須恵器と違って、底部に糸切りを施さず、口縁部外面に強いヨコナデを施し、体部外面には指頭圧痕が多く残っているように、瓦器塊の製作技法であり、内面には暗文を施す。

150は黒褐色土器塊である。形態は先述の瓦器塊とはほぼ同じで、底部は平らに近く、口縁部外面は強いヨコナデを施し、体部外面には指頭圧痕が目立つ。高台は断面低い蒲鉾形を呈し、径も3.8cmと小さい器表が荒れているため、内面の暗文は観察できない。内外面とも黒い色を呈し、体部外面は器表の剥離が目立つ。口径は13.2cm、器高は4.8cmである。断面まで黒色を呈する以外は他の瓦器塊と殆ど同じである。したがって、時期についても、瓦器塊と同様と考えられる。

151は須恵器の塊で、口縁部はやや外反させ、端部は丸くおさめている。底部は少し突出し、回転糸切りである。その他の部分はロクロナデを施している。口径16.0cm、器高4.8cm、底径6.8cmで、内面は灰白色(2.5Y8/1)、外面は褐灰色(10YR 6/1)で、口縁部のみ黒色で、重ね焼きの痕跡と思われる。13世紀前半頃であろう。

土師器小皿は152~166に示した。152~159は底部外面が指押さえで、底部とその他の部分があまり明瞭でないものである。底部以外はヨコナデあるいはナデである。152の胎土には赤色粒を含み、にぶい黄橙色(5YR7/4)、153にはにぶい黄橙色(10YR 7/4)、154は黄橙色(10 YR8/6)、155は黄橙色(10YR8/6)、156は橙色(7.5YR6/6)、157は胎土に赤色粒を含み、にぶい橙色(7.5YR7/4)、158も胎土に赤色粒を含み、浅黄橙色(10YR 8/4)、159にはにぶい黄橙色(10YR 7/4)である。160~161は底部が回転糸切りであるが、あまり突出しないものである。160は胎土に赤色粒を含み、にぶい黄橙色(7.5YR6/4)である。161は二

次焼成を受けており、にぶい橙色(5YR6/4)である。162～166は底部が突出するもので、ハラ切りや静止糸切りが認められる。厚手と薄手があり、薄手は静止糸切りである。162は胎土に赤色粒を含み、にぶい黄橙色(10YR6/4)、163も赤色粒を含み、橙色(7.5YR6/6)、164も赤色粒を含み、同色、165は浅黄橙色(10YR8/3)、166は橙色(7.5YR6/6)である。

167は瓦質足場の口縁部で、口縁部

は内傾し、錫は貼り付けてある。口径は19cm、灰色(N4/0)を呈する。播磨地域では14世紀代には認められないもので、13世紀内におさまるものと思われる。

168は鉄鍛刃しの場で、播磨でよく見られるものである。体部はほぼ垂直で、口縁部は屈曲する。口径は27.5cm、表面は黄灰色(2.5Y4/1)で、14世紀以降の年代が考えられる。

169は内傾する土器で、播磨の場に近い形態である。胎土に赤色粒を含み、にぶい橙色(5YR6/3)を呈し、体部外面は平行タタキで、錫が付着する。口縁部が殆ど外反しないことから、14世紀代の可能性が高い。

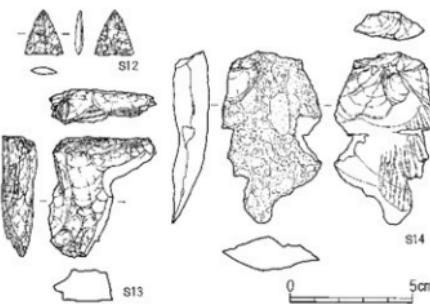
170は端も切り取られた輪状の土器で、内面が焦げていることから、五徳の機能を考えておきたい。

171は束縛系須恵器こね鉢で、口縁部が発達しておらず、13世紀代のものと考えられる。(岸本)

石器は第92図に示した。S12はササカイト製の石核で、縄文時代後期～晩期に属すると考えられる。長さ1.8cm、幅1.5cm、厚さ0.3cm、重さ0.7g。

S13はササカイト製の石核または楔形石器である。長さ5.4cm、幅2.6cm、厚さ1.2cm、重さ25.6g。裏面には稜面を大きく残している。

S14はササカイト製の報長剥片である。打面を調整した後に剥離を行っている。長さ7.1cm、幅4.1cm、厚さ1.5cm、重さ38.4gである。(山本)



第92図 出土石器

4. 小結

今回の全面調査によって、調査区のはば全体から土壤・柱穴・溝などの遺構が検出されたが、特に、A地区北西部に遺構の集中がみられた。A地区的さらに北西側は約4.5mの段差で高くなっているため、北西側への遺構の広がりは考えられない。また、南西側も土石流による谷状地形となり、遺構は読かれないものと考えられる。一方、遺構集中部については、柱穴の存在から、獨立柱建物の存在が考えられるのであるが、柱穴を建物として組み合わせることができます、その規模や方向などは明らかにできない。しかし、遺構集中部の溝や柱穴の並びの方向を観察すると、北西～南東および北東～南西の方向に溝のがたり、柱穴列が存在している。したがって、その方向を推定することができる。また、柱穴が多く存在している範囲は、等高線並行方向で約9m、直交方向で約8mであることから、5間×4間程度の建物であったと推定することができよう。また、出土遺物から、その存在時期は13～14世紀代であったと考えられる。遺跡の性格は、特徴的な遺物が出土していないことより、一般的な農村と推定され、ここでも、井ノ谷遺跡などで見られたような、中世の小規模集落跡を検出することができた。(岸本)

第12節 おさきどうのなは 尾崎堂ノ鼻遺跡

1. 位置と環境

尾崎堂ノ鼻遺跡は、津名郡一宮町尾崎字堂ノ鼻から字山門に所在する中世の集落遺跡である。

遺跡は、尾崎の平地を西流する宮川に向かって東から張り出した丘陵の先端部に立地しており、標高35mを測る。丘陵の中央には宮川に向かって丘陵を縱断する埋没谷が存在しており、この谷によって丘陵先端部は二分され、並行する二本の尾根を形成している。本遺跡は、この北側尾根の南西向き傾斜面から埋没谷にかけて位置する。

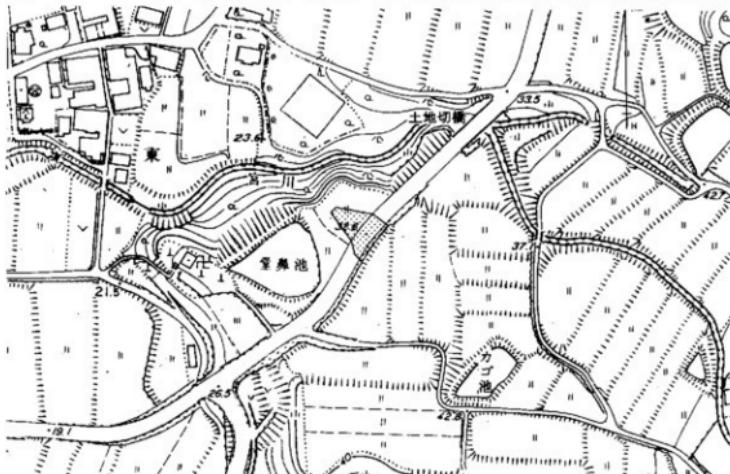
周辺には、縄文時代の石器などが採集されている大木谷遺跡をはじめ、古墳時代後期の山門古墳、大木谷古墳、中世の北ノ前遺跡、岡堂遺跡、原代遺跡といった遺跡が存在している。

2. 調査の経過

尾崎堂ノ鼻遺跡は、本州四国連絡道路(淡路縦貫道路)の工事用道路として計画された町道土地切線・町道上道路の整備に伴い、平成元年度より実施された分布調査によって遺物散布地として確認された4遺跡のうちの一つである。町道土地切線の路線内には、周知の遺跡として北ノ前遺跡の存在が知られて



第93図 遺跡の位置 (1/25,000「郡家」)



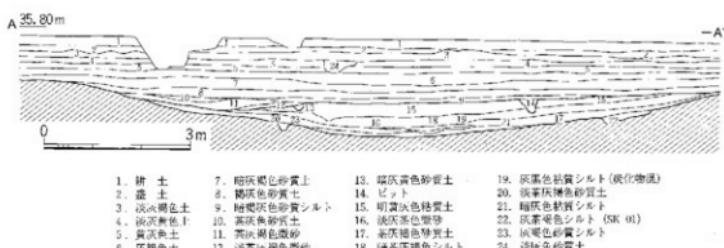
第94図 調査区の位置 (1/5,000)



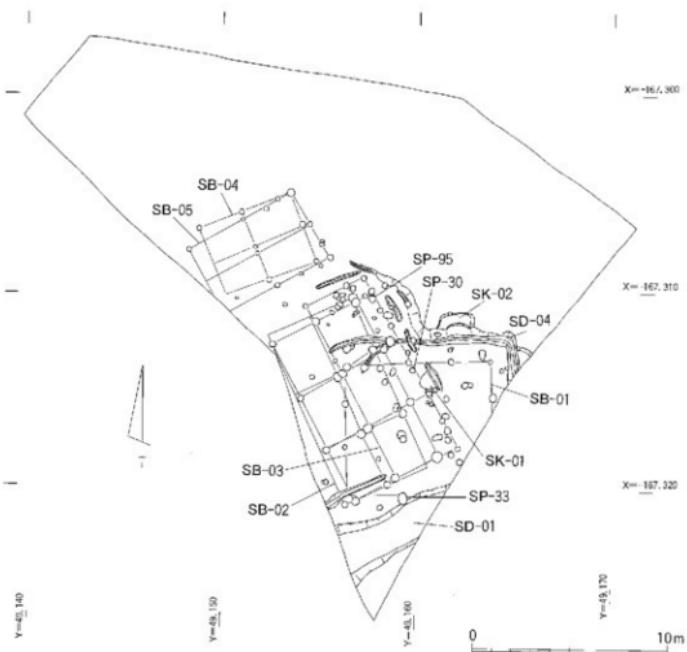
第95図 下層造構全体図

いたため、これら新たに確認された遺物散布地を併せて、平成2～3年度に確認調査が実施された。その結果、遺物散布地の1箇所で中世の遺物包含層と、柱穴などの遺構の存在が確認された。

これらの結果ふまえ、路線部分に付帯工事部分を加えた400m²について、平成4年度、一宮町教育委員会を調査主体として全面調査が行われることとなった。



第96図 調査区西壁土層図



第97図 上層造構全体図

3. 調査の成果

a. 層序

遺跡が、尾根の傾斜面から谷部分にかけて位置しているため、尾根部分と谷部分とでは層序にも明確な違いがみられる。

尾根部分については、耕作土直下で削平を受けた地山が検出され、極近年に行われた水田区画の変更に伴い削平を受けているものと判断される。

谷部分については、前述の区画変更に伴うと考えられる盛土が耕作土下で確認される。その下には旧耕作土と考えられる水田層が幾重にも堆積しており、度重なる区画変更を伴う水田運営を伺い知ることができる。それらの下層では、中世の遺物を含む暗灰褐色砂質土、褐灰色砂質土、暗褐色シルトが堆積するが、量的には暗灰褐色砂質土層の遺物量が圧倒的に多い。これら遺物を含む土層下には、人為的に谷を埋めたとみられる明黄灰色粘質土が谷を覆うように堆積し、中世の遺構面を形成している。検出された柱穴の掘方も本土層と同一の土で埋まっているものがあり、本土層で谷部分を整地した後に建物を建てたものと考えられる。明黄灰色粘質土層下には、谷部分に自然堆積したとみられる微砂層やシルト層が存在し、自然木や炭化物なども出土する。これら土層からも遺物が出土している。

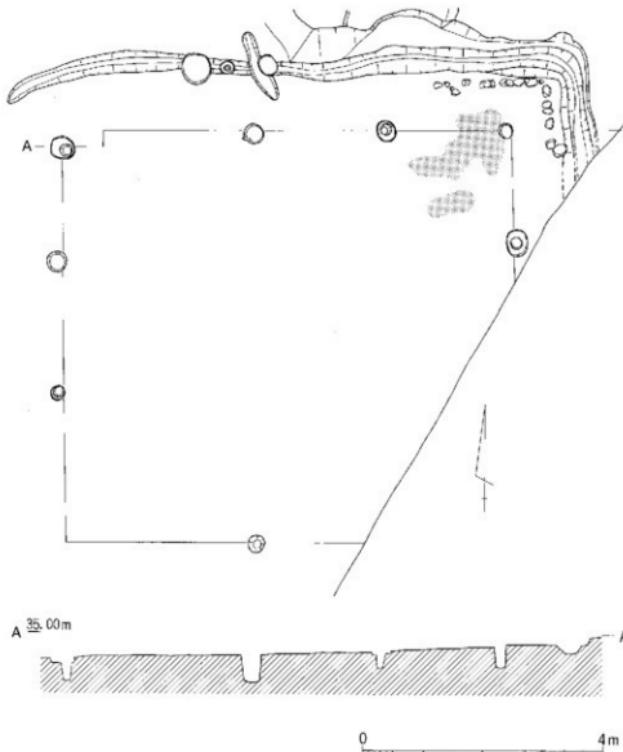
b. 造構

調査の結果、谷部分の整地層上面で検出される上層遺構として、掘立柱建物5棟のほか、土坑、溝、ピットなどの遺構が検出された。また、谷部分に堆積した土層を掘りきった段階でも遺構が検出されており、それら下層遺構としては、土壠、溝、ピットなどがある。なお、上層遺構については、柱穴の埋土と整地上がきわめて似通った色調及び土質であったため、掘立柱建物の多くは整地土層である明黄灰色粘質土を一部除去した時点で検出している。

S B -01・S D -04 (第98図)

S B -01は、直角に屈折する溝 S D -04の内側で検出された掘立柱建物で、南東隅の一部は調査区外へ広がる。建物址は、3×3間の倒柱建物址で、東西方向の一辺が南北方向に比べわざかに長い。柱間は210cm~320cmでやや不規則である。

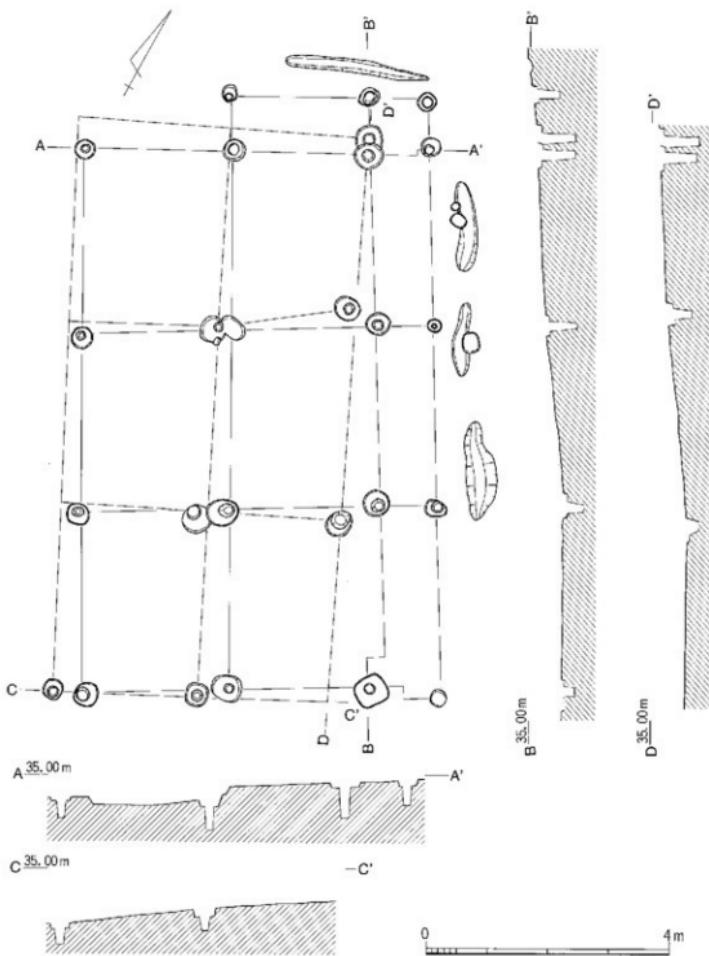
建物址の北及び東辺には、柱列と方向を同じくする直角に屈曲した溝 S D -04が巡っているが、南及び西側では検出されていない。S D -04の最大幅は約40cm、深さは約15cmを測り、北東隅のコーナー



第98図 S B -01・S D -04

内側には20cm大の角礫が一列に並べられている。溝の外側には、地山を整形した段差が残っており、建物建設時の地山整形の跡と考えられる。これらの状況から、この溝は雨落ち溝としての機能も果たしたものであろうが、それと同時に建物背後の斜面を流れてくる雨水を遮ける目的で掘られた溝である可能性も考えられる。

この建物北東隅の遺構面上には、薄く広がる炭化物層が検出されており、その周辺で刀子とみられる鉄器や砥石などが出土している。また、SD-04からは瓦器塊1点が上向きの状態で出土している。



第99図 SB-02・SB-03

S B -02・03 (第99図)

S B -02は、 2×3 間の縦柱建物址である。桁方向は南北方向 ($N 27^{\circ} W$) で、柱間寸法は桁行300cm、梁行240cmを測り、桁行の柱間が梁行の柱間より60cm広い。

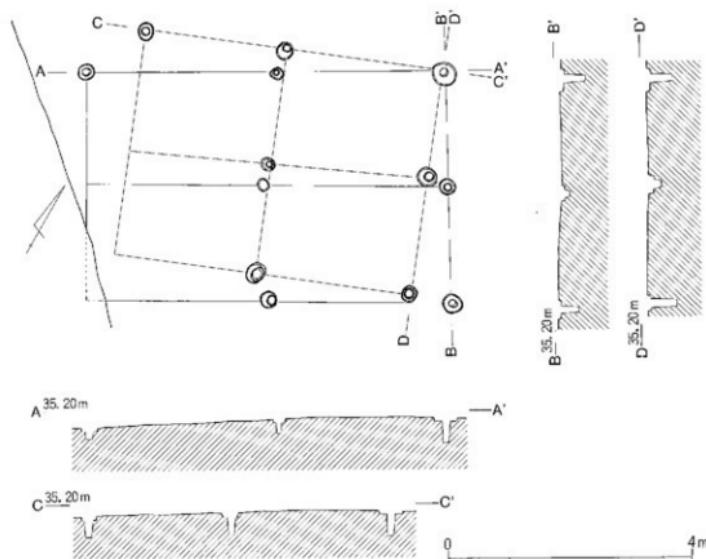
一方、S B -03はそれよりも桁方位を 1° 西に振った 2×3 間の縦柱建物址で、北面と東側に庇とみられる張り出しが設けられる。ただ、庇とみられる張り出しの北西隅柱が検出されておらず、その部分については庇が設けられなかった可能性もある。柱間寸法は、桁行300cm、梁行240cm、庇の張り出し部分は90cmを測り、庇部分を除けばS B -02とほぼ同じ規模の建物となる。この建物の北辺と東辺に沿って柱列と方向を同じくする浅い溝が検出されており、雨落ち溝と考えられる。この溝が、前述のS B -01に付随する溝SD-04を切っていることから、これらの建物はS B -01より後出する建物であると判断される。さらに、S B -02とS B -03は桁方位や建物位置がほぼ同じであり、規模も庇部分の有無を除けばほぼ同じであることから、同一建物の建て替えと判断され、柱穴の切り合い関係からS B -02が先行し、それを建て替えてS B -03が建てられたものと考えられる。

さらに、これらの建物址に伴う柱は、谷部分を埋設した整地上層と考えられる明黄灰色粘質土層上面より掘り込まれていることが確認できる。

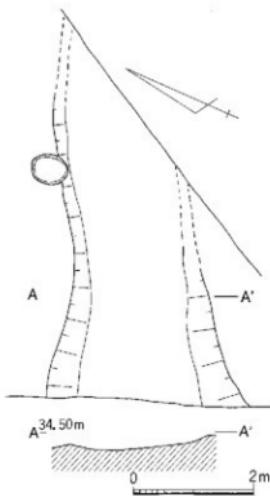
S B -04・05 (第100図)

これらの建物址は、S B -02、03北側の尾根斜面に位置する建物址である。

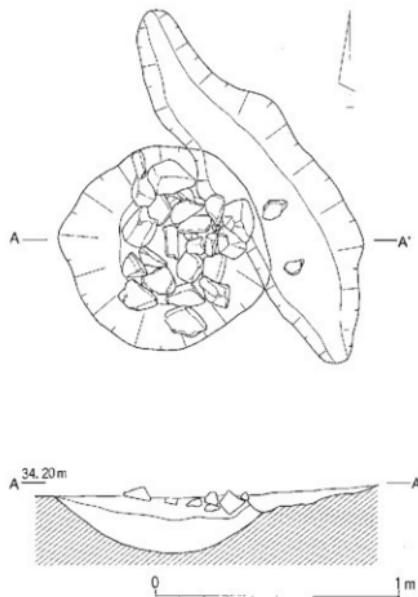
S B -04は、桁方向が東西方向 ($N 68^{\circ} E$) の 2×2 間の縦柱建物址で、柱間寸法は桁行が240cmと260cm、梁行が180cmと190cmを測り、桁行の柱間が梁行の柱間より60~70cm広い。一方、S B -05はそ



第100図 S B -04・S B -05



第101図 SD-01



第102図 SK-01

れよりも桁方向を 8° 振った 2×2 間の縦柱建物址である。柱間寸法は桁行が290cmと300cm、梁行が190cmを測り、SB-04をひとまわり大きくした建物址である。これらの建物址も、前述のSB-02・03同様、位置や規模がほぼ等しいことから同一建物の建て替えと判断される。

また、SB-04、05はそれぞれSB-02、03とほぼ並行する関係にあり、いずれも1回づつの建て替えが行われていることから、それぞれが同時期に存在した建物である可能性が強く、SB-02とSB-03の前後関係を考慮すれば、SB-04がSB-05に先行する建物であると判断される。

SD-01(第101図)

調査区南端で検出された浅い溝で、底から肩への立ち上りもなだらかである。最大幅は3m、深さは20cmを測る。溝の両端は調査区外へ延びるため全長は不明である。溝底は、検出された東端と西端との比高差が25cmあり、東から西方向へ地形に沿ってわずかに傾斜している。

検出された位置が、SB-02・03のすぐ南で、方向がそれら建物址の梁方向の柱列とほぼ並行することから、SB-02・03に伴う溝の可能性がある。

本溝からは、鉄滓(図版77)1点が出土している。

SK-01(第102図)

調査区の中央部で検出された直径85cmを測る円形の土坑である。深さ23cmを測り、肩から底にかけては緩やかな傾斜をもって掘られている。土坑内に堆積した土は、上下2層に分かれると、上層には炭化物あるいは灰を含む暗灰色を呈する汚れの強い土が堆積している。土坑上面には20cm大の角礫多数が集積しており、これらの礫の中には火気を受けて一部赤変しているもののが見られる。なお、土坑内からは、土師器片1片が出土している。

この土坑は、掘立柱建物SB-03の雨落ち溝に切られていることより、この建物に先行する土坑と考えられ、掘

立柱建物 S B -01に伴う土坑の可能性がある。

S K -02 (第103図)

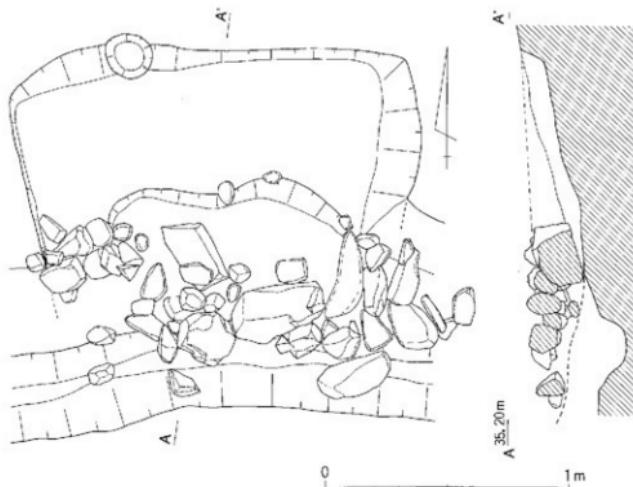
S D -04北側の傾斜面で検出された方形の土坑である。東西方向の一辺は1.6mを測り、南北方向は1mを測る。しかし、南半部は明確に検出されておらず、さらに広がる可能性もある。北及び東西方向の掘り込みは、約10cm程度を急角度で掘り込まれるが、その後は傾斜に沿い中心部に向かって緩やかに傾斜し、さらにもう一段わずかな段をもって底に至る。土坑の南半部では20cm~40cm大の角礫が集中した状況で検出されている。これらの礫には火気を受け赤変したものが多々みられる。しかし、火気を受けている面は一定しておらず、無秩序に散乱した状況にあり、原位置を保っているとは考え難い。したがって、これらの礫が本来、本土坑に伴うものかどうかは定かではない。本土坑北半部の底からは、瓦器碗1点が出土している。

c. 遺物

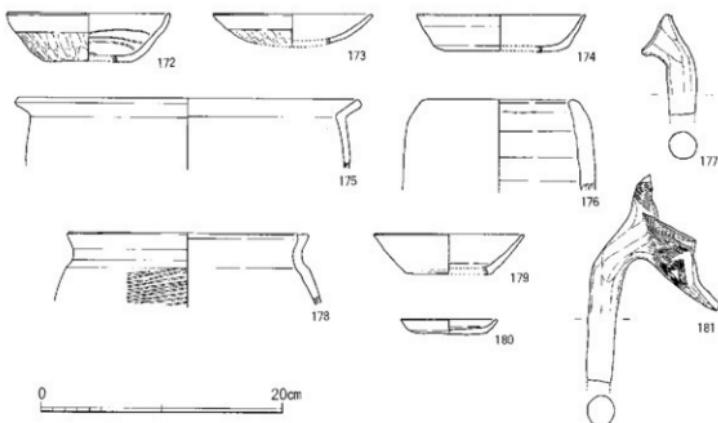
遺物は、土坑、溝、柱穴などの造構や遺物包含層などからコンテナ約10箱分が出土しているが、造構から出土したものは数少なく、その大半が遺物包含層からの出土である。出土遺物の大部分が中世のものであるが、一部石磁などの弥生時代に属する遺物も出土している。出土した遺物には、須恵器、土師器、瓦器、青磁、備前焼などの陶磁器類の他、鉄器、石器などがある。

S B -01出土土器 (第104図)

いずれも柱穴出土の遺物である。出土遺物には土師器の小皿、土壙がある。180は口径8cmの小皿である。底部と体部の境にわずかな段が看取される。底部は切り離し後指頭による調整が施されており、一見手づくり状に見える。胎土は精良で灰白色を呈する。181は、足付土壙の脚部である。体部は外面、内面ともに不定方向の刷毛調整が施される。体部外面には顯著な煤の付着が観察できる。



第103図 S K -02



第104図 遺構出土土器(1)

S B - 02出土土器（第104図）

出土遺物には、土師器の皿、土塙がある。178は、端部を内側に折り曲げて肥厚させ、端部に内傾する面をもつタイプの上塙である。体部外面には右上がりの平行する印きが看取され、内面は横方向の刷毛で調整される。体部外面には、煤が付着する。179は口径12.3cmを測る土師器の皿で、底部より屈曲して直線的に開く体部をもつ。口縁部はヨコナデ調整が施される。胎土は精良である。

S B - 03出土土器（第104図）

土師器皿、土塙などが出土している。172～174は口径13cm前後の土師器の皿である。172は、内湾気味に立ち上がる体部をもち、内面には暗文が看取される。口縁部は内外面とともにナデ調整されるが、体部外面は指捺さえの跡が觀察される。炭素の付着が認められないが、瓦器模の可能性も残る。173、174は上塙器の皿である。173は立ち上がりの緩やかな浅い皿であるが、一方、174は底部から急角度な立ち上がりをもつものである。いずれも口縁部はヨコナデ調整が施されるが、173の体部下半には指捺圧痕が残る。いずれも、胎土は精良で、172、174は黄白色、173は赤褐色を呈する。175は「く」の字状に屈曲して開く口縁部を有する土塙である。内外面ともに残りが悪く、調査の觀察は困難であるが、内外面ともに刷毛調整あるいはナデ調整で仕上げられるものと思われる。176は、口径12cmの円筒形土師器で、黄褐色を呈し良好な焼成である。器種は不明であるが、鉢蓋などの用途が想定される。

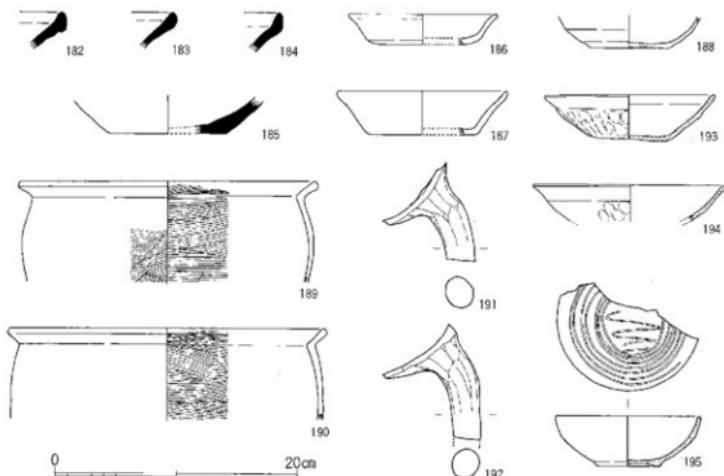
その他の遺構出土土器（第105図）

須恵器

182～185は東播系須恵器の鉢である。182～184は口縁部で、いずれも上方へ拡張する。185は底部で、底径10cm前後に復元される。182は谷部分の整地層下で検出された土坑、183は土坑 S K - 01、184、185は清 S D - 01出土遺物である。

土師器

186～188は皿である。186は平坦な底部から屈曲して短く立ち上がる。底部から口縁部にかけてはやや外反気味に立ち上がり、端部は丸みをもってわずかに肥厚する。口縁部は内外面ともにヨコナデ調整



第105図 遺構出土土器(2)

が施され、底部外面は指押えによる調整が認められる。胎土は極めて精良であり、全体に黄白色を呈する。187も底部から屈曲し外反気味に立ち上がるが、186に比べ立ち上がりは長くなる。口縁端部はやや内湾気味におさめる。底部は未調整である。胎土は、やや粗く、色調も褐色を呈する。188は底部のみで口縁部を欠く。底部から内湾気味に立ち上がる体部をもつ。底部外面にはには回転糸切り痕が認められ、器壁は極めて薄く作られる。胎土は精良で、乳白色を呈する土器である。

189、190は、口縁部が「く」の字状に屈曲して開く口縁部を有する土壙である。189にみられるように外面は不定方向の刷毛調整、内面は横方向の刷毛調整で仕上げられる。191、192は土壙の脚部で、前述のタイプの上端に付くものと考えられる。

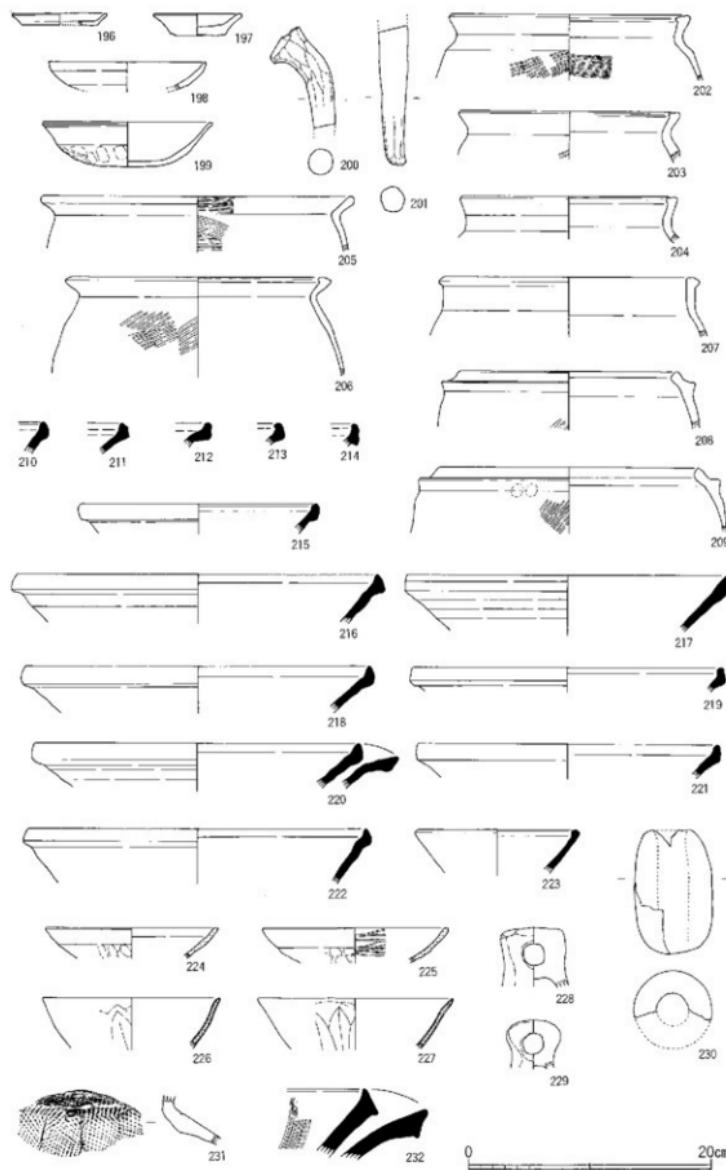
186、189、191は、土坑 SK-02、187はピット SP-33、188はピット SP-95、190はピット SP-30、192は溝 SD-04上層からの出土遺物である。

瓦器

193~195があるが、いずれも碗である。193は原形に復元できるもので、口径は14.2cm、器高は3.5~3.8cmを測る。体部の上半には、口縁部に施された強いヨコナデ調整により形成されたと見られる段が認められる。この段を境にし、体部下半には顕著な指頭痕が残る。内面については状態が悪く、観察不能である。底部の高台は消失しており、平らな底部となる。194も丸器柄と考えられるが、193に比べて作りはやや丁寧である。体部外面には指頭痕が認められ、口縁部はヨコナデ調整により、わずかに外反気味に開く。口径は16.0cmに復原される。195も原形に復元し得る瓦器碗であるが、器形は前述の2点とはやや異なる。体部は内湾気味に立ち上がり、体部外面は全面ナデ仕上げで指頭痕は認められない。内面はわずかに残る略文が観察され、底部には退化した低い高台が残る。口径は12.0cm、器高は4.2cmを測る。

193は土坑 SK-02、194は溝 SD-04上層、195は溝 SD-04最下層から出土している。

第12節 尾崎塗ノ鼻遺跡



第106図 上部包含層出土土器

上部包含層出土土器（第106回）

上層遺構に伴うと考えられる包含層出土遺物には、須恵器、土師器、瓦器、青磁などがある。また、さらに上層の灰褐色土層から出土した遺物として備前焼の擂鉢などもある。

須恵器

主に、東播系の鉢を主体に多数出土しているが、原形に復しうるものはみられない。そのうち14点を図化した。

210～214は口縁端部のみでの資料である。上方へ拡張するなど、いずれも口縁端部の肥厚が顕著で、明瞭な縁帶部を形成する。215は口径19.4cmに復原できる小型の鉢で、口縁部は上方へ拡張し肥厚する。口縁端部には自然釉が付着し、外面には重ね焼きの痕跡が観察できる。

216～222はいずれも口径28～30cm前後に復元される鉢である。このうち、217は口縁端部が上方へ立ち上がり気味に拡張し、外面には拡張された直立気味な面を有するタイプで、他のものとは若干違った特徴を有する。このほかのものについては、いずれも口縁端部が上方へ拡張され、著しく肥厚する形態をとる。

223は小型の椀あるいは杯とみられるもので、口径13.0cmを測る。直線的に開く体部に端部が内側へ肥厚する口縁部を有する。外面には重ね焼きの痕跡が認められる。

土師器

皿、壺などが出土している。皿は小型のもの196、197と大型のもの198、199がある。

196は平らな底部から短く外上方へ立ち上がる。口縁部はヨコナデ調整が施され、底部は未調整である。197は平らな厚みのある底部から短く外反気味に開く口縁部をもつ。底部は糸切り痕が認められる。胎土は粗く、全体的に褐色を呈する。口径は、196は7.6cm、197は7.4cmである。198は口径13.0cmに復元される皿である。丸みを帯びた底部から内湾気味に立ち上がる口縁部を有する。口縁部はヨコナデ調整、底部は未調整である。199は丸みのある底部から外反気味に開き、口縁部はわずかに外方へ肥厚する。口縁部は内外面ヨコナデ調整、底部外面は指頭痕が認められる。内外面ともに黄白色を呈し、極めて精良な胎土である。

202～209は壺である。図化したように様々なタイプの壺が出土しているが、全て口縁部のみであり、全容が明らかとなるものは出土していない。これらは、口縁部の形態からおおむね五つのタイプに分類できる。

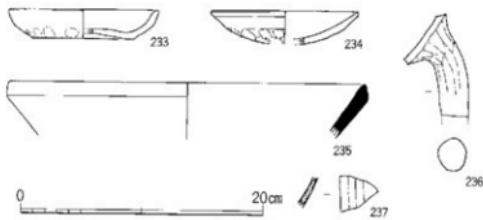
まずは、205に代表されるもので、「く」の字状に屈曲して開く口縁部を有するタイプである。口縁端部は丸く納められ面はもたず、ナデ調整が施される。体部外面はナデあるいは不定方向の刷毛調整で仕上げられ、内面は口縁部から体部にかけて横方向の刷毛調整が施される。200、201のような脚の資料には、付随して残る体部の調整がこのタイプに共通しているものが多く、底部に三足の脚を有するもののが存在すると考えられる。続いて202～204に代表されるもので、短く外方へ開き、端部を内側に折り曲げて肥厚させ、内傾する面をもつタイプである。口縁部はナデ調整で仕上げられる。体部外面には平行する右上がりの叩きが認められ、内面は横方向の刷毛調整が施される。次は207に代表されるもので、短く直立し、端部を外側へ折り曲げるように肥厚させ、玉縁状を呈するタイプである。口縁部はナデ調整である。続いては、206に代表されるもので、「く」の字状に屈曲して開き、端部を内側へ肥厚させ外傾する面を有するタイプである。体部外面には右上がりの叩きが施される。最後は、208、209に代表されるもので、内径する短い口縁部に断面三角形の鉗がつくタイプである。口縁端部はやや肥厚し、面を有

第12節 尾崎堂ノ鼻遺跡

する。体部外面には叩きが施される。

200, 201は三足脚をもつ土器の脚部であるが、おそらく205に代表されるタイプの脚に付くものと考えられる。

瓦器



第107図 整地層下層出土土器

瓦器も多数出土しているが、

大半が細片化したものであった。ここでは2点を図化した。

224, 225ともに口径15cm前後に復原できる椀である。内湾気味に立ち上がる体部であるが、立ち上がりの角度は浅く、椀自体も浅いものになると考へられる。口縁部に施されたナデ調整により、体部上半の外側にはわずかな段が形成されるが、その段を境に体部下半には顕著な指頭痕が認められる。225の内面には退化した研磨が観察される。

231は瓦質の壺の肩部である。外面には彩絵の叩きが施される。

青磁

226, 227はいずれも龍泉窯系の鍋連弁文碗と考えられる。鍋はやや鈍く退化傾向にあるもので、釉色はやや黄色みを帯びた緑黄色を呈する。

備前焼

232は備前焼の擂鉢である。口縁部はわずかに上下に肥厚し、端部には面を有する。

その他の遺物

これらの他に、漁具が出土している。

228, 229はイダコ壺である。両方とも釣り鐘型を呈するタイプのもので、釣り手の部分のみが出土している。228は角張った方形を呈するもので、厚味があり重量感の感じられるものである。一方、229は厚みがなく軽量感を与えるもので、体部との境がすぼまり、曲線を描くタイプである。

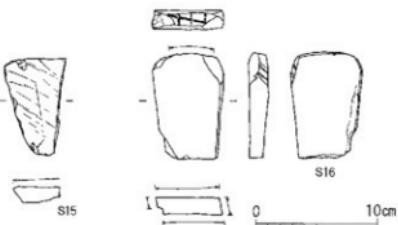
230は大型の管状土錘である。焼成が悪く極めて軟質であるが、須恵器の可能性もある。

整地層下層出土土器（第107図）

谷部分に施された整地層の下から出土遺物である。点数は少ないが、須恵器の鉢、土師器の皿、土壙脚部、青磁などが出土している。

235は東播系の須恵器の鉢で、口縁部はわずかに上方に立ち上がり気味となり、外面には面を形成する。

233, 234は土師器の皿である。233は上げ底気味の底部から屈曲して内湾気味に短く立ち上がる体部をもつ。口縁部から体部にかけてはヨコナデ調整で仕上げで、底部付近の体部外側には指頭による圧痕が認められる。底部外側は、静止糸切り後ナデ調整が施される。234は丸みを帯びた底部から大きく聞く体部をもつ浅い皿である。体部上半から口縁部に



第108図 石製品(1)

かけてはヨコナデ仕上げで、体部下半以下には顯著な指頭痕が認められる。このほか、上飾器質の土壙の脚部236も出土している。

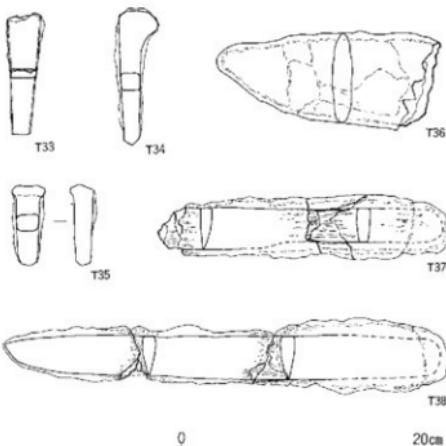
また、237は、青磁片である。外面には連弁文が認められる。上層出土のものに比べて良好な発色を示す。

石製品（第108・110図）

中世の石器としては、砥石2点が出土している。

S15は、厚さ1.4cmの楔形を呈する板状の砥石である。使用痕は表面1面のみで、無数の擦痕が認められる。材質は極めてきめの細かい泥岩⁽¹⁾が用いられている。S16も厚さ1.5cm

を測る板状のもので、表裏両面の他



第109図 鉄製品

に側面3面にも使用痕が認められる。残る側面1面は折れ面となっており、本来はこの面も使用されていた可能性がある。使用面には擦痕が認められる他、上部側面には断面がV字の交差する4本の溝が認められる。材質はやや粗めの砂岩である。いずれもSD-01付近の包含層出土である。

また、このほか石鎚2点が出土している。いずれも谷部分の整地層下層からの出土である。

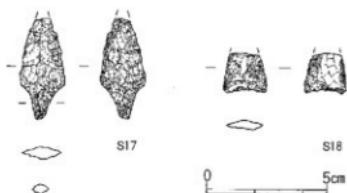
S17は凸基有茎式の石鎚で、先端部を欠損する。残存部で全長4.1cm、最大幅1.8cm、厚さ0.5cm、重量3.2gを測る。S18は凹基式の石鎚で、基部の抉りは浅い。本品も先端部を欠損する。残存長で1.6cm、最大幅1.7cm、厚さ0.3cm、重量1.0gを測る。両石鎚ともにサスカイト製であるが、いずれも風化が浅く、作りも粗雑である。弥生時代のものとみられる。

鉄製品（第109図）

用途不明の鉄片なども含め9点の鉄製品が出土しているが、そのうち6点を図化した。

T33は厚さ0.3cmの薄い板状の鉄器である。上下両端は折損しており、本来の形状は不明である。T34、T35は釘とみられる。断面は厚さ0.7~0.8cmで方形を呈し、頭部は折り曲げられ肥厚する。先端部は折損するとみられることから全長は不明であるが、残存長でT34は5.6cm、T35は3.3cmを測る。T36は幅4.1cm、厚さ0.8cmを測る板状の鉄器で、一端は折れており不明であるが、もう一端は先端となる。T37、T38は刀子とみられる鉄器である。T37は先端部が折損しているため、本来の全長は不明であるが、残存長が12.0cmを測る。T38は3ヶ所で折れているものの、先端部から基部まで完存しており、全長は18.3cmを測る。

T33~T35は遺物包含層から出土している。一方、T36、T38はいずれも上層遺構面上で出土しているが、いずれも掘立柱建物址SB-01北東



第110図 石製品(2)

溝の炭化物層が広がる付近で出土している。また、T37は浅いビット S P-56内から出土しているが、S P-56も同様の場所に位置する。なお、S P-56に接する形で集石土坑 S K-01が検出されている。また、固化はできなかったが、溝 S D-01からは重量111.4 gを測る鉄滓1点が出土している。

4. 小結

今回の調査地では、おむねⅠ～Ⅲ期の3時期の遺構が検出された。

I期

今回検出された遺構の内、最も古い時期に相当する遺構である。谷部分の整地層下で検出されたビットなどがこの時期の遺構である。

検出された遺構の大半がビットであるが、これらには建物の柱になるようなしかりとしたものではなく、杭などの痕跡である可能性が強い。

なお、この谷部整地層下より出土した遺物と整地層上で検出されている遺構や遺物包含層出土遺物との間に大きな差は認めがたく、時間的にも大きな開きは想定しがたい。したがって、谷部分の整地が行わられた後、ほとんど時間をおくかずに建物が建てられたものと判断される。言い換えれば、整地層上の建物を建てるために整地が行われたといえよう。

II期

これに続く時期は、谷部分を埋めた整地層上で検出された掘立柱建物 S B-01に代表される時期である。

前述のように、S B-01はそれぞれの建物跡に伴う溝の切り合い関係から、S B-02以下の建物に先行する建物跡と判断される。このほか、S B-01に付随すると考えられる溝 S D-04、土坑 S K-01なども当該期の遺構と判断される。

III期

S B-01に続き、方位が変更された S B-02～05の建物が相当する。

このうち、S B-02と S B-04は建物方位や建て替えの状況などから、同時期に存在した建物と考えられ、それぞれが一回づつの建て替えを受け、S B-03・S B-05として存在したものと考えられる。S B-02・03と S B-04・05は、建物の規模や建物方位などから主屋と副屋の関係にあったものと想定される。このほか、溝 S D-01や土坑 S K-02なども当該期の遺構と判断される。

一方、出土遺物には、須恵器、上師器、瓦器、青磁などがある。

出土量の最も多いものが土師器であり、時期決定には重要な要素と考えられるが、現状では在地の土師器の様相は不明な部分が多く、その時期について言及することは困難な状況にある。したがって、時期の判断は須恵器や瓦器といった遺物に頼らざるを得ない。

須恵器は大半が束縛系の鉢とみられるが、それらは荻野氏の編年でいうところのⅦ期～Ⅷ期のものが大半を占めている。一部、谷部分の整地層下より出土した235や上部遺物包含層出土の217のようなⅧ期に近い形態のやや古相を呈するものもわずかにみられるが、大半のものがⅦ期～Ⅷ期に分類されるものであり、おむね13世紀後半から14世紀中葉の時期が与えられる。

また、瓦器についても、S K-02出土の193が和泉型瓦器のⅣ～Ⅴ期以降のものとみられることから、13世紀末から14世紀前半の時期が想定される。一方、S D-01出土の195は、他のものとの間に形態上の違いが認められる。それは系譜の違いが反映されている可能性もあり、直接比較するには問題

もあろうが、高台が残存するという点に着目すれば高台が消失している193に先行するものと判断される。

これらのことより、遺跡の主体は13世紀後半から14世紀前半にあるものと判断される。整地層下層出土の須恵器にはやや古相を呈するものがみられるが、整地層上層出土遺物などと考えあわせるならば、Ⅰ期はおおむね13世紀中葉頃まで、Ⅱ期は13世紀後半、Ⅲ期は14世紀前半の時期が想定される。

また、出土している備前焼などから15世紀以降についても本遺跡は継続している可能性が指摘できるが、今回の調査ではその時期の遺構は検出されていない。また、谷部分から弥生時代のものと考えられる石礫が出上しており、周辺には当該期の遺跡が存在していることも想定される。

本遺跡の性格については、SK-01やSK-02にみられる火気を受けた角礫の集積状況やSB-01の北東隅に薄く堆積した炭化物層、これらの周辺で出土した刀子など多数の鉄器や鉄斧・砥石といった出土遺物の状況から、中世の小鎌治に関連する性格が想定される。本遺跡が所在する尾崎地区では、「室町時代に、京都の栗田口より刀鎌治が来島し、尾崎の地に住み着いた。」との伝承があり、現在も「刀鎌治の井戸」と呼ばれる古井戸なども残っている。こういった伝承との関係などからも注目すべき遺跡といえよう。

(伊藤)

第3章 まとめと考察

第1節 各遺跡のまとめ

今回報告したのは、本州四国連絡道路建設に伴い発掘調査を実施した遺跡のうち、古墳時代および中・近世に属する遺跡である。

古墳時代の遺跡としては、大木谷古墳・篠鼻山古墳群の2遺跡3古墳について報告した。

大木谷古墳は一宮町大木谷の丘陵支尾根上に位置し、昭和9年の破壊以降その位置が不明であった。今回の調査の結果、推定長5mの横穴式石室を内包する、推定径10m強の円墳であることが判明した。また、今回の調査では、出土遺物量は僅少であったが、採集遺物との時期的差異は認められず、6世紀の第3四半期であった。また、装飾大刀が副葬されていたことも判明した。

北淡町室津の海に突き出た丘陵上に所在した篠鼻山古墳群は、いずれも墳丘は削平を受け、田畠となっていた。1号墳は直径13m程度の円墳と推定されるが、不明確である。3基の主体部を検出し、いずれも堅穴式の小石室であるが、遺存していたのは第3主体のみである。第1主体からは須恵器・鉄器・耳環・ガラス玉、第2主体からは須恵器細片と鉄器、第3主体からは須恵器がそれぞれ出土した。また、第2主体は小砂利を敷いており、第1主体もやや大きめの砂利、第3主体では礫を敷いていた。出土土器から、第1主体→第2主体→第3主体の順に構築されたと考えられ、6世紀第3四半期から6世紀末にかけてのものと考えられる。2号墳は1号墳の山側にあり、主体部まで削平を受け、遺存していないなかった。周溝から直徑15m程度の円墳と考えられ、出土土器から、1号墳第1・2主体部と同時期と考えられる。地元の人の話によると、2号墳から鉄刀も出土したという。この古墳群はその所在地名および石室石材が抜き取られていること、近世の水田で破壊されていることから、「淡路草」記載の古墳であると推定される。

鎌倉時代以降の遺跡では、北淡町室津の平見遺跡で土器埋納遺構・柱穴・土壙のほか、烟の可能性がある溝状遺構を検出した。遺物には13世紀後半～14世紀代のものも存在した。一宮町尾崎の尾崎堂ノ鼻遺跡では、13世紀中葉～14世紀前半の遺構が検出され、5棟の掘立柱建物跡のほか、土壙などが存在した。また、遺物には鉄滓があり、付近にある室町時代の刀鍛冶の伝承と関連付けて考えることができた。この状況は、隣接する中須賀遺跡においても認められ、遺構は15世紀後半～16世紀前半と考えられるが、刀子と鉄滓が出土し、「すか」という鍛冶関係の地名とも考え合わせて興味深い資料となった。東浦町山田原の藤ノ木遺跡では、13～14世紀と考えられる瓦器を中心とした遺物が出土し、同時に小規模建物と推定される柱穴群と土壙・溝を検出した。北淡町育波の掛内遺跡掛内地区でも小規模建物と推定される柱穴群と土壙・溝のほか、烟と考えられる遺構も検出した。遺構の時期は15世紀前半と考えられる。なお、掛内遺跡では12世紀後半～13世紀代の遺物も出土している。外町遺跡は北淡町斗ノ内にあり、15世紀と考えられる小規模建物と土壙・溝・柱穴を検出し、多くの鉄滓と雁股鏡・火打ち石が出土していることから、鍛冶関係の遺跡と考えられる。なお、11～12世紀と考えられる土壙も検出している。井ノ谷遺跡は北淡町小田の山中にあり、15～16世紀の建物跡と推定される柱穴群と土壙墓3基を検出し、柱穴からは火打ち石、土壙墓からは鉄鏃などが出土した。この建物跡も1棟のみの小規模なものである。北淡町室津の原ノ下遺跡でも火打ち石が出土しており、16世紀と考えられる建物跡になるであろう柱穴

と、土壌などを検出した。なお、東浦町白山の山上にある菅原遺跡では、詳細な時期は不明であるが、中世の墓を6基検出した。

近世の遺跡では、一宮町述田の中原遺跡で井戸・土壌・溝が存在した。遺物には16世紀代のものも出土している。

(岸木)

第2節 中世小規模集落について

今回報告した中世の遺跡のうち、掘立柱建物跡を検出したものや、柱穴が集中して存在し、掘立柱建物跡と推定される集落跡には、原ノ下遺跡・掛内遺跡・外町遺跡・井ノ谷遺跡・藤ノ木遺跡・尾崎堂ノ鼻遺跡があり、鎌倉時代～室町時代に属するが、室町時代のものが多い。

原ノ下遺跡では 9×4 mの範囲に柱穴が集中し、掛内遺跡では12m四方の範囲に柱穴が集中している。外町遺跡では2間四方または2間×3間の掘立柱建物跡であり、一辻6m程度である。井ノ谷遺跡では12m×9mの範囲に柱穴が集中して存在し、掘立柱建物跡が建っていたものと推定される。藤ノ木遺跡でも12m×10mの範囲に柱穴が集中してあり、建物跡が推定される。一方、尾崎堂ノ鼻遺跡では8m×7m程度の3間四方の建物と10m×6m程度の2間×3間の建物2棟、6m×4m程度の2間四方の建物2棟が検出されているが、同時に存在したのは2間×3間と2間四方の建物の2棟のみである。

このように、狭い範囲に掘立柱建物が1棟のみ、あるいは小規模な建物がせいぜい2棟であり、1棟のみの場合も原ノ下遺跡・外町遺跡・尾崎堂ノ鼻遺跡では規模が小さく、掛内遺跡や井ノ谷遺跡・藤ノ木遺跡では比較的規模が大きいが、1棟のみである。

このように、狭い範囲にのみ小規模な建物跡が存在している状況を小規模集落と呼ぶことにする。

このような小規模集落は掛内遺跡では15世紀、外町遺跡でも15世紀、井ノ谷遺跡でも15～16世紀と考えられる。一方、藤ノ木遺跡では遺構出土土器から13世紀後半～14世紀代の年代が与えられる。

現在の淡路北半地域の丘陵上の集落の状況は、家がまとまっているが、その屋敷地が広く、隣家とはかなり離れて存在している状況である。したがって、一軒の家の建物群はまとまっているが、家ごとに離れているのである。このような状況は外町遺跡をはじめとする小規模集落と同様と考えられ、遙くとも15世紀にはほぼ現在の集落のありかたと同様であったと考えられ、その一部は藤ノ木遺跡に見られるように、13世紀後半から出現していたのである。また、外町遺跡をはじめ掛内遺跡・井ノ谷遺跡の出土遺物が示すように、これらの遺跡でも13世紀の段階から出現していた可能性が高い。

これら的小規模集落の成立については、その生産基盤を何に求めるかが問題になってくるであろう。この点については、ここでは水田耕作をその理由としてあげておきたい。すなわち、平安時代末～鎌倉時代にかけての播磨地域では土地区画の再編成（いわゆる条里制）が行われたと推定されている。したがって、同時に耕地の拡大が行われたことは想像に難くないのである。また、これらは、土木工事を含めた農業技術の進展に裏付けられたものであろう。農業技術の進展は、淡路地域についても同様であったと推察され、これまで低地や山間部の谷以外では技術的に不可能であった中位の丘陵上も開発され、耕地として利用されていったものと思われる。これには、北淡路の地盤が軟質の地盤であり、しかも高いところにも湧水点が存在しているといった特性も見逃してはならないことであろう。

現在、北淡路ではさらに高い丘陵上にも棚田が多く存在しているが、その開発が13世紀頃まで遡ることが推察されるのである。

(岸木)

第3節 出土瓦器塊について

淡路の瓦器塊については、未だ資料的に少なく、研究の進展が見られない状況にある。

淡路島内では昭和53年以降、淡路縦貫道関係の発掘調査によって大規模発掘調査件数が飛躍的に増加しているが、瓦器塊が比較的まとまって出土しているのは、鉢田遺跡と森遺跡のみである。

今回報告した遺跡でも、比較的多く出土した藤ノ木遺跡以外は平見遺跡、尾崎塙ノ森遺跡で僅かに出土しているにすぎない。

これらの瓦器塊はいずれも口縁部内側に沈線は施さず、外面の指頭圧痕が多く、暗紋は太く無造作に施され、口縁部外面のヨコナデが強調され、口縁部は外反気味で、口縁部を一段ナデするものもある。これらが示す特徴は、和泉型瓦器塊の範疇でとらえられるものである。

藤ノ木遺跡出土瓦器塊で、その特徴をもう少し細かくみてみることにする。

132と145・149は瓦器塊と呼ぶに相応しい色調を呈しているが、133・142~144・147は須恵器のような色調を呈する。ただし、口縁部外面のみは焼成されている。また、底部外面も高台貼り付けであり、須恵器底部外面に見られるような糸切りのものは認められない。しかし、一見すると、須恵器のような瓦器であり、製作技法は瓦器であるが、焼成方法は須恵器と同様となっている。

淡路では当該時期の須恵器窯跡で明確なものは三原町佐礼尾窯跡があり、陶瓦窯である。他には洲本市宮林瓦窯跡が陶瓦兼業もしくは須恵器窯存在の可能性が指摘されている。

淡路は東播系須恵器と瓦器塊が混在する地域であるが、当地域でひろく須恵器も焼成されていたとすれば、藤ノ木遺跡出土須恵器塊の焼成方法と瓦器塊の焼成方法が同様であることから、瓦器塊についても同じ系統の工人により焼成されていた可能性が高い。

一方、藤ノ木遺跡の須恵器色を呈する133・142~144・147は、先述の和泉型瓦器塊の特徴は示しているのであるが、その形態的特徴において様相を若干異にしている。すなわち、底部から体部へは平底状にほぼ水平に大きく拡張し、腰部は強く屈曲して体部が斜め上方にほぼ直線的にのび、断面三角もししくは逆台形の貼り付け高台は腰部よりかなり内側に貼り付けされている。この形態は「近江型」の中に類似例が存在するが、淡路出土の瓦器は「近江型」のように大和型をもとにした特徴は示さない。

この形態の瓦器塊は三原郡西淡町鉢田遺跡南地区溝3（SSD-3）で多量の土師器・白磁碗などとともに30点以上出土した瓦器塊中の1点(627)にも典型例が認められ、洲本市森遺跡では類似例が1点(197)出土している。また、これらの典型例では、見込み部の暗紋がすべて粗い平行線紋となっていることも特徴としてあげられるであろう。このタイプの時期的形態変化については不明の段階であるが、鉢田遺跡出土瓦器塊は尾上編のⅡ-2期～Ⅲ-2期にわたっており、森遺跡のものはⅢ-2～3期に属するものであろう。また、森遺跡のⅢ-1前後と考えられる(198)は底部が平底になっていない。一方、藤ノ木遺跡出土の瓦器塊はⅢ-3期以降が人半であり、このタイプは全体の半数近くを占めている。すなわち、このタイプはⅢ-2期頃に出現し、Ⅲ-3期には数多く認められるようになるようである。なお、これらが在地で作製されたか否かについては、周辺近隣の例を調査していない現段階では断言できないが、先にみた焼成法をあわせて考えると、淡路地域で作製された可能性が高いと思われる。

淡路地域の瓦器塊は和泉型に属し、Ⅱ-2期頃が現在のところ最も古い資料であり、Ⅲ期からⅣ期の初頭頃までが最も多く認められる。実年代では12世紀の中頃から存在し、和泉型の変形タイプが12世紀末～13世紀初頭に出現し、13世紀前半にはその数の割合を増してゆくようである。

(岸本)

第4節 淡路島内の古墳について

淡路島内に所在する古墳はすでに破壊されたものも含め、その数は130基以上にのぼる。それらのうち前・中期古墳あるいは前・中期と推定される古墳は3基程度で、その大半が後期古墳であり、横穴式石室や堅穴式小石室（小堅穴）を内部主体とするものである。

今回報告した古墳でも、大木谷古墳は横穴式石室をもつ後期古墳、篠鼻山1号墳は堅穴式小石室であるが、後期古墳である。両者とも海を見下ろせる位置には何時期に築かれている。しかし、大木谷古墳と篠鼻山1号墳では、内部主体の内容の違いのほかに、大木谷古墳が単独墳、篠鼻山古墳は数基が群集して築かれていたようである点も異なっている。

以下、淡路島の古墳を概観し、これらの点について述べることとする。

淡路島内の後期古墳の内部主体は、先述のように、横穴式石室と堅穴式小石室があり、ほかに箱式石棺も存在するが、数は少ない。まず、横穴式石室をみると、西淡町ハバ古墳や洲本市明田丸山古墳、洲本市曲田山古墳、²⁶ 南淡町西山北古墳、南淡町野田山古墳などが淡路島内の大型横穴式石室で、ハバ古墳ではその幅が2.56mを測り、明田丸山古墳では石室幅2mである。西山北古墳では1.89mで、曲田山古墳、野田山古墳では1.7mである。一方、幅が狭いものでは洲本市平安浦岡古墳が最も幅が小さく、0.92mである。その他の横穴式石室では、洲本市厚浜台2号墳が石室幅1.6m、厚浜台1号墳は1.15m、洲本市亀谷古墳は1.3m、西淡町しだまる1・2号墳はとともに幅1.5m、²⁷ 西淡町沖ノ島2・1号墳はそれぞれ1.3、1.27mで、五色町築穴古墳は約1.5m、淡路町石の寝屋1号墳は1.3m、一宮町大木谷古墳は推定1.3m、南淡町西山南古墳は1.09mである。淡路島内の横穴式石室の規模は、平安浦岡古墳以外はすべて石室幅1m以上である。なお、五色町愛宕山1号墳も玄室幅1.77mのようであり、津名町奥穴見古墳は玄室が斜めに削られているが、石室側壁距離は約1.5mである。

一方、堅穴式小石室では最も規模が大きいものでは南淡町丸田2号墳が幅1.25mと1mを越えるものであるが、丸田古墳群は2基存在し、いずれも横穴式石室の可能性がある。横穴式石室であれば、1号墳の石室幅が0.9mであり、横穴式石室では最も幅が狭いものとなる。これらについては石室形態が明確になってから判断を行いたい。

堅穴式小石室のうち、幅では第2位の西淡町沖ノ島9号墳では0.95mであり、丸田2号墳以外はすべて1m未満となっている。それらは、沖ノ島5・17・10・4・7・8・3・12・14・11・13・16号墳ではそれぞれ、0.91・0.9・0.82・0.8・0.8・0.7・0.65・0.55・0.47・0.42・0.4・0.3mの石室幅である。西淡町鶴崎5号墳は幅0.9m、西淡町しだまる4号墳は0.7m。南淡町小山古墳は0.6m。三原町佐礼尾古墳は0.7m、三原町入川山1号墳は0.6m、三原町上八木古墳は0.45m、三原町佐礼尾1・2号墳はともに0.4m。洲本市厚浜台8号墳は0・5m、綾町長田山1号墳は0.35m、一宮町明神1号墳は0.58m、北淡町篠鼻山1号墳第3主体は0.7mの石室幅である。淡路島内の堅穴式小石室の石室幅はほぼ1m未満であり、横穴式石室の1m以上とは明確に分離される。

なお、箱式石棺は堅穴式小石室との構造上の差が明瞭に認められるものではないが、箱式石棺と呼ばれているものには洲本市旧城内遺跡や三原町里見山古墳、一宮町明神2号墳がある。旧城内遺跡例は石棺幅0.38m、長さ1.6m、里見山例は幅0.5m、長さ1.8m、明神2号墳例は幅0.49m、長さ0.87mである。すべて幅0.5m以下である。

以上、両型式の石室規模、特に石室幅について見てきたが、横穴式石室が幅1m以上に対し、堅穴式

小石室が1m未満となっている。横穴式石室の方が規模が大きいことと、1mを境として両者が分かれることについて注意しておきたい。

次に、横穴式石室墳で単独墳あるいは単独墳的に存在するものには、一宮町小丸古墳・一宮町枯木古墳・一宮町大木谷古墳・一宮町山門古墳・一宮町郡家（荒神山）古墳・津名町奥穴見古墳・五色町岡の谷古墳・五色町筑穴古墳・洲本市平安浦岡古墳・洲本市曲田山古墳・洲本市龜谷古墳・洲本市明田丸山古墳・西淡町山の口古墳・西淡町ハハ古墳・南淡町西山北古墳・南淡町西山南古墳・南淡町八幡古墳・南淡町野田山古墳があり、横穴式石室墳のみで古墳群をなすものは確実な例を知らない。

一方、堅穴式小石室墳で単独墳あるいは単独墳的に存在するものには、北淡町林古墳・一宮町宇栄我山古墳・三原町上八木古墳・南淡町荒神森古墳・南淡町秋葉神社古墳・南淡町前山古墳・南淡町小山古墳・南淡町黒岩古墳があり、淡路島南西部に多く存在している。また、堅穴式小石室墳のみで群を構成するものには、一宮町明神古墳群（2基）・緑町長田山群集墳（2基）・三原町人田山群集墳（3基）・三原町佐礼尾古墳群（3基）がある。

また、横穴式石室墳と堅穴式小石室墳で古墳群を形成するものでは、五色町愛宕山古墳群・洲本市厚浜台群集墳・西淡町しだまる古墳群・西淡町鎧崎古墳群・西淡町沖ノ島古墳群があり、鎧崎古墳群や沖ノ島古墳群では大半が堅穴式小石室となっている。

横穴式石室墳では単独に存在するものが淡路全域に多く認められることと、堅穴式小石室墳で単独に存在するものが地域的に限られること、横穴式石室墳と堅穴式小石室墳で古墳群を形成するものが存在し、そのなかで大半が堅穴式小石室のものが認められることから、横穴式石室墳と堅穴式小石室墳の被葬者の間に階層差の存在が考えられ、先にみた規模の点でも首肯できるものであろう。

次に横穴式石室、堅穴式小石室の時期について見ることにする。

前期古墳と考えられるコヤダニ古墳は堅穴式石室と推定されており、佐礼尾古墳は後期前半に遡る可能性がある。後期後半の堅穴式小石室では、篠山1号墳が6世紀後半～末、明神1号墳は6世紀第3四半世紀、沖ノ島古墳群の堅穴式小石室は6世紀中頃～7世紀前半である。一方、横穴式石室では、大木谷古墳と郡家（荒神山）古墳が6世紀第3四半世紀、愛宕山古墳群は6世紀末～7世紀初頭、ハハ古墳は6世紀末とされている。沖ノ島古墳群1・2号墳では6世紀末・7世紀前半である。また、奥穴見古墳は6世紀末頃、厚浜台1号墳は6世紀第3四半世紀のようである。横穴式石室は淡路島内では6世紀第3四半世紀のものが現在のところ最も古いようである。一方、堅穴式小石室は佐礼尾古墳を除いても、6世紀中頃には存在しており、横穴式石室よりも古くから存在している。また、両者が混在する古墳群が存在していることから、堅穴式小石室被葬者層に新たに6世紀第3四半世紀頃に横穴式石室被葬者層が現れたと推定できると思われる。

それら被葬者の権力基盤となったものは、三原平野や洲本地域のように豊かな農地を有する地域においては主として農業であったと推定されるが、そのような農地に乏しい地域においては、農業のみでは権力基盤とはなり得なかつたと思われる。それ以外に権力基盤となり得ると推定できる遺物が淡路島西側海岸地域や南西海岸地域の各古墳から出土している。

西側海岸地域では、愛宕山古墳群から製塙土器が出土している。また、明神1号墳からも製塙土器と推定できる粗製の土師器墳が出土している。一方、淡路島南西海岸地域の古墳のうち、沖ノ島古墳群からは浮子・土鍤・釣針のはか、棒状石製品が出土している。この棒状石製品は、同地域の鎧崎古墳群やしだまる古墳群などからも出土しており、製塙に関係する道具あるいはアワビおこしなどと考えられて

いる。後者の用途とすれば、他の遺物と併せて考えて、漁業色が強く認められる。

古墳は権力を誇示するためのモニュメントであり、築山鼻古墳群・大木谷古墳・明神古墳群など西側海岸地域の古墳は海上からよくみえる位置に存在している場合が多い。このことから、淡路島西側海岸地域のこれらの古墳被葬者は、製塩のみならず漁業も行っていたと推定される。一方、淡路島南西海岸地域でも海を見下ろす台地上や小島に古墳を築造しており、かつ、現在も港となっている場所に近接していることから、漁業および海上交通、狭い範囲であろうが、制海権を握っていたことも推測される。この点については、西側海岸についても同様のことが推定できるものと思われる。（岸本）

註

- (1) 石器の材質については、植松 剛氏（兵庫県地学会顧問）よりご教示いただいた。
- (2) 萩野繁泰「近畿地方における中世の須恵器」『東洋陶磁』Vol.14 1994-86年
- (3) 尾上 実「南河内の瓦器輪」藤沢一夫先生古稀記念 古文化論叢 1983年
- (4) 麻島康雄「畿内窯瓦器輪の併行関係と曆年代」『大和の中世土器Ⅱ』大和中古近研究会 1992年
- (5) 池岡きみ子氏よりご教示いただいた。
- (6) 浦上雅史「淡路島の古窯址出土の須恵器について」『淡路考古学研究会誌』第3号 淡路考古学研究会 1980年
- (7) 波毛康宏・浦上雅史「第2章 淡路國」『兵庫県の考古学』 村川行弘編 吉川弘文館 1996年
- (8) 森 隆「近江出土の瓦器輪に関する若干の検討」『大和の中世土器Ⅱ』 前出。
- (9) 吉澤雅仁・岸本一宏『近田兼蔵－淡路窯貫道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』 兵庫県文化財調査報告書 第78冊 兵庫県教育委員会 1990年
- (10) 吉澤雅仁・岸本一宏ほか『森遺跡－淡路窯貫道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ－』 兵庫県文化財調査報告書 第55冊 兵庫県教育委員会 1988年
- (11) 浦上雅史「淡路島の古窯時代」洲本市立淡路文化史料館 1993年
以下、各古墳のデータで特に註を設けない場合、本註文献による。
- (12) 波毛康宏「ハバ古墳発掘調査報告」『竹ベラ』第6号 淡路考古学研究会 1986年
- (13) 「明田丸山古墳実測調査報告」『淡路考古学研究会誌』第3号 前出。
- (14) 浦上雅史・金田靖史・間野慶隆「曲田山古墳石室実測調査報告」『淡路考古学研究会誌』第2号 淡路考古学研究会 1974年
- (15) 岡山真美「淡路・沖ノ島一淡路・沖ノ島古墳群発掘調査報告」 西淡町教育委員会 1987年
- (16) 「五色町史」 五色町史編纂委員会 1986年
- (17) 森 和重「淡路島北端の古墳2基」『淡路考古学研究会誌』第3号 前出。
- (18) 岸本 稔「ハバ古墳について」『竹ベラ』第6号 前出。
- (19) 津名郡町村会 伊藤宏幸氏のご教示による。
- (20) 広岡俊二「奥穴見古墳について」『淡路考古学ニュース』第9号 1974年
- (21) 三原郡広域事務組合 板口弘賀氏のご教示による。
- (22) 阿久津 久彌「明神古墳群」一宮町教育委員会 1972年
- (23) 橋本龍一・桜下 勝「日本の古代遺跡 3 兵庫南部」 保育社 1984年
- (24) 船崎古墳群では11基中10基、沖ノ島古墳群では15基中13基が竪穴式小石室である。
- (25) 須恵器による各古墳の時期については、田辺昭三「須恵器大成」 角川書店 1981年による。
- (26) 小川良太「資料4 郡家古墳」『明神古墳群』 前出。
- (27) 波毛康宏・水田誠吾「淡路の古墳 副葬品は語る」 1991年 中の写真。
- (28) 岸本 稔「古事記・日本書紀と淡路の考古学」『竹ベラ』第1号 淡路考古学研究会 1983年
- (29) 森 清一「淡牛・古墳時代の漁労・製塩工副葬の意味」『日本の古代 8 海人の伝統』 大林太良編 中央公論社 1987年。また、貝類の採集用の漁具と考る説もある。橋本誠一「淡路の海人」『万葉集の考古学』 森 浩一編 筑摩書房 1984年。
- (30) 岸本 稔「淡路島の歴史的環境（縄文時代～古墳時代）」『明神古墳群』 前出ほか、岡本氏の折衝。

写 真 図 版



調査区遠景と周辺の地形（南から）



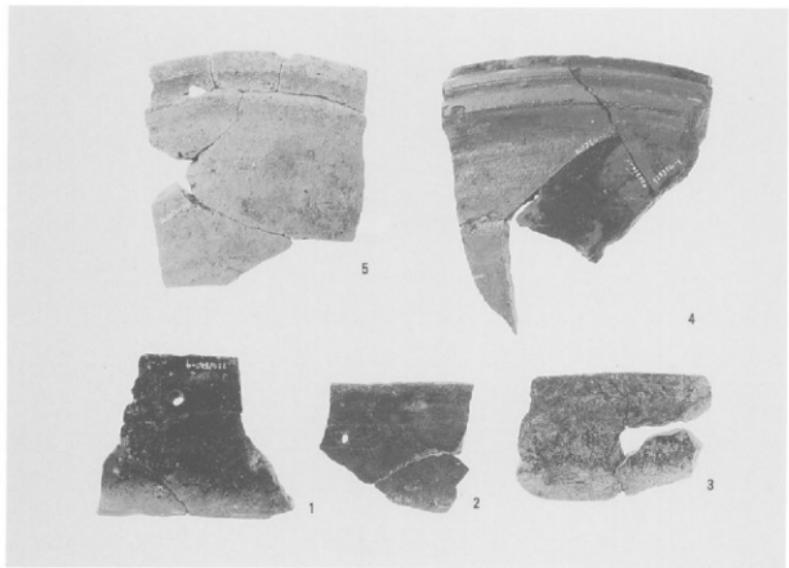
調査区全景（東上空から）



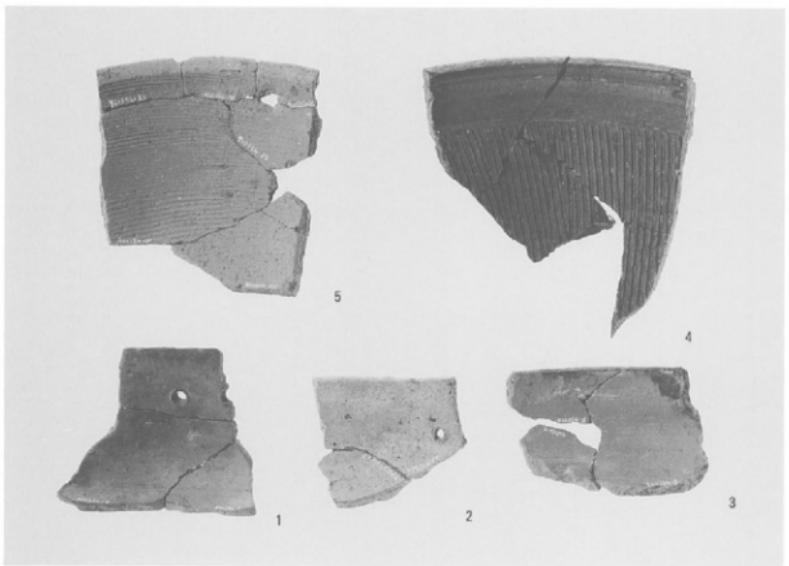
調査区全景（南西から）



西部遺構群（北から）



出土土器（外面）



出土土器（内面）

大木谷古墳



古墳遠景と周辺の地形（西北西から）



古墳の立地（南東から）

大木谷古墳



調査区全景（南東上空から）



調査区全景（南上空から）

大木谷古墳



墓墳内埋土断面（東から）

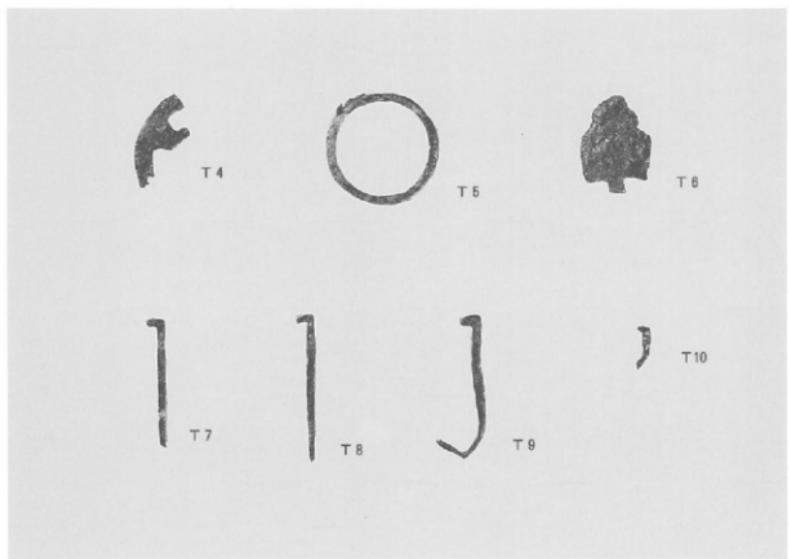


墓墳内埋土断面（南から）

大木谷古墳



検出遺構全景（南から）



出土鉄器



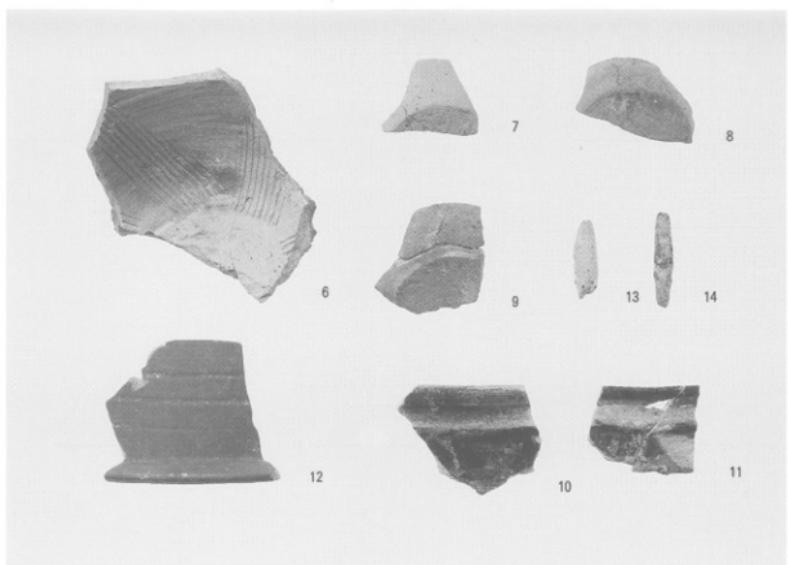
調査区遠景と周辺の地形（南から）



調査区調査前全景（東から）



遺構全景（南南西から）

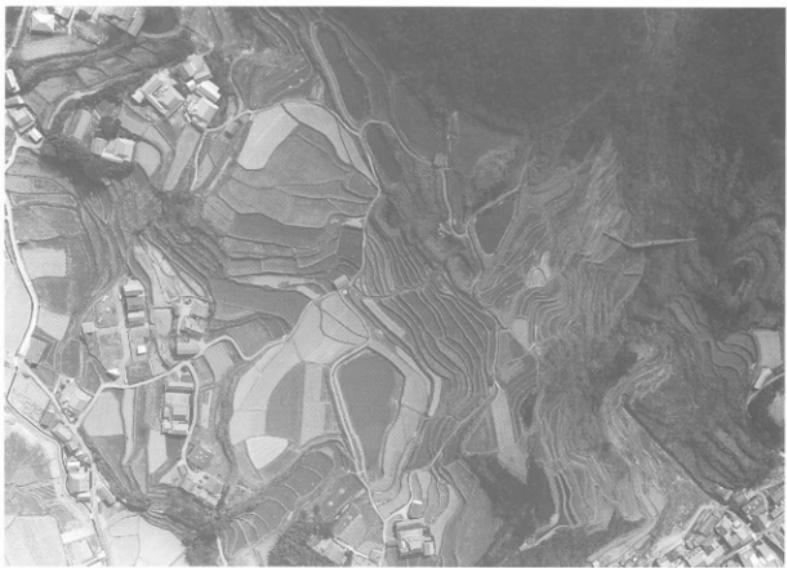


出土遺物

築鼻山古墳群



古墳群遠景と周辺の地形（南西から）



古墳群遠景と周辺の地形（北西から）

築鼻山古墳群



古墳群遠景と周辺の地形（南東から）



古墳群遠景と周辺の地形（北北西から）

篠鼻山1号墳



調査区（平成3年度）全景（北西上空から）



調査区（平成4年度）全景（南西上空から）

築鼻山 1号墳

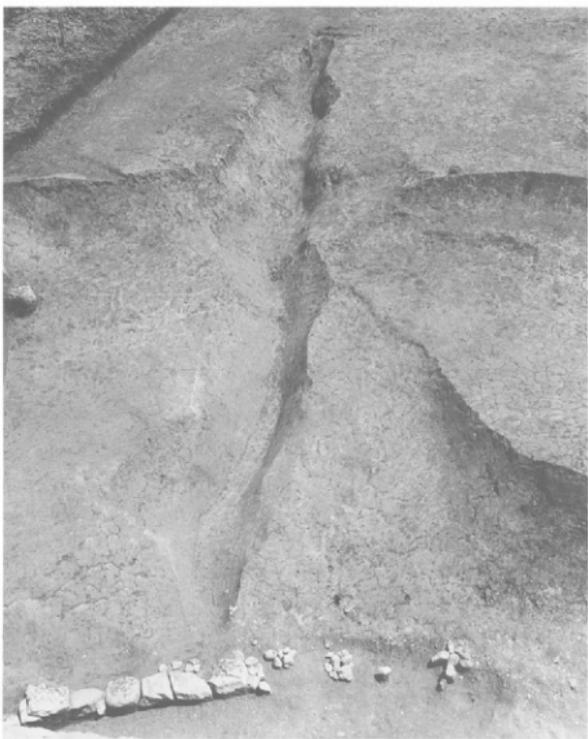


遺構（平成 3 年度）全景（東から）



遺構（平成 4 年度）全景（東から）

築鼻山 1号墳



周溝全景（北から）



遺構（平成4年度）全景（西から）



第1主体 遺物出土状況（西から）



第1主体 全景（東から）



第2主体 検出状況（西から）



第2主体 全景（東から）



第3主体 検出状況（南西から）



第3主体 全景（南西から）

薬鼻山 2号墳



全景（南東から）



周溝（東から）



15

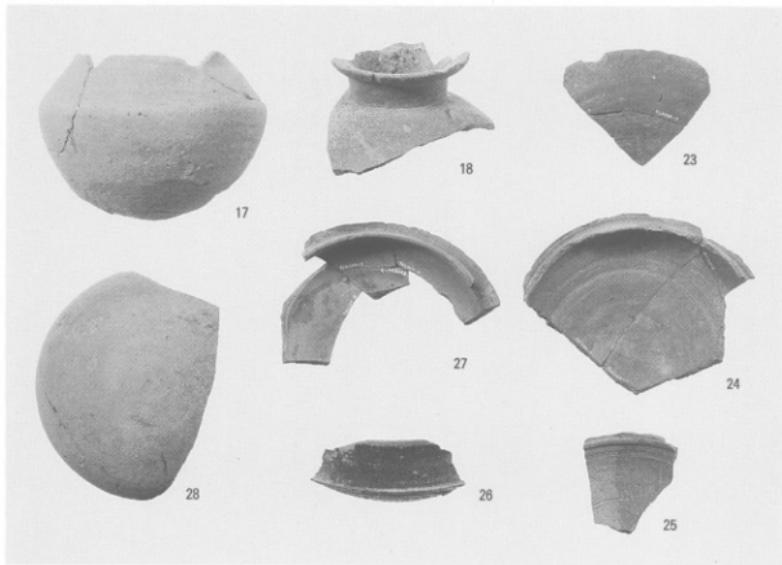


16

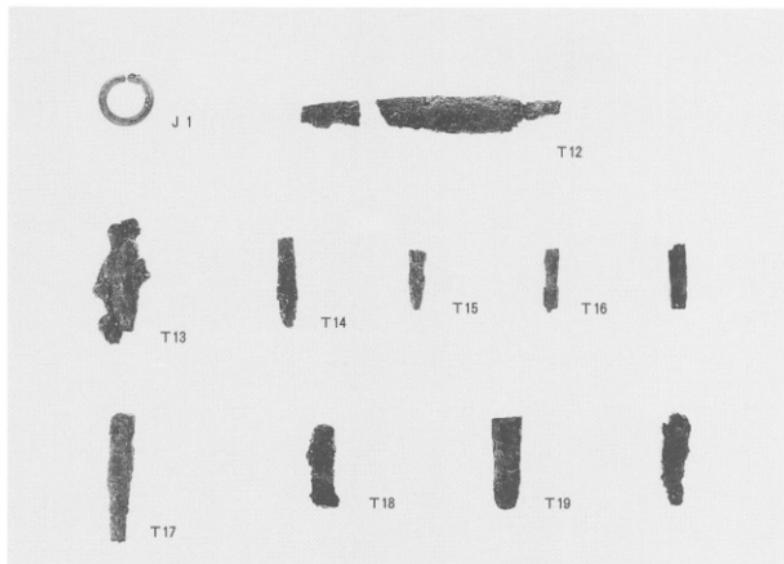


20

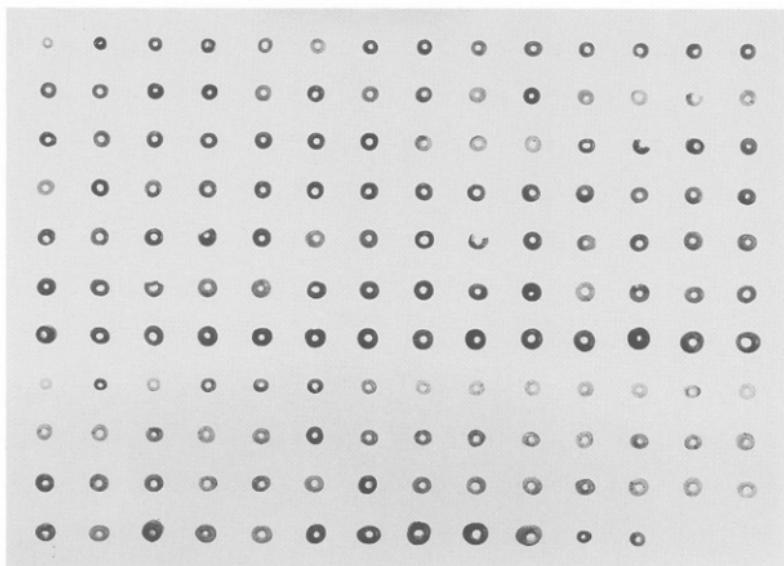
第 1・2 主体出土須恵器



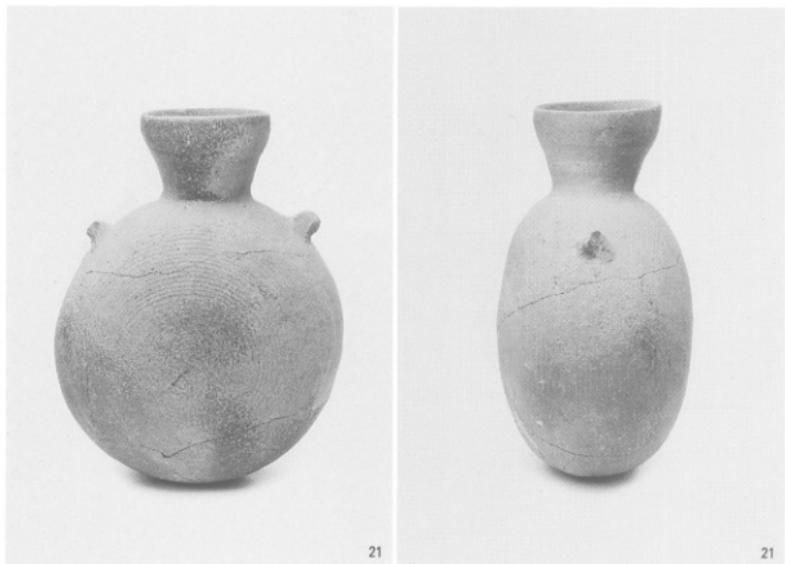
第 1 主体および主体部以外出土須恵器



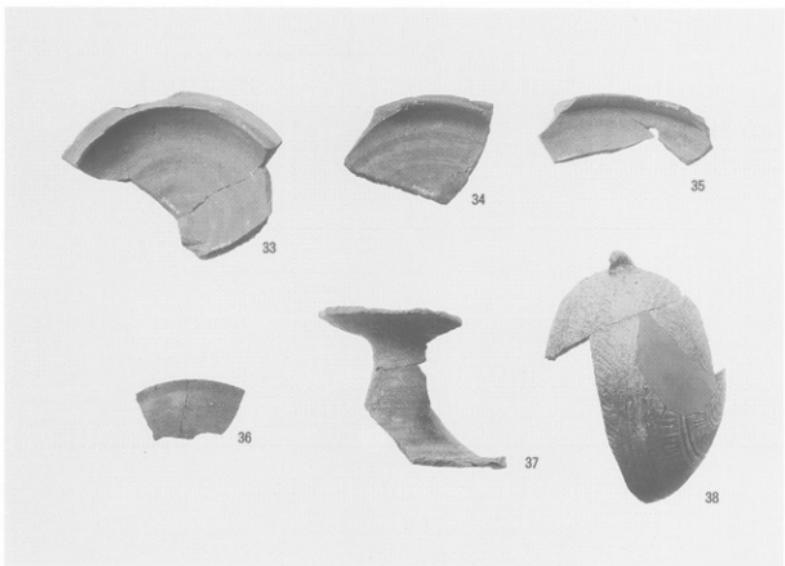
第1主体出土金属器



第1主体出土ガラス小玉



1号墳 第3主体出土提瓶



2号墳 周溝出土須恵器

原ノ下遺跡



調査区遠景と周辺の地形（北から）



調査区遠景と周辺の地形（北東から）

原ノ下遺跡



調査区全景（北東上空から）



遺構全景（南東から）

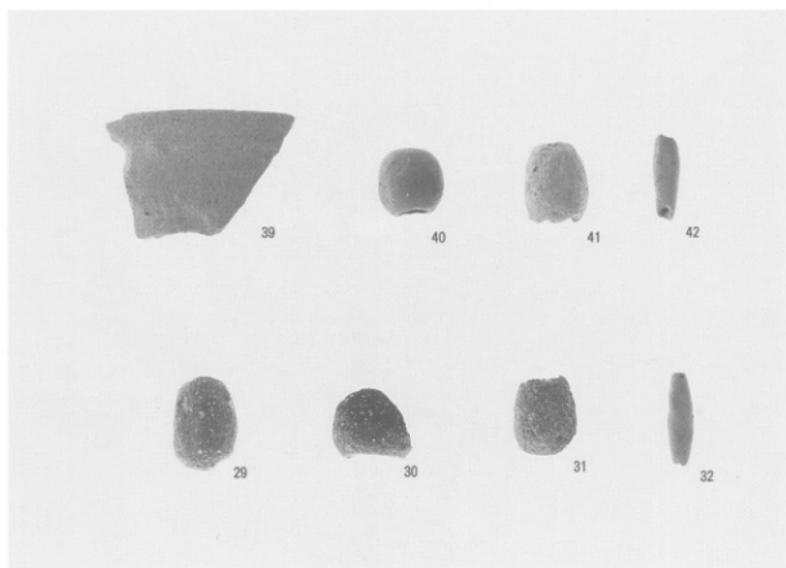
原ノ下遺跡



遺構集中部（南東から）



遺構集中部（北西から）



包含層出土遺物



S. 2

包含層出土一石五輪塔

平見遺跡



調査区遠景と周辺の地形（南東から）



調査区遠景と周辺の地形（北から）

平見遺跡



調査区全景（北西上空から）



調査区全景（西南西から）



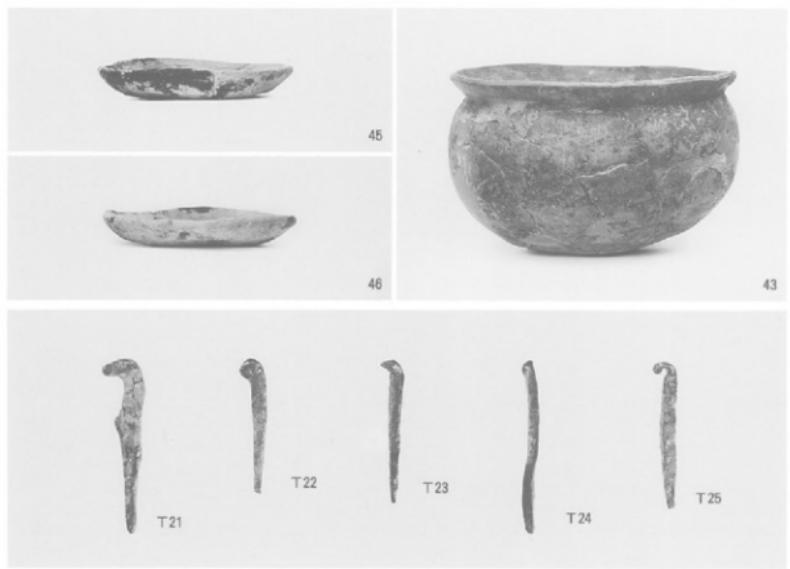
遺構全景（南西から）



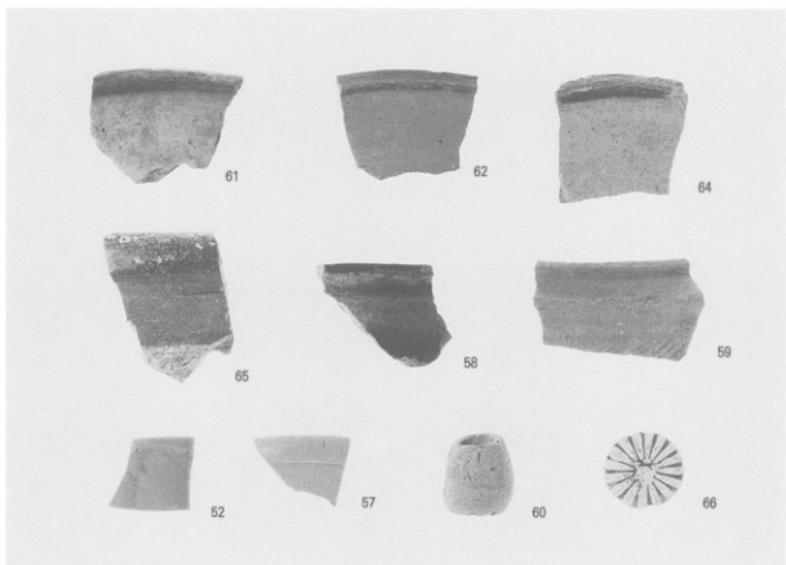
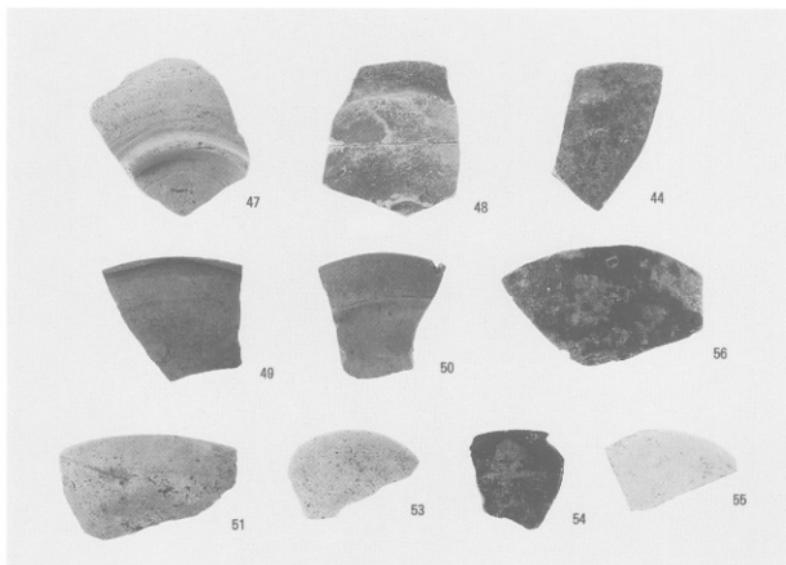
遺構集中部（東北東から）



SX-1 (東北東から)



出土遺物



掛内遺跡



調査区遠景と周辺の地形（北西から）

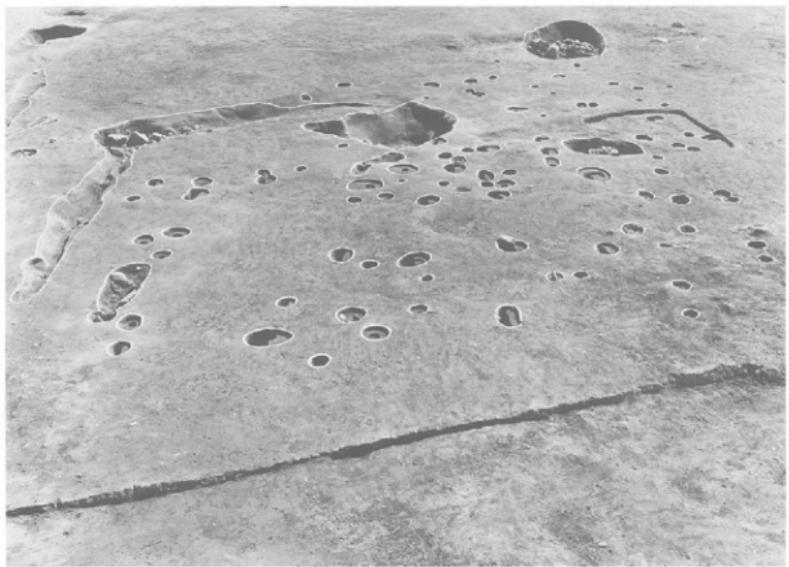


掛内地区全景（北北西上空から）

掛内遺跡



掛内地区全景（北東上空から）



掛内地区柱穴集中部（北西から）

掛内遺跡



SK-05北西部（南から）



79



J 156



T 23



73



T 21



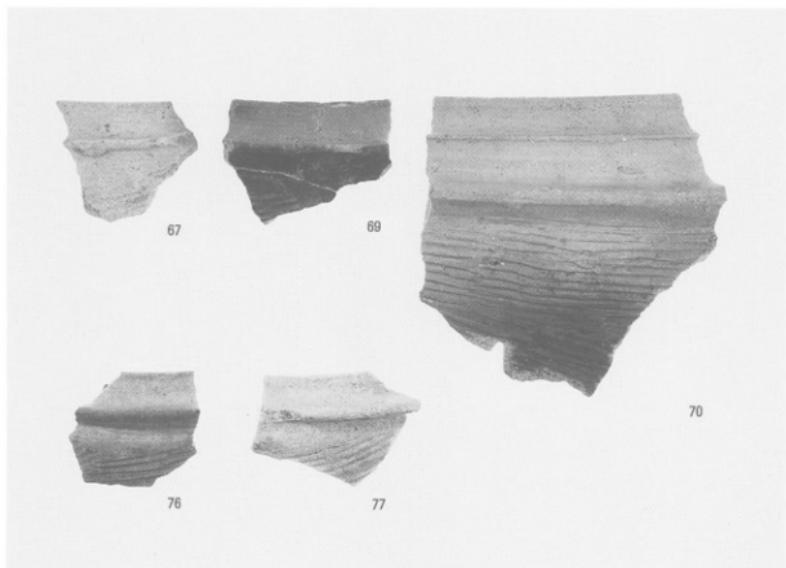
T 22



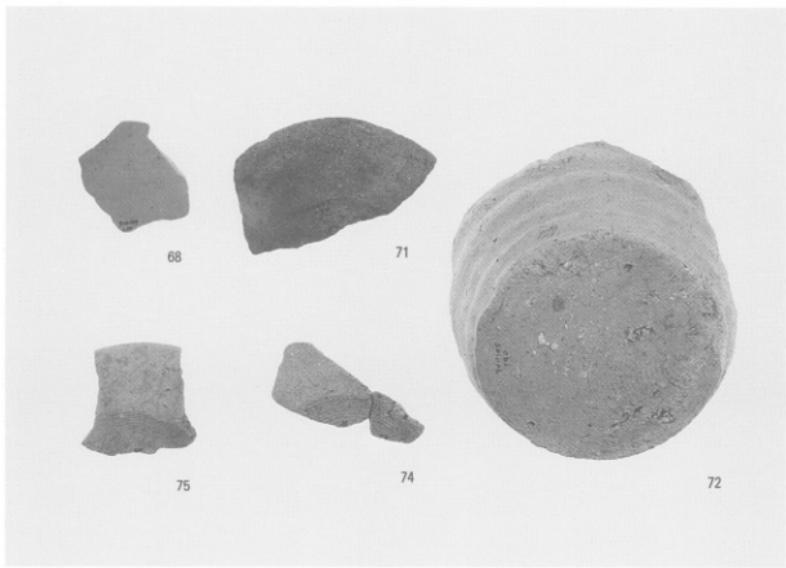
T 24

出土遺物

掛内遺跡

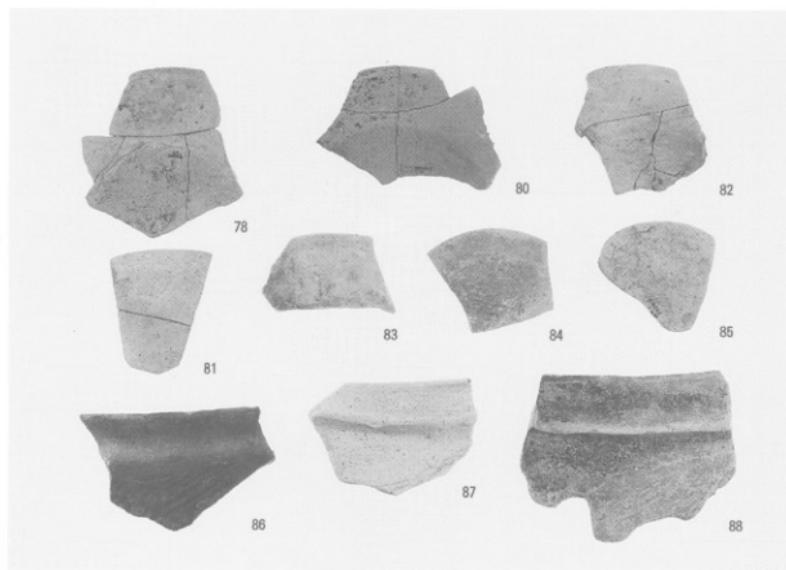


遺構出土土器

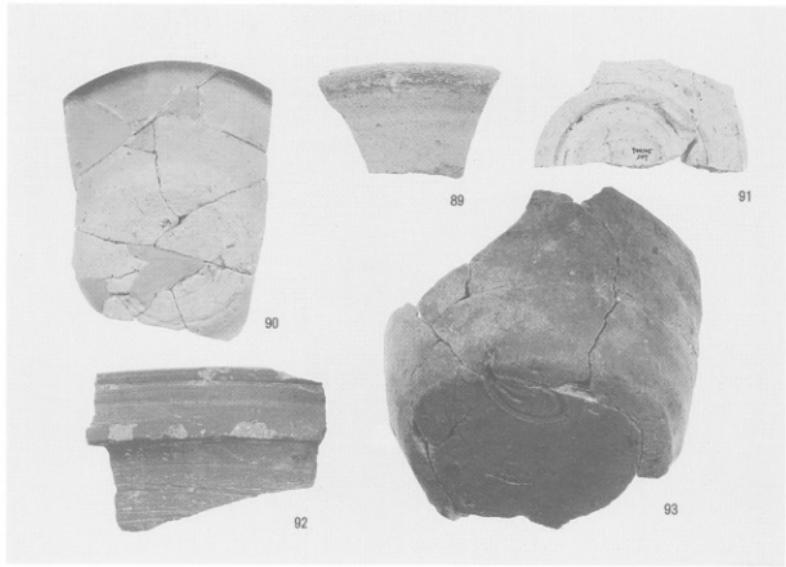


遺構出土土器

掛内遺跡

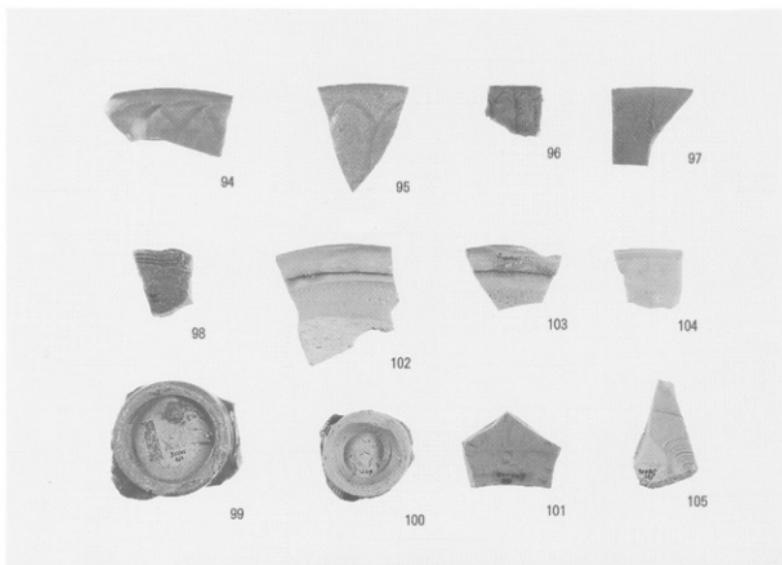


包含層出土土器

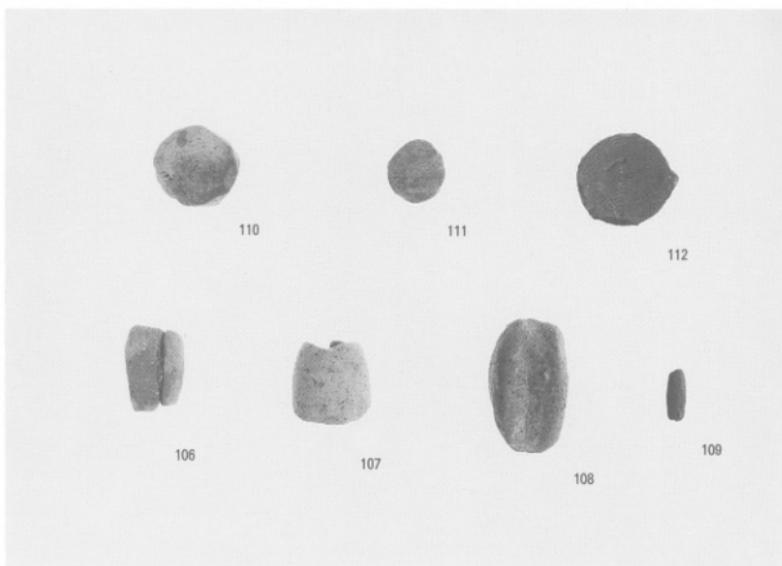


包含層出土土器

掛内遺跡



包含層出土陶磁器



包含層出土土製品

外町遺跡



調査区遠景と周辺の地形（南西から）



調査区全景（南西上空から）

外町遺跡



調査区全景（北東上空から）

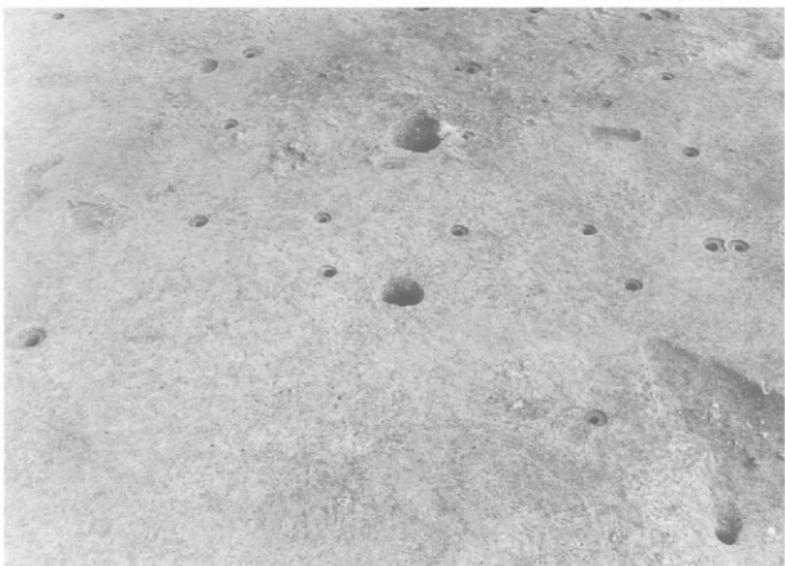


調査区全景（南東上空から）

外町遺跡

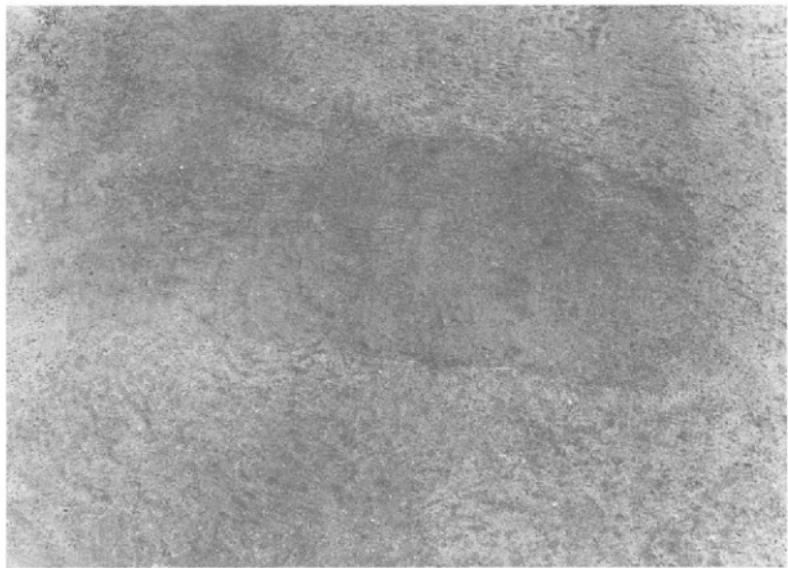


S B - 1 (北北西から)



S B - 1 南部 (北北西から)

外町遺跡



SK-1 検出状況（西南西から）



SK-1 (南から)

外町遺跡



中央部土壌群（北西から）



南西中央部（南西から）

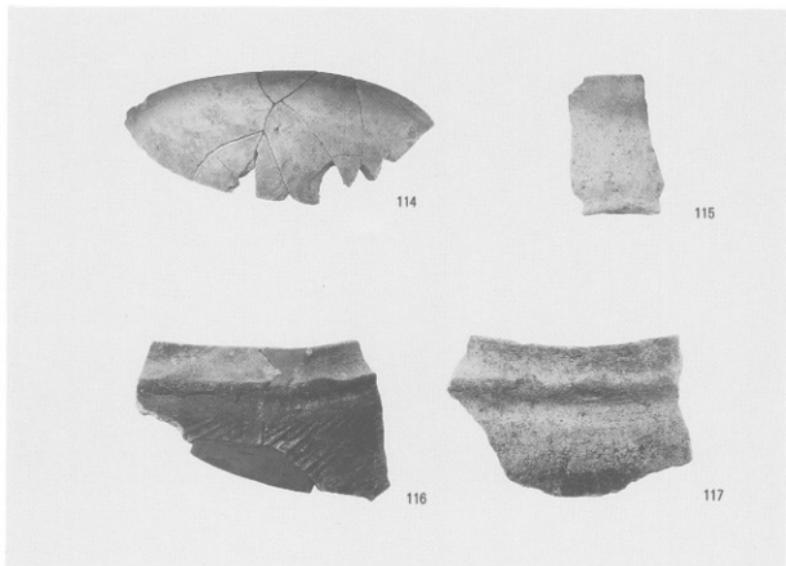


下段遺構群（南西から）

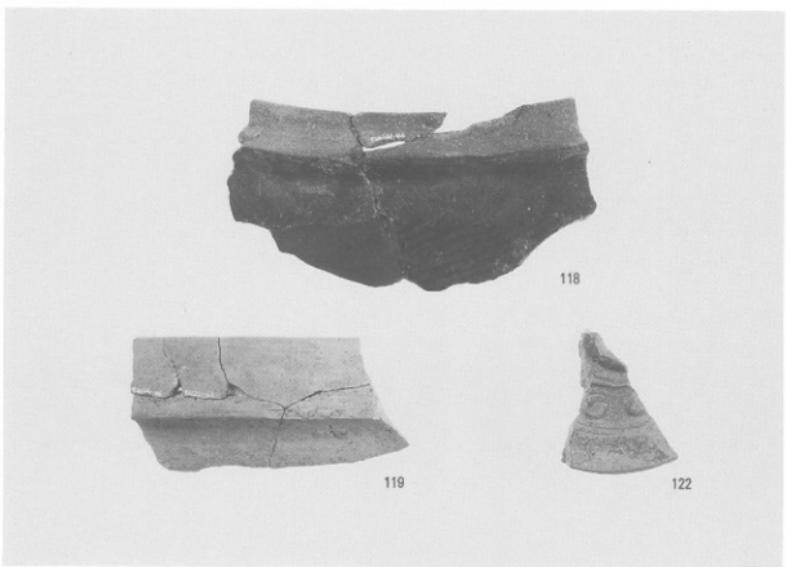


出土遺物

外町遺跡



出土土器



出土土器

井ノ谷遺跡



調査区遠景と周辺の地形（南南西から）



調査区と周辺の地形（南東から）

井ノ谷遺跡



調査区全景（南上空から）



A地区遺構集中部（北上空から）



B地区全景（北西上空から）



B地区全景（南東から）



A地区遺構集中部（東から）



A地区遺構集中部（南から）



A地区遺構集中部（北から）



S X 2~4（南から）



SX-1 (北東から)



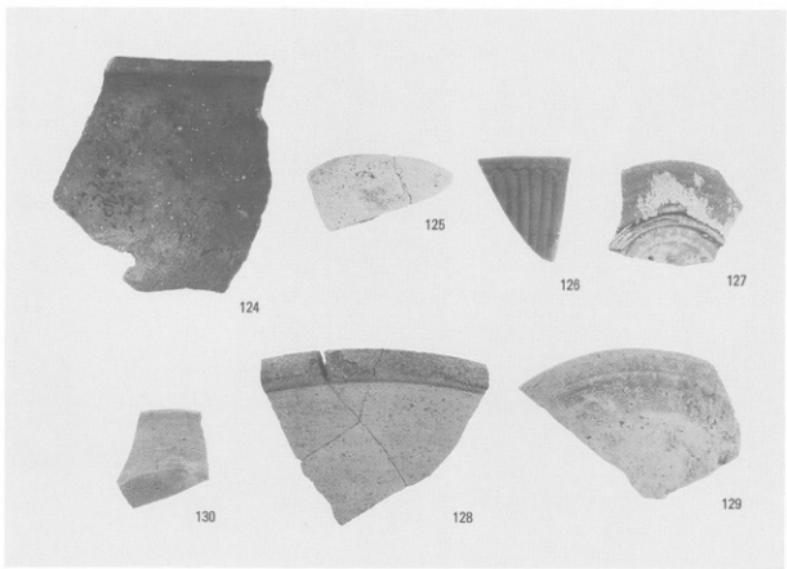
SX-2 (南から)



SK-2 (西から)



SK-2 埋土断面 (南から)



出土土器



調査区全景（南西から）



土壙群（西南西から）

蘿ノ木遺跡



A地区西部（北東から）



A地区中央部（北から）

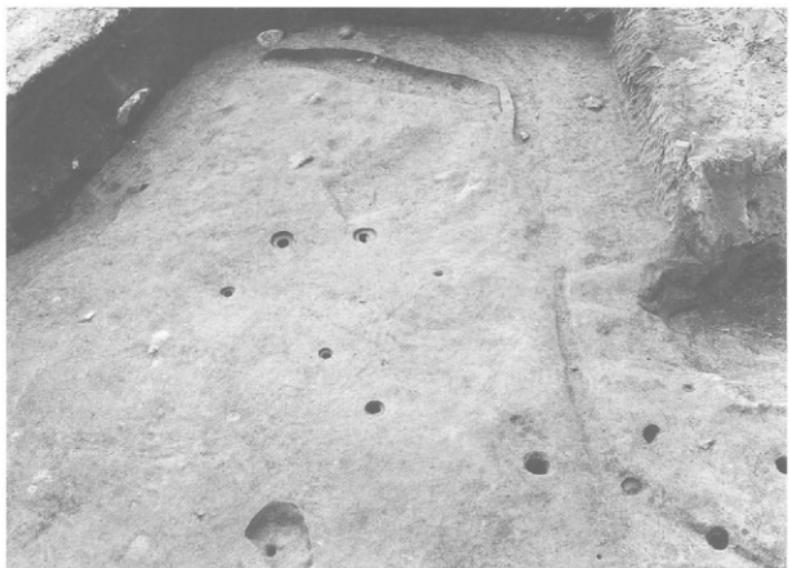


A地区遺構集中部（南東から）



A地区遺構集中部（北西から）

蘿ノ木遺跡



A地区南西部（北東から）

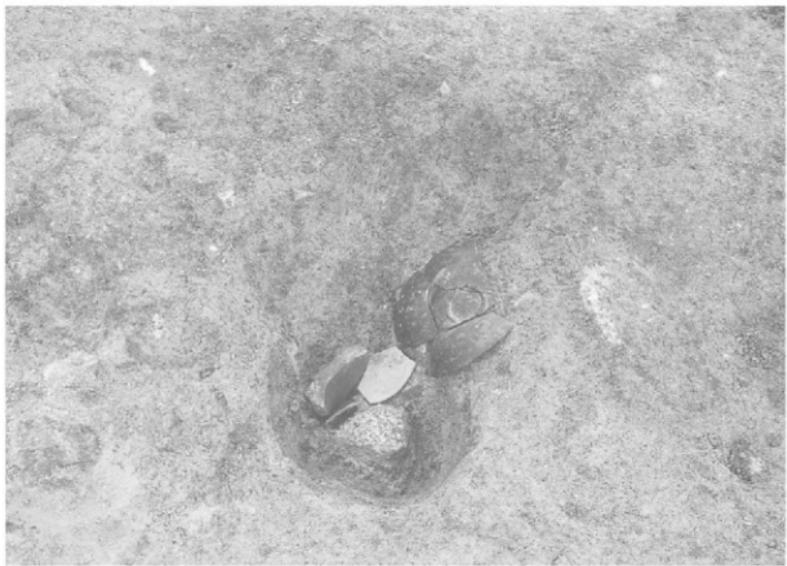


A地区東部（南西から）

藤ノ木遺跡



P-1 遺物出土状況（北から）

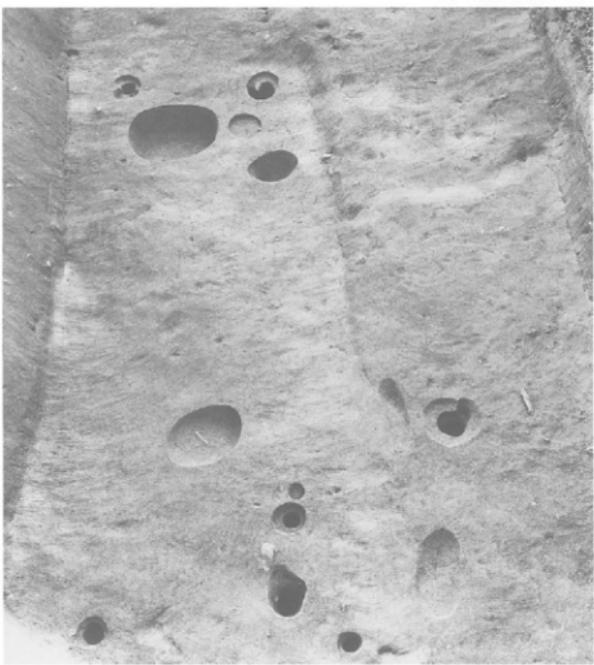


SK-4 遺物出土状況（北から）

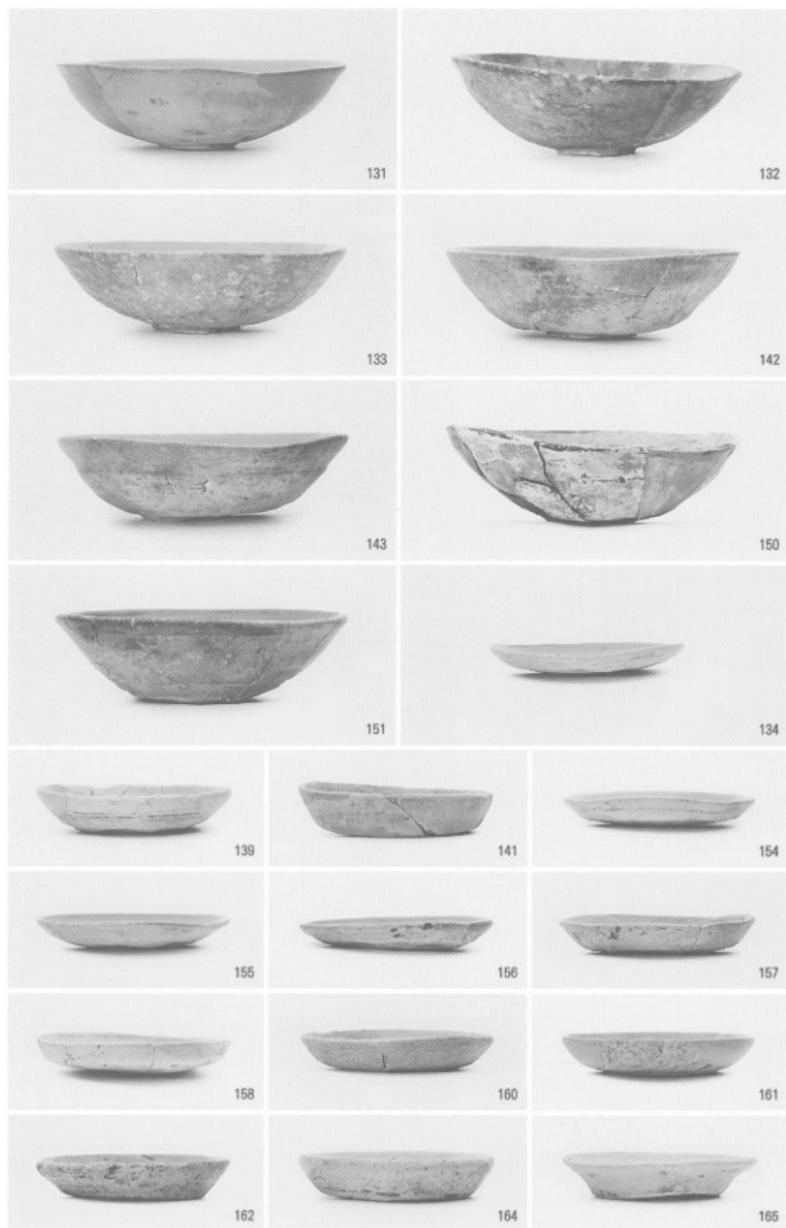
藤ノ木遺跡



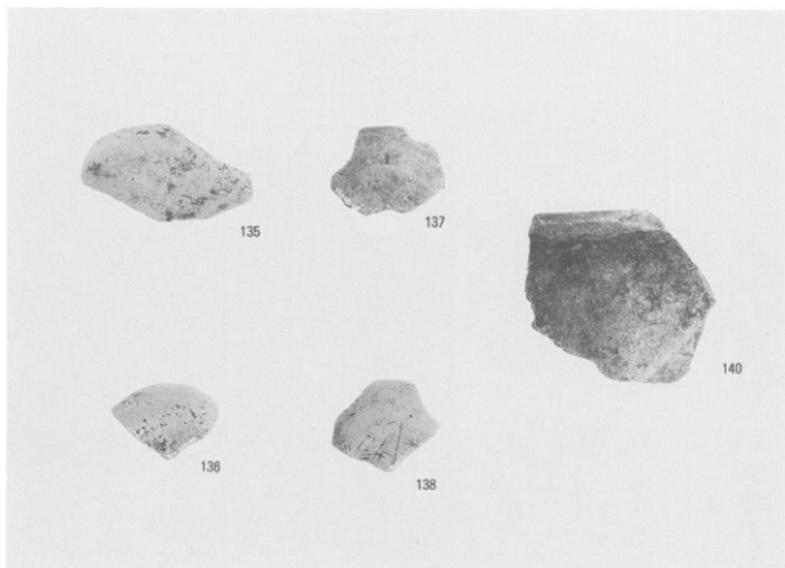
B地区全景（南西から）



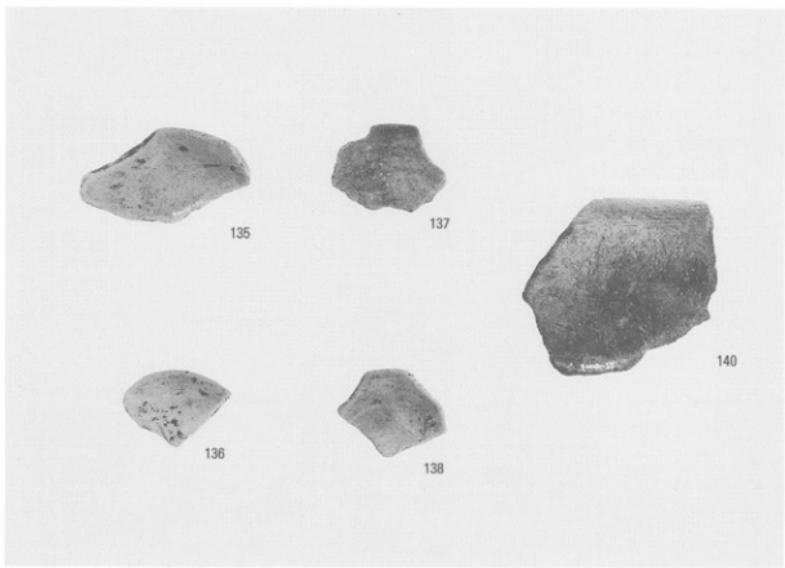
B地区遺構集中部（北東から）



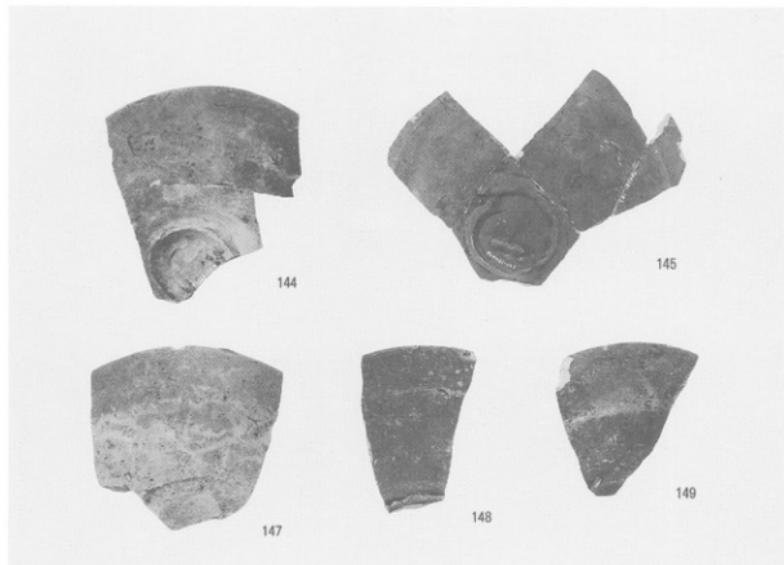
藤ノ木遺跡



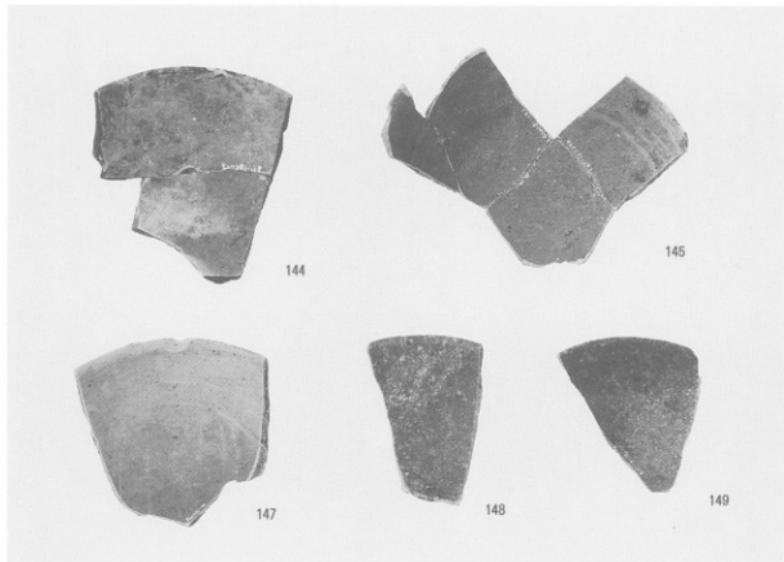
出土土器（外面）



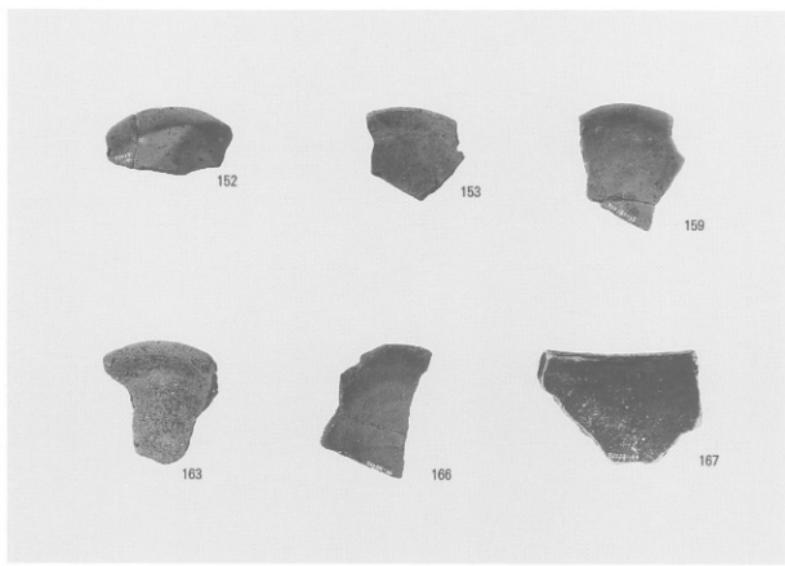
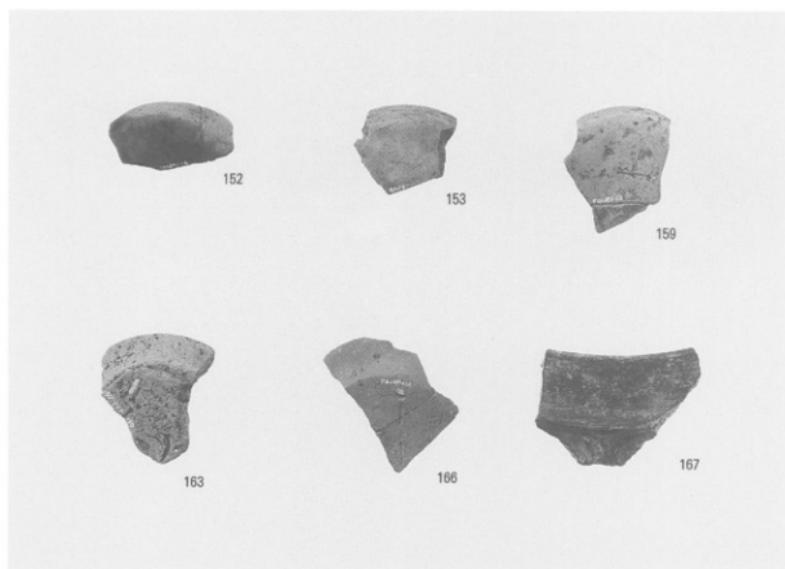
出土土器（内面）

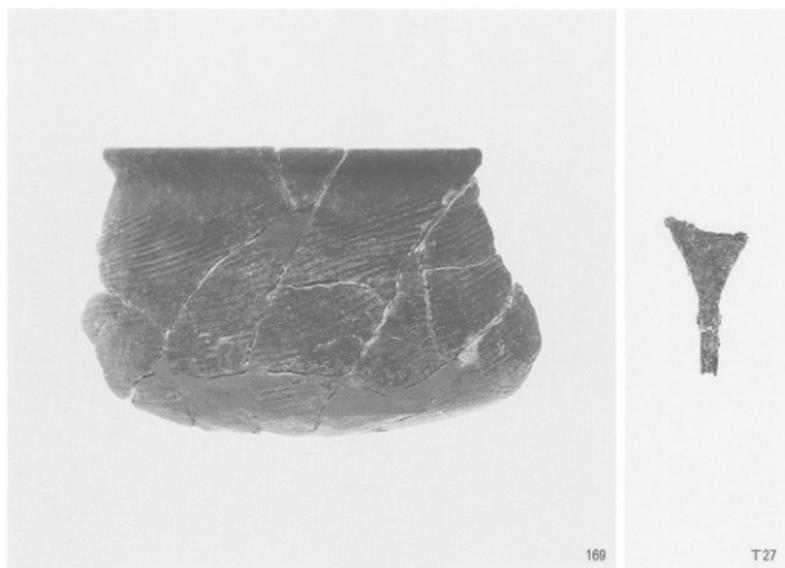


包含層出土瓦器（外面）



包含層出土瓦器（内面）

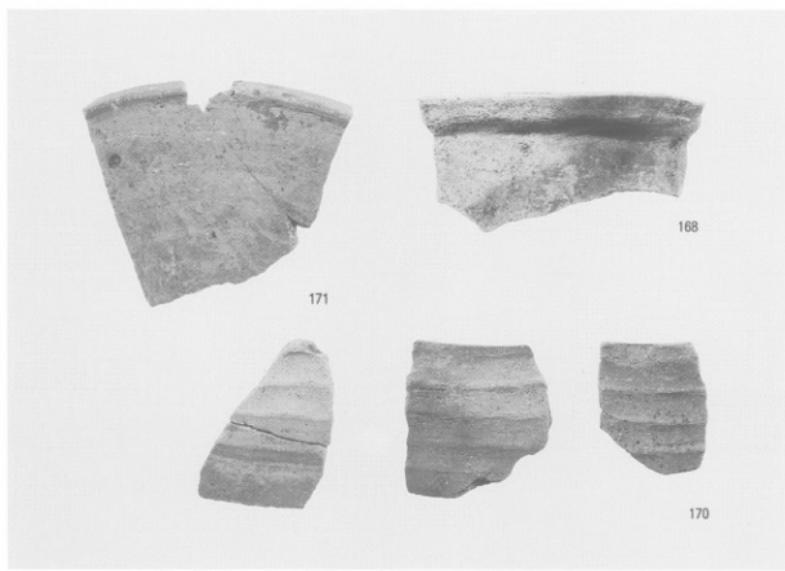




169

T27

出土遺物

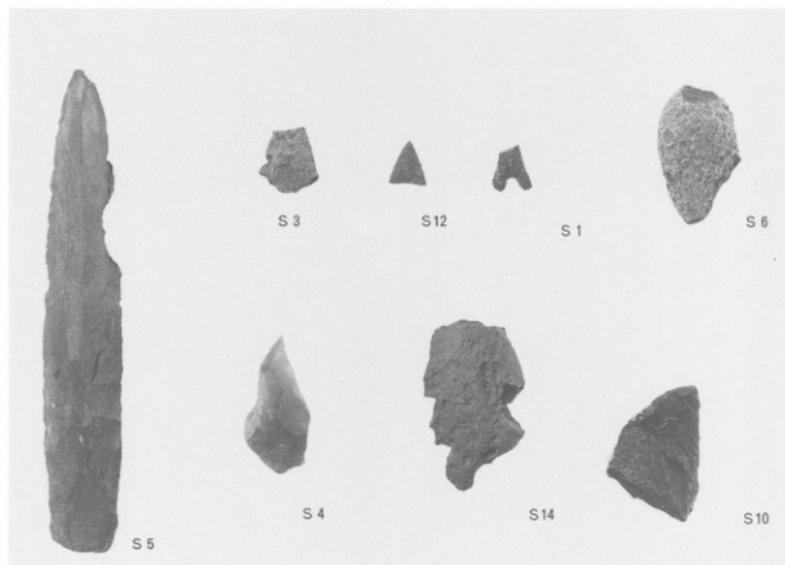


171

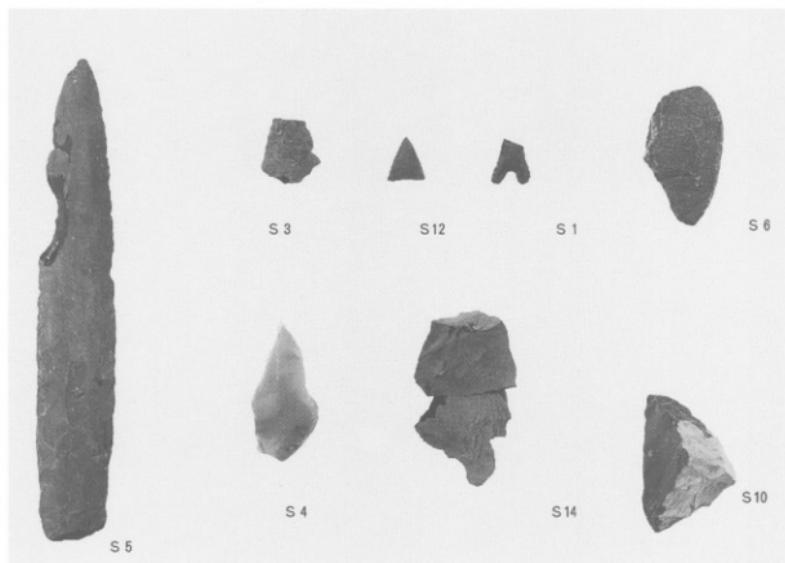
168

170

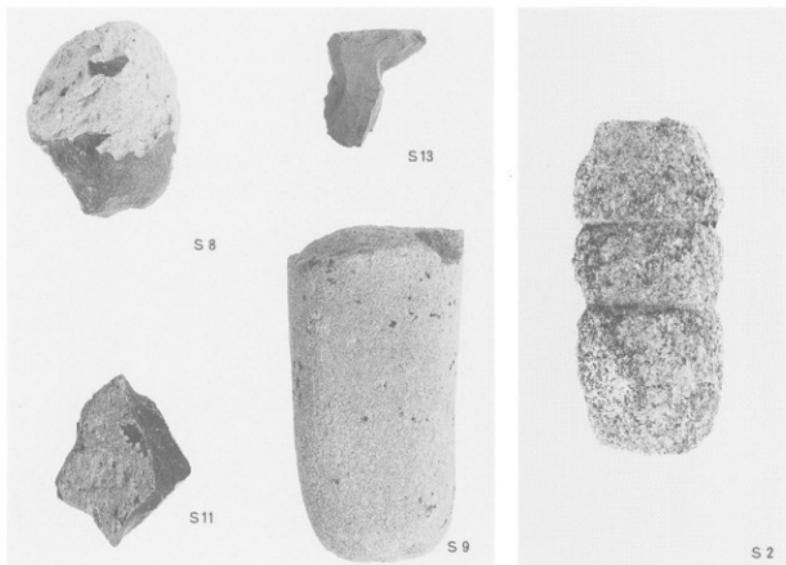
包含層出土土器



各遺跡出土石器（表面）



各遺跡出土石器（裏面）



各遺跡出土石器

尾崎堂ノ鼻遺跡



調査地遠景（南西から）



調査区全景（北東から）

尾崎堂ノ鼻遺跡



下層遺構全景（南西から）



SD-04（南から）

尾崎堂ノ鼻遺跡



SB-02+03 (南から)



SB-04+05 (北から)

尾崎堂ノ鼻遺跡



SK-01 挖出状況（南東から）



SK-01 完掘状況（南から）

尾崎堂ノ鼻遺跡



SD-01 (西から)



SK-02 (南から)



SD-04 瓦器検出土状況



土堀（18）出土状況



鉄器（T37）出土状況

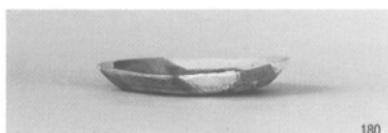


鉄器（T38）出土状況

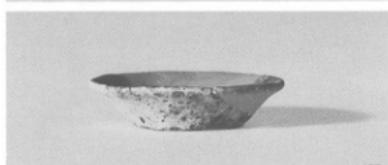


調査区西壁土層

尾崎堂ノ鼻遺跡



180



197



199

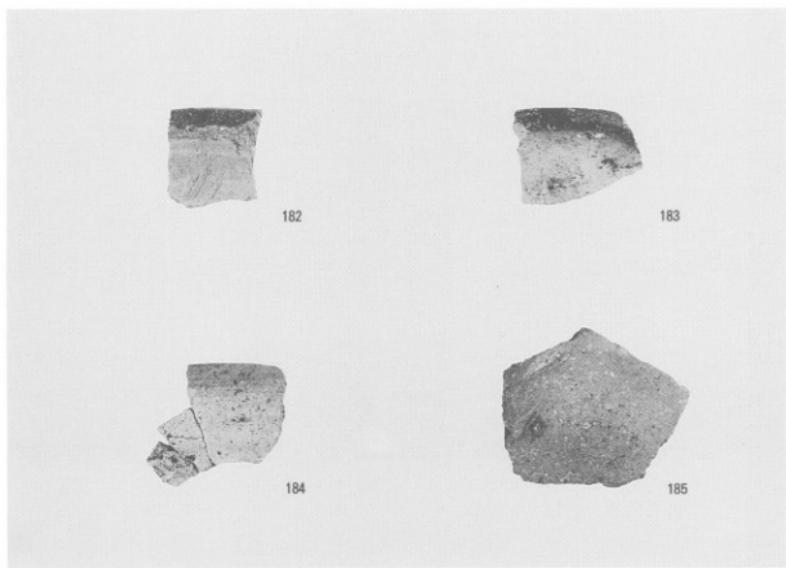


193

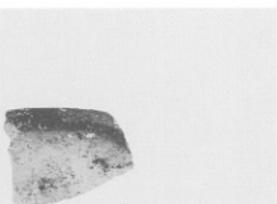


195

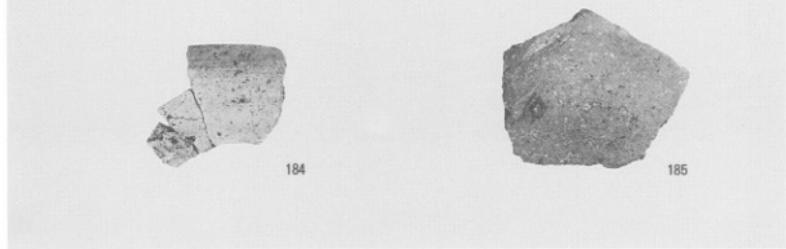
出土土器



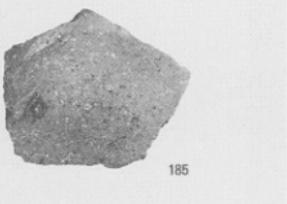
182



183

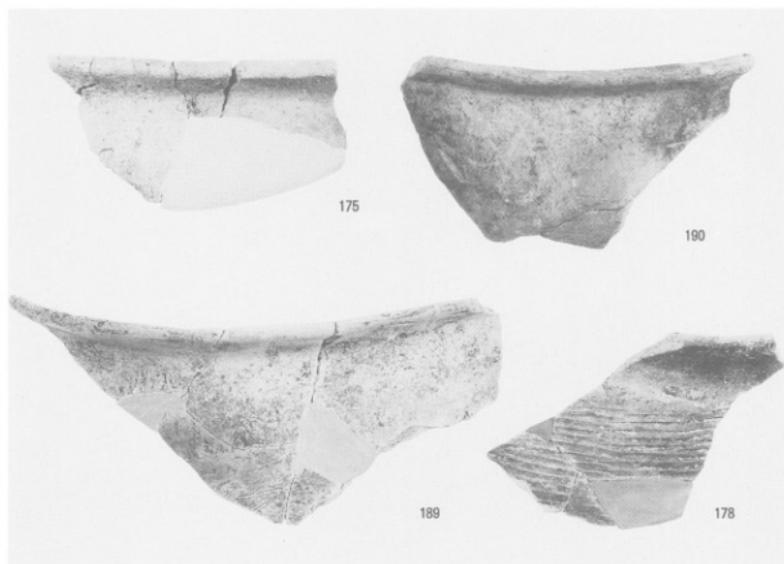


184

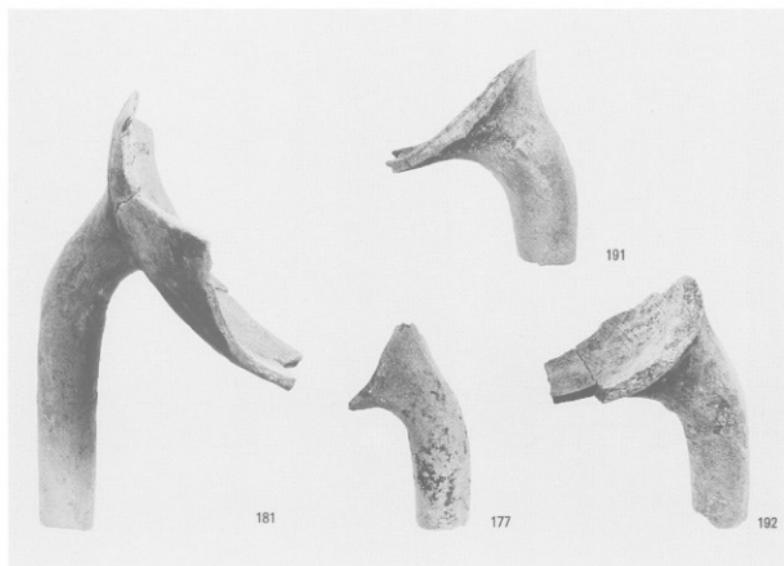


185

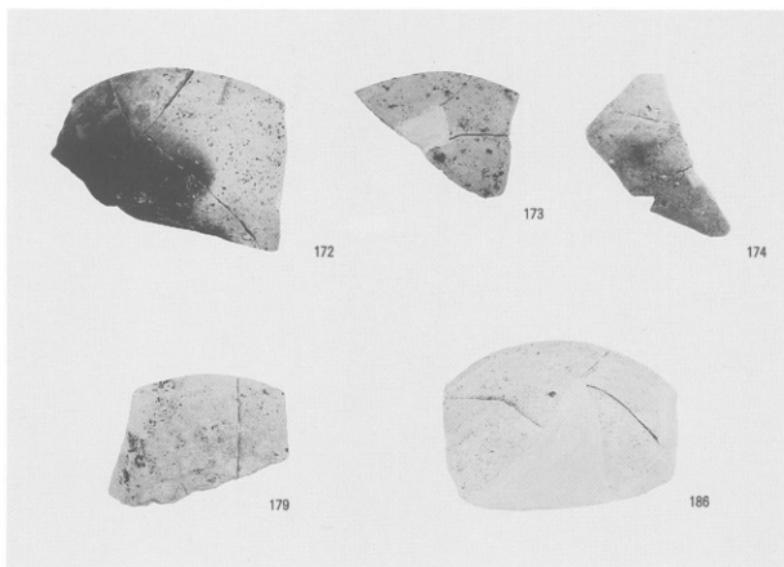
遺構出土須恵器



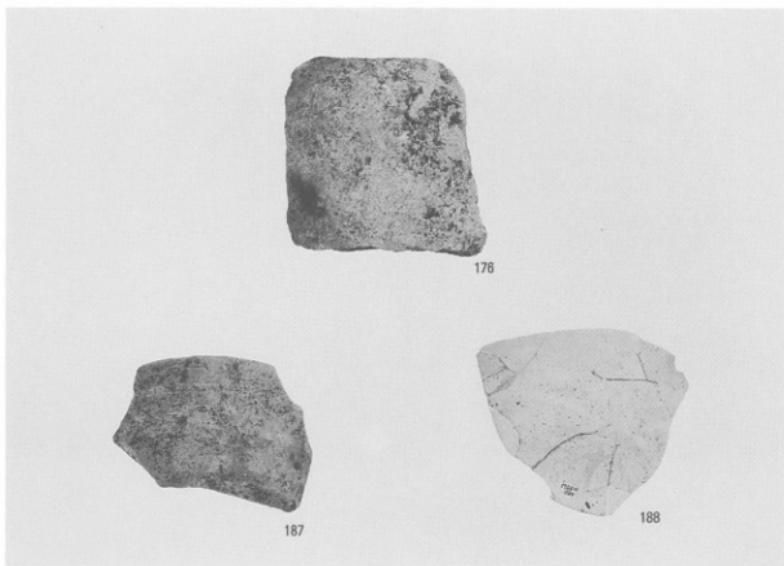
遺構出土土師器 1



遺構出土土師器 2

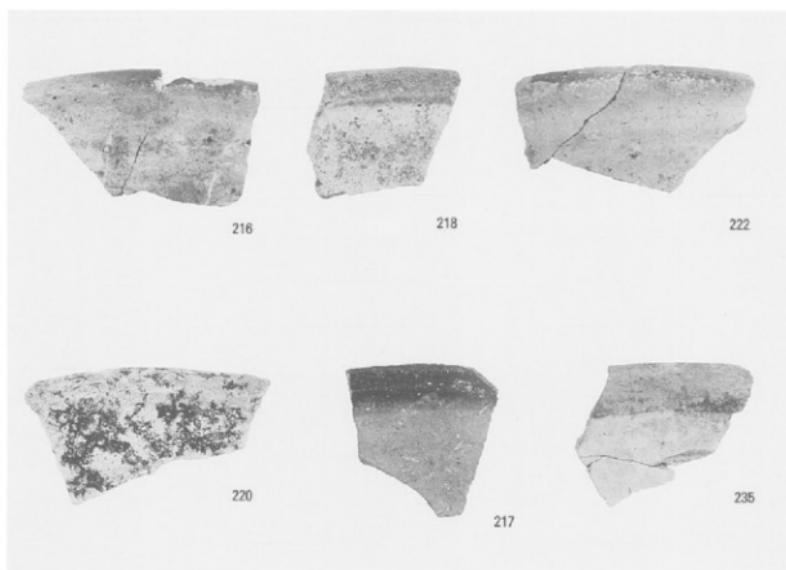


遺構出土土師器 3

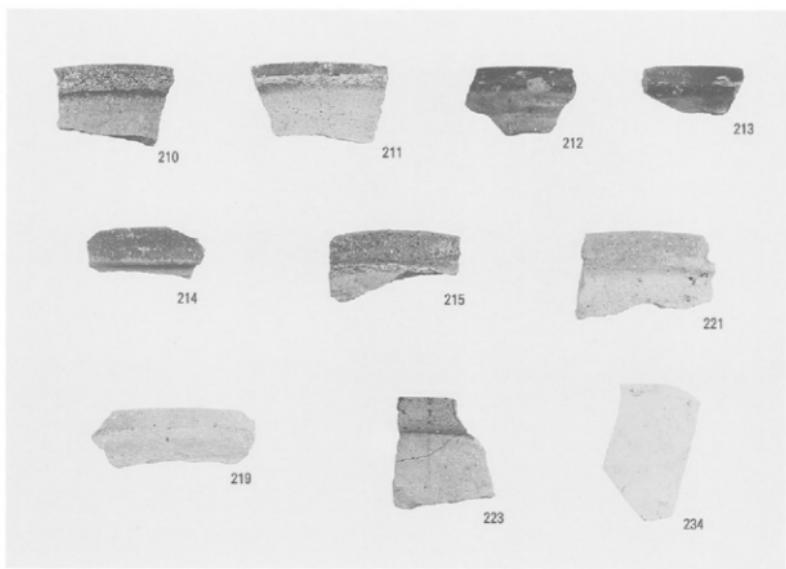


遺構出土土師器 4

尾崎堂ノ鼻遺跡

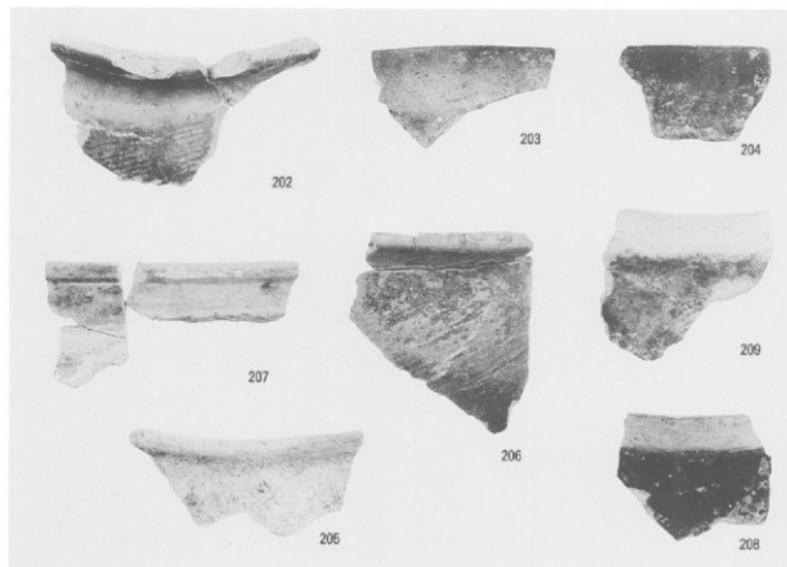


包含層出土須恵器 1

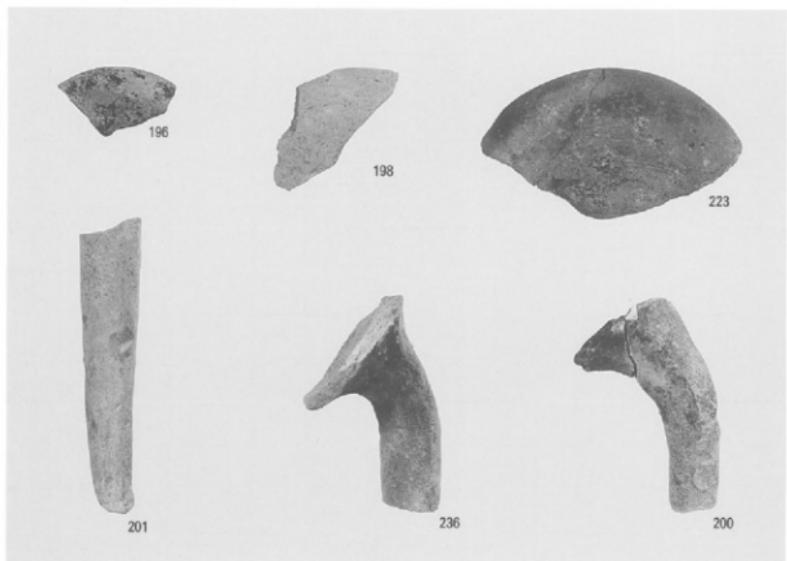


包含層出土須恵器 2

尾崎堂ノ鼻遺跡

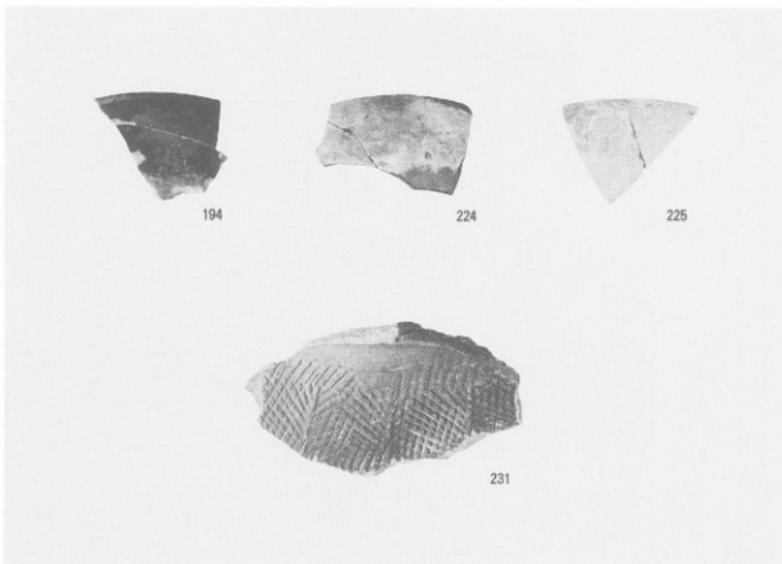


包含層出土土師器 1

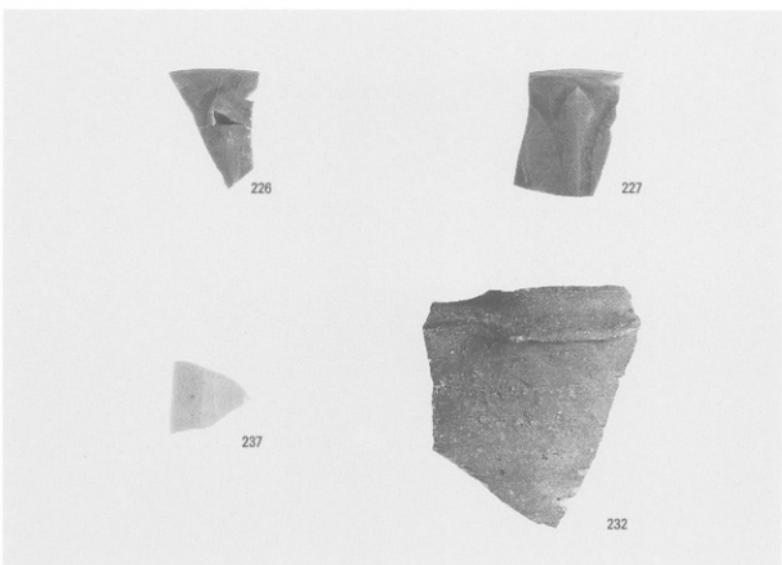


包含層出土土師器 2

尾崎堂ノ鼻遺跡



瓦器・瓦質土器

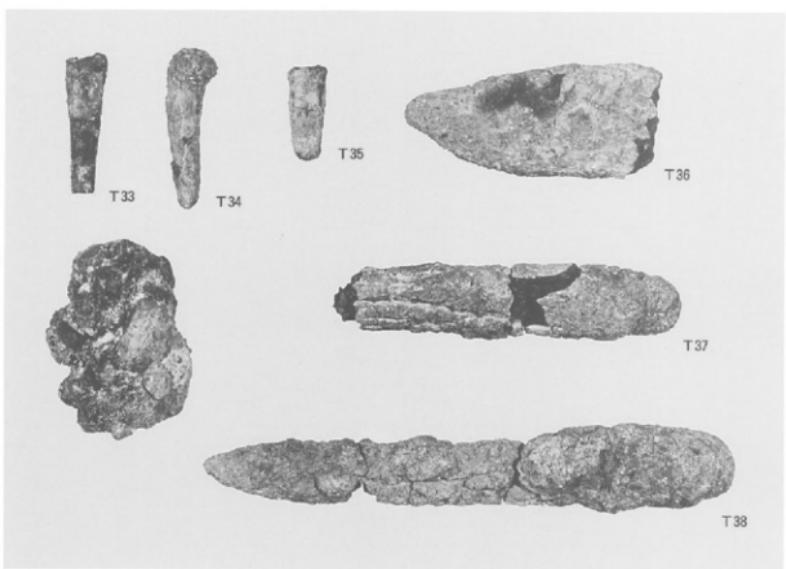


陶磁器

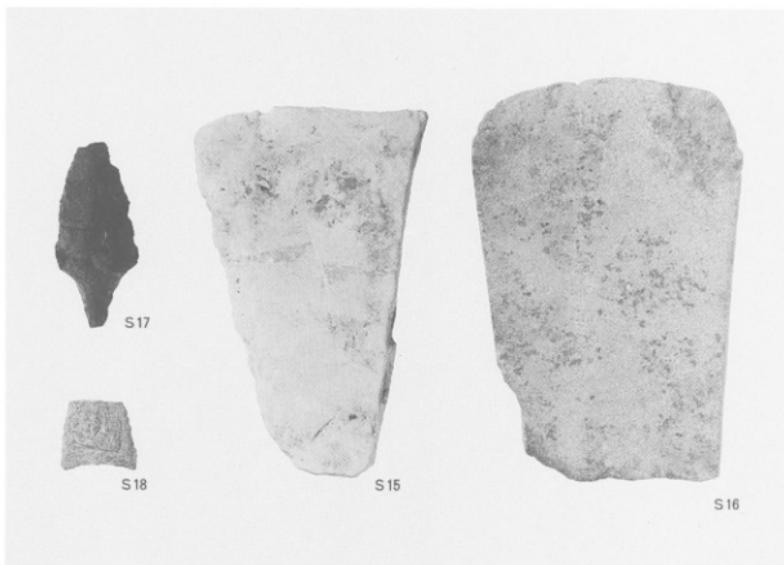
尾崎堂ノ鼻遺跡



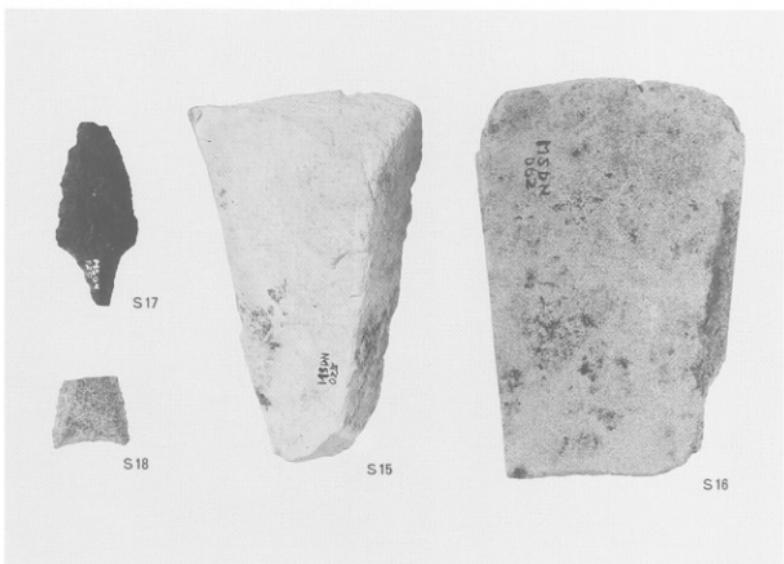
蛸壺・土錘



鉄器



石器（表）



石器（裏）

報告書抄録

ふりがな	なかはるいせきほのかくくつちゅうかほりこじょ							
書名	中原遺跡他発掘調査報告書							
副書名	本州四国連絡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告							
巻次	1							
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第159冊							
編著者名	小川直太・吉田昇・岸本一宏・山本誠・伊藤宏幸							
編集機関	兵庫県教育委員会 埋蔵文化財調査事務所							
所在地	〒652 兵庫県神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号 078-531-7011							
発行機関	兵庫県教育委員会							
所在地	〒650 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号 078-341-7711							
発行年月日	西暦1997年3月21日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東經	測量期間	調査面積 m ²	調査原因
藤ノ木道跡	兵庫県津名郡東浦町 山田原字藤ノ木1974ほか	市町村 28686	遺跡番号 920281	34度32分33秒	134度59分10秒	1992.10.1～ 12.22	1,151	道路(本州 四国連絡道 路)建設
尾崎堂ノ幕遺跡	兵庫県津名郡一宮町 尾崎字山内2009-1	28684	920281	34度29分24秒	134度52分7秒	1992.4.9～ 5.30	400	同上 関連
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項	
藤ノ木遺跡	集落跡	鎌倉～室町	柱穴、溝4、土壇23	土師器、須恵器、瓦器、鉢器、石器				
尾崎堂ノ幕遺跡	生産集落跡	鎌倉～室町	建物跡5、柱穴、溝、土壇	土師器、須恵器、瓦器、鉢器、鉄釘				

報告書抄録

ふりがな	なかはるいであはかはくつちとうさほうじょくしょ							
書名	中原遺跡他発掘調査報告書							
副書名	本州四国連絡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告							
巻次	I							
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第159冊							
編著者名	小川良太・吉田昇・岸木一宏・山本誠・伊藤宏幸							
編集機関	兵庫県教育委員会 埋蔵文化財調査事務所							
所在地	〒652 兵庫県神戸市兵庫区荒町2丁目1番5号 078-531-7011							
発行機関	兵庫県教育委員会							
所在地	〒650 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号 078-341-7711							
発行年月日	西暦1997年3月21日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
平見遺跡	兵庫県 津名郡 北淡町 室津1360-15ほか	28683	910089	34度30分50秒	134度53分6秒 3.4	1991.12.20~ 3.15	1,319	道路(本州 四国連絡通 路)建設
掛内遺跡	兵庫県 津名郡 北淡町 青波335ほか	28683	900105	34度31分16秒	134度53分31秒 3.15	1991.1.10~ 3.15	4,586	同上
外町遺跡	兵庫県 津名郡 北淡町 斗ノ内1151ほか	28683	920221	34度31分24秒	134度54分49秒 9.30	1992.8.3~ 9.30	1,154	同上
井ノ谷道路	兵庫県 津名郡 北淡町 小田470, 471	28683	910091	34度31分34秒	134度57分18秒 1992.3.4	1991.11.26~ 1992.3.4	607	同上
菅松原遺跡	兵庫県 津名郡 東浦町 白山字菅松原256ほか	28686	910084	34度32分14秒	134度58分44秒 11.1	1991.10.28~ 11.1	40	同上
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
平見遺跡	集落跡	鎌倉	柱穴20, 土壙8, 潟13		土師器, 頸椎器, 瓦器, 青磁器, 鐵劍			
掛内遺跡	集落跡	弥生, 室町	柱穴100, 土壙4, 潟4		磨製石剣, 土師器, 陶器, 青磁器, 鐵器			
外町遺跡	生産集落跡	平安 室町	土壤1, 柱穴 建物跡1, 柱穴, 潟, 上壙		黑色土器 上師器, 陶器, 鐵鐵, 火打石, 鐵津			
井ノ谷遺跡	集落跡	室町	柱穴170, 墓3, 土壙3		土師器, 陶器, 青磁器, 鎌, 古錢, 火打石			
菅松原遺跡	墳墓	中世	墓6		土師器			

報告書抄録

ふりがな	中原遺跡発掘調査報告書						
書名	中原遺跡発掘調査報告書						
副題名	本州四国連絡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告						
巻次	I						
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告						
シリーズ番号	第159号						
編著者名	小川良太・吉田昇・岸本一宏・山本誠・伊藤宏幸						
編集機関	兵庫県教育委員会 埋蔵文化財調査事務所						
所在地	〒652 兵庫県神戸市兵庫区荒町2丁目1番5号 078-531-7011						
発行機関	兵庫県教育委員会						
所在地	〒650 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号 078-341-7711						
発行年月日	西暦1997年3月21日						
所収遺跡名	所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積 m ²	測定原因
中原遺跡	兵庫県 津名郡 一宮町 遠田1139-1ほか	28684	920354	34度27分56秒	134度52分46秒 1993.1.29~ 3.12	463	道路(本州 四国連絡道 路)建設
大木谷古墳	兵庫県 津名郡 一宮町 大木谷279-10ほか	28684	920355	34度29分15秒	134度52分29秒 1993.1.8~ 3.12	285	同上
中須賀遺跡	兵庫県 津名郡 一宮町 尾崎子中須賀1916ほか	28684	910088	34度29分17秒	134度52分5秒 1991.11.12~ 12.26	282	同上
篠鼻山古墳群 (原ノ下遺跡 B・C地点)	兵庫県 津名郡 北淡町 笠津2075ほか	28683	910090	34度30分46秒	134度52分53秒 1992.1.24~ 3.9	111	同上
			920220	34度30分46秒	134度52分53秒 7.13~7.30	130	
			920282	34度30分44秒	134度52分56秒 11.6~12.8	236	
原ノ下遺跡 (A地点)	兵庫県 津名郡 北淡町 笠津1668ほか	28683	910090	34度30分48秒	134度53分2秒 1992.1.24~ 3.9	343	同上
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
中原遺跡	集落跡	江戸	戸口1, 土塹5, 墓3	土師器・陶器・鉄釘			
大木谷古墳	古墳	古墳	古墳1基(横穴式石室)	鉄器(過去には須恵器、鉄器)			
中須賀遺跡	集落跡	一宮町	柱穴8, 壁壇2, 墓2	土師器・陶器・土鍬・鍬刀子・鉄鋤			
篠鼻山古墳群 (原ノ下遺跡 B・C地点)	古墳	古墳	古墳2基(石室3)	須恵器・ガラス玉・耳環・鉄器			
原ノ下遺跡 (A地点)	集落跡	安土桃山	柱穴30, 土塹7, 墓3	土師器・土鍬・鉄釘・五輪塔・石器			

兵庫県文化財調査報告 第159冊
一本州四国連絡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 I —
中原遺跡他発掘調査報告書

1997年3月21日 発行

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号
〒652 TEL 078-531-7011

発行 兵庫県教育委員会
〒650 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷 交友印刷株式会社
〒652 神戸市兵庫区水木通9丁目1番34号